

大宰府史跡

昭和51年度発掘調査概報



昭和52年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和51年度発掘調査概報

昭和52年3月

九州歴史資料館

序

昭和43年以来、福岡県教育委員会では大宰府史跡の計画調査をつづけて、やがて10年目をむかえようとしている。その間九州歴史資料館が建設されて、調査組織が館の仕事として移ってから5カ年を経過した。顧みれば、当初の企画が、色々の事情で、十分満たされないまま次の調査に移らねばならぬなやみはあったが、大宰府政庁はじめ、多くの遺跡では予想以上の成果があがったものと自負している。昨年度まで実施してきた学校院の遺跡でも、事情が許せば、遺構の全貌を明かにする希望がもてるようになった。本年度の調査は次の重要史跡である観世音寺にうつった。幸に僧房跡の遺構も一応の復原案をうるに至った。しかし調査を終ったばかりの報告であるから、今後の検討に俟つことがらも少くない。この報告書では、他に緊急調査をふくめて、数カ所の概報もあわせ記録することにした。

これまでの調査は昭和49年立案された3カ年計画にもとづいて実施してきたが、臨時の調査も加わってこのような結果となった次第である。

新年度は更に新しい企画にもとづいて調査が続行される予定である。将来とも、史跡調査が実りあるよう、指導鞭撻を御願ひして挨拶とします。

昭和52年3月31日

九州歴史資料館々長 鏡 山 猛

例 言

1. 本概報は昭和51年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし第38次調査、第39－2次調査は昭和50年度の調査であるが、未報告であるため合わせて報告する。また昭和51年度事業のうち第44、45、46次調査については現在調査継続中ないし整理中であるため次回にゆずる。
2. これまで実測図作製にあたっては南門と中門との間に設けた原点杭を基準にしてきたが、今年度新たに第4表に示すとおりNo.1～No.14を設けた。したがって今回報告する第42次調査、第43次調査は、この基準点を使用した。
3. 第41次調査および第43次調査の検出遺構については九州芸術工科大学の沢村仁教授の指導を得た。また第38次調査検出の人骨については県文化課の橋口達也技師の協力を得た。
4. 土器の計測値については別表にまとめた。
5. 本概報の執筆、編集は当館調査課の石松好雄、高倉洋彰、倉住靖彦、横田賢次郎、森田勉、高橋章および調査補助員の山本信夫、沢田康夫、松沢直子、伊藤かの子が、これにあたった。写真撮影は学芸第一課の石丸洋による。

目 次

序	
I 調查計画	1
II 調査経過	2
1 概 要	2
2 第33次補足調査	3
検出遺構	4
出土遺物	4
小 結	6
3 第38次調査	6
検出遺構	6
出土遺物	12
小 結	47
4 第39- 2 次調査	48
検出遺構	48
出土遺物	51
5 第39- 3 次調査	59
検出遺構	59
出土遺物	61
小 結	69
6 第41次調査	70
検出遺構	70
出土遺物	72
小 結	77
7 第42次調査	78
検出遺構	78
出土遺物	79
小 結	79
8 第43次調査	80
検出遺構	80
出土遺物	83
小 結	98

表 目 次

第 1 表	第38次調査銅銭出土遺構・層位対照表	46
第 2 表	第39- 2 次調査銅銭出土遺構・層位対照表	58
第 3 表	第39- 3 次調査銅銭出土遺構・層位対照表	69
第 4 表	基準点の座標	102

挿 図 目 次

第 1 図	大幸府史跡発掘調査地域図	折り込み
第 2 図	第33次補足調査地周辺図	4
第 3 図	第33次補足調査遺構配置図	5
第 4 図	S D 600出土土器実測図	5
第 5 図	第38次調査層位模式図	6
第 6 図	第38次調査遺構配置図（上層）	折り込み
第 7 図	第38次調査遺構配置図（下層）	折り込み
第 8 図	井戸実測図	折り込み
第 9 図	S K 811実測図	9
第10図	S K 830(上)、S K 835(下) 実測図	10
第11図	S X 863実測図	折り込み
第12図	S X 864実測図	11
第13図	井戸出土土器実測図	14
第14図	井戸出土土器実測図	15
第15図	井戸出土土器・木製品実測図	16
第16図	土壇出土土器実測図	20
第17図	各層出土土器実測図	21
第18図	S K 822出土土器実測図	23
第19図	S K 823出土土器実測図	24
第20図	S K 830出土土器実測図	25
第21図	S K 835出土土器実測図(1)	27
第22図	S K 835出土土器実測図(2)	28
第23図	S D 860出土土器実測図(1)	29
第24図	S D 860出土土器実測図(2)	30
第25図	S D 860出土土器実測図(3)	31

第26図	S D 860出土土器実測図(4).....	32
第27図	S D 860出土土器実測図(5).....	33
第28図	S D 865出土土器実測図(1).....	34
第29図	S D 865出土土器実測図(2).....	35
第30図	S X 863出土遺物実測図.....	36
第31図	S X 864出土土器実測図.....	37
第32図	陶磁器実測図(1).....	38
第33図	陶磁器実測図(2).....	39
第34図	陶磁器実測図(3).....	40
第35図	軒先瓦拓影.....	42
第36図	鉄製品・木製品実測図.....	44
第37図	S D 790出土竹製品実測図.....	45
第38図	銅銭拓影.....	47
第39図	第39-2・3次調査トレンチ配置図.....	48
第40図	第39-2・3次調査遺構配置図.....	折り込み
第41図	井戸実測図.....	50
第42図	土壇出土土器実測図.....	52
第43図	井戸・土壇出土土器実測図.....	54
第44図	S D 892出土土器実測図.....	56
第45図	陶磁器実測図.....	57
第46図	銅銭拓影・刀子実測図.....	59
第47図	土壇出土土器実測図(1).....	62
第48図	土壇出土土器実測図(2).....	64
第49図	土壇出土土器実測図(3).....	65
第50図	陶磁器実測図.....	68
第51図	第41次調査層位模式図.....	70
第52図	第41次調査遺構配置図.....	折り込み
第53図	土器実測図(1).....	74
第54図	土器実測図(2).....	75
第55図	へラ書文字拓影.....	76
第56図	軒先瓦拓影.....	76
第57図	文字瓦拓影.....	77
第58図	第42次調査遺構配置図.....	78

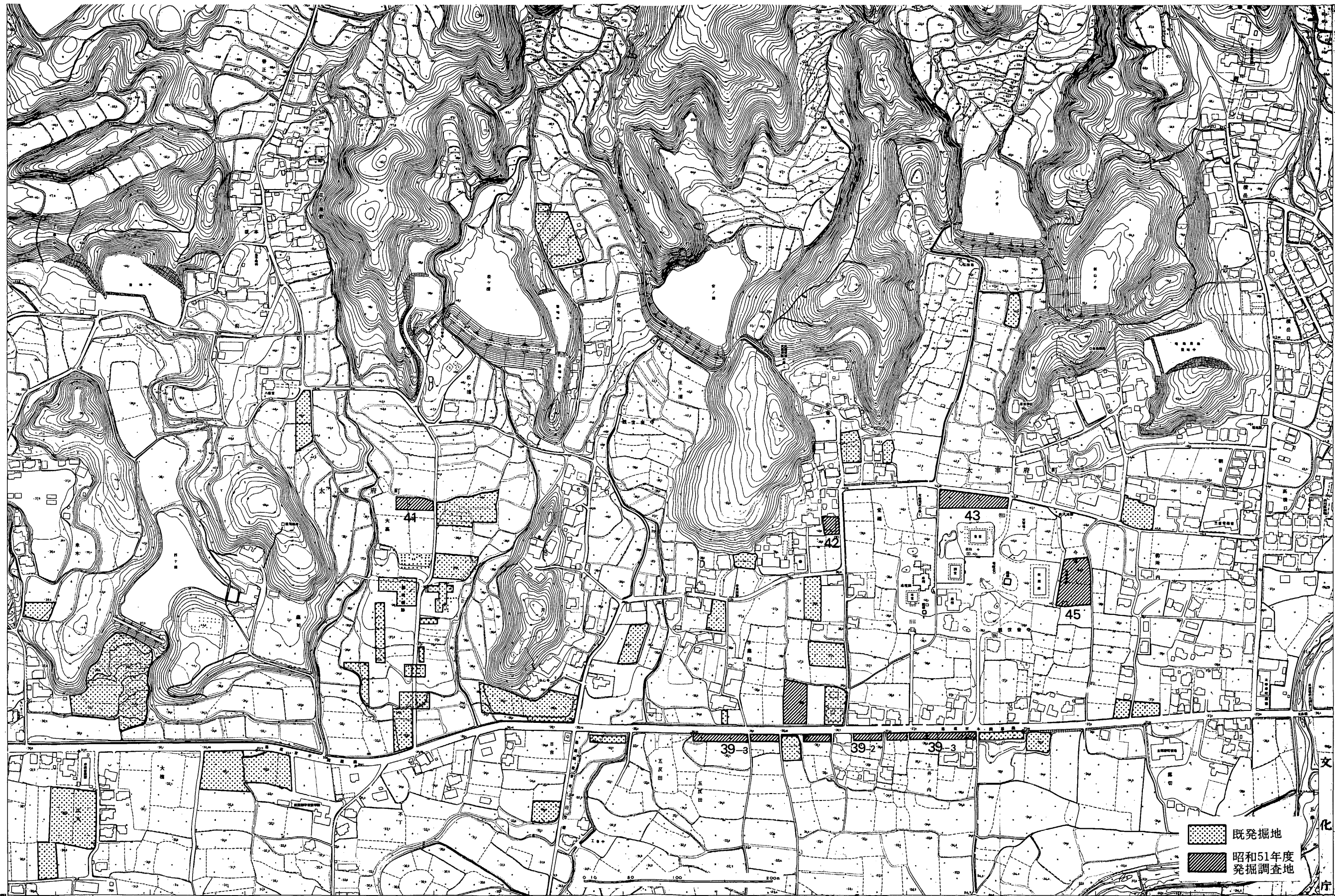
第59図	SE1070実測図	79
第60図	第43次調査遺構配置図	折り込み
第61図	井戸実測図	82
第62図	白玉帯鈍尾実測図	84
第63図	SE1081出土土器実測図	85
第64図	SK1084出土土器実測図(1)	86
第65図	SK1084出土土器実測図(2)	87
第66図	SK1106出土土器実測図	90
第67図	SE1083出土土器実測図(1)	92
第68図	SE1083出土土器実測図(2)	93
第69図	土壇出土土器実測図(1)	94
第70図	土壇出土土器実測図(2)	95
第71図	軒先瓦 (I) 拓影	96
第72図	軒先瓦 (II) 拓影	97
第73図	文字瓦拓影	98
第74図	大房跡礎石位置図	100
第75図	大宰府史跡実測基準点配点図	103

図 版 目 次

図版 1	(上) 第33次補足調査区全景(東から)・(下) SD600溝(南から)
図版 2	(上) 第38次調査区全景(北から)・(下) SB800建物(北から)
図版 3	(上) 井戸(東から)・(下) SE849井戸(東から)
図版 4	(上) SE820井戸(西から)・(下) SE850井戸(南から)
図版 5	(上) SE853・854井戸(南から)・(下) SE855井戸(東から)
図版 6	(上) SE857井戸(西から)・(下) SE858井戸(東から)
図版 7	(上) SK830土壇(北から)・(下) SX835土壇・SE847井戸(東から)
図版 8	(上) SD790溝(西から)・(下) SD860溝(南から)
図版 9	(上) SD865溝(東から)・(下) SD825溝(東から)
図版10	(上) SX863木棺墓配石状態(東から)・(下) SX863木棺墓埋土除去後(南から)
図版11	(上) SX863木棺墓埋葬状況(南から)・(下) SX863木棺墓棺材および鉄刀、銅銭出土状態(南から)
図版12	(上) SX863木棺墓棺身埋置状態(南から)・(下) SX863木棺墓横木配置状態(南から)
図版13	(上) SX864木蓋土壇墓(西から)・(下) SX864木蓋土壇墓副葬品出土状態(西から)

- 図版14 (上) SX811土壇、銅銭出土状態(東から)・(下) SK830土壇、遺物出土状態(北から)
- 図版15 (上) SD790溝出土木製品(南から)・(下) SD860溝、下駄、杵出土状態
- 図版16 第39-2次調査第3・4トレンチ上層遺構(東から)・第3トレンチ上層遺構(西から)
- 図版17 第3・4トレンチ全景(東から)・第4トレンチ全景(東から)
- 図版18 (上) SX917瓦敷遺構(南から)・(下) SE895井戸(南から)
- 図版19 (上) SD892最下層溝(北から)・(下) 第39-3次調査第2トレンチ全景(東から)
- 図版20 (上) 第5トレンチ全景(東から)・(下) SE1021井戸(南から)
- 図版21 第6・7トレンチ全景(東から)・第9・10トレンチ全景(東から)
- 図版22 第41次調査区全景(上:北西から・下:西から)
- 図版23 (上) SX1061(南から)・(下) SA1064・1065柵(東から)
- 図版24 遺物出土状態
- 図版25 (上) 第42次調査区全景(北から)・(下) SE1070井戸
- 図版26 第43次調査区全景(上:西から・下:東から)
- 図版27 SB1080建物(上:西から・下:北から)
- 図版28 SE1081井戸{上:埋土中の土器・下:井戸枠(西から)}
- 図版29 (上) SE1082井戸(東から)・(下) SE1083井戸(東から)
- 図版30 (上) SB1080建物の礎石(北から)・(下) SK1084土壇・土器出土状態
- 図版31 第38次調査 灰褐色土層、SX803、SK830土壇出土土器
- 図版32 第38次調査 黒色砂質土層出土土器
- 図版33 第38次調査 SD860溝出土土器
- 図版34 第38次調査 SD865溝出土土器
- 図版35 第38次調査 SX863木棺墓・SX864木蓋土壇墓出土遺物
- 図版36 第38次調査 出土陶磁器
- 図版37 第38次調査 出土陶磁器
- 図版38 第38次調査 出土陶磁器の墨書銘
- 図版39 第39-2次調査 出土土器
- 図版40 第39-2次調査 出土遺物
- 図版41 第39-3次調査 SK976土壇出土土器
- 図版42 第39-3次調査 出土土器
- 図版43 第41次調査 出土土器
- 図版44 第41次調査 出土土器
- 図版45 第43次調査 SE1081井戸出土土器
- 図版46 第43次調査 SK1084土壇出土土器

- 図版47 第43次調査 SK1084・SK1106土壇出土土器
- 図版48 第43次調査 SE1083井戸出土土器
- 図版49 第43次調査 SE1083井戸出土土器
- 図版50 第43次調査 出土遺物（白玉帯・三彩・墨書土器）
- 図版51 第38次調査 出土軒先瓦および土製仏像
- 図版52 第41次調査 出土瓦・「□屋郡□」銘須恵器
- 図版53 第43次調査 出土軒先瓦・文字瓦
- 図版54 第43次調査 出土軒先瓦
- 図版55 第38次調査 出土木器・鉄器
- 図版56 第38次調査 出土木器・墨書木札



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

文化庁

I 調査計画

昭和51年度の発掘調査は昭和49年度の大宰府発掘調査指導委員会議において立案された大宰府史跡発掘調査3ヶ年計画の最終年次にあたる。この計画によると今年度は観世音寺を主な調査対象地とし、僧房推定地および北辺部、東辺部における築地等の遺構について知見を得ることにあった。

しかしながら昭和45年度以来継続的に行ってきた政庁（都府楼跡）の環境整備が正殿後方の北門推定地を残して、ほぼ完成し、51年度にこの部分の整備が行われることとなったため、この北門推定地について発掘調査が必要となった。このため当初の計画を一部変更し、次の地点について調査を行うよう計画した。

	調査地域	調査期間	調査面積	備考
1	大字観世音寺字大裏528-1	5月～7月	500	北門推定地
2	〃 字今道183-4	8月～10月	1000	観世音寺僧房推定地
3	〃 〃 50, 52	11月～1月	1570	〃 東辺部

まず(1)は昭和47年度に行った回廊東北隅の調査において従来不明であった正殿後方をとりかこむ施設が築地であることが明らかとなり、つづいて昭和48年度の第26次調査によって、この築地の規模を把握することができた。これらの調査結果に基づいて環境整備が行われたのであるが、政庁地区における整備は北門推定地を残すのみとなり、昭和51年度にこの部分の整備計画が出されたため、事前に、遺構の状況について調査を行うこととした。次に昭和43年発掘調査開始以来、政庁および学校院跡に重点をおいて調査を進めてきたが今年度から観世音寺についても調査を行うこととした。

観世音寺については昭和32年に福山敏男氏らによって講堂、東回廊、中門の調査が行われている。この調査では回廊が講堂側面の中央部に取付いていたことが推定できたことが主な成果であったが、また塔跡を含む伽藍東南部分は旧地表が、はなはだしく削られており中門や回廊は礎石だけでなく基壇の痕跡すらも失われていることが明らかとなっている。観世音寺については今年度は2カ所について調査を行うこととした。まず(2)は講堂北側の僧房推定地である。僧房については延喜五年（905）の観世音寺資財帳によって、その規模を知ることができる。それによると観世音寺僧房は大房1、小子房2、馬道屋1、客僧房2の6棟から成っており大房は長さ342尺、幅35.5尺、高さ14尺である。従来講堂北側の旧水田および東西に走る道路付近

が僧房の位置と考えられてきた。今回は東西道路南側の旧水田約1000㎡について調査を行うこととした。(3)は現収蔵庫東側の旧水田で東面築地の推定地にあたり、築地の状況について知見を得ることが主眼である。

この他に昭和50年度から行っている県道山家～関屋線拡幅工事に伴う事前調査を継続して行うこととした。

II 調査経過

1. 概要

昭和51年度の調査は当年度に事業が計画されている県道拡幅工事および環境整備との関係から、これらの事前調査を優先的に行うとともに、さきに住宅建設の申請が出されていた大字太宰府字月見山の調査を第33次の補足調査として、まず行うこととした。

この申請が出されていた地域は昭和49年度に西鉄太宰府線五条駅の南側で行った第33次調査で検出した南北溝SD600の延長部分にあたる所で、調査は、この溝の延長部分を確認することを主眼とした。調査の結果、幅3m、深さ1mの2期にわたる溝を検出した。いずれも鎌倉期のもので第33次調査検出のSD600の延長部分であることが確認されるとともに、この溝はさらに北方へ延びていることが明らかとなった。

この調査終了とともに4月27日から第41次調査として政庁北門推定地の調査に着手した。

この北門については、これまで中門程度の規模のものを予想していたが、調査の結果築地基壇の側石が東西に一直線につらなり、基壇を有するような門はないことが明確となった。このことから簡略な脇門的な構造のもではなかったと推測されるが、残念ながらこのような遺構についても積極的な資料を得るにいたらなかった。

この調査と併行して6月30日から39-3次調査として県道拡幅予定路線の事前調査に着手した。昭和50年度から継続のこの県道拡幅予定路線の調査の主眼は条坊遺構の確認であったが、これまでに検出した遺構、遺物は観世音寺前面で検出した井戸を除いて、いずれも鎌倉期を中心としたものであり、条坊に関係あると考えられる遺構は検出されなかった。この調査は9月27日に終えたが、この39-3次の調査をもって県道拡幅工事に伴う事前調査は一応終了した。

次いで10月12日から現状変更申請に伴う学校院東辺部の調査(第42次調査)および観世音寺僧房推定地の調査(第43次調査)を併行して開始した。

第42次の調査地域は学校院と観世音寺との境界推定線上にあり、昭和46年度に行った第9次調査で検出した南北溝の延長線上にあたる。調査の結果南北溝1条および鎌倉期の井戸1基を

検出した。

第43次調査地は現講堂北側の東西に長い旧水田で調査結果は当初予想したよりも遺構の保存が悪く、特に発掘区西半部は後世の流れによってかなり削平されており礎石はもちろん根石も残っていなかった。しかしながら東半部では幸いに根石が残っており、僧房の位置を確認できるとともに、その規模を推測し得る資料を得ることができた。この調査で検出した主な遺構は東西棟礎石建物1棟、および井戸3基である。

この43次調査終了とともに観世音寺東辺部の調査に着手する予定であった。しかしながら宅地造成に伴う申請があいついで提出されたため計画を変更して、その事前調査を行うこととした。まず昭和52年1月11日から左郭九条八坊推定地の調査（第44次調査）を開始した。検出した主な遺構は鎌倉期を中心とした南北溝および井戸等である。この調査は2月8日に終了した。2月15日からは左郭九条三坊推定地の調査（第46次調査）に着手したが、これまで南北溝1条、ピット群を検出しているが現在も調査継続中である。

昭和51年度の発掘調査地を地区別に記すと下記の表のとおりである。

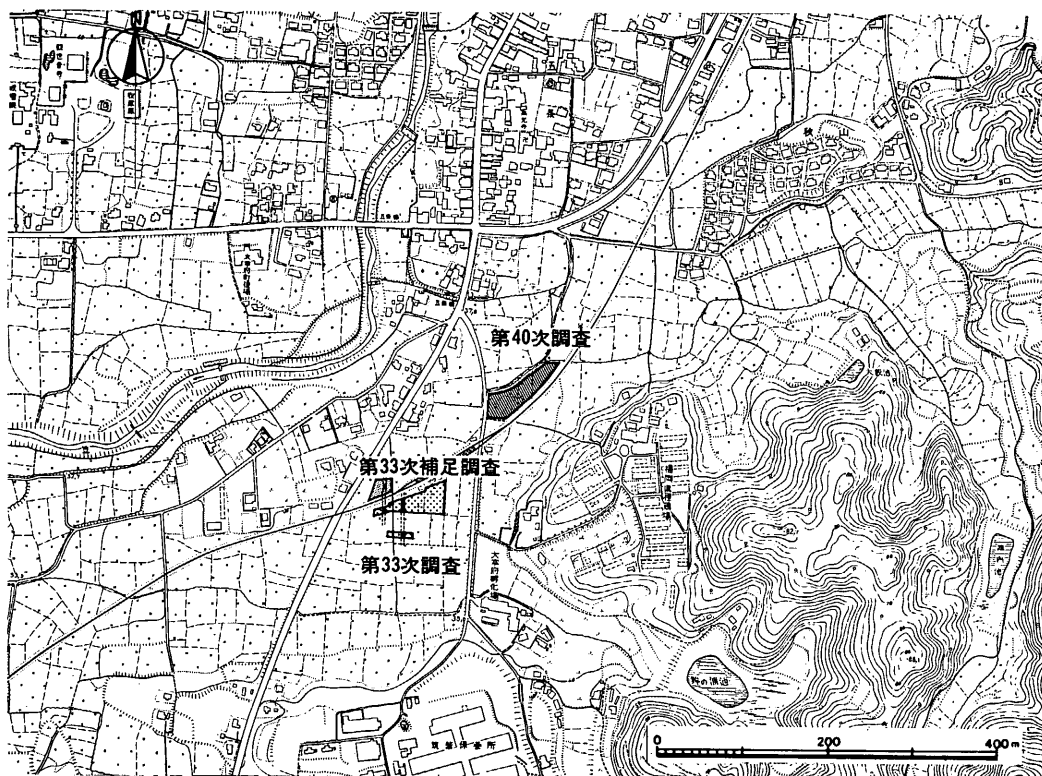
調査回数	調査地区	調査面積(m ²)	調査期間	備考
33補	6 A Y B - C	93	76.4.8~76.4.19	左郭七条九坊
39-3	6 A Y I - A, B 6 A Y E - C	600	76.6.30~76.9.27	県道拡幅工事に伴う事前調査
41	6 A Y T - B	350	76.4.27~76.8.10	政庁北門
42	6 Z G K	70	76.10.12~76.10.21	学校院東辺部
43	6 K K Z - B	970	76.10.12~77.2.24	観世音寺僧房推定地
44	6 A Y E - A	265	77.1.11~77.2.8	左郭九条八坊
45	6 K K Z - B	(1570)		観世音寺東辺部
46	6 A Y I - B	(300)	77.2.15~	左郭九条三坊

2 第33次補足調査

昭和50年度に、第33次調査として、条坊復原案による左郭の七・八条九・十坊推定地の発掘調査を行った。調査の結果、2条の南北方向の溝^(註1)(S D 605、S D 600)を検出し、この2条の溝に挟まれた地点が政庁の軸線からほぼ9町の距離にあり、またS D 605の最下層からは貞応三年銘をもつ木札が出土した。

今回、第33次調査地の北側（西鉄太宰府線の北側）で宅地造成の申請が出され、この地が先述のS D 600の延長上に位置することから、溝の有無を確認するため、第33次の補足調査として発掘調査を行うこととした。

調査区に幅5m、長さ18mの東西トレンチを設定し、調査を行った。調査の結果、トレンチ



第2図 第33次補足調査地周辺図

の中央で前回検出のSD600の延長と考えられる溝を確認した。調査地の地番は筑柴郡太宰府町大字太宰府字月見山2724-3番地である。

検出遺構

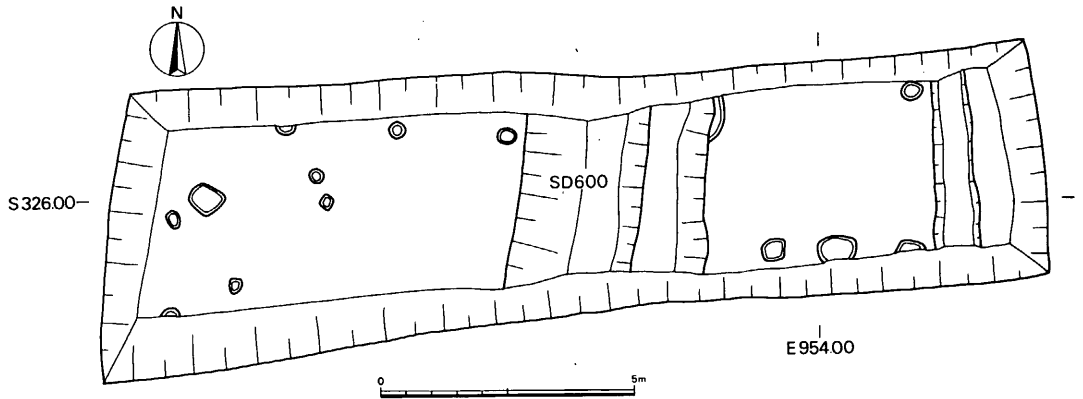
検出した遺構は溝1条とピットである。

溝

SD600 発掘区のほぼ中央で、南北方向のSD600を検出した。発掘地域が狭いため明確でないが、南北方向のものであり、二時期ある事を確認した（昭和50年度の報告では一時期として報告）。溝幅は切り合いがあるためプランとしては不明であるが、土層の観察から、新期(註2)の溝（SD600B）は幅3.20m、深さ0.65mで、旧期の溝（SD600A）は幅約3.0m、深さ1.0mと推定される。この溝は政庁軸線より約955mの距離にあり、前回の第33次検出のSD600より約3m東へ寄った位置になる。

出土遺物

出土した遺物は少量の土師器および陶磁器類である。溝は二時期あるが、遺物を明確に区別



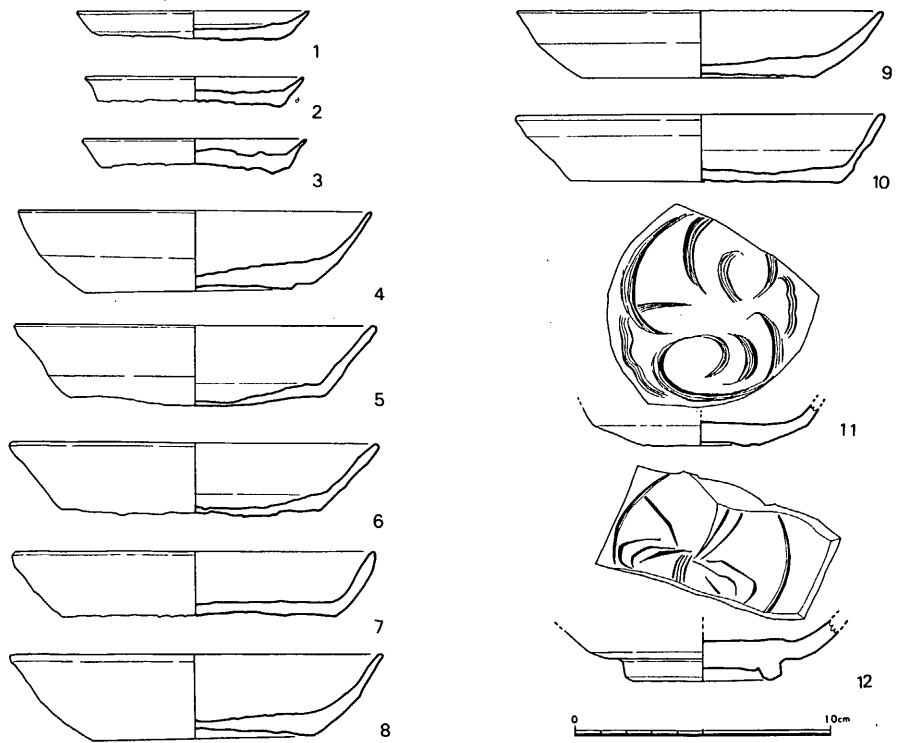
第3図 第33次補足調査遺構配置図

することは出来ないため、今回は旧期溝（SD600A）の最下層出土の土器について報告する。

土器

SD600A 出土土器（第4図・別表、図版1）

出土した層位は溝の最下層の暗灰色および黒灰色粘土層である。



第4図 SD600A 出土土器実測図

土師器

土師器には皿 a と坏 a がある。

皿 a (1~3) 口径8.6~9.1cm、器高1.0~1.6cmのものである。底部の切り離しは糸切りで、板状圧痕を有する。

坏 a (4~10) 口径14.0~14.4cm、器高2.5~3.3cm、底径8.0~10.7cmのもので、底部は糸切りで、板状圧痕を有する。

陶磁器

青磁(11・12) (11)は皿で、外面の底部と体部の境界に沈線を入れ、高台状としている。釉は底部を除いて施釉され、厚目にかかっている。内底見込みにはへら描きの文様がある。(12)は灰白色を呈する胎土で、釉は薄目にかかりやや灰色を滞びた緑色を呈する。内底見込みにはへら文様がある。高台部には釉はかかっていない。

小 結

本調査で検出した南北溝SD600A・Bは第33次調査のSD600と一連の溝と考えられるが、方向として約7°東へ偏しており、前回では、ほぼ真南北方向をとっていると報告したが、今回の調査からは若干蛇行しているのではないかと考えられる。

また溝出土の遺物も前回報告のものと大差なく、また新・旧二時期の溝は遺物として明瞭に区別できないが、新时期については鎌倉後半期のものと考えられる。

註1 鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968

註2 「大宰府史跡」一昭和49年度発掘調査概報一

3 第38次調査

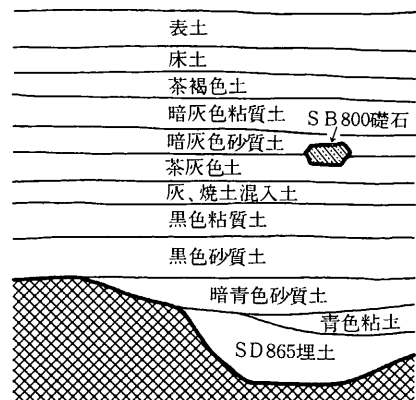
条坊復原案によると四条四坊に相当する地域で、条坊遺構の検出を目的として調査を開始した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字学業203-1番地である。

検出遺構

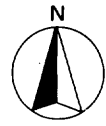
調査の結果、遺構面は数層にわたり、礎石建物1、井戸13、木棺墓1、木蓋土壇墓1、製鉄遺構、溝、土壇、ピットなど多数を検出した。

調査区南半部の土層は上層より次のようになる。

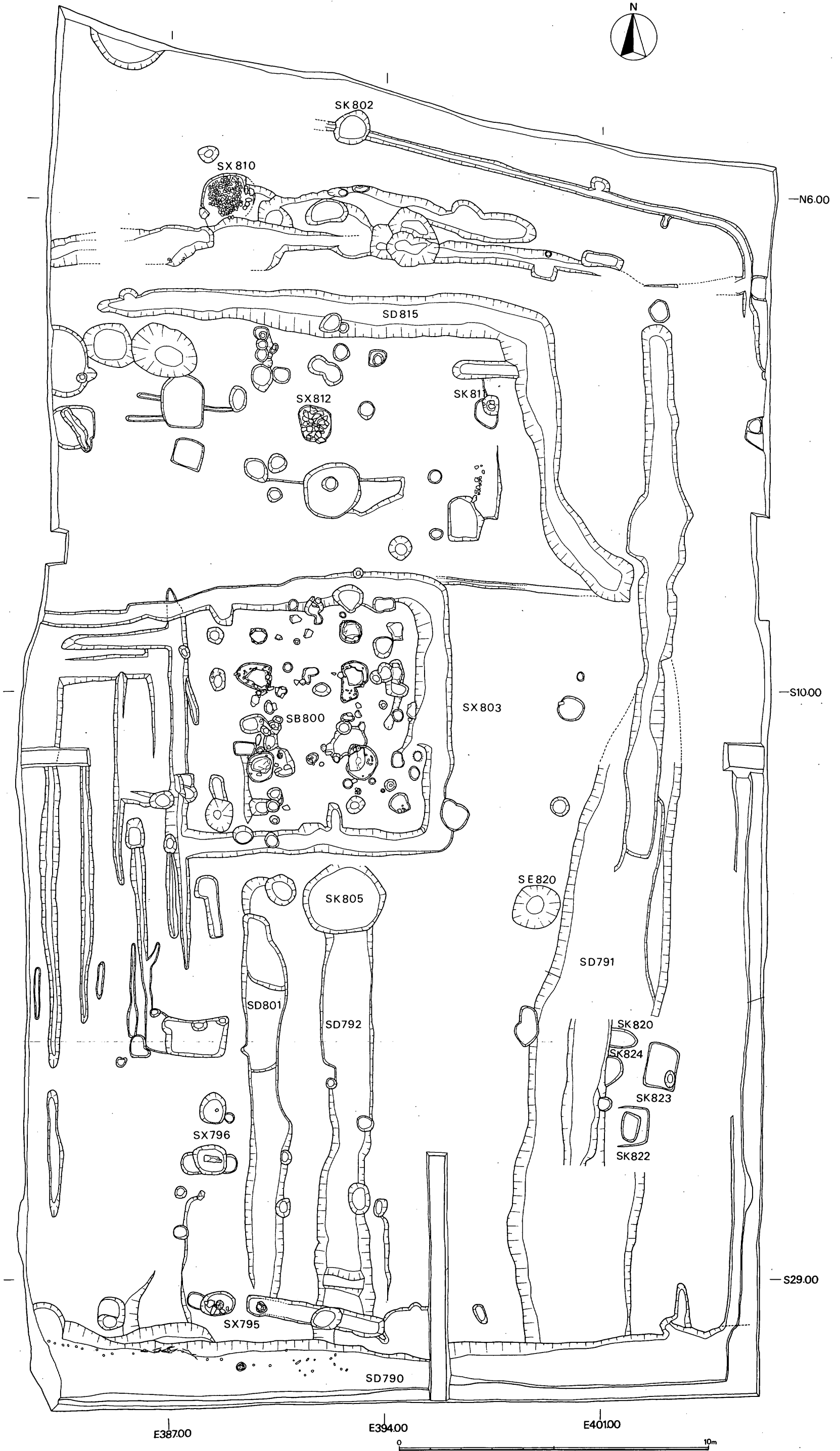
①表土



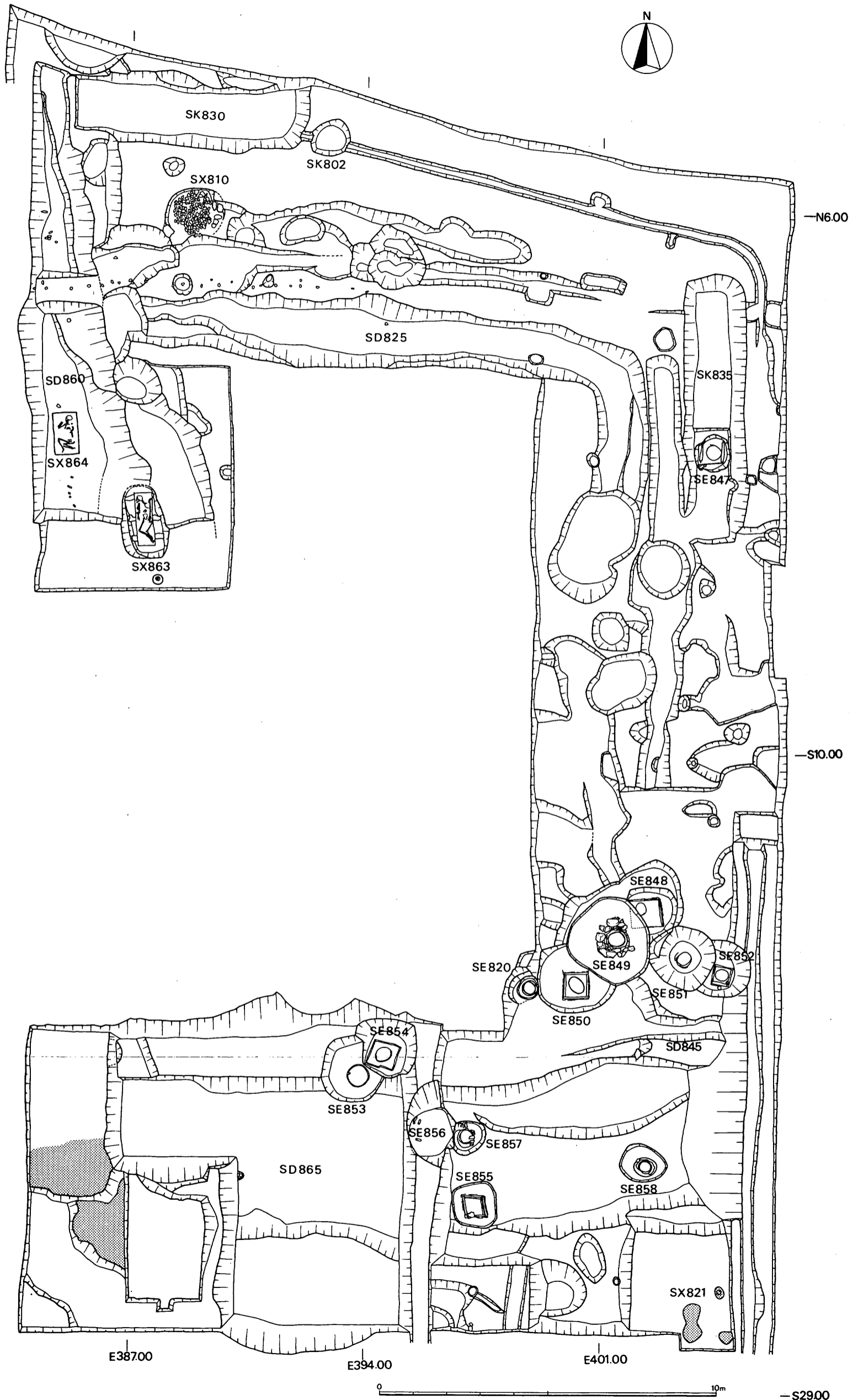
第5図 第38次調査層位模式図



第6図 第38次調査遺構配置図(上層)



第7図 第38次調査遺構配置図(下層)



- ②床土
- ③茶褐色土
- ④灰褐色土
- ⑤暗灰色砂質土
- ⑥-A 茶灰色土
- B 茶灰色土下部
- ⑦灰・焼土混入土
- ⑧黒色粘質土
- ⑨黒色砂質土
- ⑩暗青色砂質土
- ⑪青色粘土
- ⑫地山（自然堆積土）

北半部では①②③を除去した後、直ちに⑫に達する。⑫の地山は南方向へ下降する。これらのうち④、⑥-A、⑥-B、⑨、⑩、⑫の各層上面に遺構が認められた。④の上面ではSD790を検出した。⑥-Aの上面ではSB800、SD791、792、801、815、825、SK805、811、835、SE820、SX795、796、803、812、その他小溝、ピットなどを検出した。このうちSX795は上層から掘り込まれた可能性もある。⑥-Bの上面ではSX821～826を検出した。⑨の上面ではSE848、849、850、853、854などの井戸群を検出した。⑫の上面ではSK802、830、SX810、SD845、SD860、865、SE847、851、852を検出した。このうち調査区北半部にあるSK830、SX810は新期に属するもので、⑥-Aの上面と同一遺構面から掘り込まれたと考えられる。SX863周辺の土層は上から順に⑥、薄い黄色整地、SD860埋土となるがSX863は黄色整地上面で検出した。SX864もこれと同一遺構面にあると考えられる。SD859はSD860上層に地山を切りこむ黒色土の落ちこみがあり、その上面から掘り込まれている。

礎石建物

SB800 茶灰色土上面で検出した。基壇幅7.5m、南北7.1mを測り、四周に溝を配した3×3間の瓦葺の建物である。後世、一部の礎石は抜き去られているが、痕跡は残り、その柱間は心心距離東西1.5m+3.0m+1.5m、南北1.5m+2.7m+1.5mを測る。東辺中央に0.5m大の石があり階段の可能性もある。

ピット群

SX803 茶灰色土上面から掘り込み、SX800より新しい。

瓦溜り

SK805 茶灰色土上面から掘り込み、SD792より古い。掘方は円形で上面径2.2m、深さ0.6mを測る。多量の瓦が出土した。

井戸

総数13基を検出したが、このうち構造の判明するものは11基である。

SE 820 茶灰色土から掘り込まれ、掘方は円形で上面径約1.5m、深さ2mである。桶様の枠2段が残存し、1段目は上端内径41cm、高さ48cmで、2段目は上端内径33cm、高さ35cmである。1段目の上部は竹のタガで二重に緊縛している。土圧によるためか多少胴が膨らんでいる。

SE 847 茶灰色土から掘り込んだ土坑SK835により上部を切られている。掘方は隅丸方形で上面辺約1.1mあり、横棧と隅柱を組合せ、外側を縦板で囲んだ方形の井戸である。調査中に崩壊したが、横棧の長さから井戸内法は65cmであると考えられる。底には径44cm、高さ24cmの曲物が据えられている。

SE 848 黒色砂質土を除去した後に検出できた井戸でSE851より新しく、SE849より古い。掘方上面は長軸2.4mの不整形をなすが、下部では方形をなす。横棧と隅柱を組合せ、外側を縦板で囲み内法78cmを測る。横棧は凸部と凹部をつくりそれを組合せている。縦板の外側に薄板を1～3枚重ねてそれを補強している。底には径35cm、高さ26cmの曲物を据えている。

SE 849 黒色砂質土から掘りこまれ、SE848、850より新しい。掘方は不整形をなし上面径2.5である。桶様の円筒2段が残存するが、1段目の上部は腐植し、残存していない。2段目の上端内径は45cm、下端内径50cm、高さ110cmほどで、底には径47cm、高さ25cmの曲物を据えている。また井戸の上部は人頭大の礫で石積し、この上端から底までの深さは2.1mである。

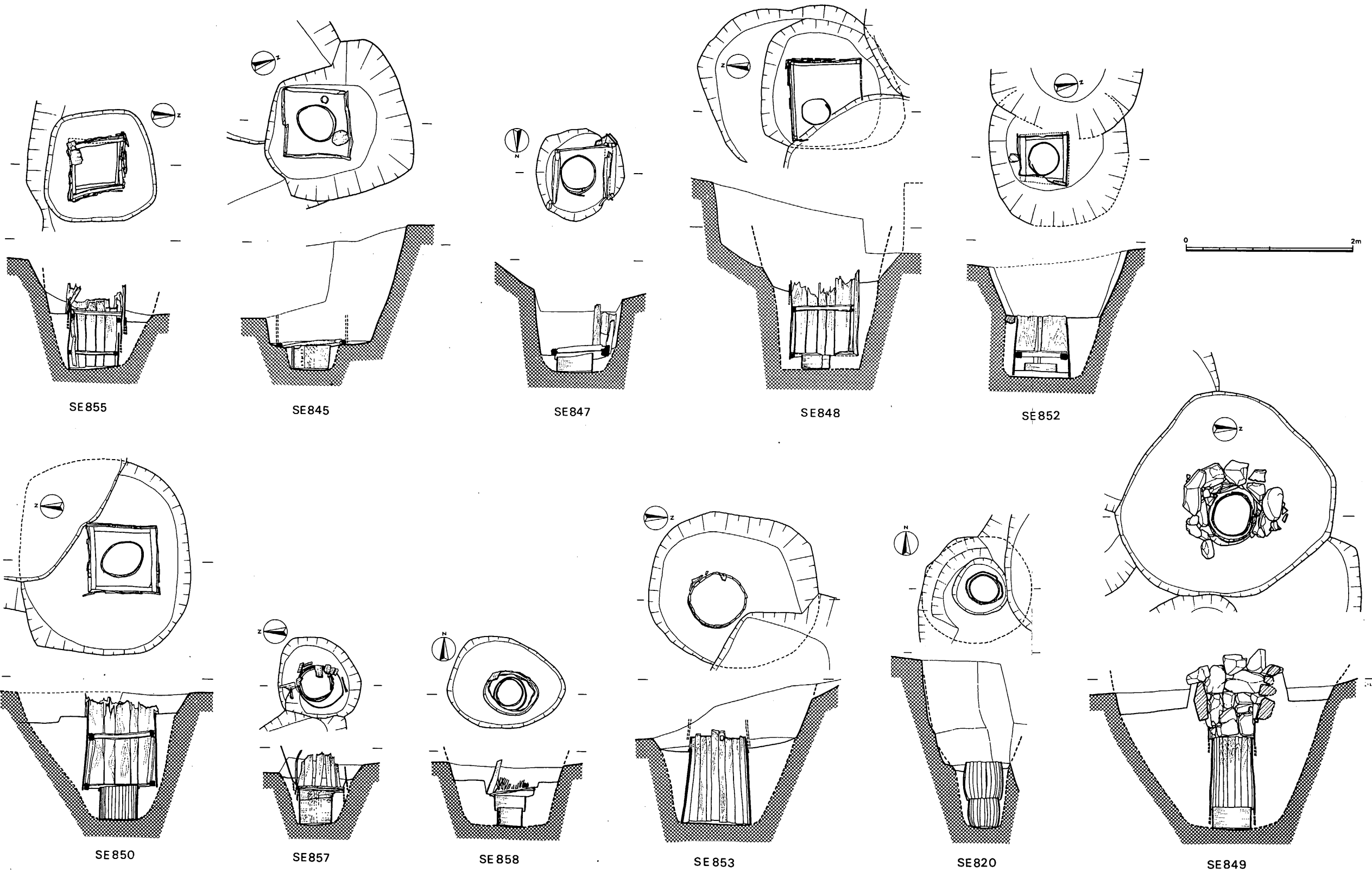
SE 850 SE820、849よりも古い。掘方は隅丸方形に近く上面辺2.3mほどで、横棧と隅柱を組合せ、外側に縦板を1～3枚重ねて囲んだ内法78cmの方形井戸である。横棧は上下2段で隅木がその中間を支えている。底には径45cm、高さ42cmの小型の桶様のものを据えている。

SE 851 地山から掘り込み、SE852、848より古い。掘方は円形で、上面径2m、深さ1.3mである。底に曲物2段を検出したのみで、井戸枠の構造は不明である。曲物の1段目の残りは悪いが、2段目は径32cm、高さ20cmのものである。

SE 852 地山から掘り込み、SE851より新しい。掘方は隅丸方形で、上面辺約1.7mで、横棧を組み合わせ、外側を縦板で囲んでいる。内法60cmである。棧は厚い角材であるが、その先端に切り込みを入れ接合している。縦板は一辺に幅20cmのものを2枚と、幅7cmのものを1枚使用している。底には径40cm、高さ9cmの曲物を据えている。

SE 853 黒色砂質土から掘り込み、SE854より古い。掘方は円形をなし、上面径は約2.0mで、桶様の井戸枠が1段残存する。その上端内径は65cm、下端内径は80cm、高さは100cmである。上端部に近いところは竹のタガで2重に緊縛している。また上端部3ヶ所に板の両面から方形の穴を穿っている。

SE 854 黒色砂質土から掘り込み、SE853より新しい。掘方は隅丸方形で、上面辺約1.8m



第8图 井戸実測图

を測る。底部に横棧と曲物を発見したことから、方形の井戸と考えられる。縦板は残存していない。横棧は長さ約80cmである。その組方は、一方に四角い穴を設け他方は凸部を削り出しそれを挿入する方法をとる。曲物は径45cm、高さ28cmである。

SE855 暗青砂質土を掘り込んでいる。掘方は隅丸方形をなし、上面辺は約1.3mである。横棧と隅柱を組合せ、外側を縦板で囲んだ内法60cmの方形井戸である。横棧は上下2段残存するが、隅柱は南西隅一ヶ所のみ残り、底部から上方横棧を支えている。縦板は2重にしている。

SE856 暗青砂質土から掘り込み、掘方は円形で上面径は約2.5mである。隅柱状の丸材2、縦板用の材とみられるもの1を検出したことから方形の井戸と考えられる。

SE857 暗青砂質土から掘り込み、SE856より新しい。掘方は円形で上面径は約1mである。竹タガが円形に残り、桶様の円筒を使用した井戸と考えられる。竹タガの外側は縦板が囲み井戸枠を補強した可能性がある。底には、上下に重なり曲物2段が残存する。1、2段目とも径30cmで、高さは1段目が10cm、2段目が30cmである。

SE858 暗青砂質土から掘り込んでいる。掘方は不整円形で、残存する上面長径は約1.4mである。竹のタガが円形に残り、その外側は井戸枠の補強のためか縦板一枚と、竹を円形に立てSE857と類似した構造であり、桶様の円筒を使用したことも考えられる。底には曲物を2段検出したが、1段目は径38cm、高さ17cm、2段目は径30cm、高さ22cmである。

土坑

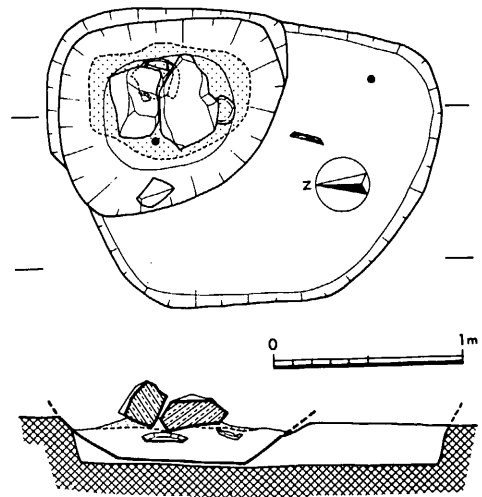
SK802 地山から掘り込む。掘方は円形で、上面径1.1m、深さ1.1mを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

SK811 掘方上面は0.5×0.6mの不整円形をなし、茶灰色土上面から掘り込まれる。0.2mほどの自然石2個を中央に据え、すぐ下には灰層が広がる。灰層から銅銭17と焼けた獣骨片が、さらにその下の埋土から土師器が出土した。銅銭は礫の間から重なって出土した。

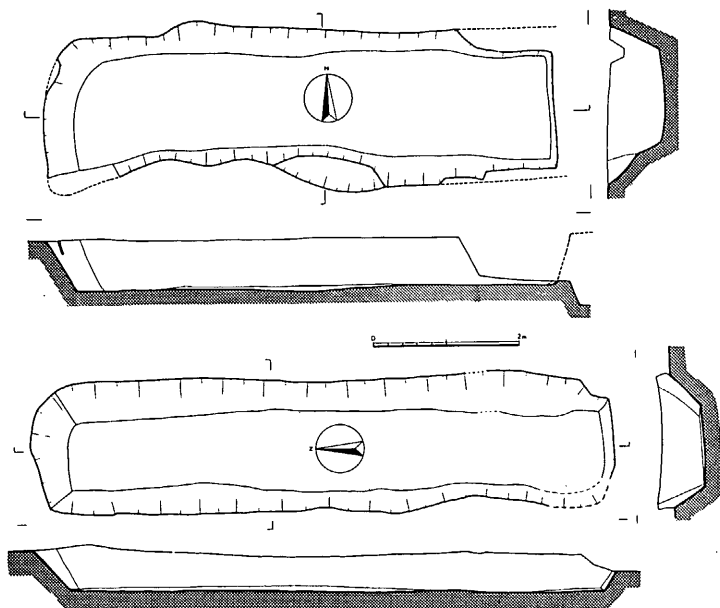
SK822 茶灰色土下層から掘り込む。掘方は南北方向の長方形で、上面辺約1.3×1.0mを測る。

SK823 茶灰色土下層から掘り込む。掘方は南北方向の長方形で、上面辺約1.4×1.0mを測る。

SK830 地山から掘り込む。掘方は東西方向の長方形で上面辺7.0×2.1m、深さ0.7mの大形土坑である。



第9図 SK811 実測図



第10図 SK830(上)・SK835(下)実測図

SK835 茶灰色土上面から掘り込み、SE847より新しい。掘方は南北方向の長方形で、上面辺8.0×1.85m、深さ0.6mの大形土坑である。

溝

SD790 灰褐色土から掘り込み、検出した遺構の中では最も新しい。東西方向で底面は西方向へ下降する。北岸のみを長さ約23m検出したが、杭を打ち、竹でしがらみを組んだ

きちんとした溝である。

SD815 茶灰色土上面から掘り込み、SD825より新しい。SB800の北側を区画するようにL字状に巡っている。最大幅1.5mで東西14m、南北10m分を検出した。この溝はSD825の直上に重複して同一方向をとり、溝の清掃などのために掘り替えを行った可能性もある。

SD825 茶灰色土から掘り込み、SD815より古い。SD815と重複しながら同一方向にL字状に流れることからSD815の旧期のものと考えられる。底面は南方向へ下降する。最大幅2mで、東西18m、南北7m分を検出したが、北岸には溝と平行に杭列があり、しがらみを組んだものと思われる。

SD845 地山から掘り込み、SD865と平行して流れる。幅約0.7mの小溝である。

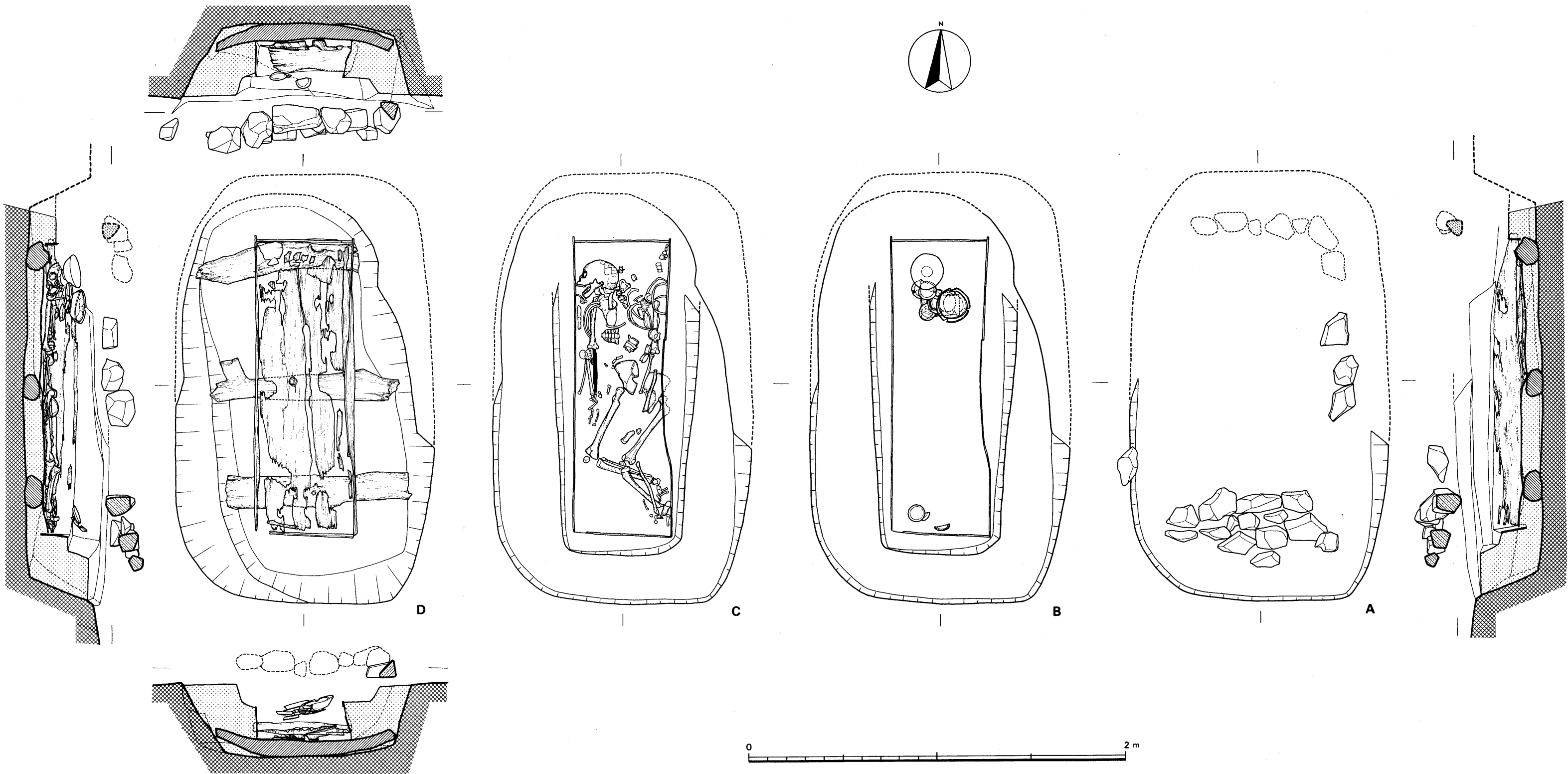
SD859 黒色土から掘り込む。南北方向の溝で、長さ約7m分を検出した。

SD860 地山から掘り込み、SD825、830、859より古い。南北方向で、東岸のみ長さ約16mを検出したが、底面は南方向へ下降する。埋没状態により上層（黒灰色砂質土）中層（腐植土）、下層（暗灰色砂）に分かれる。

SD865 地山から掘り込み、検出した遺構の中では最も古い。東西方向で、幅5mを測り、長さ18m分を検出した。

製鉄遺構

SX821 茶灰色土下層から掘り込み、保土穴1と鉄滓を入れたピット2からなる。保土穴は



第11图 SX863 实测图

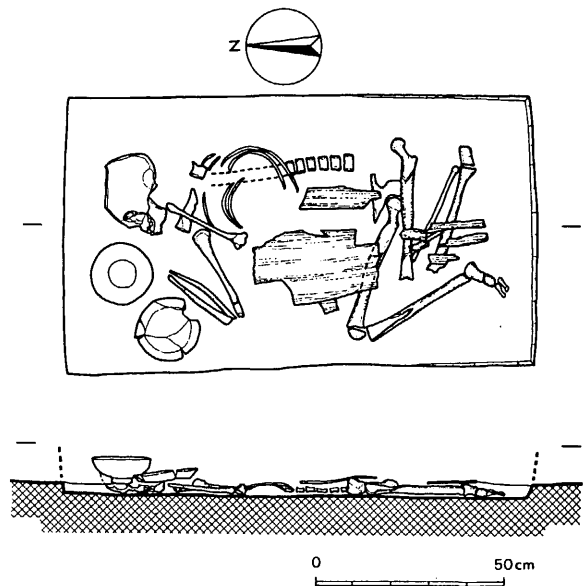
長径0.4mの楕円形で、壁はよく焼け中央は径0.1mの浅い凹みがある。

その他の遺構

SX863 この木棺墓は人骨、副葬品、棺材の残存が良好で、埋葬様式の詳細が判明する好例である。

木棺墓周辺の土層は上から茶灰色土、薄い黄色の整地層、地山の順になり、SD860は地山から掘り込んでいる。木棺墓は黄色の整地層から掘り込み、SD860より新しい。掘方の全長は不明であるが、長軸残存長は2.08m、短軸は1.48mの隅丸長方形をなす。掘方上面より5～20cm上に、人頭大の礫をコ字形に配列し、埋葬後、標石ないし配石を行っている(A)。この掘方上面から石列までの空間は、盛土された可能性を示唆する。内部主体は木棺を使用したもので、木蓋が一部残存し、その上面の人骨頭部側には白磁1、瓦器椀1、土師器杯1、土師器小皿6が、足元側には土師器小皿2が供献された状態で出土した(B)。人骨は北を向き屈葬された成年男性骨であるが、多少乱れた部分があり、これは何らかの事情によって原位置から移動したと考えられる。右前腕の下、棺底に接して鉄刀1、宋銭1が副葬されていた(C)。木棺の上部は腐蝕して本来の高さを知りえないが、残存のよいところでは0.17mあり、頭部、足部、小口側内法ともに0.51m、長軸1.55m、N2.5°Wの方向をとり、側板は1枚板の可能性が高い。底板は棺の長軸方向に2～3枚わたされる。これらの板材は腐蝕して1cmほどに厚みを減じている。ところで小口、側板などの接合法は腐蝕により不明であるが、鉄釘の出土をみないので、釘留めによる方法ではない。また木棺は、土壇底部に据えられた3本の丸太の上に直交して置かれている。この丸太は、径0.15mほどの自然木を長さ1mほど切断し、枝も完全に除かれてはおらず、細かい加工はなされていない。

SX864 木棺墓SX863の北西に近接し、木蓋、人骨、副葬品が残存する。SD860埋土を掘り下げる際検出したが、それより新しいものである。茶灰色土上面では検出していないのでSX863と同一層位から掘り込まれたと考えられる。掘方は長軸1.24m、短軸0.72mで南北の短辺は等しい。木蓋は一部残存し、人骨上面に接するが、後世、腐蝕して落ちこんだためと考えられる。副葬品は青磁椀1、土師器杯1で、人



第12図 SX864 実測図

骨頭部の西から、底部より若干浮いた状態で検出され、先のSX863の例を考慮すると木蓋上に供献された可能性がある。人骨は完存していないが、頭部を北に向け、右腕、両足がきつく屈葬された成年女性骨である。

SX795 茶灰色土上面から掘り込むが、その上層からの可能性もある。柱穴は東西に2個のみで建物の一部とは考えられず、溝SD790の橋桁として使用されたことも考えられる。両柱穴にはそれぞれ長さ0.4m、径0.3mと長さ1.0m、径0.3mの柱根が残存し、東側の柱根には、根がらみを施している。心心距離は約1.37mを測る。

SX796 茶灰色土上面から掘り込む。柱穴は南北に2個のみで建物の一部とは考えられない。両柱穴には、それぞれ長さ0.75m、径0.15m、長さ1.6m、径0.2mの柱根が残存する。心心距離は1.57mを測る。

出土遺物

本次調査で発見した遺物は多量の土器、瓦および木製品、鉄製品、銅銭である。ここでは井戸および土塚から一括資料として発見した遺物を中心に報告する。

土器

SE820出土土器（別表）

三間堂の面から掘り込んだ井戸では唯一のものであるが、土器の出土点数はきわめて少なくまた細片化しているため、その形態・法量は知りえない。その中で唯一の完形器である坏は口径12.5cm、器高3.0cmを測る。

SE847出土土器（第13図1～6、別表）

土師器 全てへラ切りである。

皿a（1、2） 口径9.2～9.4cm、器高1.15～1.45cmである。

杯a（3） 口径15.4cm、器高3.15cmである。

陶磁器 白磁のみが出土した。

b（4） 端部を小さく肥厚させた椀で、淡黄白色の釉をかけている。

c（5） 口縁部を三角形に折り曲げ、見込みに1条の沈線を有する。

（6） bと同種の胎・釉調である。

SE848出土土器（第13図7～17、別表）

土師器 へラ切り（7・8）と糸切り（9～11）が出土した。

皿a（7～10） 口径8.8～9.6cm、器高0.9～1.45cmである。

杯a（11・12） 口径14.6～16.2cm、器高2.5～3.0cmである。

陶磁器 出土したのは白磁および陶器で、青磁は含まない。

白磁 b（14）、c（13）、d（16）、e（15）が出土した。

16は細く高い高台を有し、口縁部を若干外反させる椀の底部である。15は台形状の高台と見込み部分に段を有し、その内側の釉を環状にカキ取った椀の底部である。

陶器 (17) 口縁端部を内側に肥厚させ、その下に凸帯を巡らしたもので、小豆色を呈し、焼成は堅緻である。

SE 849 出土土器 (第13図18~23、別表)

出土した土器は、土師器、瓦器、片口の須恵質土器、陶磁器および滑石製石鍋片である。

土師器 (18~20) 皿・杯・土鍋が出土した。ヘラ切 (18) と糸切り (19・20) がある。

皿 a (18・19) 口径9.2cm、器高1.1~1.2cmである。

杯 a 口径14.65cm、器高3.05cmである。

陶磁器 白磁、青磁、黒釉陶器、褐釉陶器、黄釉陶器が出土した。

白磁 b、c、d、e、h、i が出土した。

h (21) 見込みの釉を環状にカキ取ったものとそうでないものがあるが、(21)は前者の高台付の皿である。

青磁 同安窯の皿 (e) の破片が出土している。

黒釉陶器 (22) いわゆる天目茶椀と称されているもので、胎土は灰色を呈する。

無釉陶器 (23) 淡赤褐色を呈した甕で、底部および体部下半のみが残存している。内面には自然釉が吹き出している。

SE 850 出土土器 (第14図1~7、別表)

出土した遺物は、土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器である。

土師器 (1~6) 皿・杯が出土しているが、糸切りの皿1点 (5) を含む。

皿 a (1~5) 口径9.2~10cm、器高1.0~1.5cmである。

杯 a (6) 口径15.7cm、器高3.0cmである。

黒色土器 (7) 内面を燻したものである。内面はジグザグ状のヘラミガキを丁寧に行い、外面は体部下位付近まで間隔を置いて横方向に磨き、それより下位は回転ヘラ削りを行っている。9世紀代のものであろう。

陶磁器 白磁、青磁および陶器が出土した。

白磁 b、c、d が出土した。

青磁 越州窯系 (a) の破片である。

SE 851 出土土器 (第14図、別表)

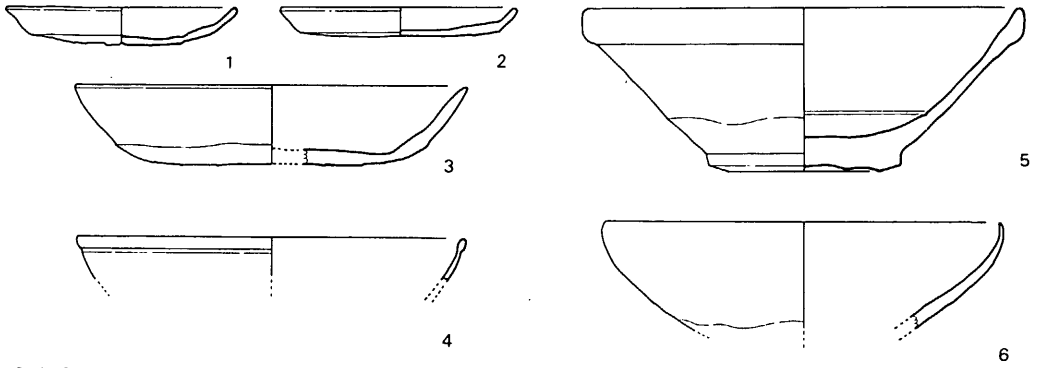
出土した土器は、土師器、黒色土器、陶磁器である。

土師器 (8~11) 皿、丸底の杯および椀が出土した。

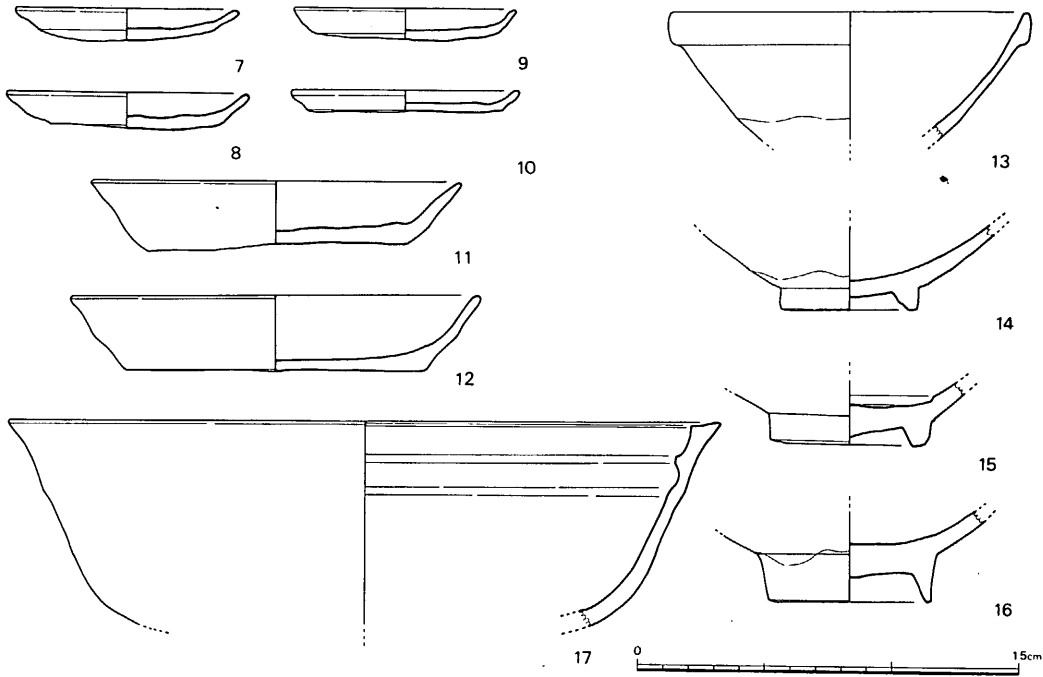
皿 a (8~10) 口径10.0~11.7cm、器高1.6~2.0cmである。

椀 (11) 底部を欠失しているが、外面中位以下に指頭圧痕があり、中位以上には横方向の

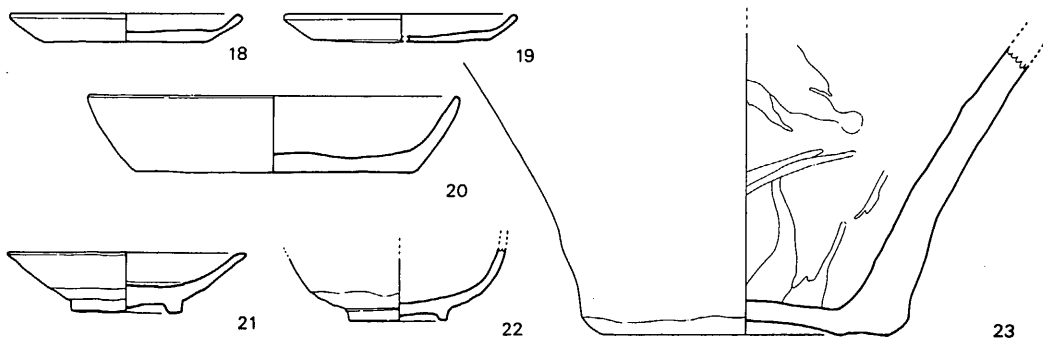
SE 847



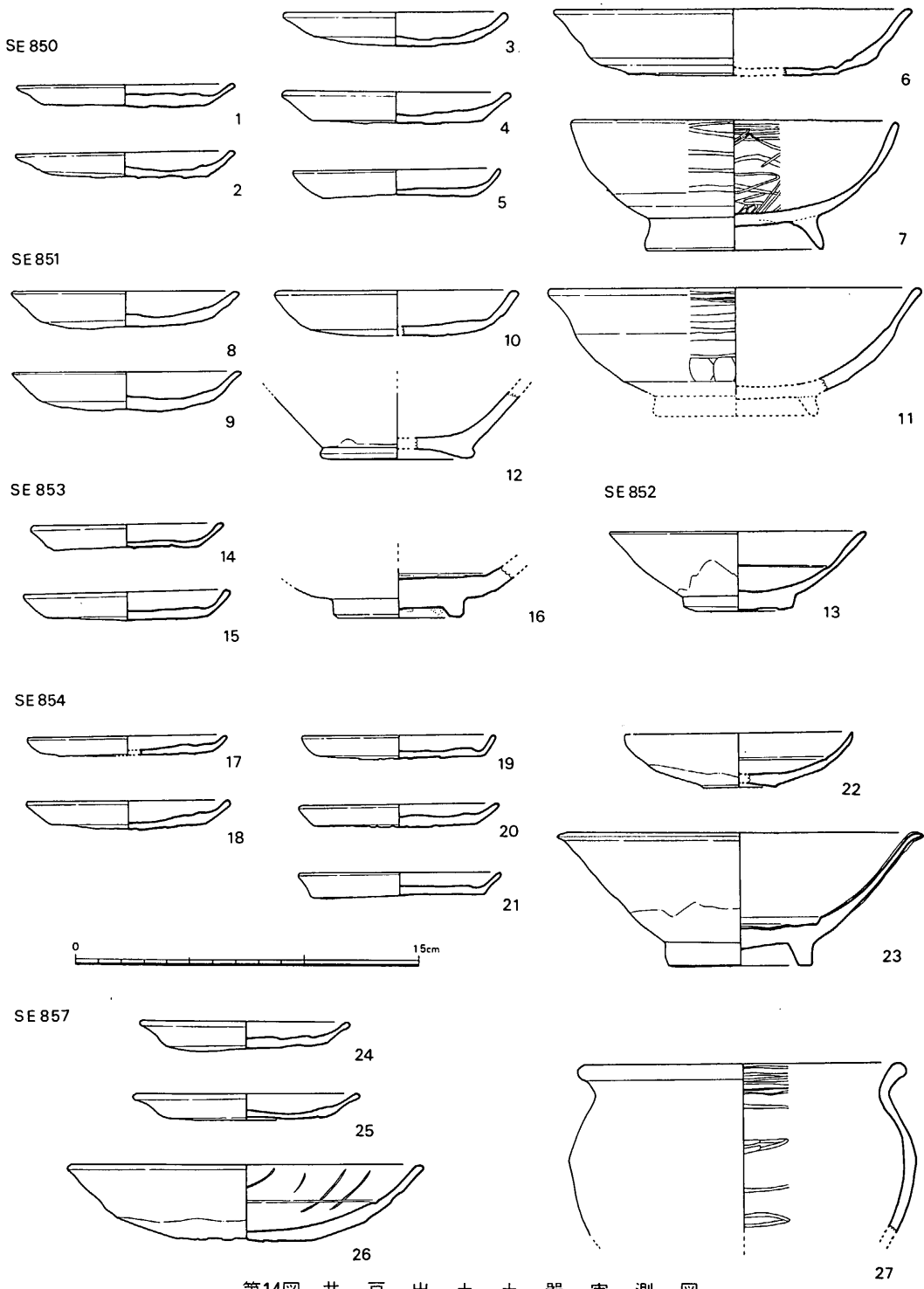
SE 848



SE 849

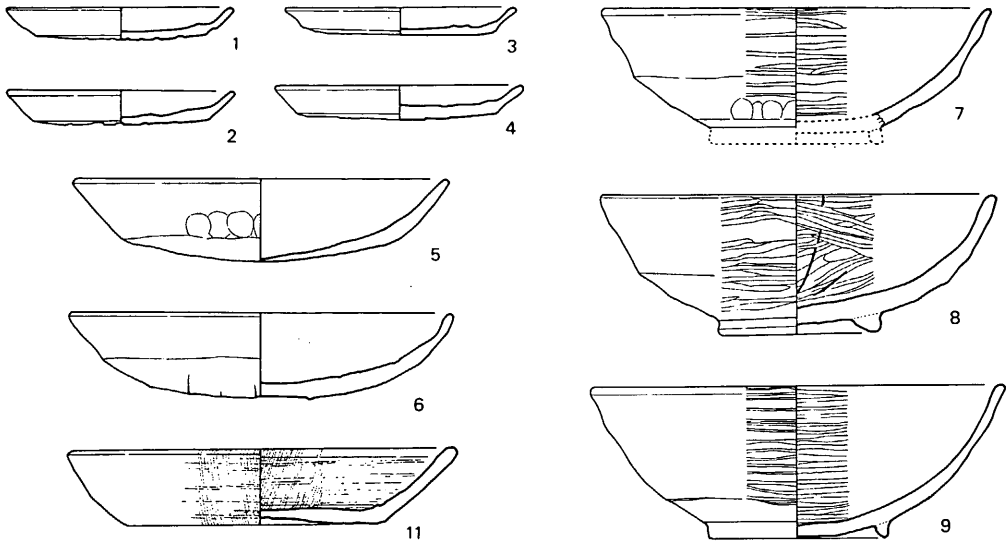


第13図 井戸出土土器実測図

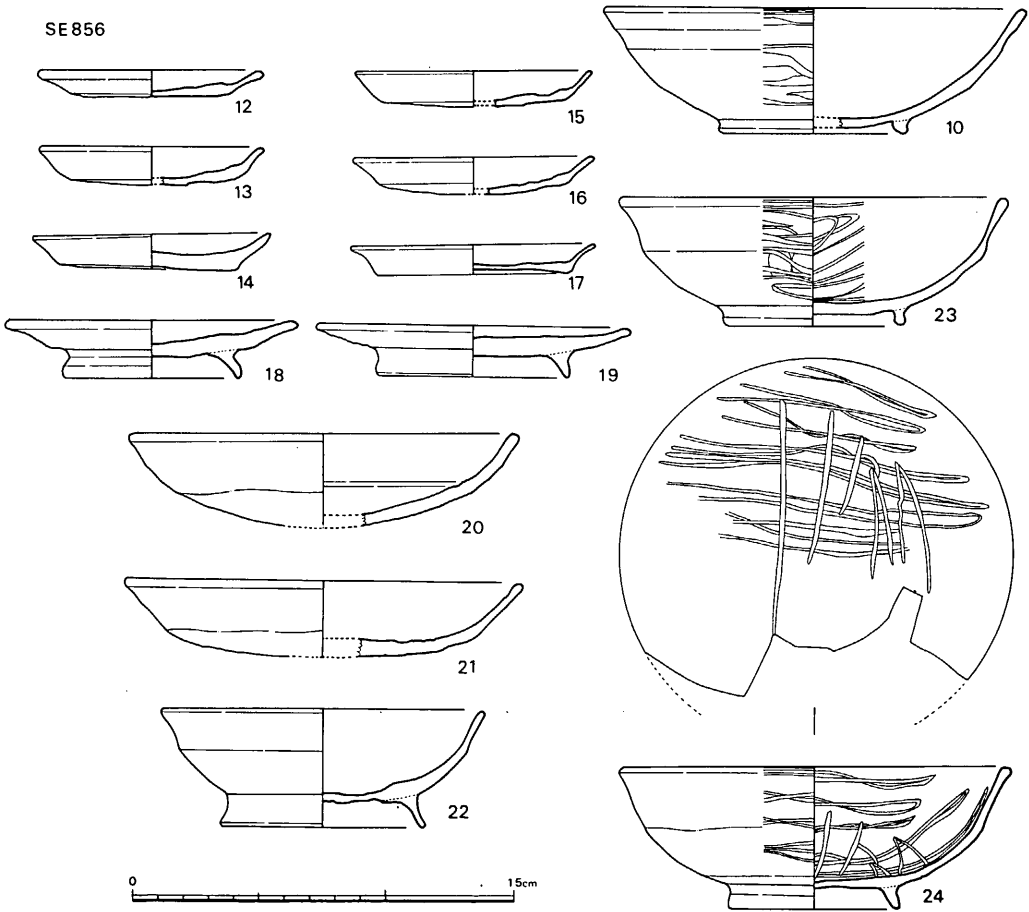


第14図 井戸出土土器実測図

SE 855



SE 856



第15図 井戸出土土器・木製品実測図

ヘラミガキを行っている。内面にもミガキを行い、器面を円滑にしている。淡茶灰色を呈し、胎土は精良である。

陶磁器 青磁および黄釉陶器が出土したが、黄釉陶器は混入と考えられる。

青磁 a (12) 内面は淡緑黄色、外面には黄緑色の釉がかかる。底部露胎部分は小豆色を呈する。

SE 852 出土土器 (第14図13)

土師器、陶磁器が出土した。土師器の点数は少なく、しかも細片のため形状は不明である。

陶磁器 白磁、青磁が出土した。

白磁 d、h が出土した。

h (16) この種の皿では大型のものである。

青磁 同安窯の皿 (e) が出土した。

SE 853 出土土器 (第14図14~16、別表)

土師器、陶磁器が出土した。

土師器 (14・15) 皿 a、杯 a が出土した。ヘラ切りと糸切りがあるが、後者が多い。

皿 a (14・15) 口径8.4~9.1cm、器高1.0~1.2cmである。

杯 a 口径16.2cm、器高2.9cmを測る。

陶磁器 白磁、青磁、褐釉陶器が出土した。

白磁 c、d、i が出土したが、全て細片である。

青磁 a、b-1 が出土した。

b-1 (16) 無文の龍泉窯系の椀の底部である。見込み部分および外底に重ね焼きの目跡がある。bの形態の中でこのような目跡のあるのはきわめて希有の例である。

SE 854 出土土器 (第14図17~23、別表)

土師器、瓦器、陶磁器が出土した。

土師器 皿 a、丸底の杯で、ヘラ切り (17・18) と糸切り (19~21) がある。

皿 a (17~21) 口径8.55~8.9cm、器高0.9~1.3cmである。

陶磁器 白磁および青磁が出土した。

白磁 e、i が出土した。

e (23) 見込み部分に段がつき、それより内側の釉を環状にカキ取っている。口縁部を外反させ、台形に近い形状の高台を有する。

i (22) 体部内面に1条の沈線を有する皿である。

青磁 aの小片が出土した。

SE 855 出土土器 (第15図1~10、別表)

土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器、滑石製品が出土した。

土師器 皿 a、丸底の杯、椀である。

皿 a (1~4) 口径9.0~9.8cm、器高1.1~1.4cmである。

杯 a 口径10.3cm、器高2.85cmを測る。

丸底の杯 (5・6) 口径14.9~15.2cm、器高3.2~3.35cmである。

椀 (7) 内外面を丁寧にヘラミガキしたもので、体部外面下位に指頭圧痕が見られる。

瓦器

椀 (8~10) 8は体部中位に屈曲があるもので、内外面のヘラミガキは丁寧であり、内面にはヘラミガキの下に右寄りの放射状の跡がある。器肉内面は褐色および灰色を呈しているが、燻しが深いため、黒色土器とみなした方がよいかもしい。9は銀白色を呈し、ミガキは非常に丁寧である。内面には炭化物が一面に付着しているため、ミガキの方法は不明である。

陶磁器 白磁 c、d、f、g および青磁 a が出土した。

SE 856 出土土器 (第15図12~24、別表)

土師器、黒色土器、陶磁器が出土した。

土師器 (12~24) 皿 a、皿 c、丸底の杯が出土した。大部分はヘラ切りであるが、糸切りも少数出土している。

皿 a (12~17) 口径8.9~9.6cm、器高1.1~1.5cmである。

皿 c (18・19) 高台付の皿で、SD865埋土から掘り込んで作った井戸であるため、それからの混入品であると考えられる。

丸底の杯 (20・21) 口径15.4cm、15.7cmで、内面を磨いている。

椀 (22~24) 小型 (22) と大型 (23・24) があり、前者は皿 c と同じく SD865からの混入であろう。23、24は内外にヘラミガキを行っており、器肉は比較的薄く、胎土は精良である。両者とも体部中位に屈曲があるが、鈍い。

陶磁器 白磁 c、d および青磁 a が出土した。

SE 857 出土土器 (第14図24~27、別表)

土師器、黒色土器、陶磁器が出土した。

土師器 皿 a と丸底の杯である。

皿 a (24・25) 口径9.2cm、9.9cm、器高は1.2cm、1.15cmである。

丸底の杯 (26) 右回りの細かい放射状の痕跡と内面を円滑にするためのミガキがみられる。

黒色土器 (27) 内面をヘラミガキし、真黒色に燻した甗である。内面は淡茶色を呈し、煤が厚く付着している。

陶磁器 白磁椀 c が出土している。

SK 802 出土土器 (第16図1~10、別表)

土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器が出土した。

土師器 皿 a、丸底の杯、椀が出土し、全てヘラ切りである。

皿 a (1~5) 口径9.2 cm~10.8cm、器高1.1cm~1.7cmを測る。

丸底の杯 (7~10) 7、8の口縁部は椀にみられる特徴と類似し口縁部を若干外反させる。また体部と底部との境に稜線を有している。9は口径16cmを越す大型のものである。10は7、8の器形に高台を貼付したものである。

椀 (6) 口縁部を丸く肥厚させ、若干外反する無高台の椀である。

陶磁器 白磁のみで、青磁、陶器は出土しなかった。

白磁 i、mの小片が出土した。

SK811出土土器 (第16図11~14、別表)

銅銭17枚とともに少数の土師器が出土した。

土師器 皿 b および杯 a が出土した。

皿 b (11~13) 口径7.9~8.5cm、器高1.4~1.9cmで、口径に対して器高が高い。

杯 a (14) 口径12.8cm、器高3.0cmである。

SK805出土土器 (第16図15~19、別表)

瓦は瓦当を含め多量に出土し、また少数であるが、土師器、陶磁器が出土した。

土師器 皿 b、杯 b が出土した。

皿 b (18・19) 口径6.7cm、8.0cm、器高1.4cm、1.7cmである。

杯 b (15~17) 口径12.0~12.3cm、器高2.5~2.8cmである。

SB800出土土器 (第16図20、別表)

SB800に伴う雨落溝、礎石掘方から出土した土器は細片化しているため、その法量は知り得ず、ただし皿 a (20) のみが計測できた。

SX803出土土器 (第16図21~25、別表、図版31)

出土した土器はSB800の年代を考える上で重要な位置を占めると考えられるが、法量が知れるものは少数である。

土師器 (21~23)

皿 b (23) 口径6.7cm、器高2.1cmで、灯火器として使用している。

杯 a (21・22) 21・22は基壇直上で重なって出土した。

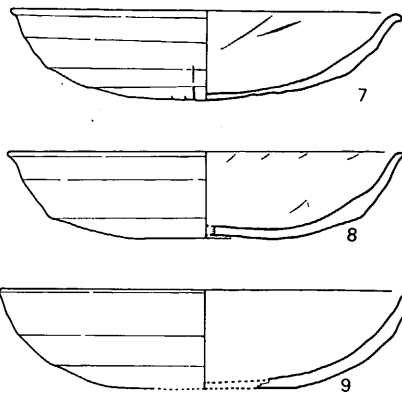
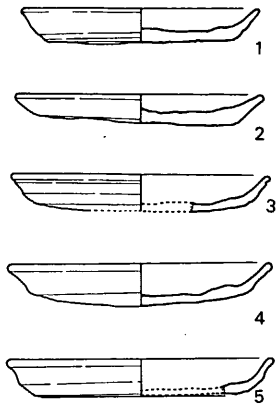
火鉢 (24) 復元口径約39cmで、体部上端近くで2条の突帯を貼付し、その間に梅花状の文様をスタンプしている。外面はミガキを行い、器面を密にし、内面はハケ目調整を行っている。

瓦器質土器 (25) 口径は約39cm、復元器高13.5cmで、六角形と菊花状文3個を1単位としてスタンプしている火鉢である。外面はミガキ、内面はハケ目調整を行っている。

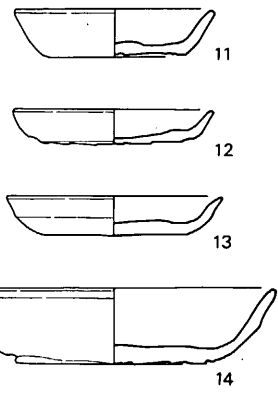
各層出土土器

灰褐土層出土土器 (第17図1~4、別表、図版31)

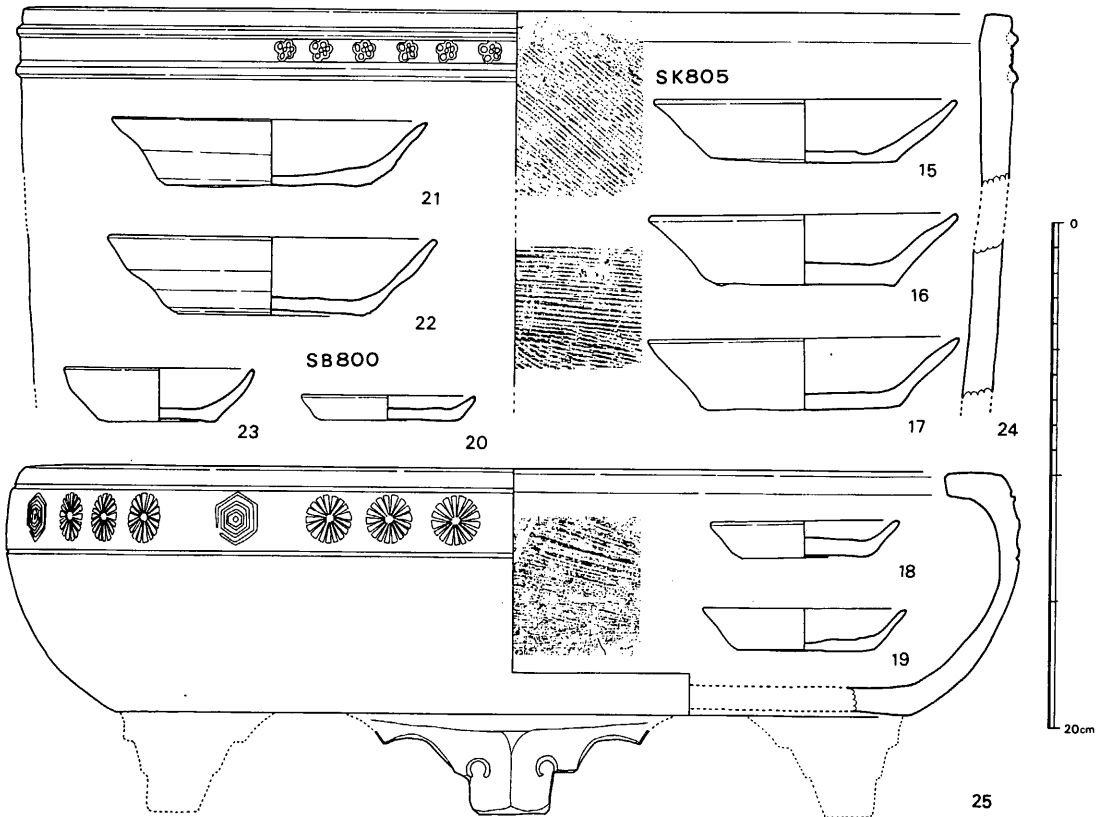
SK802



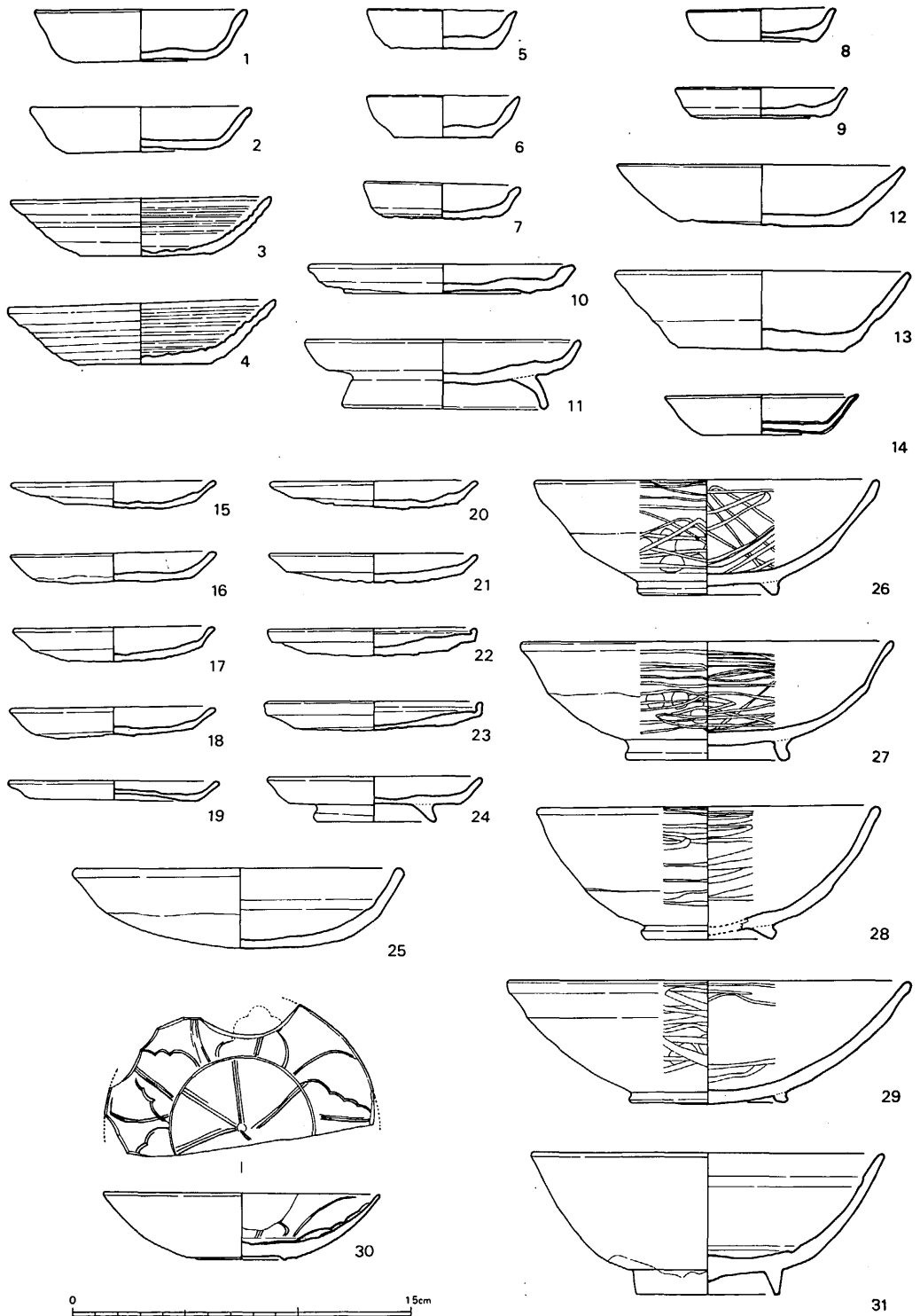
SK811



SX803



第16图 土 塚 出 土 土 器 实 测 图



第17图 各層出土土器実測図

灰褐土層はSB800を覆う層で、多くの土器を出土したが、そのうち最も新しく、また4個重なって出土した土師器（皿と杯b）についてのみふれる。

皿（1・2） 口径9.4cm・9.8cm、器高2.3cm・2.0cmである。

杯b（3・4） 口径11.6cm・11.9cm、器高2.6cm、2.7cmで、体部には凹凸が著しい。

茶灰土層出土土器（第17図5～14、別表）

多数の土器が出土したが、その中でもっとも新しいと考えられるものを図示した。

土師器

皿a（9・10）・b（5～8）・c（11）、杯a（12）・b（13）がある。

陶磁器

白磁g（14） 口縁部の釉をカキ取った、いわゆる口禿の白磁皿である。

黒色砂質土層出土土器（第17図15～31、別表、図版32）

黒質砂質土層から本次調査でもっとも多く出土した。しかし、軟質で黒色の層のため十分なる調査が実施しえず、上の層から掘り込まれた遺構の遺物もこの層出土とした可能性もある。ここでは確実に一括して出土した土器の一群について述べる。

土師器 全てへら切りである。

皿a（15～21） 口径9.1～9.3cm、器高0.8～1.55cmである。

c（24） 口径9.6cm、器高2.0cmである。

d（22・23） 口縁部を直立させた皿で、蓋状の形態をもつ。

丸底の杯（25） 数点あるが、法量を知れるのは1点だけである。口径14.8cm、器高3.5cmである。

椀（26・27） 体部中位に屈曲を有し、内外面に丁寧なへらミガキを行った乳茶色を呈するもので、両者ともに体部外面下位に指頭圧痕を有する。

瓦器

椀（28・29） 28は体部に若干屈曲を有し、29は屈曲を残さないまでに体部を押えている。両者ともにジグザグ状にへらミガキを施している。

陶磁器 白磁のみで、青磁は出土しなかった。

白磁i（30） 外底面を高台状に削り出している皿で、花状の文様をへらで描いている。

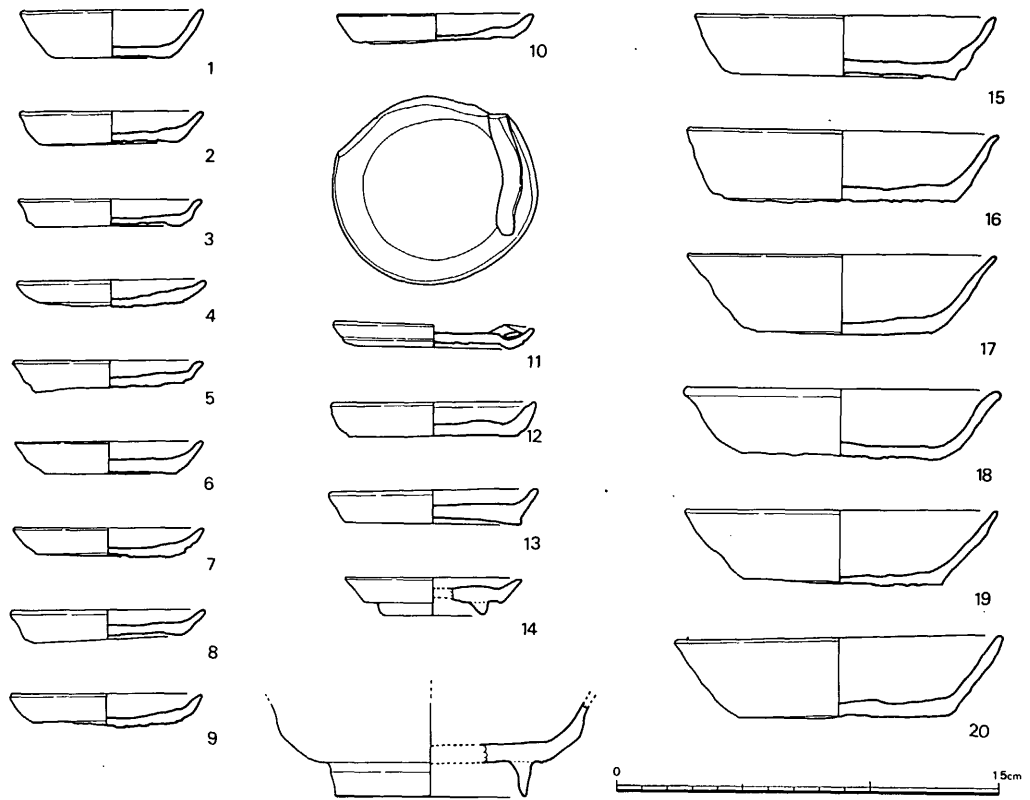
f（31） 高い高台を有する椀で口縁部下、見込部分に各々一条の沈線をめぐらす。

SK822出土土器（第18図、別表）

出土した土器は土師器のみであり、全て糸切りである。

土師器

皿a（2～13） 口径7.2～8.3cm、器高0.9～1.4cmである。11は底部切り離しに失敗したためか、体部を $\frac{1}{2}$ 程切っしまい、それをそのまま焼成したものである。



第18図 SK822 出土土器実測図

b (1) 口径7.2cm、器高1.9cmである。

c (14) 口径7.0cm、器高1.9cmである。

杯 a (15~21) 口径11.8~13.1cm、器高2.4~3.3cmである。

c (21) 高台付杯の底部および体部の一部で比較的高い高台を貼付している。

SK823出土土器 (第19図、別表)

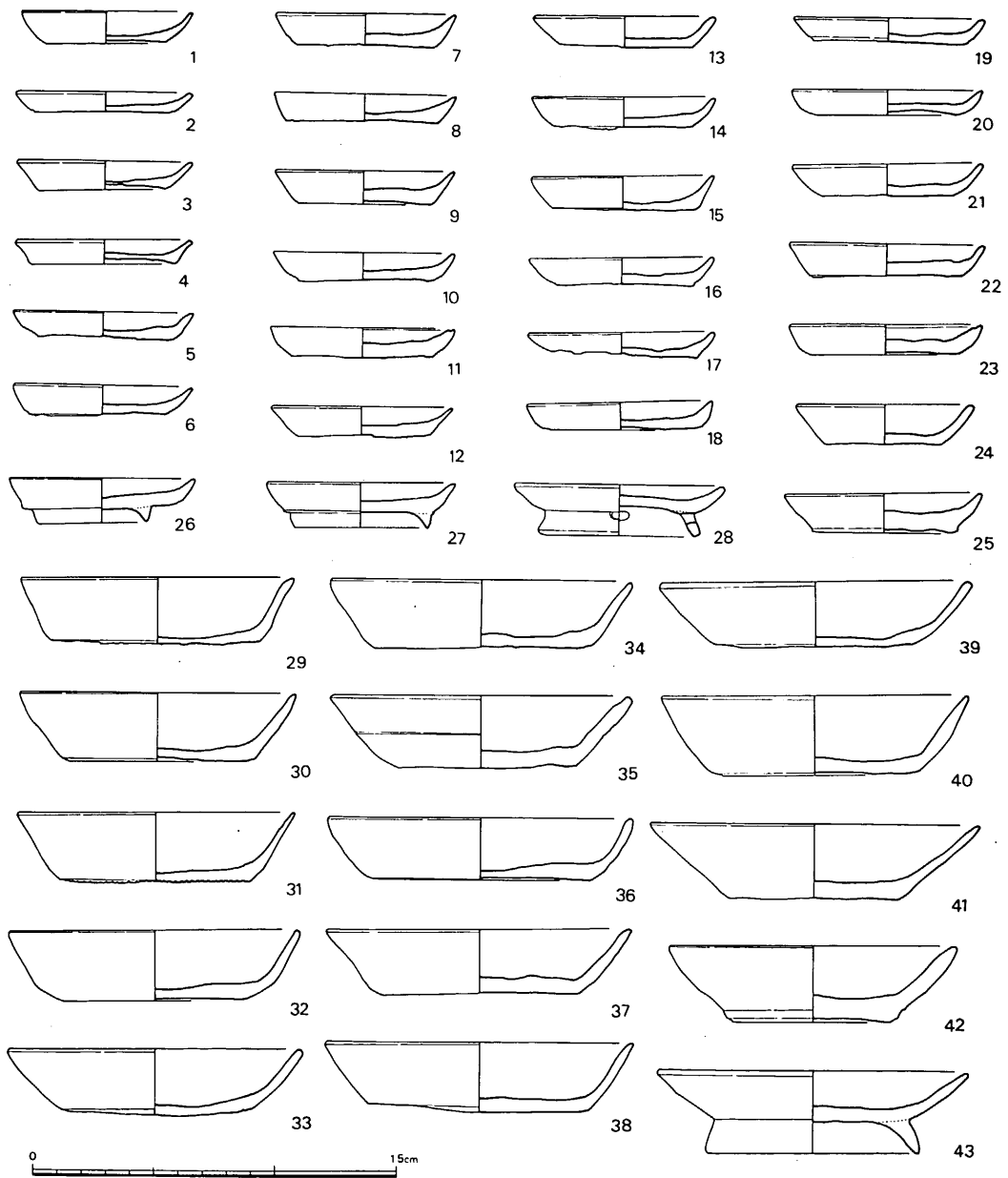
出土した土器は全て土師器で一括して出土した。底部切り離しは全て糸切りである。

土師器

皿 a (1~23) 口径7.1~8.3cm、器高0.8~1.4cmを測る。

b (24・25) 口径7.4cm・8.2cm、器高1.6cmを測り、25は42と同様に器肉は厚く、また胎土、焼成ともに類似している。

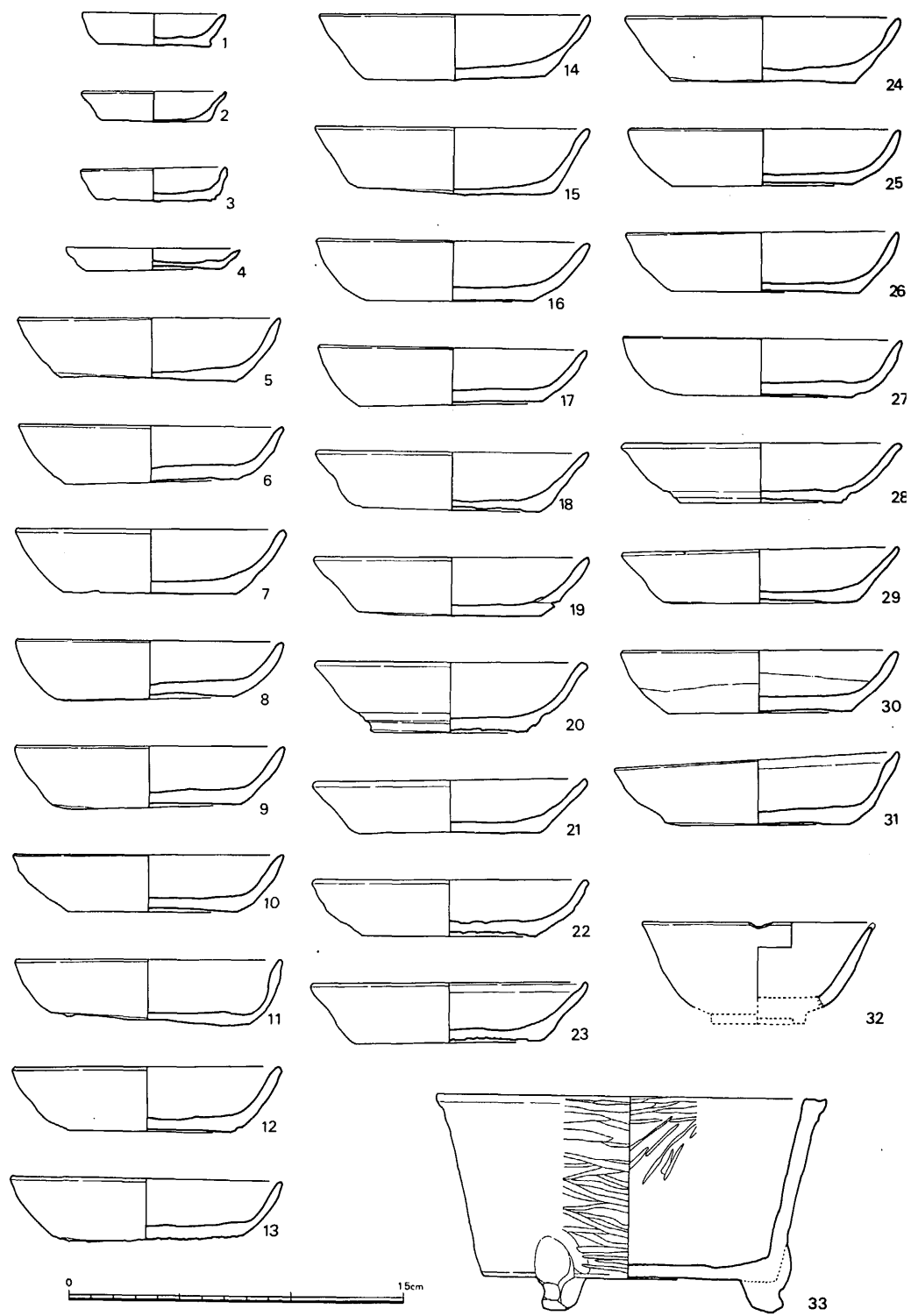
c (26~28) 口径7.4~8.8cm、器高1.9~2.2cmの高台付小皿で、28の高台部側面に4箇所焼成前に穿孔している。



第19図 S K 823 出土土器実測図

杯 a (29~39) 口径11.3~12.8cm、器高2.3~3.2cmで、35には体部外面中位に一条の沈線がある。

b (41・42) 口径に比して、器高が高く、体部が大きく開くものである。



第20图 SK830 出土土器实测图

c (43) 高台付の杯で、杯部の器高は a・b に比して低い。

SK830 出土土器 (第20図、別表、図版31)

土師器、瓦器質土器、陶磁器が出土した。

土師器 全て糸切りで、重ねて置かれた状態で発見した。

皿 a (4) 口径8.0cm、器高1.0cmである。

b (1~3) 口径6.5cm・7.4cm、器高1.4~1.6cmである。

杯 a (5~31) 口径11.8~13.0cm、器高2.4~3.1cmである。19は底部切り離しに失敗し、体部の一部を切ったため、内面に粘土を貼りつけ補強し、焼成したものである。30は体部中位で色調が変わる。重ね焼きによるためであろうか。

瓦器質土器 (33) 約2/3を欠失した火舎で、内外面は真黒色に燻し、器肉内部は淡茶色を呈す。体部内面中位以下は磨滅のためミガキは不明である。残存底部から3脚と考えられる。

陶磁器 出土した磁器は全て細片で、杯にみられたように意識して土壇に入れたものではない。白磁、青磁がある。

青磁 b (32) 口縁に輪花がある小椀で、竜泉窯系のものである。

SK835 出土土器 (第21・22図1~59、別表)

出土した土器は土師器、緑釉陶器、陶磁器であり、全て投げ込まれたような状態で出土した。

土師器 全て糸切りである。

皿 a (3~18) 口径8.2~9.5cm、器高1.1~1.4cmを測る。

皿 b (1・2) 1の口縁部内面に油煙が付着していることから、灯火器として使用されたと考えられる。

杯 a (19~51) 口径12.4~14.2cm、器高2.2~3.0cmを測る。底部に内部から穿孔しているもの(20)を1点含む。

c (52) 高台を貼付したもので、aに比すと口径は大きい。

盤 (53) 口径21.5cm、器高2.9cmのものが1点出土した。

陶磁器

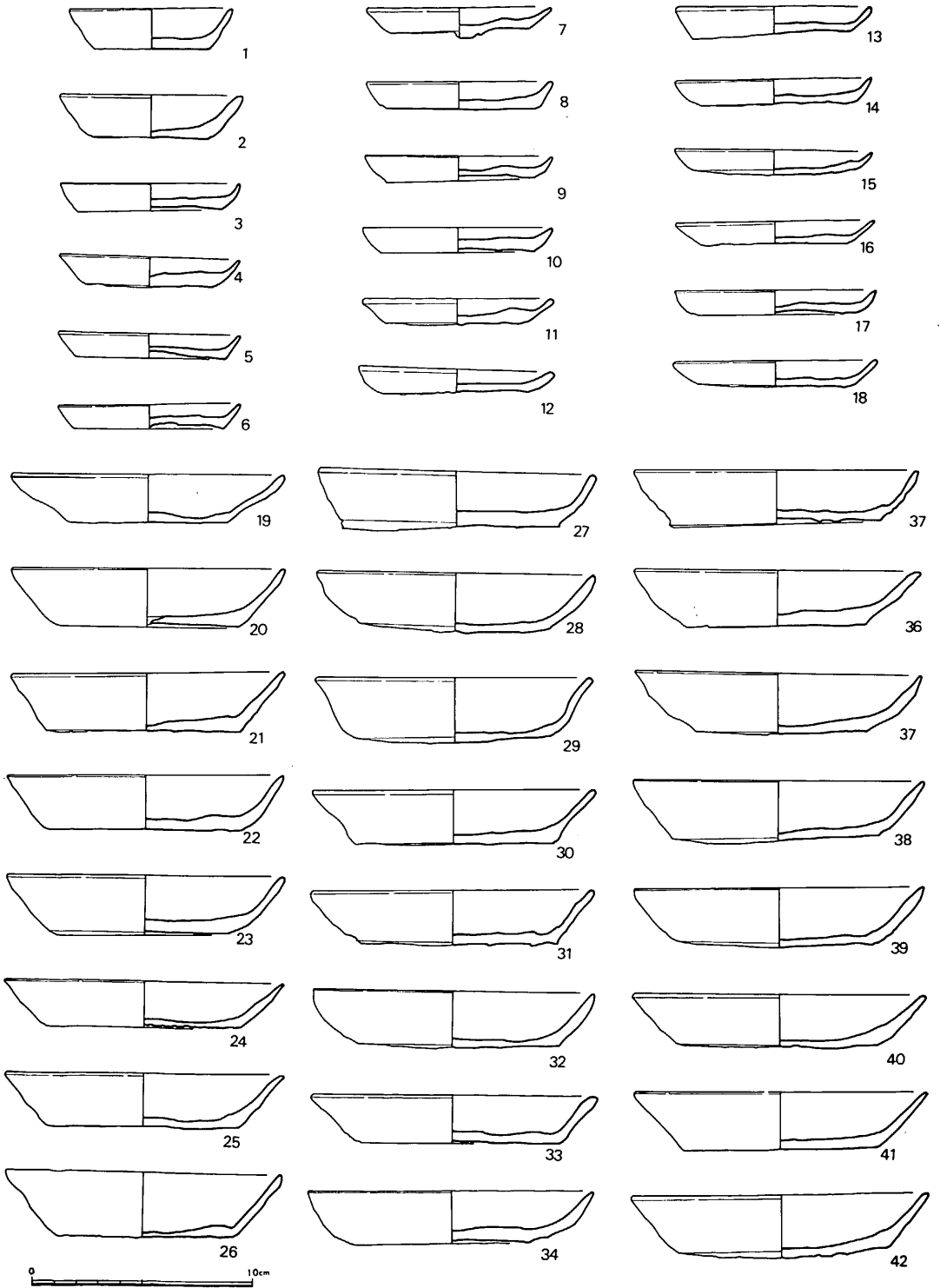
白磁 g (54・55) 口縁端部の釉を削り取った椀で、体部中位および見込み部分に沈線を巡らしている。

青白磁 (56~58) 空色を呈す釉がかけられたもので、56・57の見込み部分には1条の沈線があり、57の外底には釉がかかっている。58は型つくりのもので、体部中位で接合している。

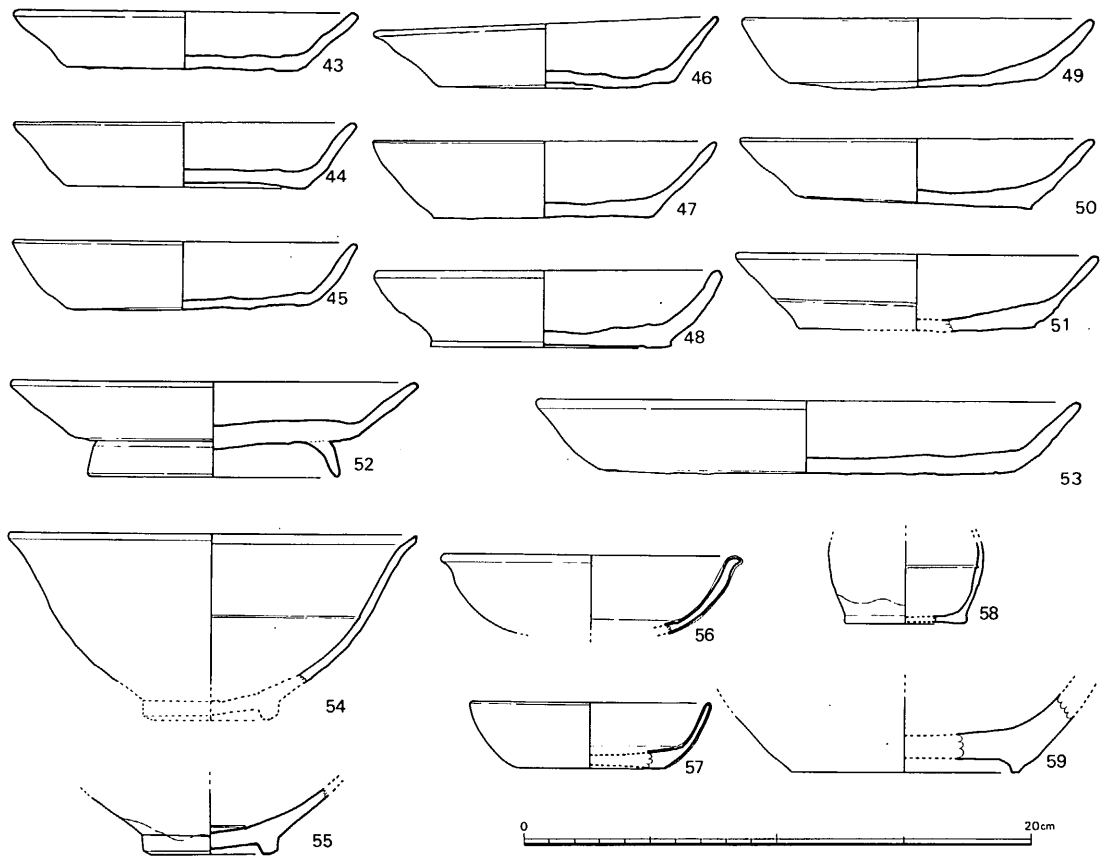
褐釉陶器 (59) 褐色の釉がかかった鉢の底部片である。

SD860 出土土器 (第23~27図、別表、図版33)

埋土は、大別すると3層に分かれ、もっとも多く出土したのはII層からである。土師器、瓦器、陶磁器が出土した。



第21图 SK835 出土土器实测图(1)



第22図 SK835 出土土器実測図(2)

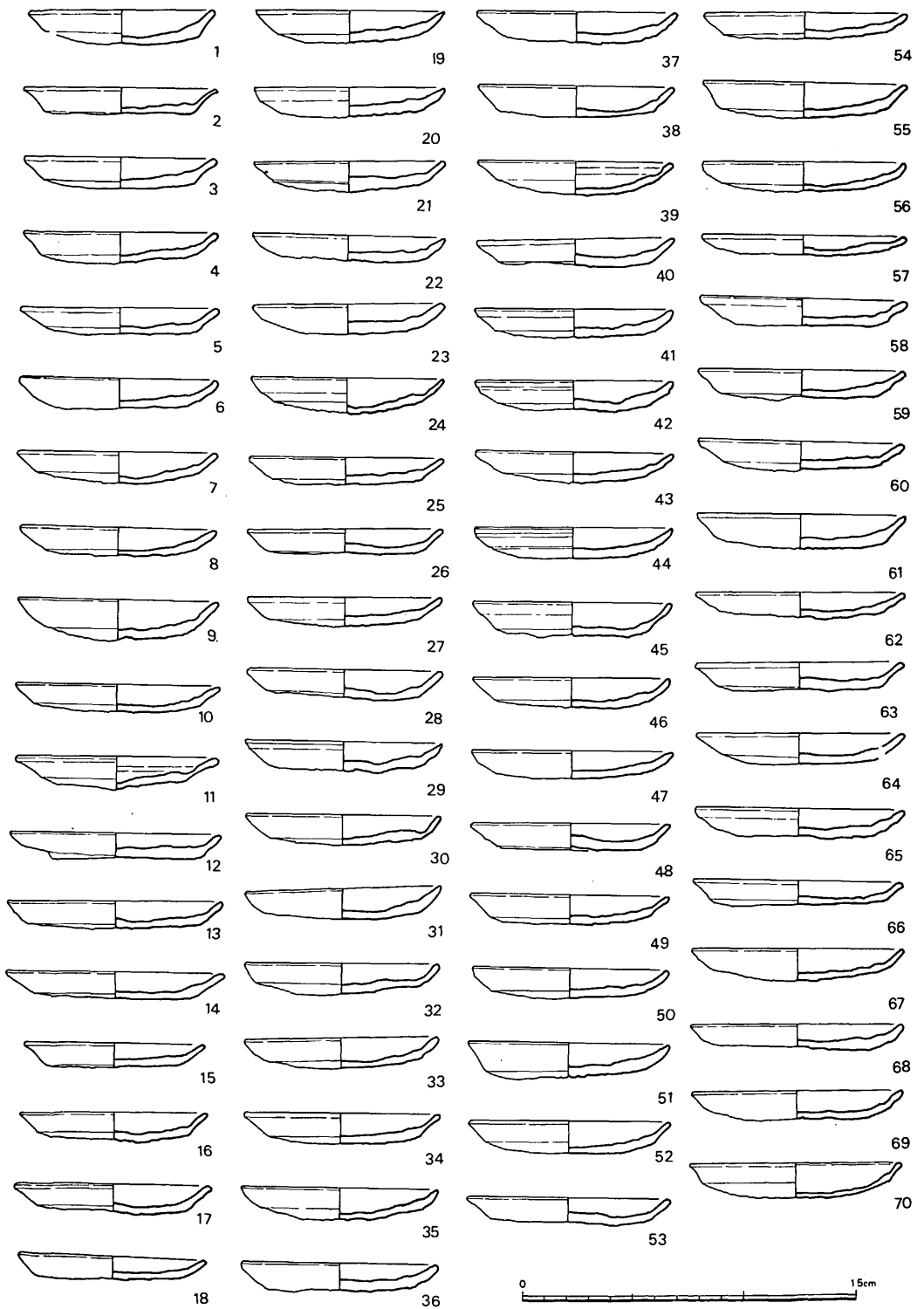
土師器 皿 a、杯 a・c、丸底の杯、椀、小壺が出土した。このうちもっとも出土数の多いのは皿 a で、完形および完形に近いものだけで100点を越える。

皿 a (1~100) III層 (1~14)・II層 (15~77)・I層 (78~100) 77は他のものより口径、器高とも大きく、それを除外すると、口径は8.25~9.75cmで10cmを越すものはない。器高はへら切りの場合は底部が丸くなるためか0.9~1.9cmまでであるが、糸切りのそれは1.05~1.4cmの狭い範囲におさまる。6は手捏ねである。

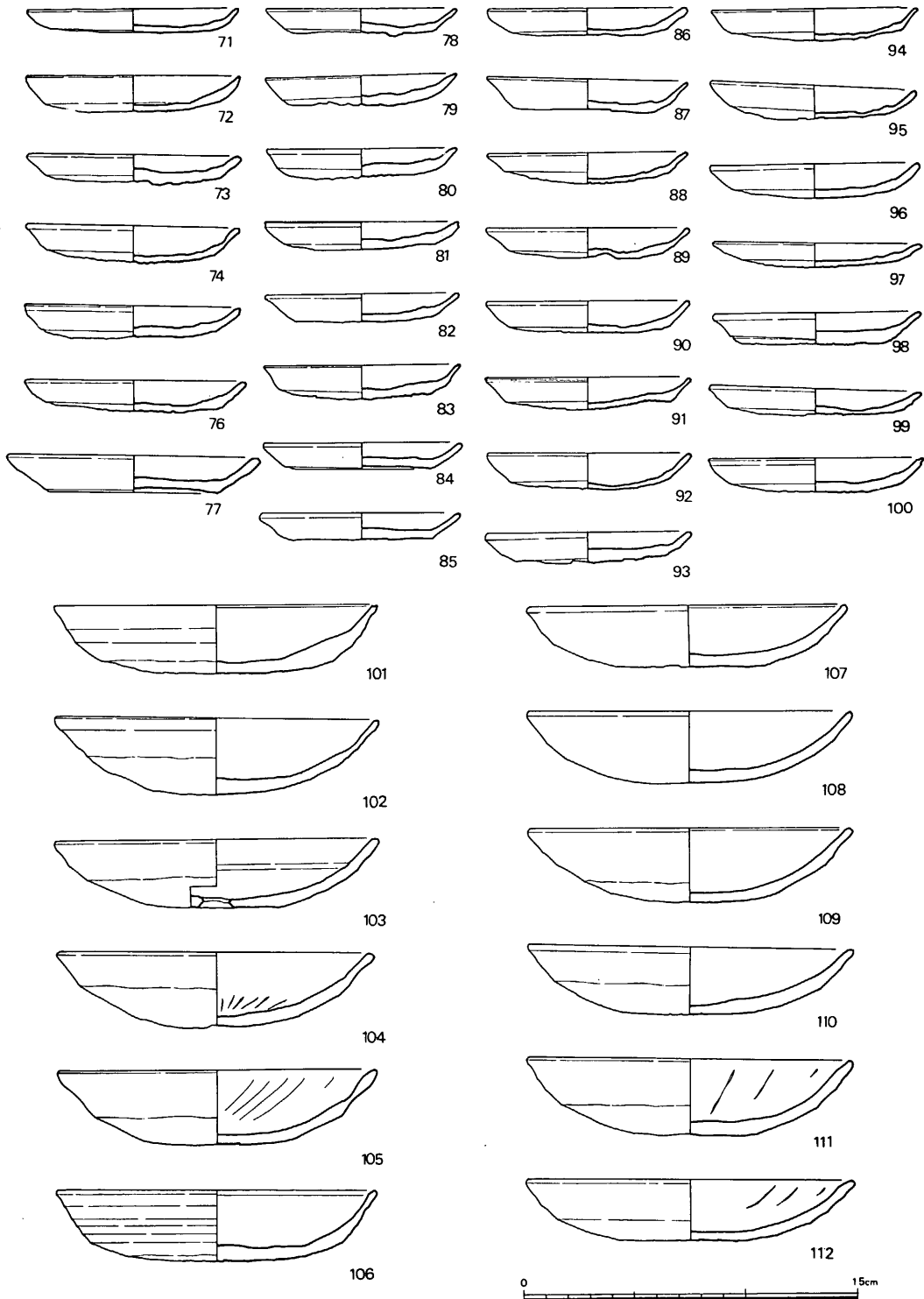
杯 a (130・137) II層 (130)・I層 (137) 130はへら切りで口径16.25cm、器高2.6cm、137は糸切りで、口径15.6cm、器高2.5cmである。

c (138) 肉太の高台を貼付した高台付杯で、口径は小さい。

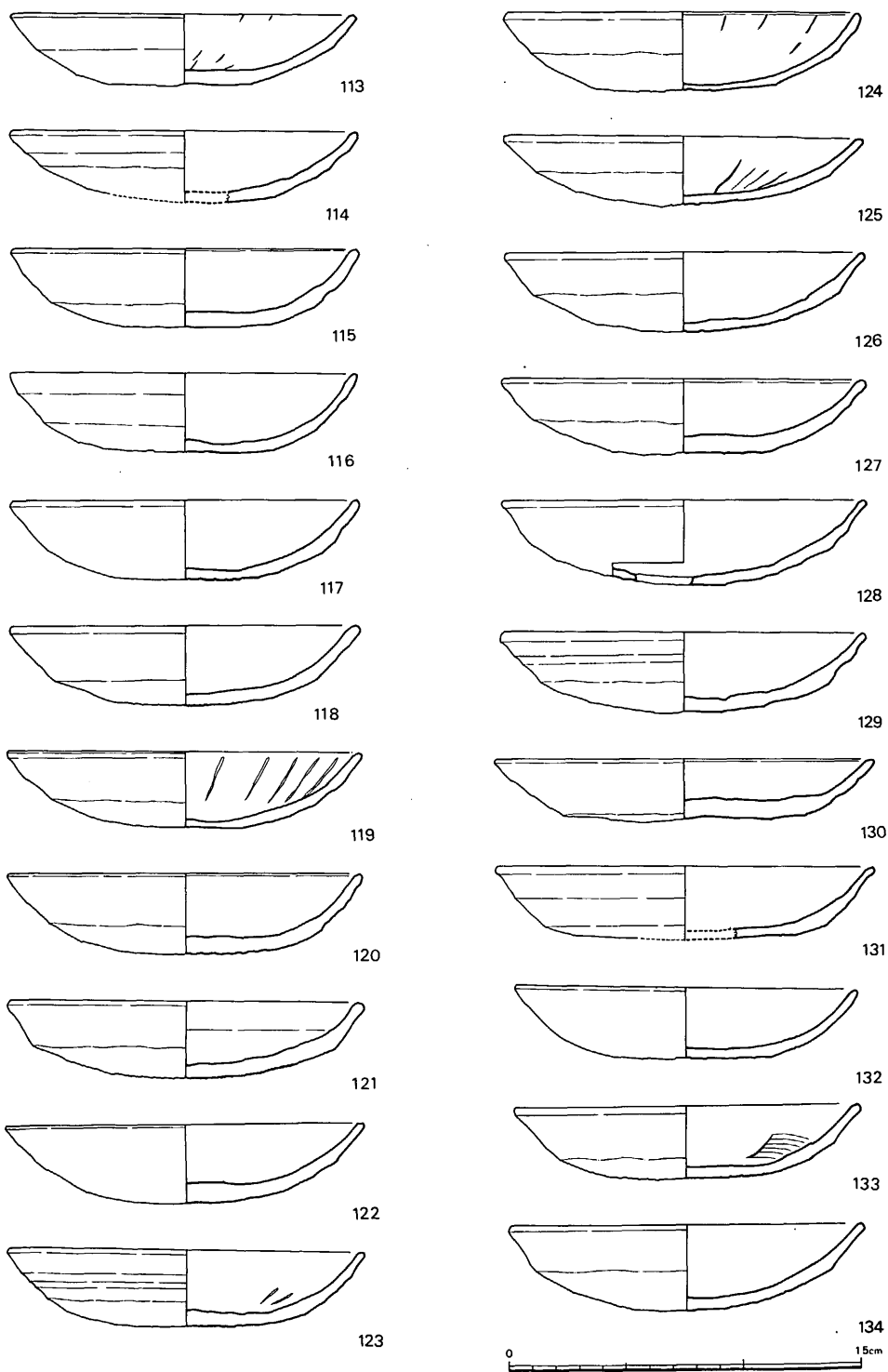
丸底の杯 (101~129、131~136) 口径14.3~16.25cm、器高2.8~3.7cmである。内面にミガキを行い、器面を密にしている。成形時の痕跡と考えられる放射状の跡がみられる。煮沸に使用したため外面が赤化し、内面に炭化物の付着しているものも少数出土している。



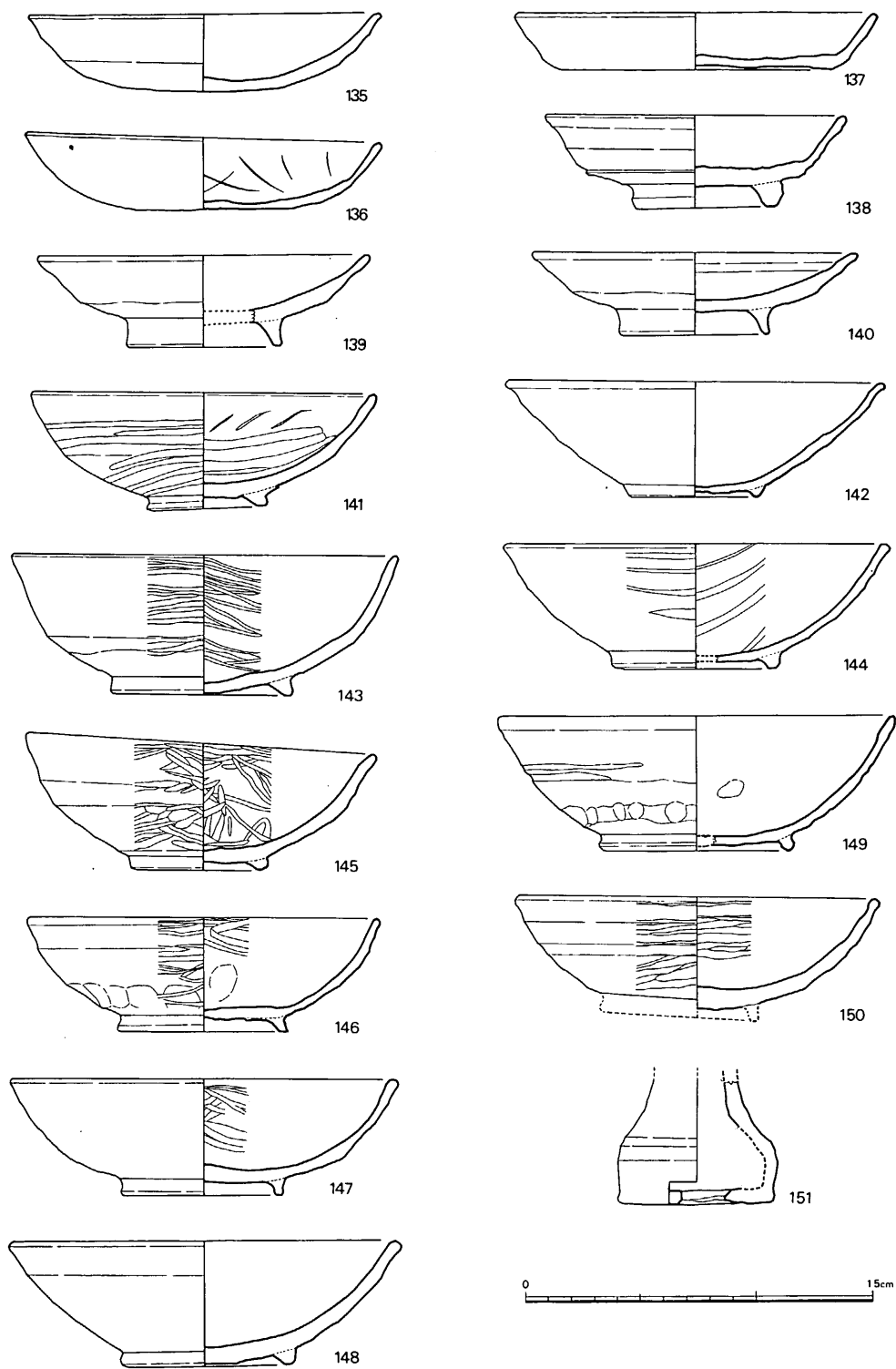
第23图 S D860 出土土器实测图(1)



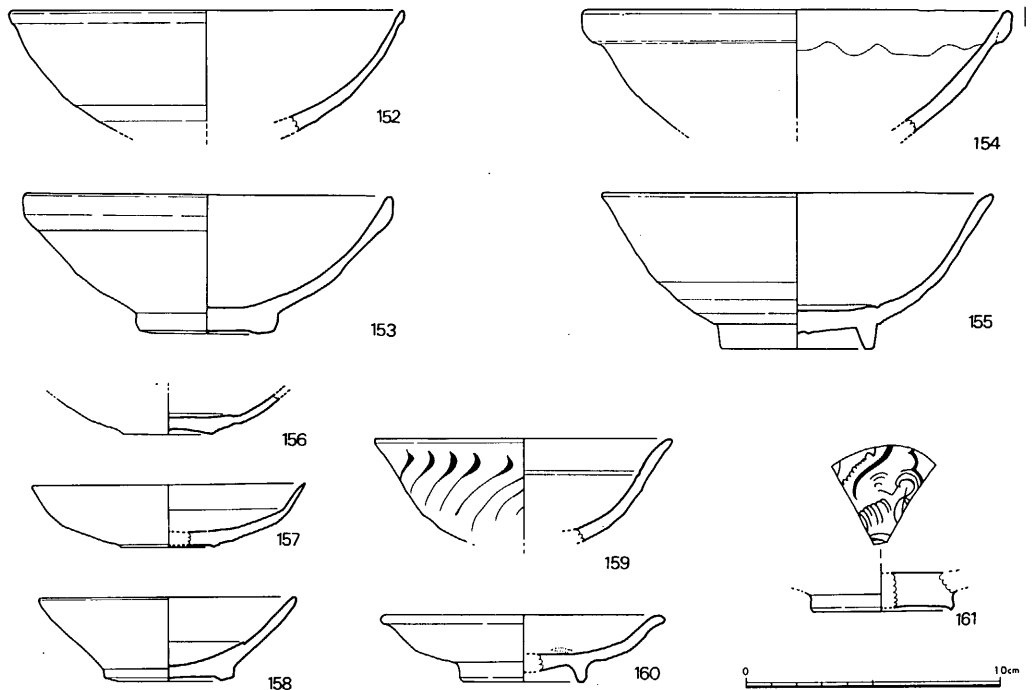
第24图 SD860 出土土器实测图(2)



第25図 S D 860 出土土器実測図(3)



第26图 SD860 出土土器实测图(4)



第27図 SD860 出土土器実測図(5)

高台を貼付したもの(139・140)があるが、出土数は少ない。

椀(141~144) 全て内外にヘラミガキを行っている。144の内底には炭素が吸着していることから、黒色土器が瓦器として焼成しようとしたが、うまく炭素が吸着しなかったのかもしれない。

壺(151) 乳白色を呈し、底部に一孔を焼成後にうがっている。

瓦器

椀(145~150) 口径に対して器高の比較的低いものが多く、丸底の杯にみられる指頭圧痕が顕著なもの(146・149)があり、両者に共通する技法上の特徴が知られる。148・150の器肉内部は灰白色を呈すが、炭素の浸透が深いため黒色土器とした方が良いかも知れない。

陶磁器 白磁73点、青磁8点、青白磁1点、陶器10点が出土した。

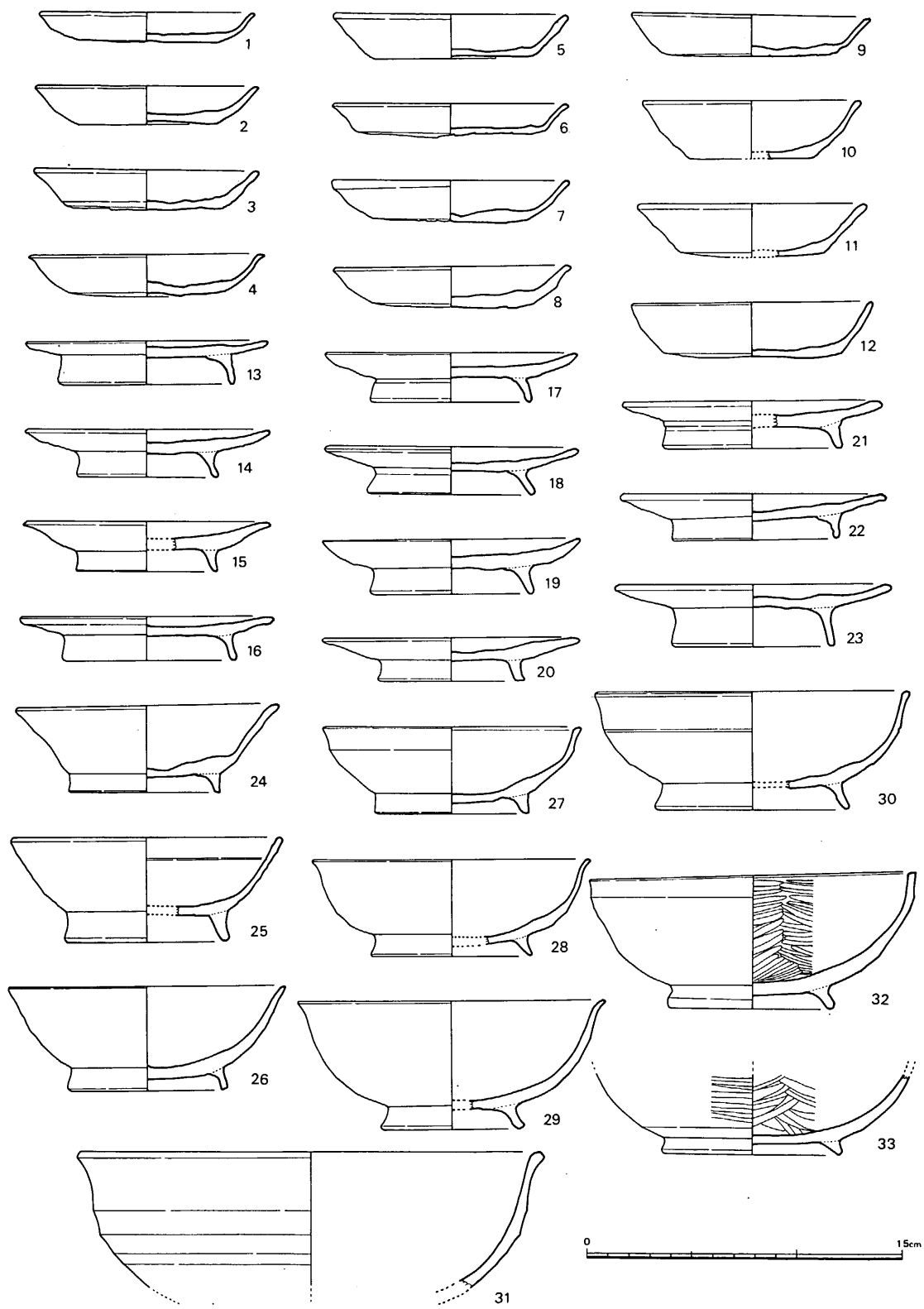
白磁 b・c・d・f・h・iが出土した。

b(152) 底部を欠失している椀で、体部下半をヘラ削り調整している。

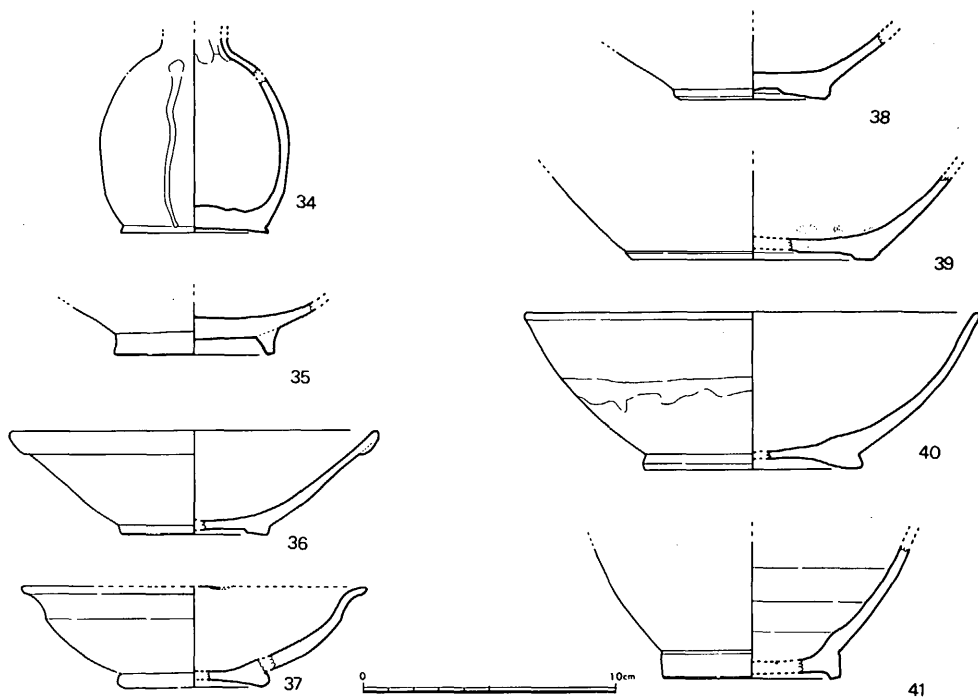
c(153・154) 外底を低く削り出し、口縁部を三角形に折りまげた椀である。

f(155) 比較的高い高台を有し、見込みに1条の沈線をめぐらしている。

h(158・159) 158は見込みに1条の沈線を有し、159の外面にはヘラ状の工具で縦に文様状の沈線を描いている。



第28图 S D 865 出土土器实测图(1)



第29図 S D865 出土土器実測図(2)

i (156・157) bと同様の胎土、色調である。

青磁 a、fが出土した。

f (160) 比較的荒い胎土に濃緑色の釉がかけられ、内外に重ね焼きの目跡がある。

青白磁(161) 見込み部分に文様を描いているが、破片であるため、どのような文様が不明である。高台畳付および外底部を除いて青味をおびた透明な釉がかけられている。

SD865出土土器 (第28・29図、別表、図版34)

土師器、黒色土器、陶磁器が出土した。

土師器 皿 a・c、杯 a・c、碗を発見した。全てヘラ切りである。

皿 a (1~9) 口径10.3~11.4cm、器高1.5~2.0cmを測る。

c (13~23) 細く高い高台を貼付した皿で、口径11.6~13.2cm、器高2.1~3.0cmを測る。

杯 a (10~12) 口径10.4~11.6cm、器高2.6~2.8cmである。

c (24・25) 口径12.4~12.6cm、器高4.2・4.0cmである。

碗 (26~31) 体部および口縁部の形状により26と27~31に分かれる。

26は若干体部に丸味を持つが、あまり顕著ではなく、口縁部と体部との境は不明確である。

27~31は体部中位で屈曲し、口縁部は体部と区別される。

黒色土器 (31・32) 31は内面を、32は内外面を燻した碗である。

緑釉陶器 (34・35) 34は黄白色の胎土に黄緑色の釉をかけ、さらに肩部から底部付近まで濃緑色の釉を垂下させている。35は黄白色の胎土に黄色味をおびた緑色の釉がかかっている。

陶磁器 白磁、青磁が出土した。

白磁 aのみである。

a (36) 白色の胎に空色をおびた白色の釉がかかっている。

青磁 aのみが出土した。

a (37~41) 椀および壺の底部片が出土した。高台の形状は平底、蛇の目、輪状と全て揃って出土している。

SX 863出土土器 (第30図、別表、図版35)

出土した遺物は土器のほかに小刀・銅銭があり、それらは一括遺物であるので、ここでは小刀・銅銭も含めて述べる。

掘方内出土土器 皿 a と杯 a がある。SD 860の埋土から掘り込んでいるため、掘方内にはSD 860の遺物を含む。

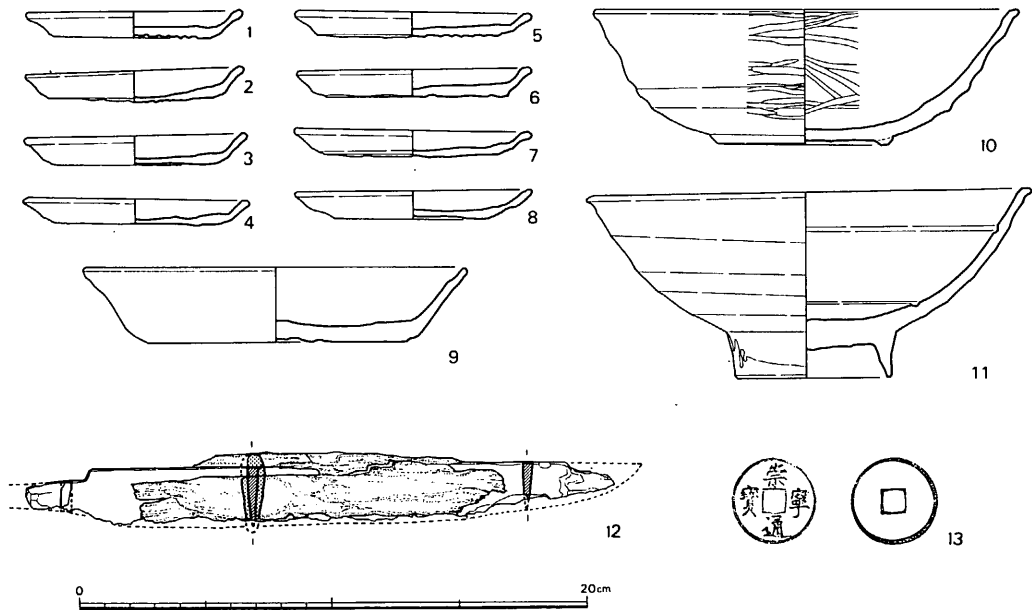
皿 a 口径8.6~9.4cm、器高1.0~1.2cmである。

杯 a 口径16.0cm、器高3.4cmで、底部は糸切りである。

棺上副葬品 皿 a 8個、杯 a 1個、瓦器椀1個、白磁椀1個が頭部の位置に埋置されていた。

土師器 全て糸切りである。

皿 a (1~8) 口径8.6~9.4cm、器高1.0~1.2cmである。



第30図 SX 863 出土遺物実測図

杯 a (9) 口径15.2cm、器高3.0cmである。

瓦器碗 (10) 体部下半が若干屈曲する碗で、その屈曲部分から糸切りが始まる。内外のヘラミガキはやや粗雑である。

白磁碗 (11) 細くて高い高台を有し、口縁部を若干外反させる碗で、白磁 d に相当する。

棺内副葬品 小刀1口、銅銭1枚が出土した。

小刀 (12) 遺存状態が悪かったため、取り上げ時に一部が欠損した。木製鞘に入れて副葬していた。

銅銭 (13) 径3.45cmの崇寧通宝である。

SX864出土土器 (第31図、別表、図版35)

SX863と同様に棺上(頭部の位置)に並んで出土した。出土遺物は土師器、杯 a 1個、青磁碗 (b-1) 1個である。

杯 a (1) 口径16.2cm、器高2.8cmで、底部は糸切りである。

青磁碗 b-1 (2) 体部内面に草花文を3個連続して描いている。見込み部分にも文様があるが、何を描いているのか判然としない。

陶磁器 (第32~34図、図版36~38)

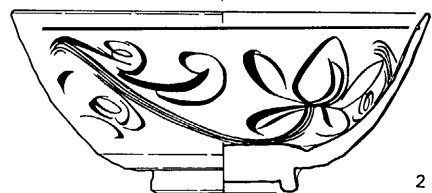
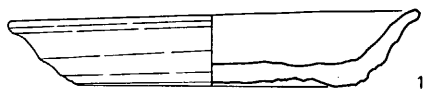
各遺構から多量に出土したが、とくにSD865を覆う暗青砂質土層・黒色砂質土層からは白磁・青磁・青白磁が多く出土した。以下では、これらの陶磁器を中心として述べる。

白磁 (1~21)

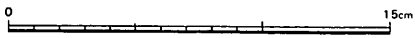
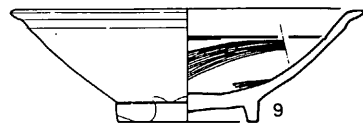
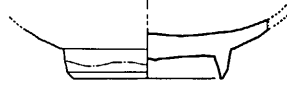
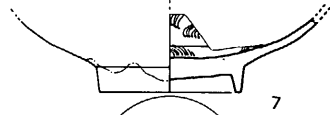
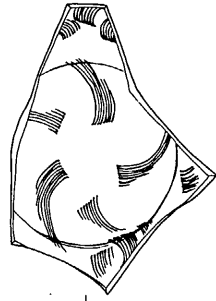
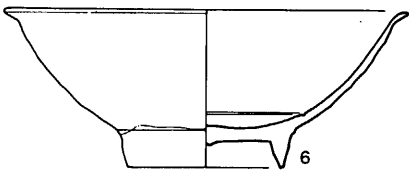
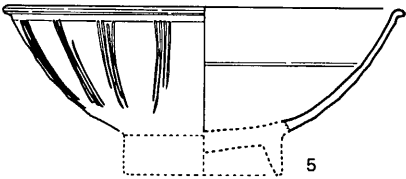
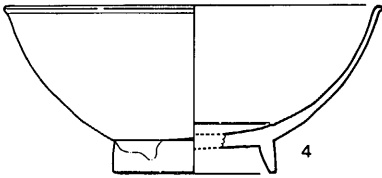
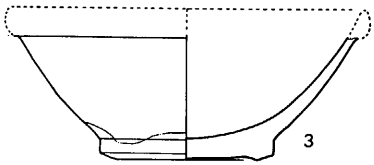
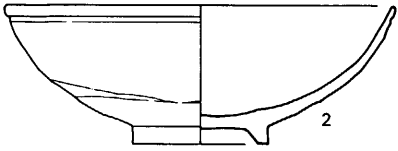
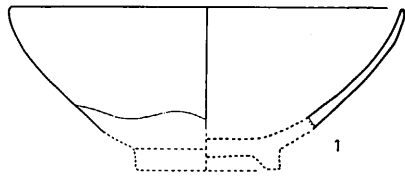
b (1・2) 白灰色の胎、黄色味をおびた釉調を特色とし、台形の高台をもつ碗で、2は口縁部を若干肥厚させている。1は体部下半を欠失していたため高台の形状は不明である。一応ここでは2と同種のものであろうと想定したが、平底になるかもしれない。

c (3) 低い高台と口縁部を三角形に折り曲げる碗で、灰白色の釉がかかる。

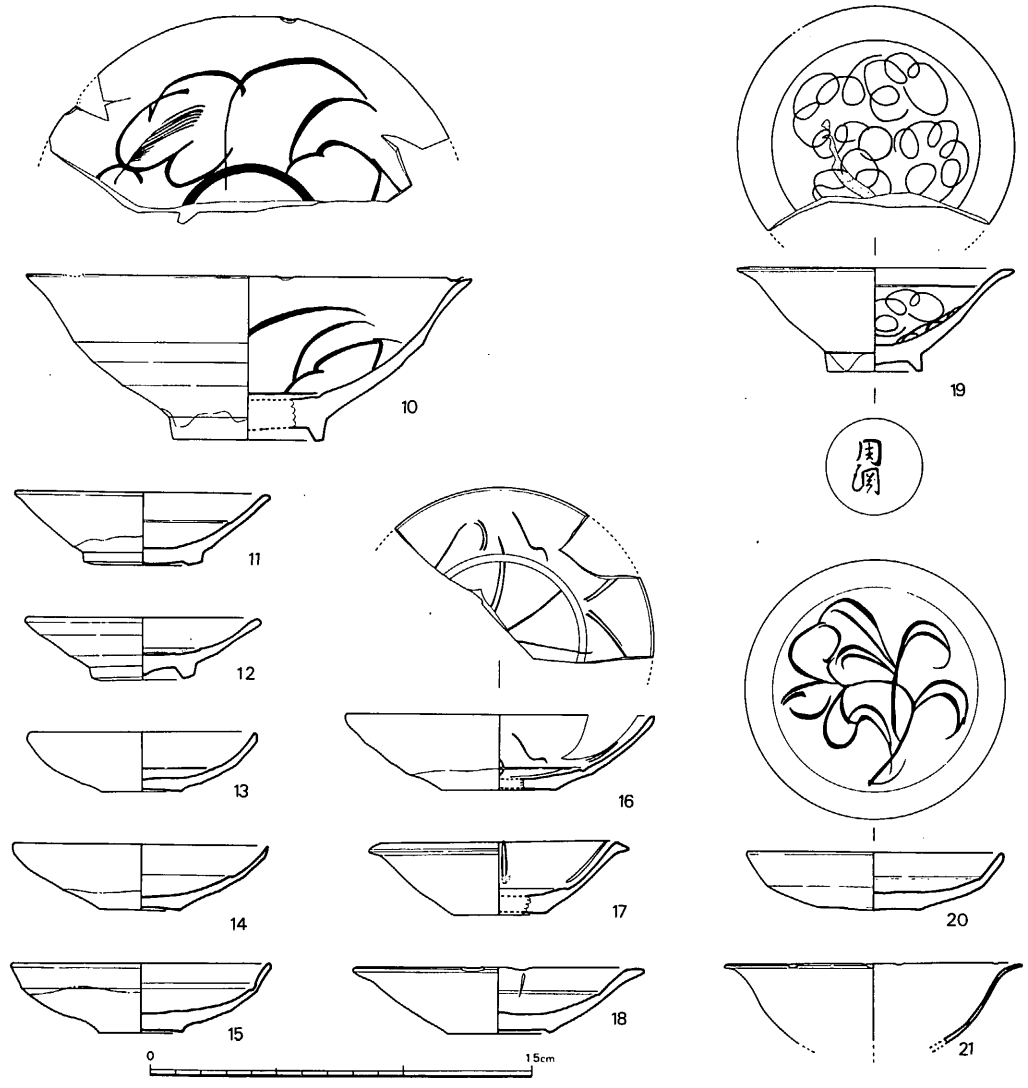
d (4~10) 口縁部を外に折り曲げ、細く高い高台をもつもので、5の外面には縦に4本単位の櫛状の工具で沈線を入れている。7・8の外底には墨書があり、8は「張旧」と読めるが、7については判読困難である。10の口縁には6花の輪花がある。灰白色の胎と灰白色の釉を主体とし、若干黄色味をおびるものもある。



第31図 SX864 出土土器実測図



第32图 陶磁器 实测图 (1)

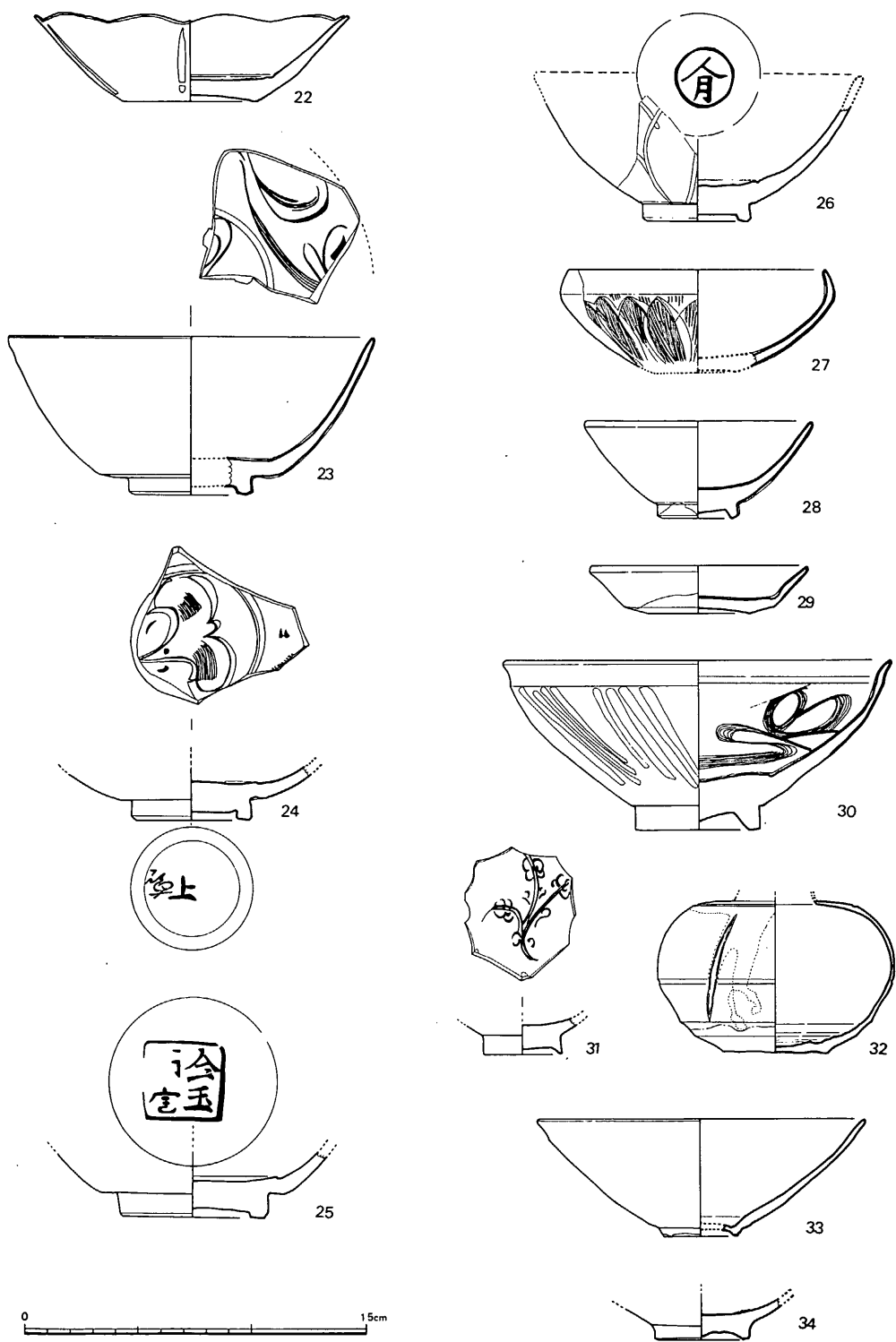


第33図 陶磁器実測図(2)

h (11・12) 高台付皿で、断面四角形の高台を有し、dと同種の胎・釉調である。12の見込み部分は焼成前に釉を環状にかき取り、その部分に重ね焼きの跡がある。

i (13～16) 無高台の皿で、bと同種の胎・釉調である。16の体部内面には草花状の文様が彫られている。

j (17・18) 口縁を外反させ、端部が面をなす無高台の皿で、dと同種の胎・釉調である。17は内面の釉下に細い粘土紐を縦に貼付して、5区画に分割している。18は輪花があり、その部分に沈線を入れている。底部を若干削り、圈足状にしている。



第34图 陶磁器 实测图 (3)

K (19) 体部内面にラセン状の線刻を施した小型の椀で、灰白色の胎に灰白色の釉をかけている。外底には「周綱」の墨書がある。

l (20) くすんだ空色をおびた白色の釉を比較的厚くかけた皿で、見込み部分に草花文様が彫られている。

m (21) 非常に薄く、つくりのよい小椀で、口縁部に8花の輪花がある。胎は白色で、釉は淡緑色をおびた白色である。

青磁 (22~30・33・34)

a (22) 口縁部を花卉状に切り出した鉢で、外面の体部を縦に凹め、4分割している。内面には使用跡と考えられる擦痕が横方向に無数にはいつている。褐色をおびた緑色に施釉した越州窯系の青磁である。

b (23~26) 低い四角形の高台と厚い底部をもつ椀で、高台の位置により2種に分けられる。

b-1 (23~25) 底部の内側に高台を削り出したもので、23は体部内面に右流れの草花文様が刻まれている。24は内面の全面にへらと櫛状のもので花状の文様が刻まれている。

外底に異筆の墨書2字が見え、「上」は読めるが、花押状の文字は判読困難である。25は内面に「金玉満堂」の刻印がある。

b-2 (26) 高台部からすぐに体部が丸味をもって外上方へ延びるもので、外面にはへらで蓮弁を削り出し、内底には「人月」の刻印がある。

c (27) 蓮弁の上に細い櫛目を入れたもので、底部は欠損しているが、平底であろう。

d (28) 高台付の小椀で、b-2に近い胎および釉調である。

e (29・30) 同安窯の皿・椀で、29は無文で、30は外面にへら状のもので4本単位の沈線を入れ、内面体部には櫛状のもので花文が描かれている。

f (33・34) 33は初期高麗の椀で、高台部に重ね焼の目跡がある。褐色を呈する黄緑色の釉がかけられている。34は李朝期の椀の底部で、内外に目跡がある。緑色をおびた暗灰色の釉を全面にかけている。

青白磁 (31) 見込み部分に草花文を丁寧を描いている。外底面露胎部分は黄色味を呈し、その上に黒色の斑点が見られる。

陶器 (32) 茶入れといわれている壺で、頸部と肩部の境に1条、肩部に1条、胴部に1条計3条の沈線を巡らし、また胴部にはへらで押えたような沈線がある。1/6程度の小片であるため、胴部を何分割するのか不明である。釉は暗褐色の部分と黄色味をおびた褐色の部分があり、褐色の釉が胴部下位まで垂下している。

図面番号と出土層位・遺構対照表

1 暗青砂質土層 2 黒色砂質土層 3 暗青砂質土層 4 暗青砂質土層 5 暗青砂質土層 6 黒色砂質土層 7 黒色砂質土層
8 SD825 9 黒色砂質土層 10 黒色砂質土層 11 暗青砂質土層 12 黒色砂質土層 13 暗青砂質土層 14 黒色砂質土層

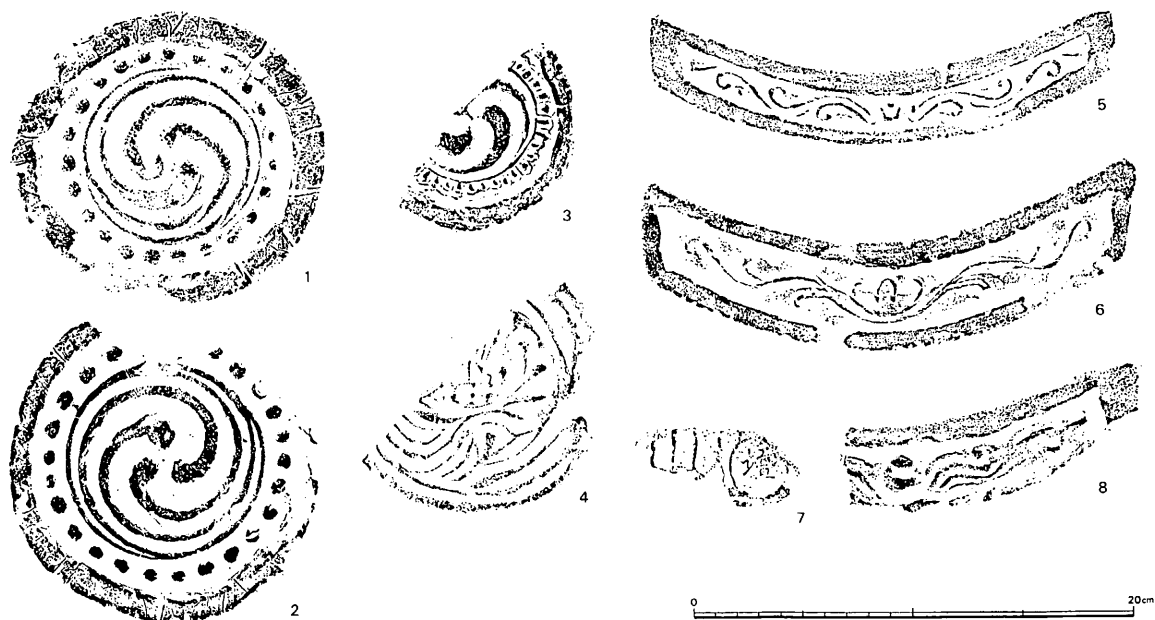
15 黒色砂質土層 16 暗青砂質土層 17 黒色砂質土層 18 黒色粘土層 19 暗青砂質土層 20 青灰粘土層 21 暗青砂質土層
 22 暗青砂質土層 23 暗青砂質土層 24 暗灰粘土層 25 黒色砂質土層 26 SD815 27 黒色砂質土層 28 SD815
 29 焼土層 30 SD815 31 黒色砂質土層 32 SX796 33 黒色砂質土層 34 SD790

瓦（第35図、図版51）

今回の調査で出土した瓦は丸・平瓦、軒先瓦が主なもので、ほかに少量の文様埴がある。軒先瓦は総数163点で、主に瓦溜SK805やSB800の整地土と考えられる茶灰色土および遺構を覆う暗灰色砂質土から出土している。このうち75%が鎌倉期を中心とした中世の瓦であり、出土点数では第35図-1・5・6の三点が圧倒的に多いので、ここではこれらの瓦を中心に述べる。

軒丸瓦は総数78点で、うち第35図-1が38点で全体の約49%を占めている。瓦当径13cmで内区は左巻きの三巴文を配している。巴文の頭部は尖り気味で尾は長く古い要素を残している。外区内縁には23個の珠文を配している。胎土は荒い砂を多量に含んでいる。2は1よりも瓦当直径が若干大きく巴文の中心に小さな円点を置いている。3は巴文の頭部が連続しており、尾は短い。外区内縁に剣頭文を配している。4は他の瓦にくらべて瓦当文様の趣きが異っており、また裏面の痕跡から軒先瓦とするには疑問がある。瓦とは用途の異なるものである可能性がある。

軒平瓦は総数85点で、第35図-5が16点（19%）、6が40点（47%）である。5は瓦当幅21cm、瓦当厚3.4cmで比較的小形である。内区は宝珠形の中心飾の左右に3回反転の唐草を配している。外区の両脇が若干幅広くなっている。6は瓦当幅22.5cm、瓦当厚5cmである。内区は逆U字形の中心飾の左右に2回反転の唐草を配した均正唐草文で外区は素縁である。胎土は1と同



第35図 軒先瓦拓影

様に砂粒を多く含んでいる。7はわずかに1点が出土のみである。内区文様は剣頭文で瓦当の両脇と中央に各々「戒」「壇」「院」の文字を円でかこんで配したものと思われる。8は均正唐草文で中心飾の宝珠形の文様は5よりも整っている。また外区の両脇は5と同様に幅広くなっている。

以上述べた軒先瓦のうち出土量の上から1と6がセット関係をなすものと考えられる。この組合せの瓦は出土状況からSB800の礎石建物に使用されたものと考えられる。またSK805から共伴した土師器の形態から、これらの瓦は鎌倉期後半頃のものとしてさしつかえないであろう。

鉄製品・木竹製品（第36・37図、図版55・56）

鉄刀（1）

SD859から出土し、木製柄が良好に残存する鉄小刀である。木柄は長さ20.5cm、幅3.6cm、厚さ2.2cmで、全体に鉄刀子などの刃物で加工したと思われる細い削りがみられる。刀身の復元長は15.4cm、最大幅2.5cm、最大厚0.4cmで、反りがある。目釘穴はない。

紡錘車（2）

SK830の下層から出土した。直径4.5cm、厚さ0.5cmで、中心に1孔を穿ち、側面に削り痕がある。

扇（3）

SD860の最下層（暗灰色砂）から出土した。柁目の割板を薄く削った骨は8枚残存し、そのうち完存する1枚の全長32.6cm、幅0.7～1.6cm、厚さ0.2～0.3cmである。要孔の径は0.9cmで、要棒が残存する。

鋤（4）

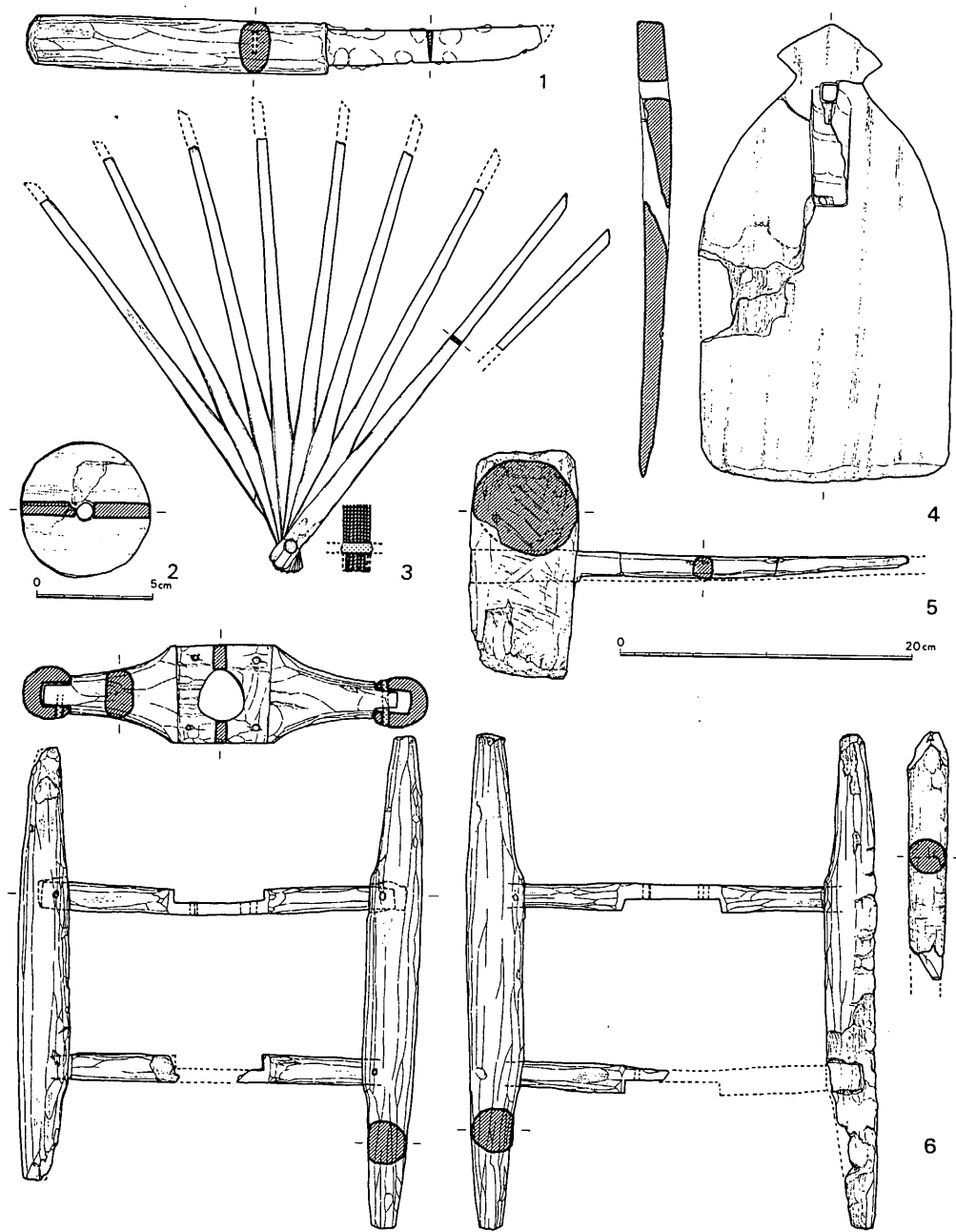
SK830の下層から出土した。全長31.3cm、最大幅17.0cm、最大厚2.0cmで、反りがある。頭部は菱形につくり出され、両端にくびれ部を設け、両面からはノミ状の刃物で頭部の方から、直角方向、斜方向2ヶ所が方形に穿孔される。斜方向の孔には、柄を鋭角に挿入し、上方の直角方向の孔は柄を固定するためのものであろう。先端は刃部状を呈し、磨滅しているが、鉄製鋤先を着装するか否かは不明である。

木槌（5）

SK830の底面から出土した。頭部は長さ15.8cm、径7.4cm、柄部は残存長22.5cm、最大幅2.0cm、厚さ1.4cmである。頭部両端は使用のため磨滅している。また側面は刃物のキズが多数つき、何らかの加工台としても使用されている。

糸巻き（6）

SD860のII層から出土した。横木は、長方形板材の両端に向けて側辺を削り、先端を欠きとって方形とする。中央には板材幅の切り欠きを入れ、相欠きの仕口をつくり、軸棒を通す円孔

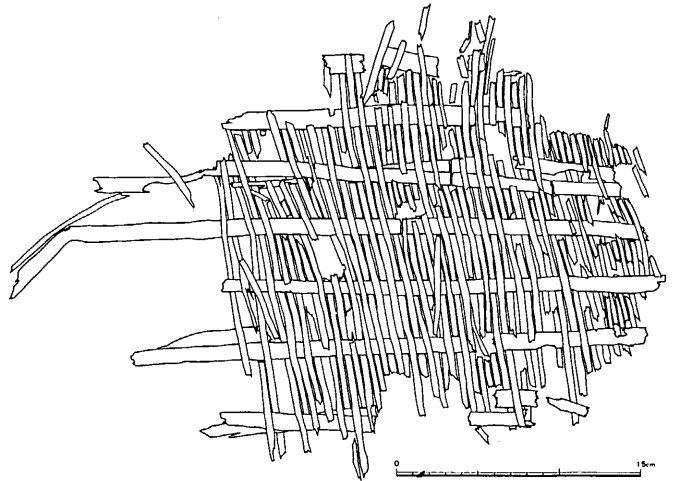


第36図 鉄製品・木竹製品実測図

を穿孔する。この2枚の横木を十文字に組み、上下2段で4本の杵木を支える。杵木は半円形をなし平坦面（内面）の上下に、横木を挿入する方形の柄穴をつくる。軸棒とみられるものは、細かい加工は行われておらず、表面には木皮が残っている。横木と横木、横木と杵木は目釘穴を穿ち、竹釘様のもので固定する。横木の接合部はこれが4カ所あり、横木と杵木の接合部には夫々1カ所ずつあるが、目釘穴は杵木の両側面に貫通するところと、片面のみのところがある。全体は刃物状のもので削られるが、杵木の端部、横木の中央欠き取り部や杵木への挿入部など、一部は鋸で切断したままの痕跡が残る。柄穴はノミ状のもので加工されたものであろう。また、火熱をうけて不用となった後廃棄されたとみられる。それぞれの部材値は、横木の全長25.0cm、そのうち両端接合部、1.06~1.7cm。最大幅5.7cm、厚さ1.7cmである中央軸孔の径3.4cm。杵木4本の全長29.9cm、33.9cm、34.1cm、34.2cm、最大幅3.5~3.9cm、最大厚3.5~3.6cm、柄穴間10.2~10.9cm。軸棒とみられるものの残存長17.2cm、径2.6cmである。

組物（第37図）

SD790の底部から出土した。残片であるため原形は不明であるが、幅1cm前後の竹材を2.5~3.5cm間隔に、その間には幅0.3~0.4cmの細い竹材を密に通して箆目編みとする。



第37図 SD790 出土竹製品実測図

木製杯（第15図11）

SE855の井戸杵内から出土した。復元口径15.5cm、器高3.0cm最大厚0.7cmを測り、外底部の削り方向は不明であるが、その他はロクロ挽きである。

横櫛

SE858から出土し、約 $\frac{2}{3}$ 残存している。

杵

SD860から約 $\frac{2}{3}$ を残して出土した。

墨書木札（図版56）

この墨書木札は井戸SE855から検出したものである。長辺端に桜皮を用いて加工した痕跡が認められ、現形状からは曲物の一部とくに底板と推定される。しかし両面の墨書が曲物そのものになされたのか、あるいは材のみを再利用したのかは明らかでない。なお時期的には、遺構あるいは相伴遺物などからみて、11~12世紀初頭と推定される。

(1) (2)

□ □木 長

蘇 □ □依有^(僅カ) □

天 □ 可 □

□ 鑑 塚 □

□ □

[17.3 (8.5) × 7.0 × 0.3 ~ 0.5cm]

両面に線刻による界線が施され、1面では幅1.7cmごとに5本および左端を画する縦線、2面では幅2.0cmごとに3本が認められるが、縦線は確認できない。

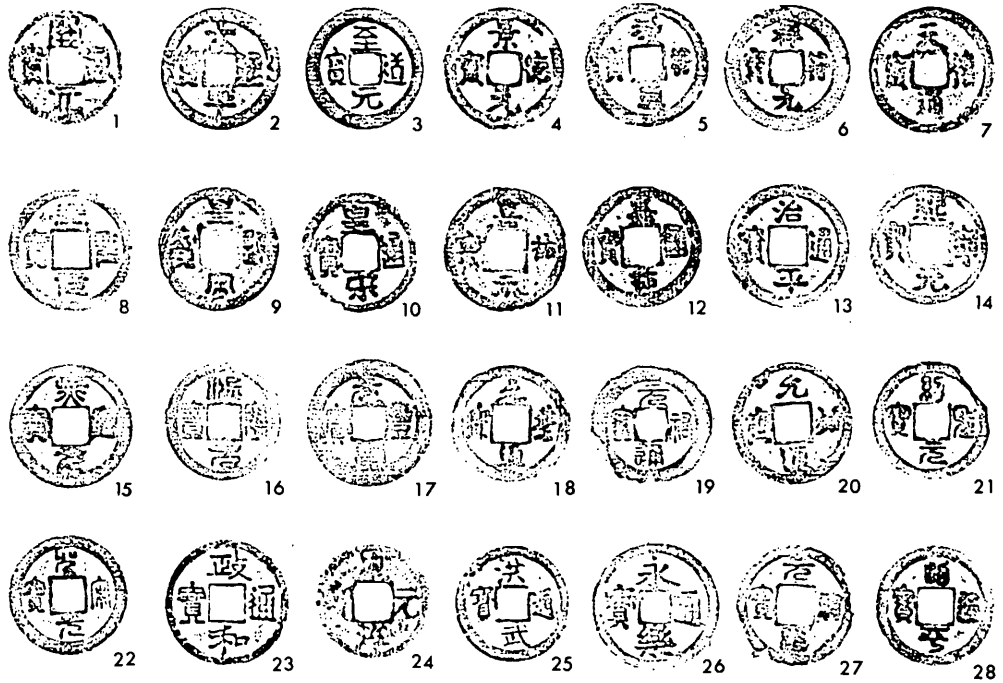
文字は、異体字の「蘇」を含めて計10字を判推読できるが、2面の「□依有□」および「可」の2行、1面の最下行以外は界線を意識していないようである。また使用筆は複数と見られ、両面にそれぞれ2方向に記されており、一時に書かれたものではないようであるが、運筆からはいずれも同一人の筆跡と推定される。

銅銭（第38図、第1表）

総数55点が出土した。出土層位、遺構は第1表に示した。

第1表 銅銭出土遺構・層位対照表

番号	銭種	初鋳年代	出土遺構・層位	番号	銭種	初鋳年代	出土遺構・層位
1	開元通宝	621	S K 811 暗灰色砂質土	15	熙寧通宝	1068	黒色土おちこみ 茶灰色土 S K 811
2	太平通宝	976	S K 830	16	熙寧通宝	1068	S K 811
3	至道元宝	995	茶灰色土下層	17	元豊通宝	1078	黒色土おちこみ
4	景德元宝	1004	S K 811 S X 803	18	元豊通宝	1078	黒色土おちこみ 茶褐色土
5	祥符通宝	1008	S K 811	19	元祐通宝	1086	暗灰色砂質土
6	祥符元宝	1008	S K 811	20	元祐通宝	1086	S K 811 黒色土おちこみ
7	天禧通宝	1017	S K 811	21	紹聖元宝	1094	床土 黒色土おちこみ S K 811
8	天聖元宝	1023	S K 811	22	聖宋元宝	1101	S K 811 黒色土おちこみ 茶灰色土→□宋元宝
9	皇宋通宝	1039	S B 800上面 S K 811	23	政和通宝	1111	S K 796
10	皇宋通宝	1039	黒色土おちこみ 茶灰色土下層	24	咸淳元宝	1265	S K 811の南側ピット
11	嘉祐元宝	1056	黒色土おちこみ S K 811	25	洪武通宝	1368	S D 790
12	嘉祐通宝	1056	S K 811	26	永樂通宝	1408	灰褐色土
13	治平通宝	1064	S K 811	27	元□通宝		S X 803 □は祐か？祐としたらNo.18と同じ
14	熙寧元宝	1068	茶灰色土 S K 830 黒色土おちこみ 茶褐色土	28	□平通宝		S D 790 □を紹としたら安南黎太祖 1434



第38図 銅 銭 拓 影

土製仏像（地蔵菩薩像）（図版51）

型づくりの仏像が3点出土した。3点ともにSB800の周辺から発見され、1は暗灰色砂質土層、2は灰褐土層、3は茶褐土層から出土した。1を出土した暗灰色砂質土層はSB800の基壇直上に薄く覆う層で、そこから出土する他の土器から、この仏像は鎌倉時代末から室町時代初期のものと考えられる。

小 結

本次調査で検出した主要な遺構は礎石建物、井戸、土壇、墓、溝等で、平安時代から室町時代後半期までである。もっとも新期のものは調査区東端で検出した東西溝で、洪武通宝を出土していることから少なくとも14世紀以降に考えられる。鎌倉時代末と考えられる礎石建物は北側にL字状に延びる溝を配し、東にその外側に長方形の土壇（SK830、835）を掘り込み、また、南西部に井戸（SE820）を設けている。

調査区東南隅付近の製鉄遺構SX821は39-2・3次でも検出していることからさらに南へ広がる遺構で、出土遺物から鎌倉時代後半期以降のものであると推定できる。

木棺墓の検出は学校院地区の調査では36次に次いで2・3例目のもので、出土遺物も同一の

ものであり、12世紀中頃にこの地の一区を墓地として使用していることが知れる。

本次調査は学校院関係および条坊の調査を目的としたのであるが、それらは存しなかった。きわめて多量に出土した土器は古代末から中世にわたる土器編年研究の一助になると考える。

4 第39-2次調査 (左郭五条五坊)

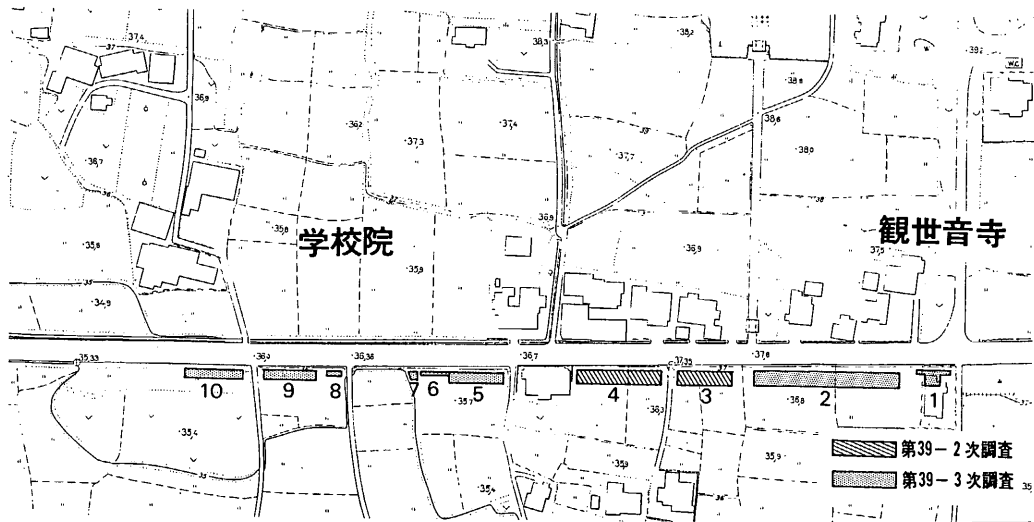
本調査は県道山家一関屋線の拡幅工事に伴う事前調査で、第39-1次調査に続くものである。調査は大宰府条坊復原案による左郭五条五坊に推定され、観世音寺南西端の前面にあたる県道(註1)の南側部分で約250m²をその対象とした。地番は太宰府町大字観世音寺字土井ノ内154番地、他である。

調査は大宰府条坊に関連する遺構の確認を主目的とし、道路にそって、幅5m、長さ20mのトレンチ(第3トレンチ)と幅5m、長さ30mのトレンチ(第4トレンチ)を設定し、調査を行った。調査期間は昭和51年2月2日から4月16日までである。

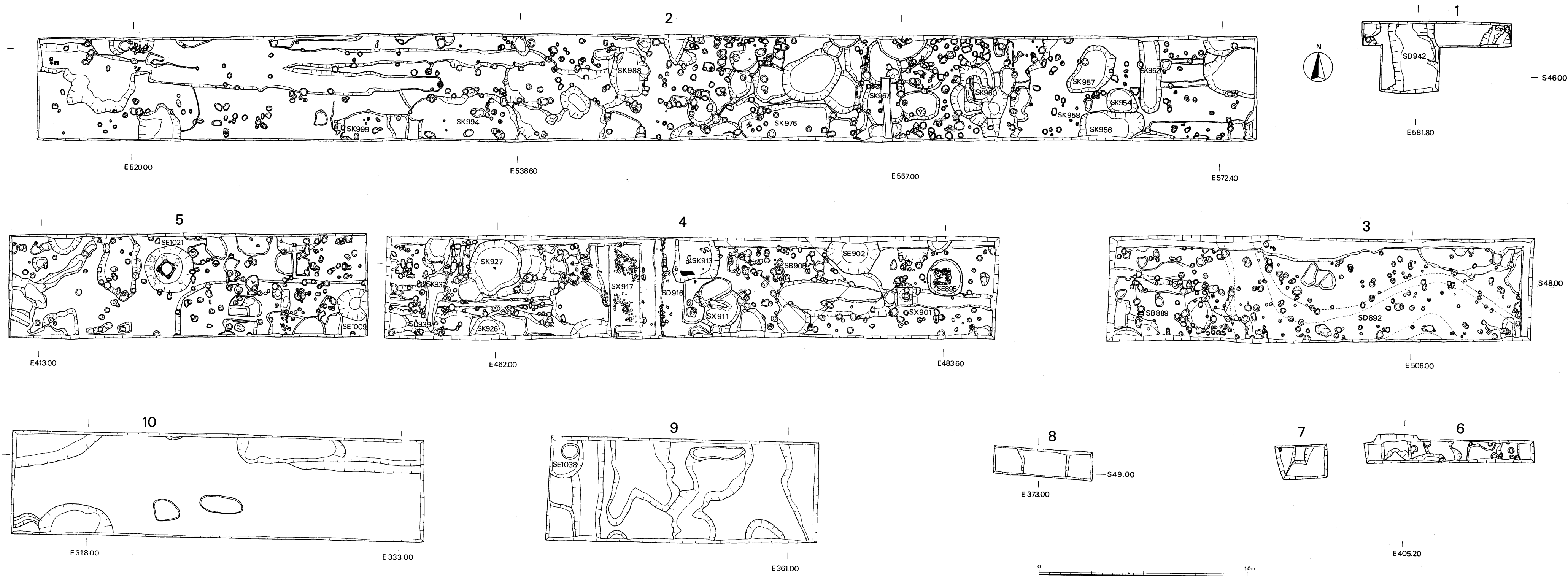
なお、今回報告では第39-3次調査と本調査の各々のトレンチに連続した番号をつけたので前回報告の東トレンチを第3トレンチ、西トレンチを第4トレンチと変更した。(註2)

検出遺構

本調査では上・下二層において遺構を検出した。上層の遺構では第3トレンチで掘立建物、柱穴多数、第4トレンチで井戸、保土穴、瓦敷遺構、土坑、柱穴多数などがあり、下層の遺構では、第3トレンチで土坑、柱穴、第4トレンチで井戸、掘立建物、石組溝、土坑、東西にのびる溝、柱穴などがある。また、第3トレンチでは下層遺構の下に南北に蛇行する溝状の遺構



第39図 第39-2・3次調査トレンチ配置図



第40図 第39-2・3次調査 遺構配置図

を検出した。

掘立柱建物

柱穴は両トレンチともに多数検出したが、建物として想定できたのはそれぞれのトレンチに1棟ずつである。

SB889 第3トレンチ上層で検出したもので、調査区外に延びており、全容は明らかでない。梁行2間（柱間110cm）の建物で、桁行3間分（柱間100cm）を検出した。

SB906 第4トレンチ下層で検出したものである。これも調査区外へ延びており、全容は知れない。やはり梁行2間（柱間140cm）の建物で、桁行3間分（柱間150cm）を検出した。また、第4トレンチ東端では円弧状に、西半では東西に延びる小溝に沿うように、それぞれ柱穴列が並ぶようであるが、他の建物想定のできない柱穴も合わせて、更に検討が必要であろう。

溝

SD892 調査区内で南北に蛇行し、深さ20～30cmのものである。第3トレンチの最下層で検出した遺構で、底には荒砂、流木などが見られ、小川状の流れと考えた方が適当であろう。遺物は古墳時代の須恵器、土師器が出土している。

SD916 第4トレンチ下層の遺構で、調査区外に南北へ延びる小溝である。溝の東岸は人頭大のグリ石を積んでおり、西岸では溝の肩に沿って杭列を検出した。深さ20～30cmほどの浅いものである。

SD939 第4トレンチ西端で検出した東西に延びる溝であるが、土壇などで寸断され、本来の姿を失っている。これも調査区外へ延びる。

土壇

土壇は両トレンチともに見つかっているが、第4トレンチに多い。

SK926 不整の土壇である。第4トレンチの下層で検出したが、調査区に一部かかったのみで全体は分らない。青磁碗、土師器などが出土した。

SK934 これも細長い不整の土壇である。第4トレンチ下層で検出し、白磁碗などが出土した。

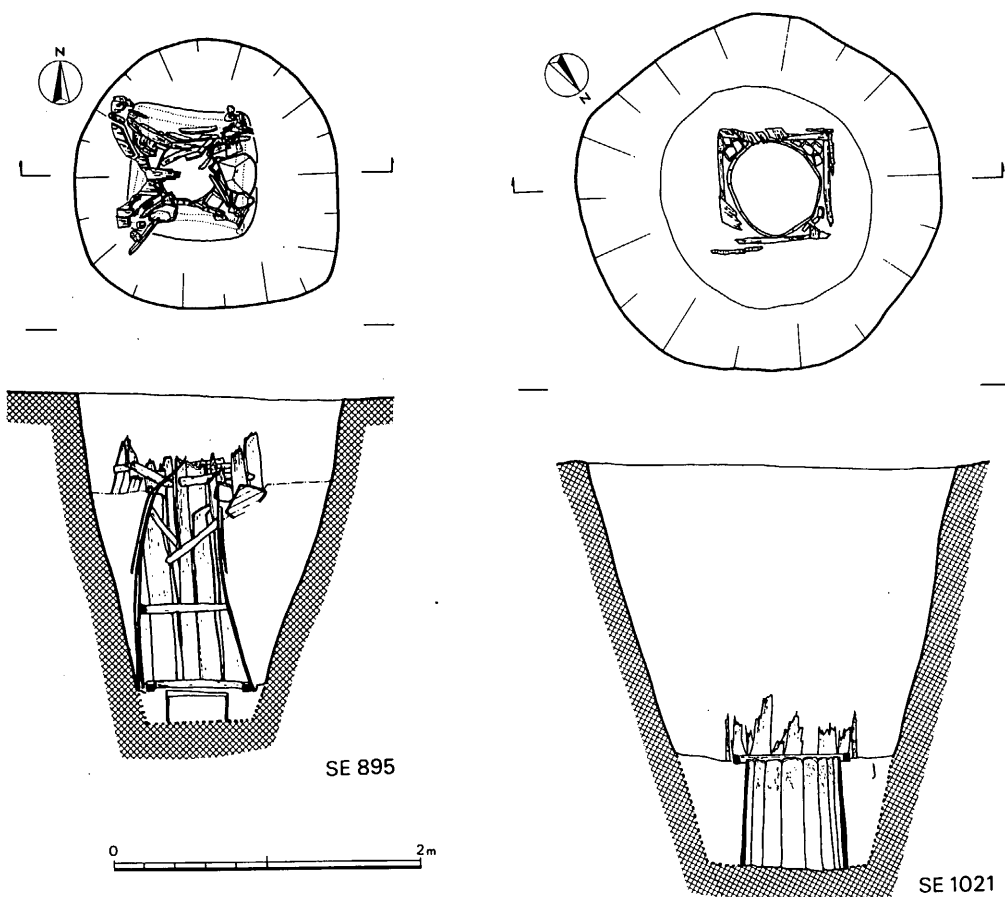
SK927 第4トレンチ下層で検出した、ほぼ円形に近い土壇で、深さは0.2mである。中央に木材を1本立てており、埋土中にはかなり厚い灰の層が含まれる。これと似たような土壇を、このトレンチ東隅に1つと第3トレンチに1つ検出している。3つとも大きさは異なるが、いずれも木材が立ててあり、埋土の状態も同様である。

井戸

第4トレンチで2基を検出した。いずれも調査区東半に近接して在る。

SE902 プランは不整円形で、深さ1.2mの掘方しか残らず、その構造は不明である。

SE875 一辺80cmの方形の枠が残っており、側板には幅20cm、長さ180cm（最大）、厚さ1cm



第41図 井戸実測図

の板材を使っている。底には曲げ物を入れている。

その他の遺構

SX 901 保土穴である。第4トレンチ上層で検出した。土中に不整形の穴を掘り、中に黄色粘土で0.35m、深さ0.2mの角ばった穴をつくっている。加熱のため周壁は赤変し、焼けしまっている。同様のものを同じトレンチで1つ検出した。

SX 911 土壇状の掘り込みで、周壁は焼けしまっている。楕円形プランで深さ0.4m前後のものである。中央よりやや北で粘土を用いて二つに区切っており、埋土中よりファイゴの羽口、焼土塊が出土した。この焼土塊は板状のもの断片で、一方の面には溶けてガラス質になったものが付着している。この種(註3)のものは他にも多く出土している。

SX 917 瓦敷遺構である。第4トレンチの上層で検出した。瓦の細片を幅1.2mで南北に帯状に敷いている。南、北とも調査区外へ延びており、性格は不明である。文琳茶入れが出土して

いる。

出土遺物

須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、陶磁器、砥石、ファイゴの羽口、ルツボ、炉壁片、掛仏、不明の銅製品、刀子、銅銭、石鍋が出土した。これらは両トレンチの土壇、井戸、溝、柱穴などの遺構から出土しているが、量的には遺構を覆う黒灰土層からの出土が多い。

ここでは土壇、井戸、溝、柱穴から出土した遺物を中心に述べる。

土器

SK926出土土器（第42図1～5、別表、図版39）

土師器（皿a・丸底の杯）青磁碗、及び褐釉陶器が出土している。

土師器

皿a（1～3） 全て糸切りである。1は口径7.4cm、器高1.2cmである。2・3は口径8.1cm、器高0.8～1.0cmのものである。

丸底の杯（4） 底部はへら切りである。内面は磨いて器壁を密にしている。口径15.3cm、器高3.4cmである。

陶磁器

青磁（5） 体部外面にへら描きの蓮弁文を施している。内面は無文である。釉は厚目で底部外面にまで施され、茶黄色を滞びた緑色を呈する。胎土は灰白色である。

SK927出土土器（第42図6～35、別表、図版39）

土師器（皿a、皿c、杯a）、瓦器碗、片口、白磁皿（口禿）、青磁碗（蓮弁文、クシ描き文、越州窯系）青磁皿、褐釉陶器が出土している。

土師器

皿a（6～18） 6～17は糸切り、18はへら切りである。6～17は法量により2つに分けられる。6～8は口径6.9～7.1cm、器高1.1～1.3cmであるが、9～17は口径8.4～9.9cm、器高1.0～1.5cmと前者に比べ大きい。18は口径9.6cm、器高1.8cmである。

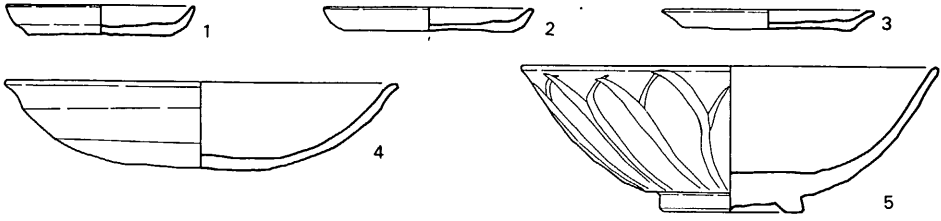
c（19～23） 口径8.5～8.8cm、器高1.4～1.9cmを測る。底部の判別できるものは全て糸切りである。

杯a（24～30） 全て糸切りである。法量により2つに分けられる。24～26は口径11.9～12.7cm、器高2.2～2.8cmと小さく、27～30は口径13.0～13.7cm、器高2.4～2.8cmである。

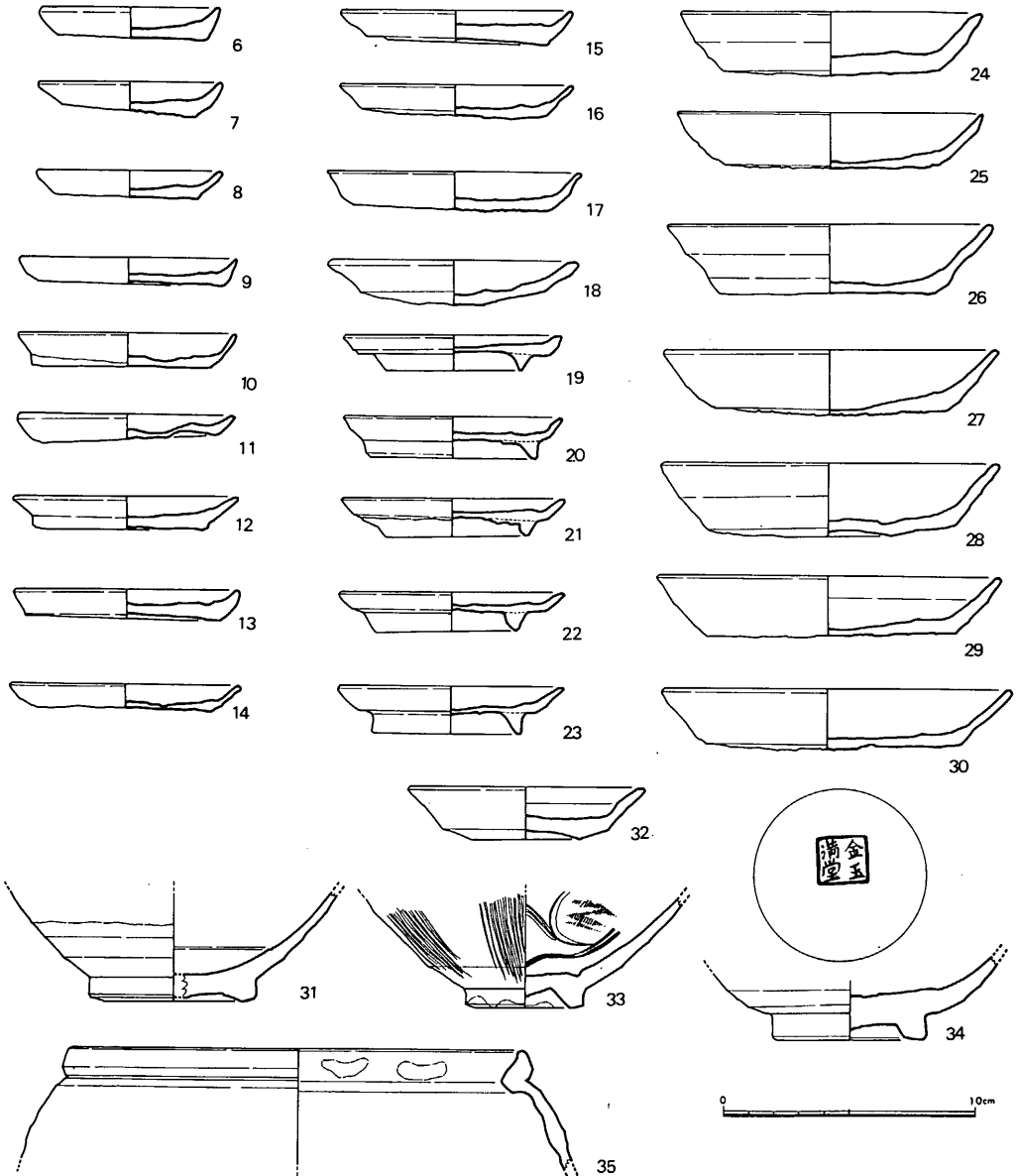
陶磁器

白磁（21） 台形の高台をもつ碗の底部のみである。見込みの部分に沈線が一条回る。胎土は白色で黒い細粒が多く含まれる。釉は白色で全体的にうすく外面体部途中まで施されている。

SK 926



SK 927



第42图 土 坑 出 土 土 器 实 测 图

青磁（32～34） 32は無文の小皿で、緑色の釉を口縁部外面まで施している。胎土は灰白色である。33は椀の底部で体部内面にクシ描きとへら描きによる文様が、外面には縦方向にクシ描きによる文様が施されている。見込みに段を有し、高台は削り出しであるが、中心部の削りを少なくして高く残している。釉は黄味を滞びたうすい緑色である。34はずんぐりとした高台部である。釉は灰緑色でやや厚目に施され、高台の畳付の部分と底部外面には、施釉されてない。見込みに「金玉満堂」の刻印がある。

褐釉陶器（35） 暗褐色の釉をうすくかけた口縁部である。短い口縁がやや外方に開き、内面に重ね焼きの痕跡が認められる。鉢の口縁部であろう。

SE 895 出土土器（第43図1～4、別表）

土師器（杯 a、高台付椀）、須恵質土器（甕）瓦器片、白磁椀、褐釉陶器（壺）が出土している。

土師器

椀（1） 高台部を残すのみである。埋土上層から出土した。

陶磁器

白磁（2） 玉縁のある椀で、高台は台形をなし、体部は直線的にのびる。見込みに一条の沈線が回る。釉は黄色気味の白色でブツブツがあり、体部外面途中まで施釉されている。図示したものは底部と口縁部が同一個体ではあるが、接合できなかつたので、図上復元を行ったものである。

青磁（3） 椀の底部で内面にクシ描きとへら描きの文様、外面に縦方向にクシ描きの文様を施している。高台はM字形をなし、特徴的である。釉は青味を滞びた緑色で、胎土は灰白色である。

褐釉陶器（4） 壺の底部である。井戸掘方から出土した。外面は緑色を滞びた褐色、内面は白っぽい褐色である。

SE 902 出土土器（第43図5・6、別表）

土師器（高台付椀）瓦器椀、白磁椀、青磁椀（越州窯系、クシ描き文）が出土した。

土師器

椀（5） 口縁端部を外方へ引き出す特徴をもつ椀である。口径13.1cm、器高4.8cmを測る。

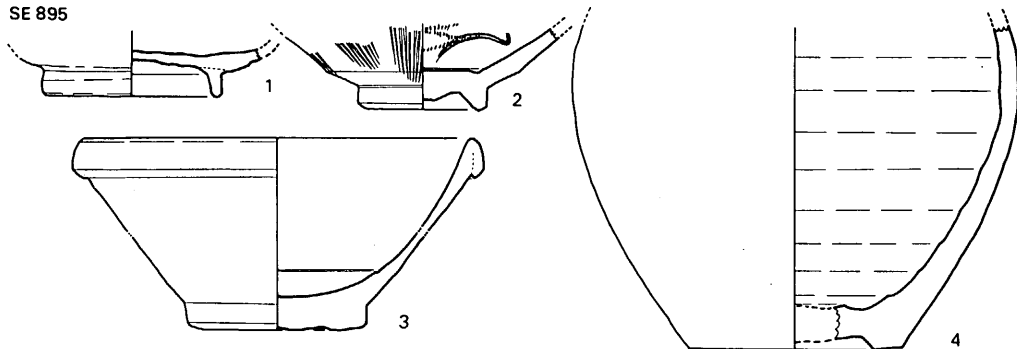
陶磁器

青磁（6） 越州窯系の青磁椀で蛇目高台を付し、底部内面に重ね焼きの目跡が認められる。釉はうすい緑色である。

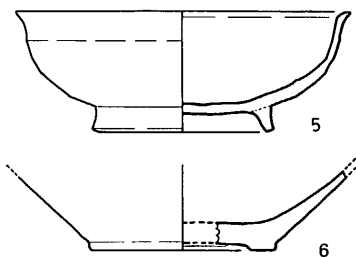
SK 934 出土土器（第43図7～9、別表、図版39）

土師器（皿 a、皿 c、高台付椀、甕）、白磁（高台が高く、口縁端を外方へ引き出すもの、口禿のもの、小さな高台、蛇目高台）、青磁（蓮弁のある椀、櫛描きのある椀および皿）が出

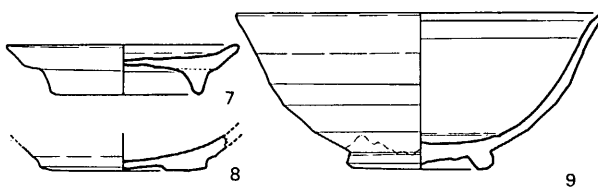
SE 895



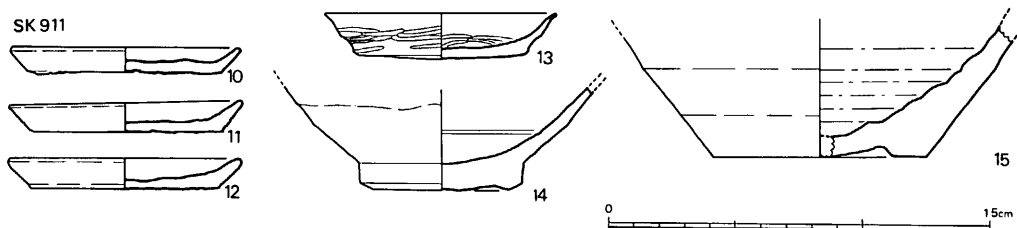
SE 902



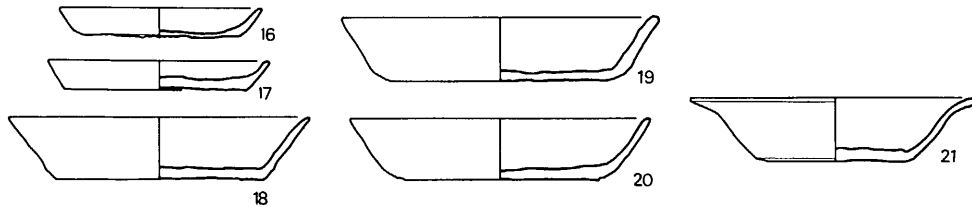
SK 934



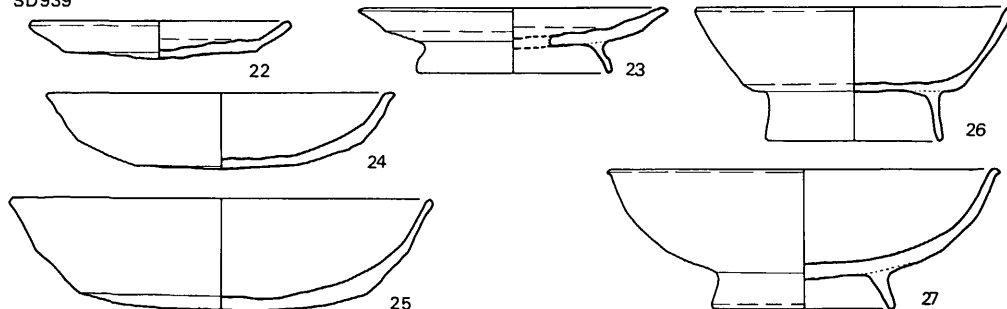
SK 911



SD 916



SD 939



第43図 井戸・土塚出土土器実測図

土している。

土師器

皿 c (7) 口径9.0cm、器高2.0cmをはかる。

陶磁器

白磁(8・9) 8は蛇目高台を残すのみである。釉は灰色を滞びた白色で、高台畳付の部分には施釉されてない。9はいわゆる口禿の白磁碗である。口縁部内面と見込みの部分にそれぞれ1条ずつ沈線が回る。釉は灰白色で、口縁端部と高台部を除いて全体にうすく施されている。胎土は純白に近い色である。

SX911出土土器(第43図10~15、別表)

土師器(皿 a、皿 c、碗)、瓦器(碗、皿)、片口、白磁碗、青磁、褐釉陶器が出土した。

土師器

皿 a (10~12) いずれも底部は糸切りである。口径8.9~9.1cm、器高1.0~1.2cmを測る。

瓦器

皿(13) 口径9.1cm、器高1.9cmをはかる。全体に雑なミガキである。底部は糸切りで板状圧痕が観察できる。

陶磁器

白磁(14) 碗の底部である。高台は台形をなし、見込みの部分に一条の沈線が回る。釉は緑がかった白色を呈し、胎土は白色で黒色細粒が混る。

褐釉陶器(15) 壺の底部で、釉は暗褐色で全体に及び、高台部に重ね焼きの痕跡がある。

SD916出土土器(第43図16~21、別表)

土師器(皿 a、杯 a、丸底の杯)、白磁(高台が高く、内面に櫛目のある碗、口ハゲの皿)、青磁(蓮弁のある碗、櫛描き文の碗)、摺鉢が出土した。

土師器

皿 a (16・17) いずれも糸切りで、16は口径7.9cm、器高1.1cm、17は口径8.5cm、器高1.2cmである。

杯 a (18~20) いずれも底部は糸切りで、口径11.6~12.4cm、器高2.4~2.6cmのものである。

陶磁器

白磁(21) いわゆる口禿のある皿で、見込みの部分に段を有する。釉は灰白色で、薄く施されている。

SD939出土土器(第43図22~27、別表、図版39)

須恵器(高杯、甕)、土師器(皿 a、皿 c、丸底の杯、杯 c、碗)、黒色土器 A、瓦器、緑釉陶器、白磁(口縁端部を引き出すもの)、青磁(越川窯系)が出土している。

土師器

皿 a (22) 底部はへら切りで、口径10.0cm、器高1.5cmである。

c (23) 底部はへら切りで口径11.6cm、器高2.6cmである。

丸底の杯 (24・25) 24は口縁端部を外方へ引き出したもので、口径13.6cm、器高3.0cmである。25は口縁端部を丸くおさめており、やや大形である。口径16.4cm、器高4.4cmである。いずれも底部はへら切りである。内面は磨いて、器壁を密にし、外面の底部と口縁部の境には指頭痕と思われる凹凸を観察できる。

杯 c (26) 底部はへら切りで、杯に高い高台を付したものである。口径12.3cm、器高5.3cmである。

碗 (27) 体部は丸くなり、口縁端部はやや外に突き出す。底部はへら切りである。口径15.0cm、器高5.7cmである。

SD892出土土器 (第44図、図版39)

須恵器、土師器のみで、いずれも溝下層から出土したものである。

須恵器

杯蓋 (1) 天井部のみをへら削りし、他はヨコナデを行っている。口縁端部はややふ

くらみ丸く仕上げている。

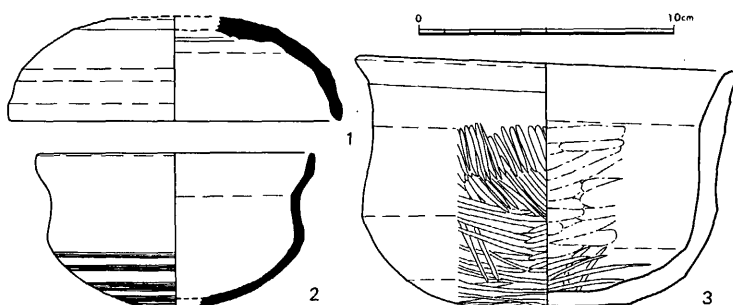
壺 (2) 小形のものである。外面の体部大半にカキ目を施している。体部口縁部ともにヨコナデで、底部内面にナデがみられる。

土師器

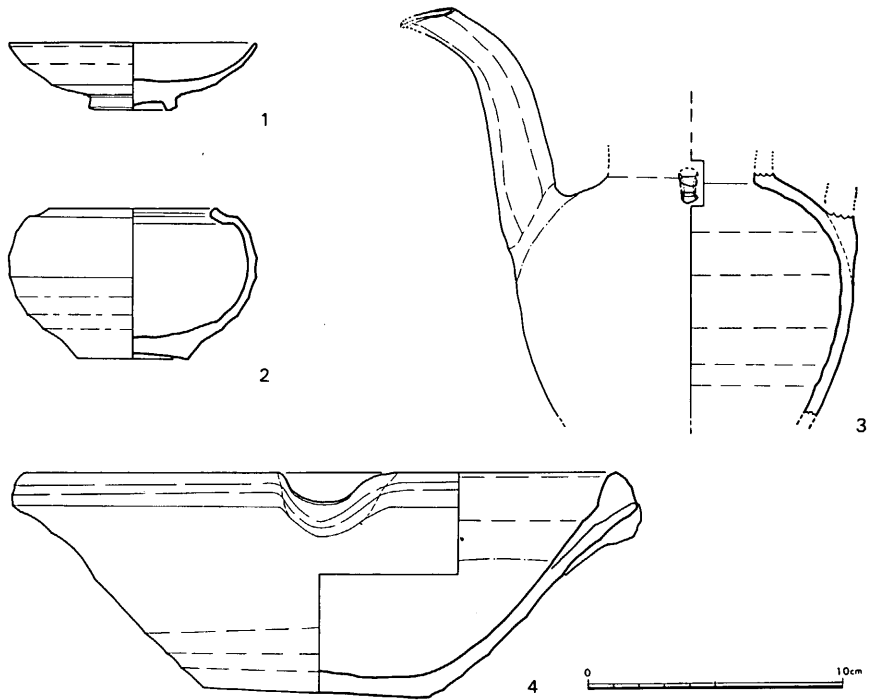
壺 (3) 平底で体部は直線的に立ちあがり、口縁部がわずかに外反するものである。器壁は肉厚で、胎土には粗い砂粒が多い。調整は口縁部にヨコナデ、体部から底部の外面は引っ掻いたようなケズリが入り、内面では体部に、横方向で幅広のケズリ、底部には外面でみられるようなケズリを行っている。

その他の陶磁器 (第45図、図版40)

白磁 (1・3) 1は高台付の小皿である。第3トレンチ東隅の柱穴から出土した。高台は断面正方形に近く削り出し、口縁部は器壁をうすく仕上げている。胎土は茶色を滞びた灰白色で、釉は乳灰色であり、貫入がみられる。3は水注で、第4トレンチの黒灰土層から出土した。均整のとれた球形の体部と、肩部に取り付く注口を残すのみであるが、取手及び耳二つが



第44図 SD892 出土土器 実測図



第45図 陶磁器実測図

付くものである。釉は内外とも全体に施され、外面は灰白色、内面はやや黄味をおびる。胎土は灰白色である。

褐釉陶器（2） 文琳茶入れである。第4トレンチの上層、瓦敷遺構から出土した。体部の器肉はうすく、丸味のある体部から直角におれ曲る口縁部はやや厚目にして、端部を上向きにしている。底部は上げ底気味で、外面に重ね焼きの目跡がある。釉は茶褐色で、光沢があり、全体にうすくかけられている。

須恵質土器（4） 片口である。第4トレンチの黒灰土から出土した。器肉はうすめで、口縁部を肉厚にし、端部を上方へ突き出している。片口部は下方へ弱く押し下げている。底部は糸切りで、他はヨコナデによる調整を行っている。内面に条線はないが、体部下半は使用の為すり減っている。

墨書土器（図版40）

第3トレンチの下層遺構面である黄褐土から出土したものである。須恵器の小片で、全形は不明であるが、杯蓋の天井部かと思われる。

文字は、外面に2字、内面に4字が認められる。外面の2字のうち、右方は「目」と判読されるが、左方は墨痕が薄く、判読は困難である。内面は田字形に4字が記されているが、左右

各行は異筆と考えられる。左上の字形は「𠄎」であるが、正字ではなく、異字体であろう。凡は「瓦」の異体で、さらに偏と旁が置換されていると考えられるので、「瓶」の異体字とみなすことができ、時代的にもかなり遡ると考えられる。左下の文字は、その運筆からみて、左に90度転位して記され、2字である可能性も想定されるが、左側が欠損しているため詳細は明らかでない。右行の文字は左行のそれに比して線が太く、異筆であることは確認できるが、墨痕が不明瞭かつ薄いため判読できない。なお右下の文字は「𠄎」と「口」の2字とも考えられるが、「𠄎」を「𠄎」の異体字とすれば、その字義は堤などであり、ここに記された意味が明らかでない。むしろ上段の文字の大きさからみて、1字とみなすべきではないだろうか。

銅銭（第46図、第2表）

本調査で銅銭は第3・4トレンチ合わせて26枚出土した。そのうち第3トレンチからは2枚のみで、他は第4トレンチからの出土であり、中でも黒灰土層からの出土が多い。26枚のうち判読不能なのが6枚あり、残る20枚は表に示すとうりである。その中で代表的なもの12枚について拓影を示した。

第2表 銅銭出土遺構・層位対照表

番号	銭種	初鑄年代	出土遺構及び層位	番号	銭種	初鑄年代	出土遺構及び層位
1	開元通宝	621	黒灰土(炭化物混)	6	景祐元寶	1034	黒灰土
	開元通宝	621	黒灰土(炭化物混)	8	嘉祐元寶	1056	ピット(石)
	開元通宝	621	茶褐土	9	熙寧元寶	1068	黒灰土(炭化物混)
	開元通宝	621	床土		熙寧元寶	1068	黒灰土
2	咸平元寶	998	黒灰土		熙寧元寶	1068	灰層
3	景德元寶	1004	黒灰土(炭化物混)	10	元豊通宝	1078	灰層
	景德元寶	1004	茶褐土	7	元豊通宝		黒灰土(炭化物混)
4	祥符元寶	1008	ピット	11	元祐通宝	1086	黒灰土(炭化物混)
	天聖元寶	1023	黒灰土	12	大觀通宝	1107	黒灰土(炭化物混)
5	天聖元寶	1023	灰層		大觀通宝		茶褐土

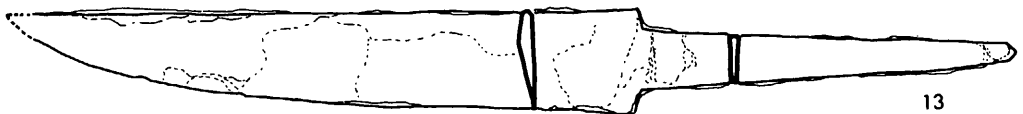
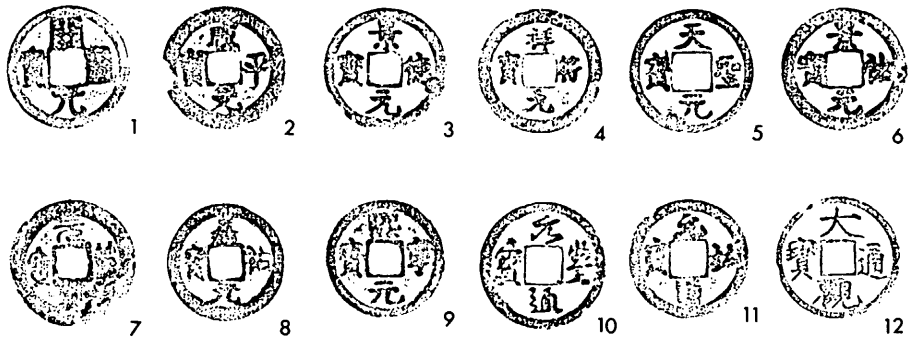
金属製品

刀子（第46図、図版40）

第4トレンチの柱穴から出土した。切先を欠くが、復元すると全長19.8cmで、刃部長12.5cm幅は最大で2.0cmである。刃部は一面だけを砥ぎ、刃部中央に稜がつくが、一方の面は峰から刃先まで平坦面をなしている。

懸仏（図版40）

仏体は十一面観音と思われる坐像で、裏面に小突起が1個ある。像高4.08cm（台座を含む）



46図 銅 銭 拓 影、刀 子 実 測 図 (2/3)

蓮台幅2.35cmを測り、銅製で鑄造されたものである。

註1 鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968

註2 「九州歴史資料館年報」一昭和50年度一

註3 大澤正巳氏の御教示によると焼土塊は炉壁の一部ということであり、SX911のようなものこの炉壁とは関連があるのかもしれない。

5 39-3次調査

県道山家-関屋線の拡幅工事に伴う事前調査は、第39-1次・第39-2次調査に続いて今回の調査をもって終了した。調査地は大宰府条坊復原案による左郭5条3坊・4坊・5坊・6坊に推定される地域であり、推定学校院跡及び観世音寺^(註1)の前面にあたる。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字土井ノ内169-6、143、字五反田140-4、230である。

調査地に道路に沿って1~10(第39図トレンチ配置図参照、但し3・4は39-2次調査)のトレンチを設定し、調査を行った。調査期間は昭和51年6月30日から9月27日までである。調査の結果、当初予測した溝等の遺構は確認できず、平安末~中世の土壇、井戸、溝、ピット群を検出した。

検出遺構

第39-3次調査で検出した主な遺構は土壇41、溝および溝状の遺構3、井戸3、それに多数

のピット群である。今回はそのうち主だった遺構について概略を記述したい。

土坑

SK952 短径1.0m、長径3.5m、深さ0.2m前後の細長い土坑で、一部は発掘区外へ延びる。土坑中には炉壁と考えられる焼土片と炭化物が混入していた。

SK954 径約2.0m、深さ0.2m前後の不整円形のもので、埋土は暗灰色である。

SK956 不整円形で一部しか確認していないが、深さ0.64mで、炭化物混りの暗灰色の埋土のものである。

SK957 長径2.0m、深さ0.24m前後の不整円形のもので、埋土については前述のと同様である。

SK960 深さ1.0mの不整円形のもので、検出した土坑の中では最も深く、埋土中に板材が入っていた。井戸の可能性もあるが、明確でない。

SK967 径2.0m、深さ0.2mの楕円形で、暗灰色の埋土とともに炉壁と焼土が混入していた。

SK976 方形のもので、長径3.4m、深さ0.26mで、一部しか確認できなかった。とくにこの土坑からは完形の土師器の小皿(皿a)、杯(丸底の杯)および白磁の椀が出土している。

SK988 長径2.3m、短径1.3m、深さ0.45mの長方形のもので、埋土は暗灰色である。

SK994 全形は不明であるが、長径5.0mで、深さ0.2mのものである。

SK999 全形は不明であるが、深さ0.1mの浅いものである。

井戸

3基の井戸を検出したが、井戸枠が残存していたのは1基のみである。(第41図、図版20)

SE1021 井戸枠は上部構造が方形縦板、下部構造が桶の組合せのものである。上部の縦板材は一部しか残っていないが、幅10cm前後、厚さ2cm前後の板材を張り合わせている。周囲に横棧が残っており、一辺約70cmの正方形である。下部構造の桶は歪んでいるが、径約60cmで、長さは70cmのものである。桶を構成している板材は幅10cm、厚さ2.5cmある。掘方は円形で上部径2.30m、深さ2.65mである。井戸枠内より出土した遺物はきわめて少なく、土師器片数点と青磁片(同安窯)が1点出土しているのみである。

この他にSE1009、SE1038があるが、井戸枠は残存せず、不明である。SE1009の掘方は円形で、上面径1.5m、深さ約0.6mである。SE1038は径約80cm、深さ60cmの円形で、両者とも井戸とするには掘方、深さ等に若干疑問点もあるが、一応井戸とした。

溝

SD942 第1トレンチで検出した南北方向の溝で、幅2.20m、深さ0.50mである。政庁中軸線から溝中心までの距離は587.50mあり、観世音寺現参道の西肩の延長上の近くに位置する。南北3mについて確認したのみで、方向は明確でないが、若干西へふっている。埋土には人頭大の小石と荒砂が混入しており、遺物から、鎌倉後半から室町期のものと考えられる。

出土遺物

出土した遺物は土器（土師器、瓦器、陶磁器、緑釉陶器、灰釉陶器）、瓦、石製品（滑石製石鍋等）、宋銭である。土器は主に遺構面を覆う黒灰色土層と土坑中から出土したものである。以下出土量が比較的多かった土坑出土の土器について概略を記述したい。

土器

SK954出土土器（第47図1～13、別表、図版42）

土坑中から土師器の皿a、杯a、瓦器、須恵器、土鍋、それに陶磁器（白磁、青磁）が出土した。

土師器 皿aと杯aがある。

皿a（1～3） 口径8.6～8.8cm、器高0.9～1.0cmのものである。

杯a（4～11） 口径12.5～13.4cm、器高2.2～3.0cm、底径9.0～9.8cmのもの（4～9）と口径13.8cm、器高2.9～3.0cm、底径9.7～10.0cm（10・11）がある。皿a、杯aとも底部の切り離しは糸切りである。

陶磁器

青磁（12～13） 12は皿で口径10.2cm、器高2.2cmのもので外面体部下半から底部は施釉されておらず、釉色は灰色をおびた緑色の透明に近い色である。13は椀で底部の小片である。胎土は赤褐色を呈し釉色はよごれた黄味のある灰緑色を呈する。高台部は施釉されていない。体部外面にへら描きの蓮弁が残っている。また見込みには刻印がみえるが、印文は不明である。

SK956出土土器（第47図14～25、別表、図版42）

土師器（皿a、杯a）、瓦器、須恵質土器、陶磁器（青磁、白磁、褐釉陶器）がある。

土師器 皿aと杯aがある。

皿a（14～17） 口径8.4～9.0cm、器高1.0～1.5cmのものである。

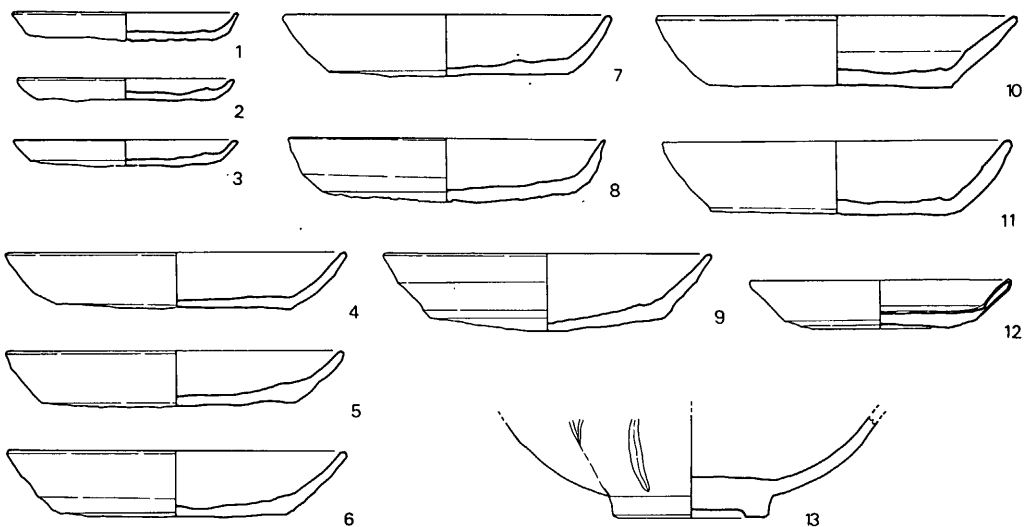
杯a（18） 口径13.4cm、器高2.7cm、底径9.6cmのものである。

陶磁器

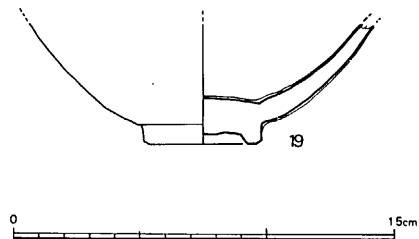
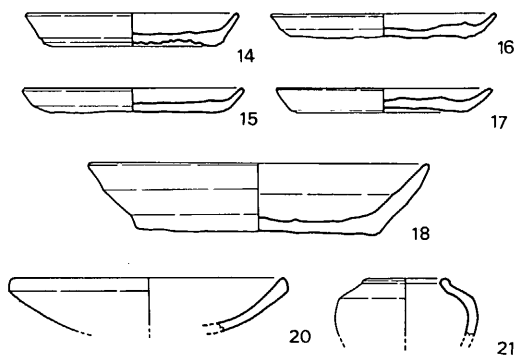
白磁（21） 椀の底部片である。釉はやや灰色をおびた緑色を呈する。

青磁（22～25） 22は椀で釉は全面に薄目にかかりよごれた灰緑色を呈する。高台は上げ底状になっている。高台部に重ね焼きの痕跡とみられるものがある。23は椀の底部片で胎土は淡茶色、釉は黄色味の強い茶色を呈する。全体にこまかい貫入がみられる。体部外面に不明瞭であるがへら描きの蓮弁がある。24は復元口径16.4cm、器高5.5cmあり、釉色はよごれた感じの暗緑色を呈する。高台部には施釉されておらず、体部外面にはへら描きの蓮弁がある。25は椀で釉は厚目にかかり淡緑色を呈し貫入がみられる。

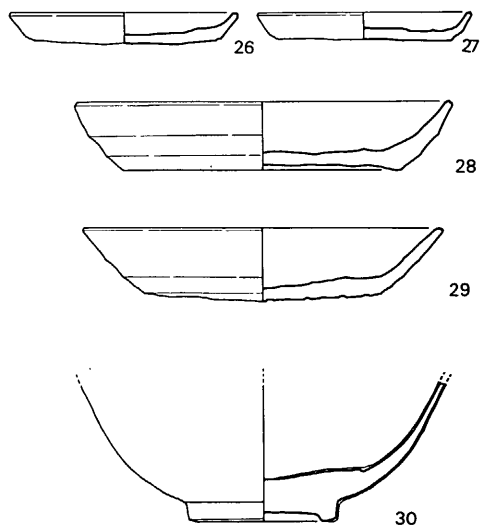
SK954



SK956



SK957



第47图 土 坩 出 土 土 器 实 测 图 (1)

青白磁(20) 小壺の小片である。釉はやや黄味をおびた白色を呈する。

陶器(19) 口縁部の小片で全形は不明であるが、皿と考えられる。胎土は白灰色で暗褐色の釉を薄くかけている。

SK957出土土器 (第47図26~30、別表)

土師器(皿a、杯b)、陶磁器(白磁、青磁、陶器)がある。

土師器

皿a(26・27) 口径8.4~9.0cm、器高1.0~1.2cmのものである。

杯a(28・29) 口径14.2~15.0cm、器高2.6~2.9cm、底径9.4~11.0cmのものである。皿a、杯aともに糸切りである。

陶磁器

青磁(30) 椀で、やや灰色をおびた緑色を呈する。高台部には施釉されていない。

SK958出土土器 (第48図1~8、別表)

土師器(皿a、杯b)が出土している。

土師器

皿a(1~8) 口径7.8~8.0cm、器高1.0~1.2cm(1~4)と口径8.8~9.4cm、器高1.0~1.1cm(5~8)がある。すべて糸切りのものである。

SK960出土土器 (第48図9~17、別表、図版42)

土師器(皿a、杯b)、陶磁器(白磁、青磁、褐釉陶器)がある。

土師器

皿a(9~11) 口径8.4cm、器高1.0cmのもの(9)と口径8.8~9.4cmのもの(10・11)がある。

杯a(12) 復原口径13.8cm、器高2.7cm、底径9.0cmである。皿a、杯aともに糸切りである。

陶磁器

白磁(13) 高台付皿で見込みを輪状にカキ取っている。体部下半と高台部には施釉されていない。釉は灰白色を呈する。

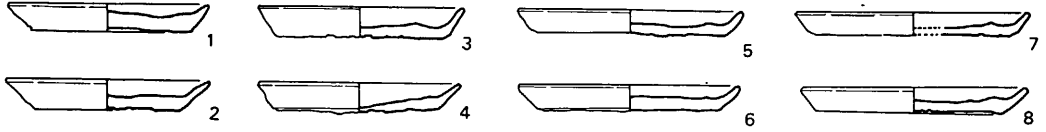
青磁(14~17) 14は完形の皿で釉は薄目で灰緑色を滞びる。体部下半と底部は施釉されていない。15は灰緑色を呈する釉がかかり見込みに楡描文がある。いわゆる同安窯のものである。16は復元口径17.0cm、器高6.2cmで黄色味のある茶色を呈する。見込みには「金玉□□」の刻印がある。17は黄色味をおびた緑色の釉がかかり、外面にへら描きの蓮弁の文様がある。

SK976出土土器 (第48図18~40、別表、図版41)

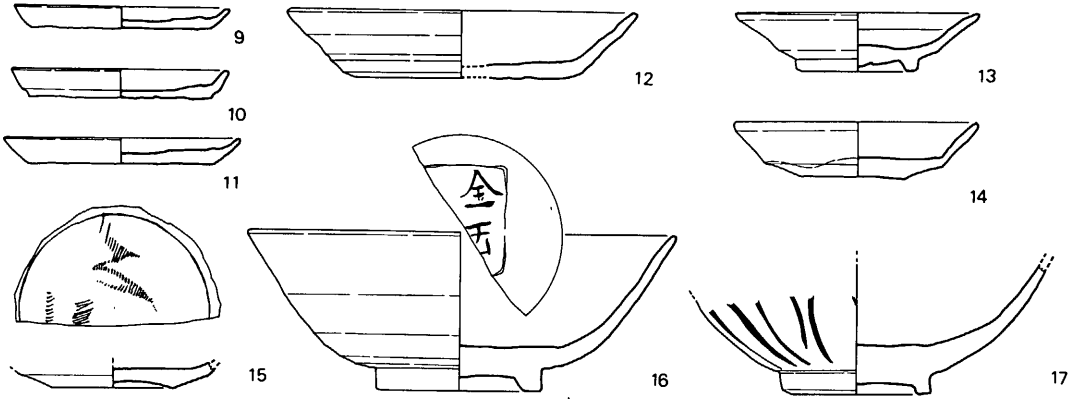
土師器(皿a、丸底の杯)、瓦器、陶磁器(白磁)がある。

土師器 皿aと丸底の杯がある。

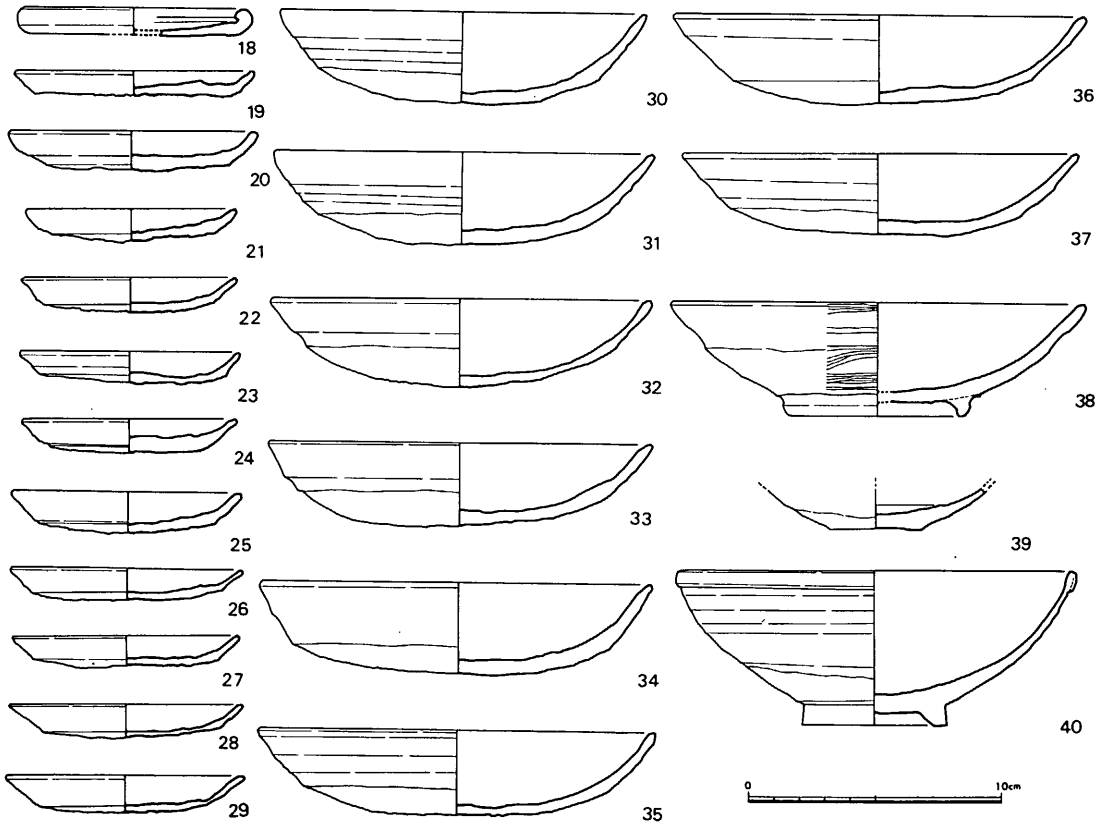
SK 958



SK 960

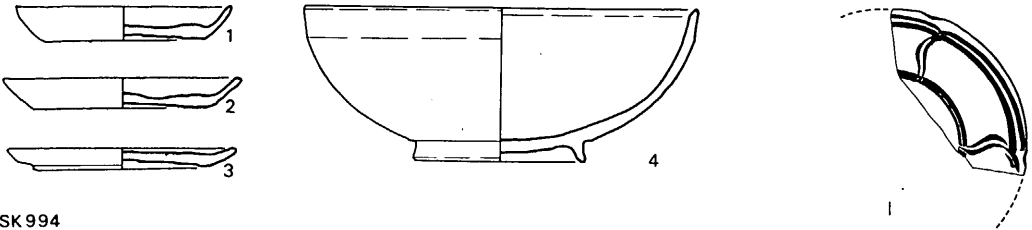


SK 976

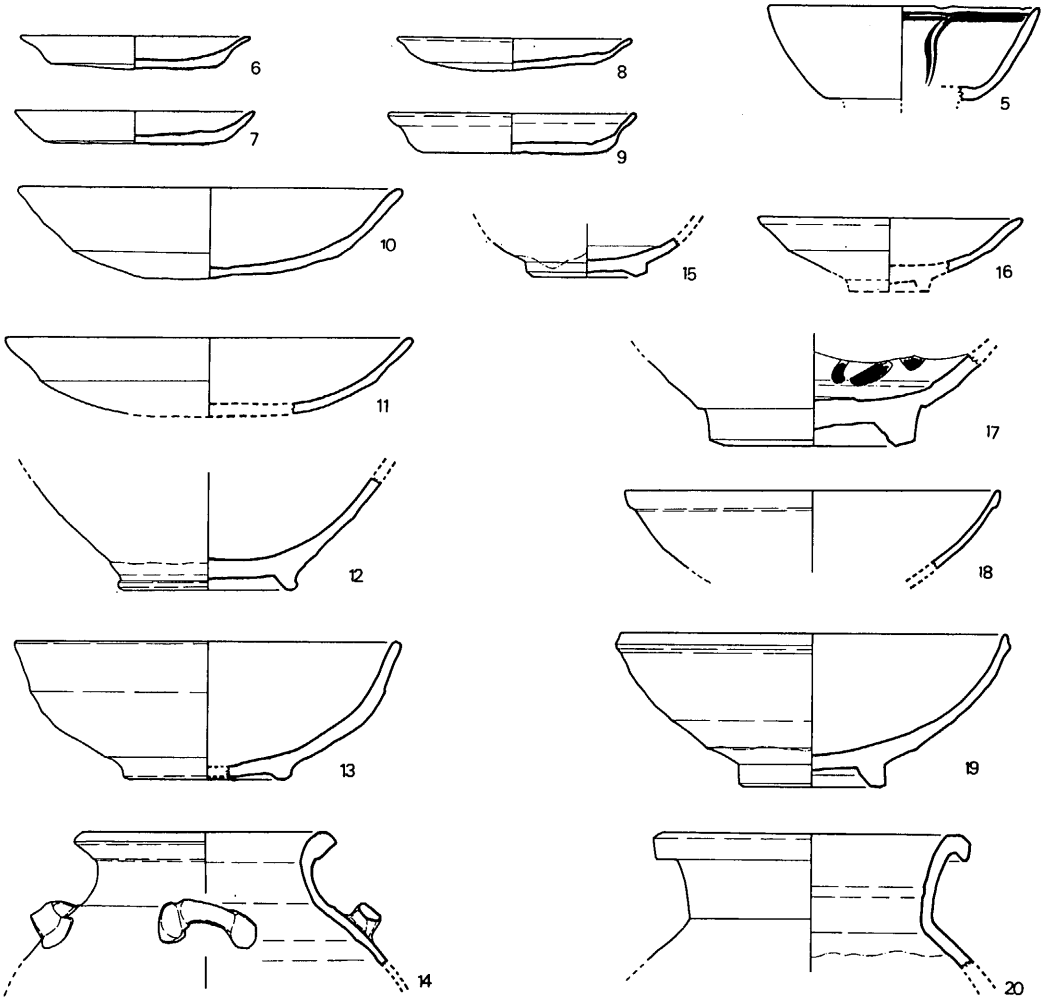


第48图 土 坩 出 土 器 实 测 图 (2)

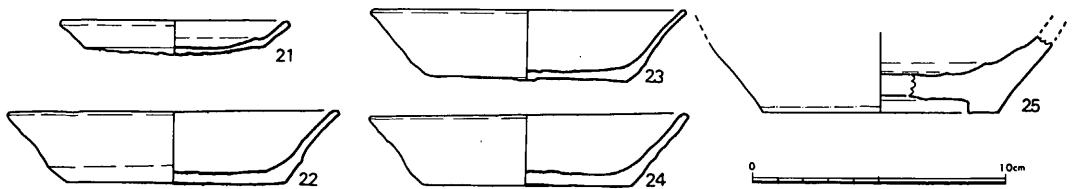
SK988



SK994



SK999



第49图 土 坩 出 土 土 器 实 测 图 (3)

皿 a (18~29) 18~20は糸切りであり、21~29はへら切りのものである。18は特異なもので体部を内側に折り曲げている。19・20は口径9.5~9.8cm、器高1.0~1.5cmである。21~29は口径8.3~9.4cm、器高1.2~1.6cmのものである。

丸底の杯 (30~37) 底部の切り離しはへら切りで内面はミガキを行っている。口径14.5~16.8cm、器高3.2~3.8cmのもので、体部と底部の境界に明瞭な稜をもつ。

瓦器

椀 (38) 高台付椀で内面は部分的に銀白色を呈する。外面は粗いミガキを施している。

陶磁器

白磁 (39・40) 39は皿で見込みに段がつく、40は完形のもので口縁部を小さく玉縁状に折り曲げたもので、胎土は灰白色で釉は全体に薄くかかりやや黄味をおびた灰白色を呈する。体部下半と高台部は施釉されていない。口径15.6cm、器高6.1cmである。

SK988出土土器 (第49図1~5、別表)

土師器 (皿 a、杯 a、椀)、瓦器、陶磁器 (白磁、青磁、黄釉陶器) がある。

土師器

皿 a (1~3) 口径8.6~9.4cm、器高0.8~1.4cmである。糸切り離しのものである。

瓦器 (4) 椀で口径16.0cm、器高7.0で内外面とも灰白色を呈し、口縁部は一部黒変している。内面は乱雑なミガキを施している。

陶磁器

青磁 (5) 椀の小片で割花と輪花をもつ。胎土は灰白色で、釉はやや厚目にかかり、淡緑色を呈する。

SK994出土土器 (第49図6~20、別表、図版)

土師器 (皿 a、丸底の杯)、陶磁器 (白磁、青磁、黄釉陶器) がある。

土師器

皿 a (6~9) 口径9.0~9.8cm、器高1.3~1.6cmのものである。切り離しはへら切りである。

丸底の杯 (10~11) 体部と底部の境界に明瞭な稜をもち、へら切りのものである。

瓦器

椀 (12・13) 13は復元口径15.2cm、器高5.5cmで口縁部近くに稜をもっている。内外面は乱雑なミガキを行っている。

陶磁器

白磁 (15~20) 15・16は高台付の皿で体部内面下半にわずかに段がある。胎土は濁白色、釉色はやや緑色をおびた灰白色を呈するが16は純白に近い釉色である。17は椀の底部片で見込みに輪状にカキ取りがある。一部鉄絵が残っている。18・19は小さい玉縁をもつ椀で18は口縁部を

折り曲げたもので19は明瞭ではないが、ナデて玉縁状としたものである。胎土は灰白色でやや黄色味を帯びた灰白色を呈する。20は壺の口頸部片である。胎土は灰白色で、釉は光沢のないやや緑色を帯びた灰白色を呈する。その他図示しなかったが磁器では白磁が量的に多い。

陶器(14) 口縁部の小片で褐色の釉がかかった四耳壺である。耳は1個しか残存していない。

SK999出土土器（第49図21～25、別表）

土師器（皿a、杯a）、瓦器、陶磁器（白磁、青磁）がある。

土師器

皿a（21） 口径8.9cm、器高1.2cmで底部切り離しはへうである。

杯a（22～24） 口径12.4～12.8cm、器高2.8～3.0cm、底径7.9～8.6cmで底部の切り離しは糸切りである。

陶磁器

陶器（25） 褐色の釉がかかった壺の底部片である。

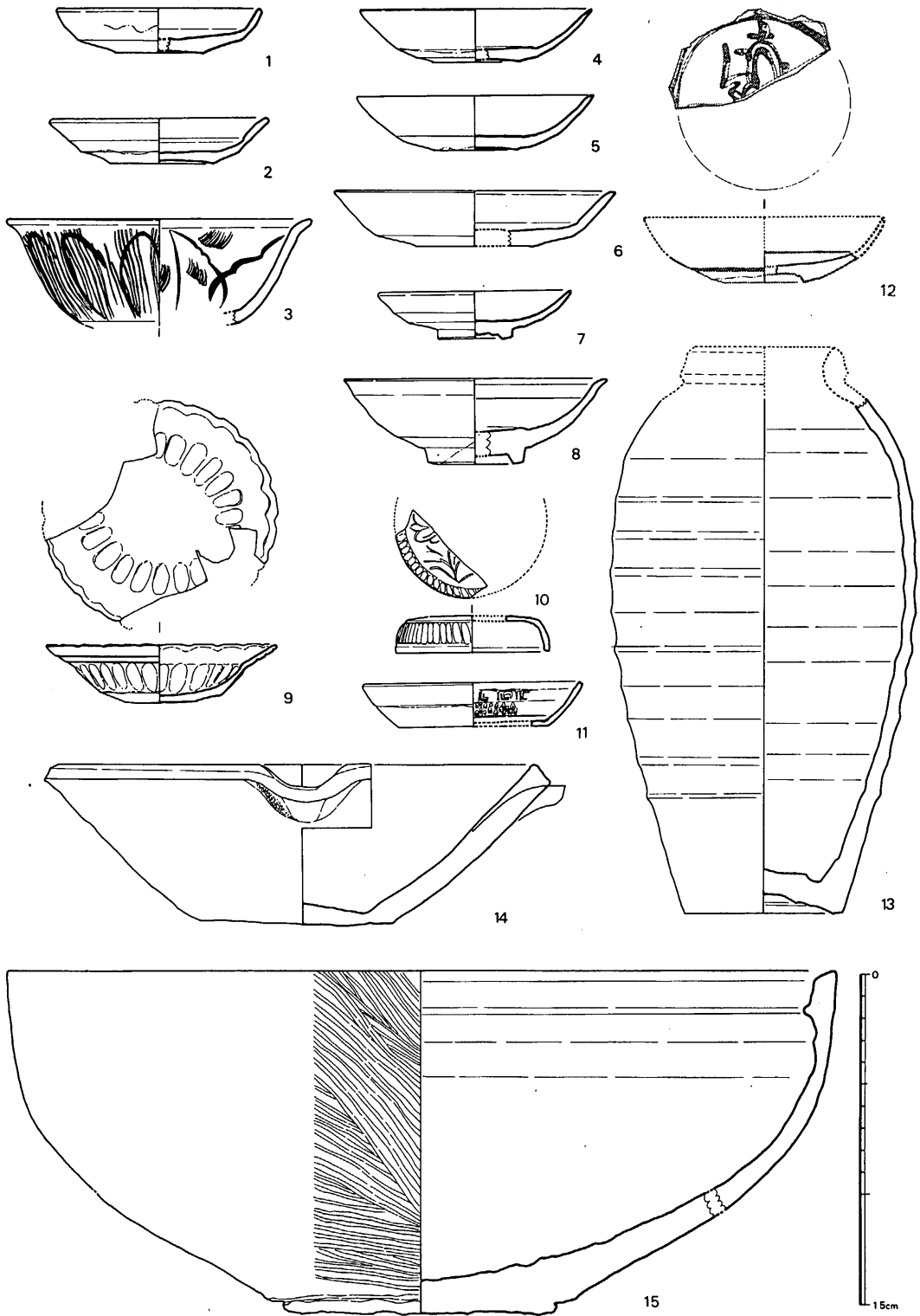
その他の陶磁器（第50図、図版42）

白磁（4～8） 4は皿で口径10.6cm、器高2.5cmのもので見込みはやや高くなり段をもつ。胎土は乳白色で釉はやや黄味をおびた白色を呈し、底部下半には施釉されていない。5は前述のものと同様であるが釉色はやや青味をおびた白色を呈している。6は小片であるが釉はやや厚目に施され灰白色を呈する。見込みには花卉のスタンプがある。底部には施釉されていない。7は高台付皿で釉色はやや青味をおびた白色を呈する。外面体部下半と高台部には施釉されていない。8は見込みの部分がやや高くなり段がつく。釉は薄目にかかり、やや青味をおびた白色を呈する。

青磁（1～3） 1～3は皿で(1)の胎土は濁白色を呈し、釉は薄く施釉され淡青緑色を呈する。外面体部下半から底部には施釉されていない。2は1と口径、器高ともほぼ同じであるが内面体部下半に沈線状の凹みがある。釉はやや灰色をおびた淡緑色を呈する。外面体部下半と底部には施釉されていない。また底部には墨痕がみられるが判読できない。3の胎土は暗灰色を呈する。小片で全形は不明であるが外面体部にはへう描きの蓮弁があり、蓮弁文の上から縦方向に櫛目を施している。

青白磁（9～11） 9は菊皿で体部に花卉の形押しがある。口縁部には輪花があり、外面の口縁部近くには二条の沈線がある。底部には施釉されていない。10は合子の蓋で側面に蓮花座をもち天井部は草花の形押しがある。胎土は灰白色を呈し、釉色は灰緑色を呈する。11は小片であるが体部内面に草花文の形押しがある。釉は薄く施釉され緑色をおびた白色を呈する。底部には施釉されていない。

染付（12） 皿の小片で見込みに文字様の文様が描かれている。明代のものであろう。



第50图 陶磁器实测图

褐釉陶器 (13) 壺の破片であるが、口頸部を除き図上復元ができる。体部はロクロ痕が明瞭に残る。

須恵質土器 (14) 片口の摺鉢でほぼ完形のものである。瓦質に近いもので灰白色を呈し、内面は摺られた様でスベスベしている。

陶器 (15) 陶質の鉢で破片であるが、図上復元ができ、口径38cm、器高15.7cmである。内面は灰色を呈し、器壁は粗いがスベスベしている。外面は平行条線の叩きがある。外面は淡茶色を呈する。

銅銭

本調査で出土した銅銭は12枚で、そのうち判読できるのは5枚である。出土層位および遺構は第3表の通りである。

第3表 銅銭出土遺構・層位対照表

番号	銭種	初鑄年代	出土層位
7	天禧通宝	1017	土塚18 (S K973)
13	治平元宝	1064	暗褐土下層
17	元豊通宝	1078	黒灰土
18	元豊通宝	1078	土塚17 (S K968)
	嘉定通宝	1208	暗褐土

番号は第38次調査出土銅銭拓影(第38図参照)

その他の遺物

その他に瓦および石製品が出土しているが、少量であるため今回は省略した。

小 結

県道山家-関屋線の道路拡幅工事に伴う事前調査は昭和51年度に実施した第39-1次調査、^(註2)そして今年度行った第39-2次調査および第39-3次調査で終了した。

第39-1次調査では5基の井戸を検出し、この井戸は平安時代前~中期に属するものであった。しかしその他、顕著な遺構は検出できなかった。第39-2次および第39-3次調査の結果検出した遺構の状況は似ており、多数の土塚およびピット群、それに井戸、溝があり、それらは平安後期~室町期(鎌倉期の遺構が中心)に考えられるものである。土塚中からは炉壁片と考えられるものが多量に出土し、鞆の羽口や銅鏝、鉄鏝がみられ、また第39-2次調査では保土穴を検出していることから製鉄関連の遺構と考えられる。

第39-3次調査では、第6~10トレンチには第1~5トレンチにみられた土塚、ピット群は

なく、遺構らしきものはなかったが、地山が第6トレンチの西端近くから西へ落ち、また第8トレンチの東端近くから東へ落ち、昭和48年度実施した第27次調査の結果と^(註3)考え合わせると、その間は南北の溝状になっているものと推定され、この溝は遺物から古代末～鎌倉前半期に存在していたと考えられる。

今回の調査の目的であった条坊に関連する遺構は検出できなかった。

註1 鏡山猛『大宰府都城の研究』 1968

註2 「大宰府史跡」-昭和50年度発掘調査概報-

註3 「大宰府史跡」-昭和48年度発掘調査概報

6 第41次調査

政庁地区は昭和43年以降の第1・6・15・26・30次調査により、南門、中門、東西脇殿、正殿、後殿、回廊、築地などの主要構造を明らかにした。

正殿後方を取り囲む施設は、第15・26次調査により築地であることがわかったが、北門については課題として残され、環境整備も未完結のままになっていた。昭和51年度が政庁跡の環境整備の最終年度にあたるため北門想定地域の発掘調査を実施した。

検出遺構

調査の結果、新旧の築地、瓦積基壇建物1および柵列2、その他土坑などを検出した。調査区の土層は上層より次のようになる。

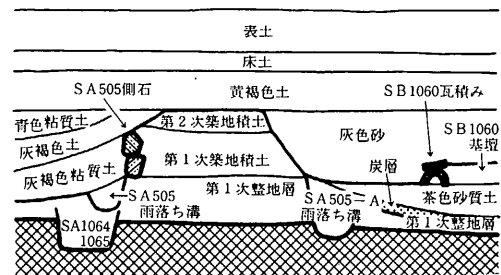
(第51図)

- ① 表土
- ② 床土
- ③ 黄褐色土
- ④ 築地 (SA505) 北側堆積土 青色粘質土
灰褐色土
灰褐色粘質土
- 築地 (SA505) 南側堆積土 灰色砂
茶色砂質土
炭混入層

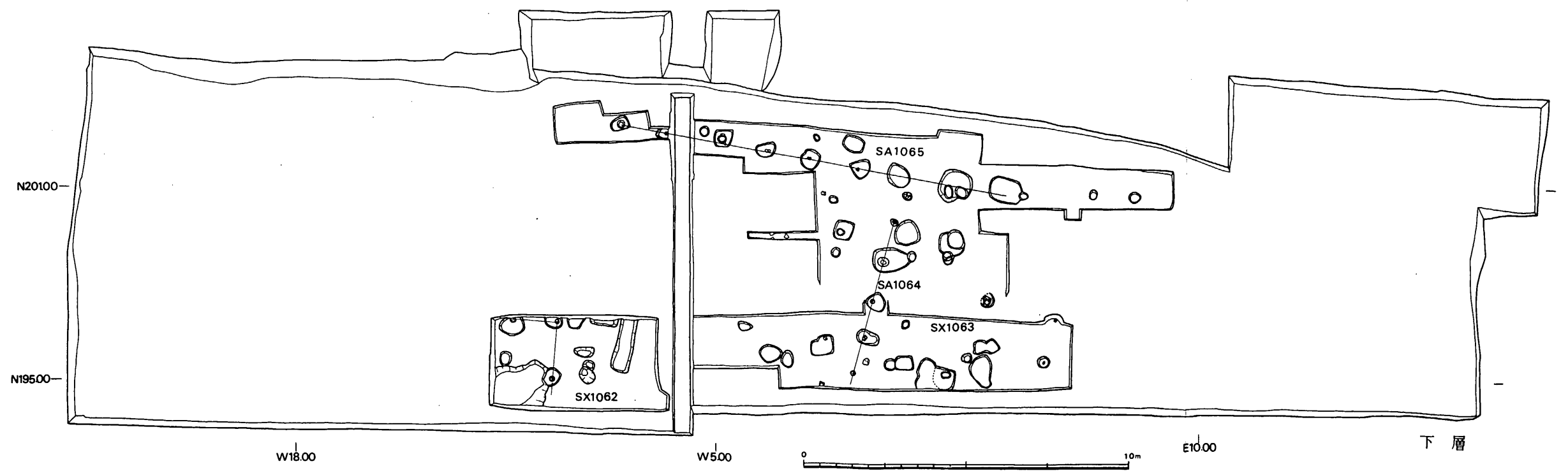
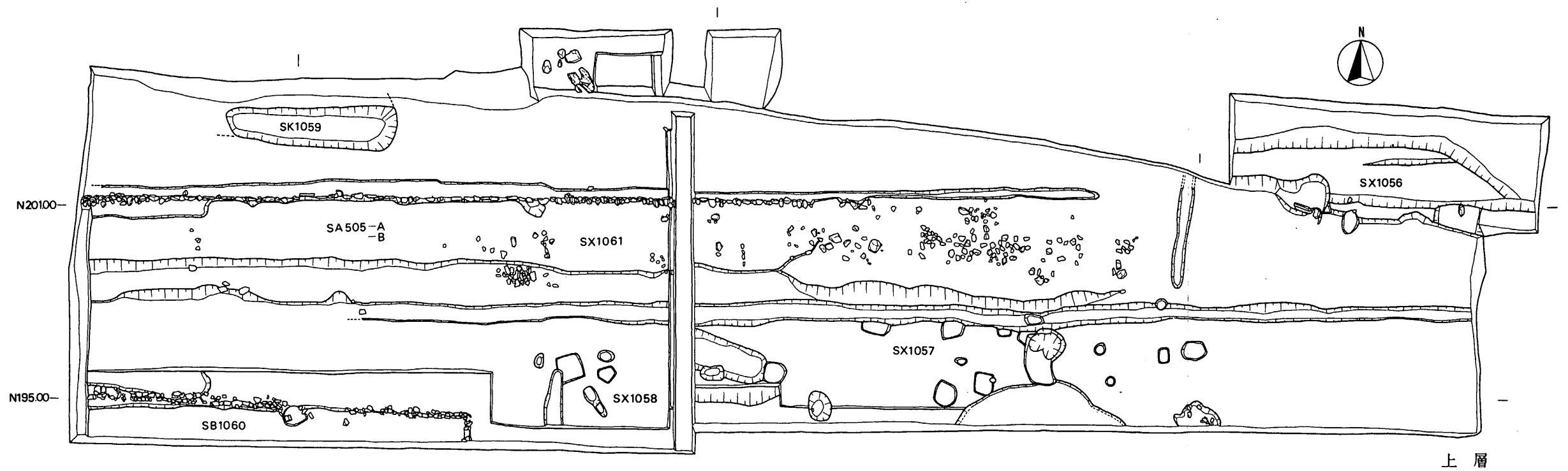
⑤ 第1次整地層

⑥ 地山 (自然堆積層)

これらのうち④～⑥までの各層ごとに遺構が認められた。



第51図 第41次調査層位模式図



第52図 第41次調査遺構配置図

①②③を除去すると築地の上面があらわれた。

④は、築地（SA505-B）がその機能を失ない、埋没した段階のものである。築地の北、南側で堆積土は異なるが、いずれも西側に向かって厚く堆積する。この時期のものでは、土壇SK1059、小数のピット、小溝などがあり、SK1059は築地北側の灰褐色土から掘り込まれている。

④の灰色砂は新期築地（SA505-B）と瓦積基壇建物（SB1060）を覆う。

④を除くと、第1次整地層があらわれる。⑤の上面にSA505-Aは構築され、その南北両側に雨落ち溝が掘られている。⑤は8世紀初頭頃までの土器や、炭化物を包含した整地層である。

⑥は遺物を包含しない地山（自然堆積層）であり、この面から掘立柱群SX1062、1063、柵列SA1064、1065が掘り込まれるが、さらに古い時代のもので、古式土師器を出土した土壇が認められた。調査区東端で一番高く、西に向かって傾斜している。

土壇

SK1059 北と東側は調査区外になり、規模は不明であるが、南側辺9.5m分を検出した。長方形プランのものと考えられ、壁の傾斜は徐々に立ち上がりをなし、底部は平坦に近い。深さは灰褐色土上面から0.4mほどある。

遺物は瓦、黒色土器、土師器それに「□屋郡□」の刻銘ある須恵器甕片がある。ただしこの須恵器片は、後述するごとく、貴重な資料といえるが上層からの混入の可能性があり出土層位については明確ではない。

瓦積基壇建物

SB1060 建物は北東辺12mと北東隅を検出したが、大半は調査区外にあるため、その規模については明らかでない。基壇化粧は瓦を用い、各辺では平積みになっているが、北東隅では平瓦を垂直に立てている。使用瓦は、縄目、細かい斜格子の叩きが施された丸、平瓦である。基壇方向は築地方向と約3°北へふれる。

築地

SA505-A・B 築地は新旧2時期認められた。北側の基壇化粧は乱石積みで、残りのよいところは三段あり、新・旧ともに使用している。その北側には幅0.2~0.5mの雨落ち溝が付属する。

SA505-Bは3分の1ほどが削平されているので、基壇幅は不明であるが、第15・26次調査の成果から3.6mであると考えられる。SA505-Aの、南側にも幅0.6mほどの雨落ち溝を検出した。この雨落ち溝北側肩から先述基壇北側石積みまでの幅は3.3mである。

北門は南門、中門とは異なり、基壇の張り出しはなく、築地の基壇幅で一直線に延びる。

SX1061 基壇中に南北に6mの間をおいて並ぶ2列の石列の間をさし、調査前には北門跡が想定された部分である。西側の石列の位置から基壇側石の積み方が変わることから、この石

列間を一応北門跡と考えた。この想定が正しければ、脇門的な小規模な門が考えられる。しかし、石列間にも側石から0.9mのところから幅1.5m、厚さ0.1mの丁寧な版築が認められ、26次調査の成果を考え合わせると築地が連続し、北門はなかったとも考えられる。

掘立柱群

SX1057・1058 これらの下層遺構は上に築地基壇があるため夫々について配列、規格性などは明らかにし得なかった。また柱穴の一部には重複があり、さらに数時期に分かれると考えられる。

柵列

SA1064 南北方向に4間分検出した。最北端の柱穴を末端として南へのびるものと考えられ、第1・3・4・5番目の柱穴には柱根が残存し、各々の柱間寸法は、第1・3番目の間が2.252m、第3・4番目は1.197m、第4・5番目は1.128mである。全体の平均柱間寸法は約1.2m(4尺)である。

SA1065 東西方向に8間分検出した。最東端の柱穴を末端として西へのびるものと考えられる。東から第4・5・6・8番目の柱穴には柱根が残存し、各々の柱間寸法は、第4・5番目の間が1.552m、第5・6番目は1.262m、第6・8番目は3.245mである。全体の平均柱間寸法は約1.5m(5尺)である。

掘立柱群

SX1062 柱穴群のうち3個には柱根が残存し、L字形に直交する。南北、東西にそれぞれ一間分のみを検出したが、柱間寸法は東西1.36m、南北1.79mであり、建物の一部かとも考えられる。

出土遺物

発掘調査により発見した遺物は瓦と土器である。

土器 (第53・54図、図版43・44)

第41次調査で検出した土器は、須恵器、土師器および輸入陶磁器である。このうち、輸入陶磁器は約30片を数え、政庁跡調査としては比較的多い。大部分は遺構から遊離し、床土中から出土したものである。以下では、整地層、築地基壇中、土壇および建物を直接覆う層などから出土した土器について報告する。

須恵器 (1~21) 全てへら切りである。杯蓋天井部はへら削りもしくはへらナデによって切り離し時の凹凸を調整している。

1~11は第1整地層および基壇積み土中から出土した。この層から出土した須恵器のうち、杯は混入と考えられ、径21cmを測る杯蓋1点以外には大型のものはない。杯蓋には身受返りの

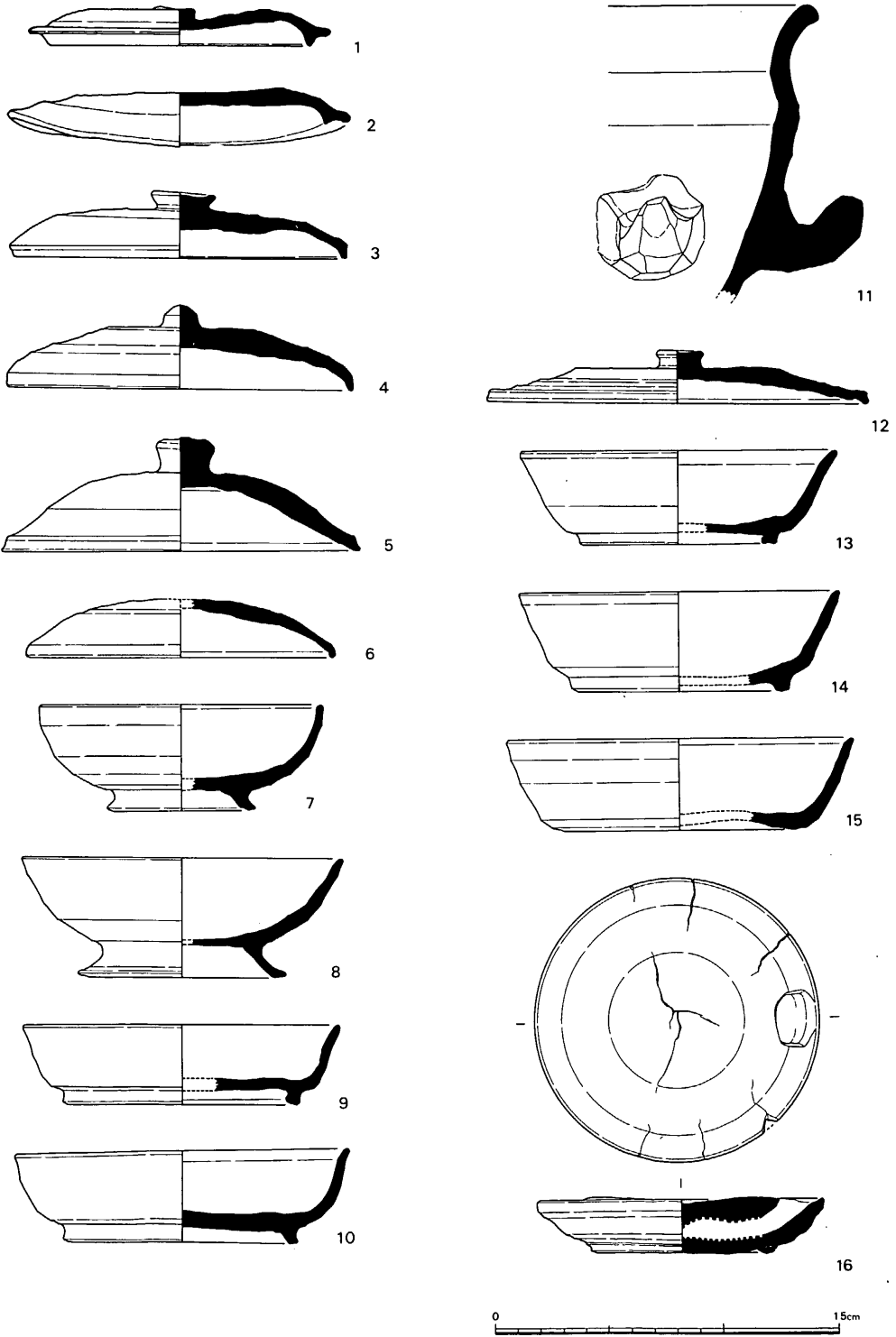
あるもの（1・2）とないもの（3～6）があり、量的には前者が圧倒的に多い。この返りのある蓋の多くは焼き歪みが著しく、割れ目が密着しないものまで含んでいる。杯身も杯蓋と同様に、体部に丸味を有し、高台は高くまた大きく外反するもの（7・8）と体部の丸味は小さく、断面が四角形に近い高台を有するもの（9・10）とに大別できる。後者のうち、9のように、体部と底部との境は若干不明瞭ながら判別できるものもあるが、シャープな境をなすものはない。11は推定復元径51.4cmの大型の鉢で、外面把手以下に平行線状の叩き目跡が、また内面には同心円状のあて板跡が見られる。

12～16は築地南側雨落ち溝(SA 505-A)から出土した。この雨落ち溝から出土した遺物は少ないが、前述の第1整地層や築地基壇積み土層中出土の杯に比して、身受け返りのある蓋や大きく外反する高台を有する身はきわめて少なく、返りのない蓋や断面四角形の高台を有する身が大部分を占める。杯身の体部は直線的に外上方に延び、体部と底部との境は13のようなシャープなものを含む。無高台杯の出土点数は少なく、体部を底部の境から外底部にへら削りの調整を行っている。16は上面に穴を1つ穿った異形の須恵器で、上面中心近くには細かいへら磨きを施し、器面を円滑にしている。内面全体が中空になっているかどうかは不明である。

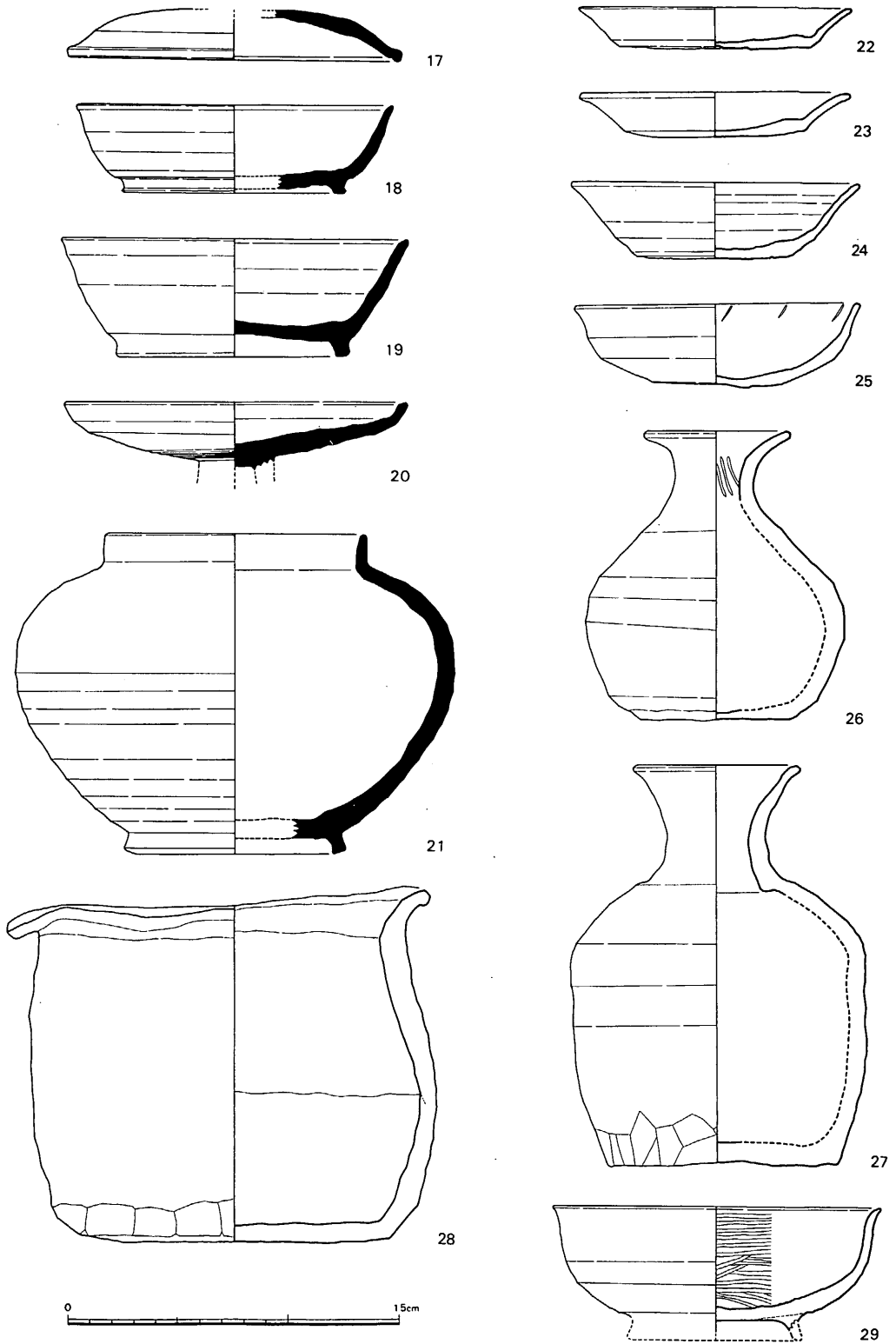
17～21は雨落溝を覆う灰層から出土したものである。15は口径15.9cm、器高5.4の大型の杯身で、体部は直線的に外上方に延び、体部と底部との境に高台貼付されている。その器形は、奈良時代後半期から見られる土師器高台付椀に類似している。20は口径15.7cmの高台で、脚部の大部分は欠損している。杯部外底面はへら削り調整を行った後に下半部をカキ目調整を行っている。短頸壺21は大部分が欠損し、全体の6分の1程度しか残存していないため、正確な法量は不明である。胴部全体にへら削りを行っている。短頸壺は中・南門の調査において地鎮として埋められていたものを各1個検出しているが、それに比すと、肩部の張りはなく、丸味を有し、胴部との境は不明瞭である。

土師器（22～29） 遺構を直接覆う層から出土したもので、全てへら切りで、糸切りのものは出土しなかった。

22～24はSB 1060の直上から出土した。杯22・23のように小型化したものと24のように大型のものがある。前者は口径12cm強、器高2.0cm前後で、体部を外反させているためか、同種の杯に比して口径は大きい。後者は口径13.0cm、器高3.5である。両者とも内底はナデ、外底には細かい板状圧痕がある。25～27はSA 505-B、SB 1060を覆う灰砂層から出土した。26は無高台の椀で、乳白色を呈し、内面は器面を磨いて円滑にしている。また右回りのコテ跡も残存している。外面は、体部がヨコナデ、底部に板状圧痕がある。26・27は並んで出土したもので、口縁部の一部のみを欠損している。26は口径6.7cm、器高13.1cm、最大径11.7cmで、口縁・頸・胴部ともにヨコナデを行っている。頸部内面にはへら状のもので押えた跡がある。乳白色を呈し胎土は比較的精良である。27は口径7.6cm、器高18.1cm、最大径13.3cmで、体部と底部との境に



第53图 土器 实测图 (1)



第54図 土器実測図(2)

不定方向のヘラ削りを行っているほかはヨコナデである。淡茶灰色を呈し、胎土中の砂粒は比較的多い。22はSK1059から出土した口径19.3cm、器高15.3cmの甕で、ロクロを使用していないためか器面に凹凸が著しく、外面に縦方向、内面に横方向のナデを観察できるのみである。体部と底部の境に時計回りのヘラ削りを行っている。灰白色を呈し、焼成は堅い。胎土中には荒い砂粒を多く含む。

黒色土器 (29) 里色土器の出土点数はきわめて少なく、数点を数えるのみである。29は22と同様にSK1059から出土した黒色土器Aで、内面のみを埴している。内面は横方向に丁寧なヘラミガキを行っている。

ヘラ書き文書 (第55図、図版52)

須恵器の比較的大きな甕の頸部にヘラで横に記された文字で、現状では計3字が確認される。第2字は完形であり、「郡」と判読できる。第1字は左下方向に流す線と「至」部がほぼ完全に判断できることから「屋」と推読して大過ないだろう。第3字は「戸」部の文字とも考えられるが、中央に位置しながら上の2字に比して小さいことから、この想定は困難であろう。むしろ下端切断面にわずかながら横棒の痕跡が認められるので、「戸」部の文字とみなすのが妥当と考えられるが、下半部が欠損しているため断定はできない。



第55図 ヘラ書文字拓影

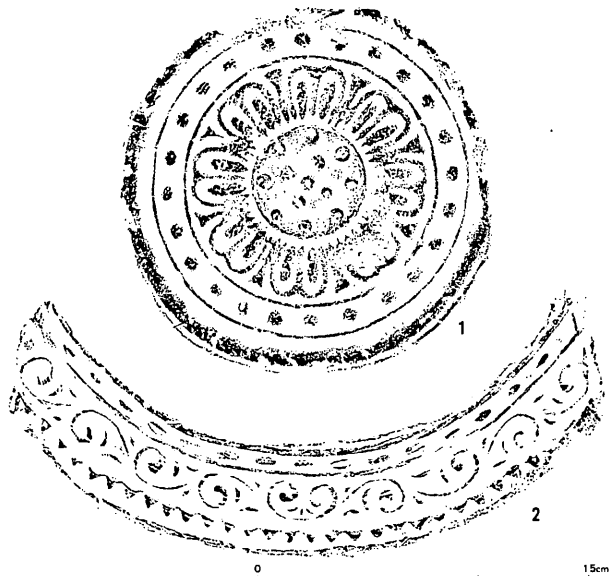
大宰府管内諸国島のうち、某屋郡と称するのは筑前国粕屋郡だけであり、この土器は粕屋郡に何らかの関係を有するものとみなすことができる。また第3字が「戸」とすれば、これに記された文字は「糟屋郡戸^(主カ)」で、人名が続くと推定しうるが、それ以上は明らかでない。なおこの時期については、器形的にきわめて小断片であり、また出土層位も明確には判定しえないので、断定することは困難である。

瓦 (第56・57図、図版52)

今回の調査で出土した瓦類の主なものは軒先瓦、丸瓦、平瓦で、他に面戸瓦、鞆瓦、鬼瓦、塙が少量ある。

軒先瓦は総数81点で比較的少く、主に遺構を覆う灰色砂質土から出土した。また文字瓦は174点である。

軒先瓦は総数42点で12型式14種類に分



第56図 軒先瓦拓影



第57図 文字瓦拓影

1は比較的大きな斜格子に「安樂之寺」の文字を入れ、さらにこれを2～3本の線を入れて消した形にしている。叩板は長さ29cm、幅6cm（いずれも焼成後の寸法）程度の細長いものである。2、3は書体が非常に類似しているが、文字の大きさが異なる。この二点の文字瓦は他の「平井」銘のものと比較すると斜格子の叩きが陰陽逆になっているのが特徴である。これまでの調査における出土状況と比較すると1は回廊東北隅から多く出土しており2、3は第26次調査の後殿地区の築地東北隅から比較的多く出土している。

小 結

北門跡の検出を主目的として調査を実施したが、門跡と確定できる遺構は存しなかった。

検出した主要な遺構は築地、瓦積基壇を有する建物1棟、柵列2条および土壇である。

築地は新旧2時期あり、旧期のそれは基壇幅11尺、新期は26次調査結果から12尺であると考えられる。旧期のものは8世紀前半代につくられ、新期の基壇は旧期雨落溝から出土した遺物から8世紀後半代に旧期の築地を南に拡張してつくられたことが判明した。

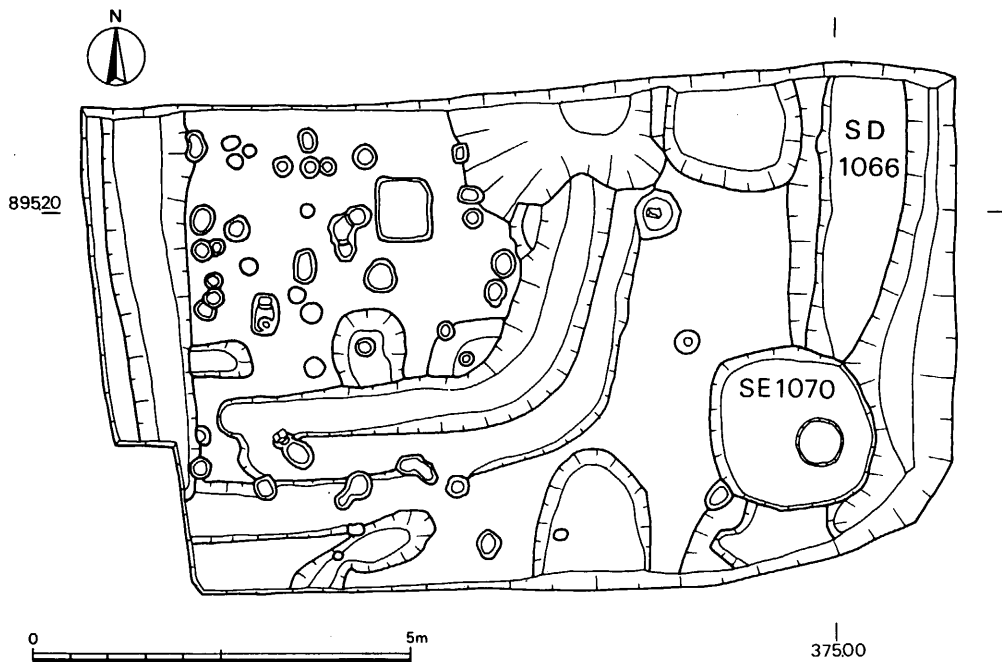
瓦積基壇を有す建物は、その大部分が調査区外にあるため礎石建物か掘立柱建物が明らかに

類できる。このうち第56図-1のいわゆる鴻臚館式が最も多く22点ある。瓦当の内区は中房に1+4+8の蓮子を配し、複弁八弁蓮華文で、外区は内縁に24個の珠文を配し、外縁は素縁である。全体的に黒く焼きあがったものが多い。

軒平瓦は総数38点で9型式10種類に分類できる。第56図-2の鴻臚館式が最も多く25点ある。瓦当文様は均正唐草文で内区は3葉形の中心飾の左右に各々4回反転する唐草文を配する。外区上縁は偏円形の珠文を下縁には外向する凸鋸齒文を配している。このいわゆる鴻臚館式の軒先瓦は、これまでの調査でも最も出土量の多いもので今回の調査でも軒丸瓦、軒平瓦とも50%を越えている。

文字瓦は総数174点で、これらはいずれも瓦製作時の叩板に刻み込まれたものである。「安樂之寺」、「平井」、「佐」、「賀茂」、「筑」、「前」など多種類にわたるが、第57図に掲げた「安樂之寺」、「平井」銘のものが比較的多い。

1は比較的大きな斜格子に「安樂之寺」の文字を入れ、さらにこれを2～3本の線を入れて消し



第58図 第42次調査遺構配置図

し得なかった。出土遺物から平安時代初めには少なくとも造営されていたと考えられる。

7 第42次調査

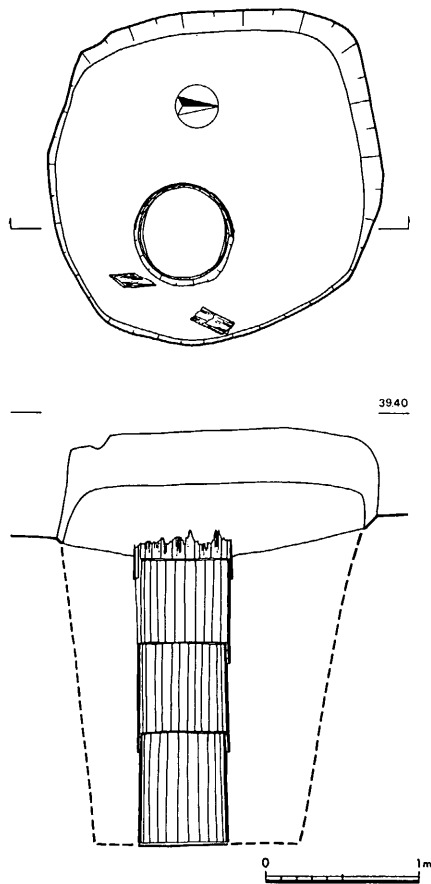
この調査は住宅改築に伴う事前調査である。調査地は政庁中軸線から東へ4町の学校院と観世音寺の境界推定線上にあり、昭和46年度に調査を行った第9次調査地の北方約150mの位置にある。現在この付近には南北方向の小路および小溝が走っている。第9次調査では、この小路に接して平安末期から鎌倉期にかけての南北溝5条を検出している。したがってこの調査ではこの溝の延長部分についての状況を把握することを主眼とした。

検出遺構

当該地は遺構面が浅く、また発掘調査直前まで家屋が存続していたため、それに付随する各種の攪乱が行なわれていた。検出した主な遺構は鎌倉期の井戸1基と南北溝およびピット群などである。

井戸

SE1070 掘方は2.2×2.2mで隅丸方形に近い。溝SD1066によって切られており、深さは約2.7mである。枠は直径60cm、深さ70cmの桶様のもを積んだもので4段分が残っているが、最上



第59図 SE 1070 実測図

段の枠は下端の一部を残すのみで大半が消失している。枠内埋土から検出した土師器の杯から鎌倉期後半頃のものと考えられる。

溝

SD 1066 発掘区東端で検出した南北溝で大半は道路の下にあるため、幅、深さ等については不明である。また検出範囲が狭いため出土遺物も少ないが、中には近世陶器などが含まれており、新しい時期のものと思われる。この溝は位置的に昭和46年度に行った第9次調査検出の南北溝に連続する可能性が考えられるが、出土遺物に年代的なずれがあり、疑問が残る。

出土遺物

発掘範囲が狭く、また調査直前まで家屋が存続していたため、これに付随する溝や土壇が各所に掘られており、攪乱が激しかった。したがって遺物もまとまったものはなく量的にはきわめて少ない。土師器、青磁、瓦などが主なものである。

土器

SE 1070出土土器

口径12.9cm、高さ2.2cmの杯で底部の切り離しは糸切りで、幅1mm前後の細い板状圧痕が認められる。この杯は第38次調査のSK830から出土した一群の杯と同じタイプのもので鎌倉期後半頃のものである。このほか少量の土師器があるが、いずれも小片であるため記述は省略する。

瓦

主なものとしては軒丸瓦3点、軒平瓦2点がある。これらはいずれも遺構面を覆う暗茶灰色土および攪乱土から出土した。軒丸瓦は左廻りの三巴文で頭は尖り気味で連続しており、尾は長い。周縁には珠文を密に配している。軒平瓦は均正唐草文で中心飾に菊花文と宝珠形の文様を配したものがある。

小 結

従来の大宰府条坊復原案によると学校院は方2町である。今回の調査地は、この方2町の東北隅に当る。これまでの学校院推定地における発掘調査で検出した遺構のうち最も北に位置するものは第18次調査検出の井戸（SE400）で平安時代初頭頃のものである。今回の調査は学校院推定地の東辺部はもちろん北辺部における遺構の有無を確かめることを主な目的としたが、今回の調査範囲内には顕著な遺構は検出されなかった。しかしながら調査面積がわずかに70㎡できわめて小範囲であるため、この地域まで学校院関係の遺構が及んでいるか否かについては断定的な判断を下すことには危険性がある。今後の調査の進展を待って検討を加えることとしたい。

8 第43次調査

第43次調査は観世音寺講堂の北、僧房跡の推定地約970㎡について行なった。観世音寺の発掘調査は、昭和27年の九州文化総合研究所、昭和32年の福山敏男・鏡山猛氏等による発掘調査が実施され、その成果の一部が知られている。^(註1) これらはいずれも境内所在の金堂・講堂・回廊など中心堂宇に関するものであった。その後、福岡県教育委員会・九州歴史資料館によって寺地の四至の一部が調査されているが、中心堂宇の周辺については手つかずのままであった。^(註2) 最近観世音寺周辺の公有地化がすすみ、観世音寺伽藍の解明が可能な状態となってきたため、その最初の事業として、僧房推定地の発掘調査に着手したものである。地番は大字観世音寺字堂廻183-4番地である。

調査は昭和51年10月12日に開始した。同23日には遺構の検出にはいったが、公有地化前の水田耕作によって土地が深く削平されており、遺構の残存状態は良くなかった。12月23日までに遺構の検出を終え、目的とした僧房（大房）の位置を確認することができた。その後写真撮影・遺構実測を行い、若干の補足調査の後、昭和52年2月24日に調査を終了した。

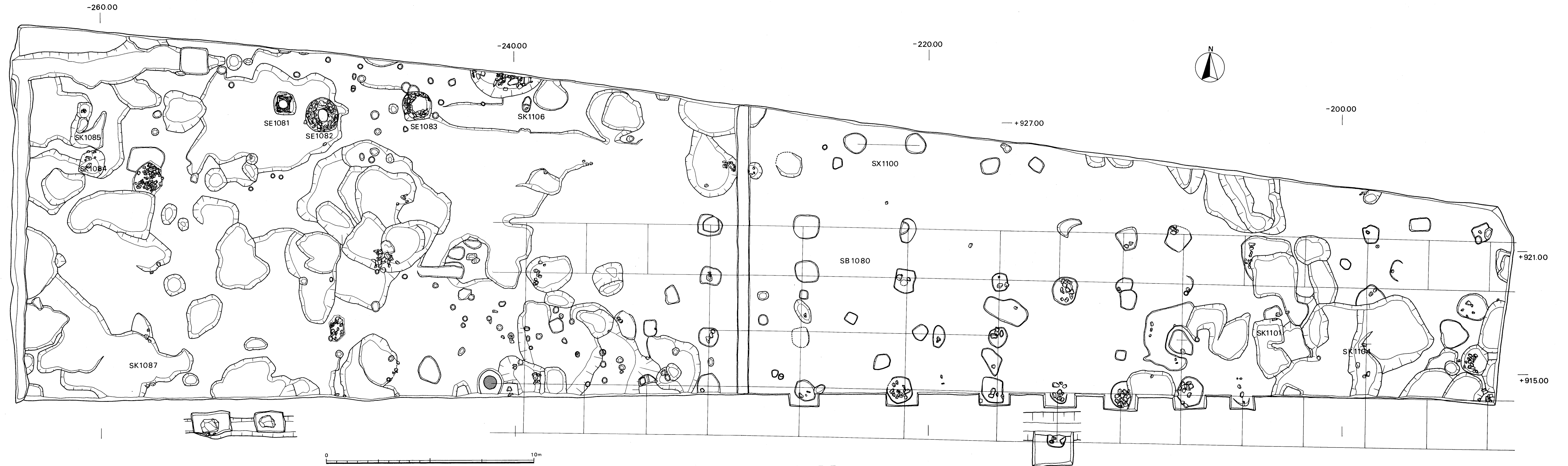
検出遺構

第43次調査では礎石建物1棟、井戸3基、土壇多数、その他の遺構1を検出した。遺構の残存状態は悪く、調査区の東側は地山面まで削平され、西側は水流によって攪乱を受けていた。したがって遺構の掘込み面を確認することはできなかった。

以下、これらのうち主な遺構について述べる。

礎石建物

SB1080（大房） 調査区の南半部分において東西方向の4列の、それぞれ一辺50cm前後の隅丸方形に近い礎石の掘方・根石および抜き跡の列（以下礎石列とする）を検出した。礎石は削平のためすでに除去され、いずれも認めることができなかった。またこのような状態のため基壇・雨落ち溝などについても明らかにできなかった。礎石列第1列（北から）の残存状態は



第60図 第43次調査遺構配置図

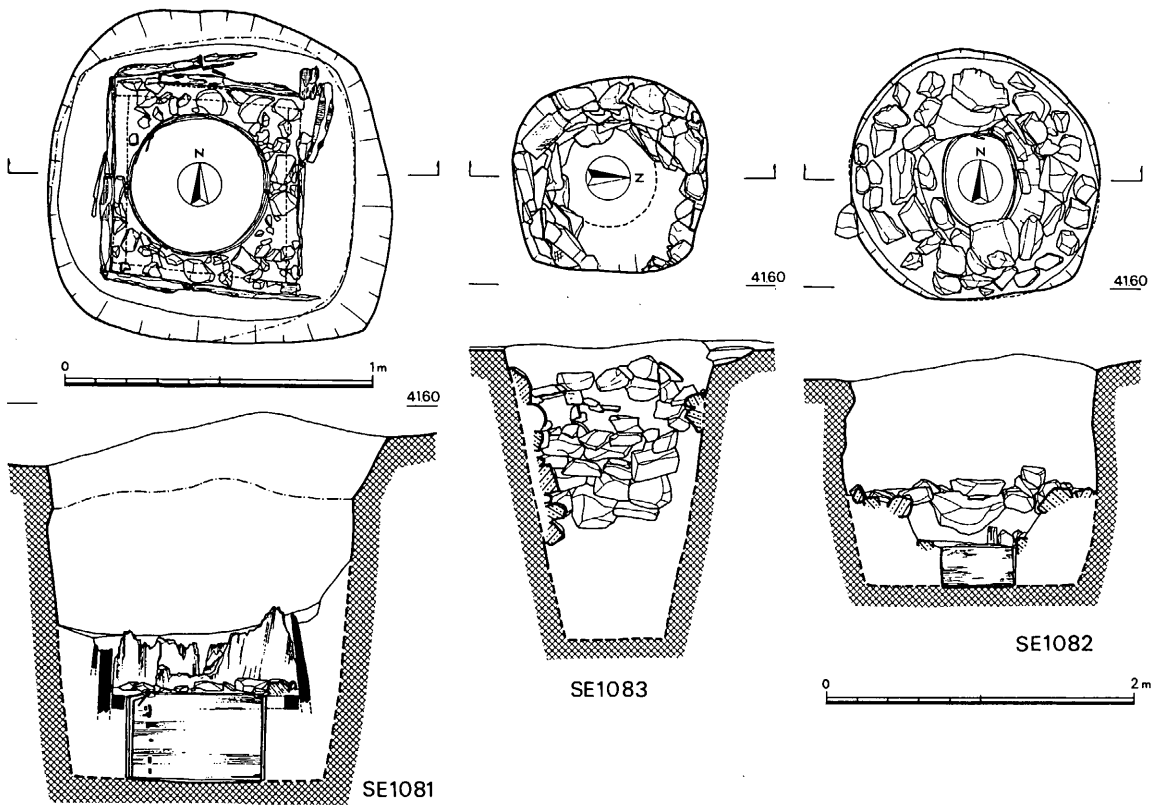
ことに悪く、根石すらもほとんど残されていない。しかし黄色粘土質の地山に切り込まれていたため遺構はかなり明瞭に識別することができた。第2・3列は一部に掘方・根石が認められたが、やはり残りは良くなかった。第4列は調査区南端に接して検出されたが、比較的残存状態が良く、確認したすべての掘方に根石を検出することができた。これら4列の礎石列の相互の柱間間隔は、第1列と第2列が約240cm（8尺）、第2列と第3列・第3列と第4列がいずれも約270cm（9尺）であった。東西に長く延びるその配列から東西棟と考えられ、かつまた柱間間隔が北から8尺・9尺・9尺となるところからさらに南8尺に第5列が存在すると考え、一カ所延長したところ果たして礎石の掘方を確認することができた。したがってSB1080は8尺・9尺・9尺・8尺の柱間間隔をもつ梁行（南北）4間の礎石建物であることが知られる。なお講堂とは約68尺の間隔をもつ。

一方これらの礎石列を桁方向にみると、講堂礎石から算定した中軸線（第4列で-223.70m付近、真北から約1°東に振れる）から西に2列、東に6列を確認できる。このうち東第1・3・4列では北第3列の礎石掘方を欠いていた。これらの柱間間隔をみると、東第1列は中軸線から約250cm（8.5尺）、第1列と第2列とは約450cm（15尺）、第2列と第3列以東はそれぞれ約300cm（10尺）であった。また西第1列は中軸線から約250cm（8.5尺）、第1列と第2列とは約450cm（15尺）ををはかった。これからみてSB1080は中軸部分に17尺、その両脇に15尺、それより東（西）に各10尺毎の柱間間隔をもつと考えられる。これを延長すると東第8列および東第10列に礎石掘り方がみられる。また西第9列・第10列では北第5列のわずかに北側で二個の礎石がみられた。すでにいずれも原位置を移動しており、またそれぞれの礎石の上面高が各掘方の底面ないしはそれ以下になることなどから、原位置の北側に落し込まれたものと推定できる。^(註3)西第10列の礎石はSB1080に使用された礎石の形態を示すものと考えられるが、長さ85cm、幅63cm、厚さ40cmほどの花崗岩製であった（図版30-(上)）。これらを参考にすればSB1080は東西にそれぞれ少なくとも10列、すなわち19間以上の桁行をもつ建物であることが知られる。

以上のように、SB1080は梁行4間（34尺）×桁行19間以上（207尺以上）の東西棟の建物である。講堂の北に位置し、このような規模を有する建物は、『延喜五年観世音寺資財帳』を参照すれば僧房のうちの大房に相当する。^(註4)昭和43年に大宰府史跡の発掘調査が開始されて以来文献と照応する建物の検出は初めてのことであり、内容の検討を後述したい。

井戸

SE1081 調査区の西側、SB1080の北約5.5mに位置する。掘方のプランは一辺110cmほどの隅丸方形で、深さ約110cmの比較的規模の小さな井戸である。掘方中には厚さ3～4cmの縦板を一辺に二枚並べた辺長約65cmの方形枠が置かれる。板枠はやや朽損しており、その上端は掘方の上端から約50～65cmの深さにある。方形板枠は横棧でとめられている。底には直径約54cm・深さ約30cmの曲物が一段据えられており、その上端は横棧の上面に合わされている。曲物



第61図 井戸実測図

は二重に巻かれ、桜皮で綴じられているが、上端のみはさらに二カ所で留められている。方形枠と曲物の間には小石が詰められている。

注目すべきことに、掘方埋土から一括して各種の須恵器・土師器約20点が出土している。その上面は鶴嘴の刃が立たぬほどの硬質の土で覆われていた。その状態には井戸の埋没が廃棄後の自然のものでなく、意図的な埋め立て後の土器の一括埋置を思わせるものがあった。なお井戸枠埋土中からは土器の出土はみられず、瓦片のみであった。

SE1082 SE1081の東に接するように位置する。直径160cmほどのほぼ円形の掘方中に曲物が据えられていた。曲物は直径50~60cmで土圧のためか長円形をなす。深さ約25cmをはかる。掘方の上端から約80cmの深さのところの人頭大の石が敷き詰められ、曲物の上端とに約40cmの落差がある。おそらくこの部分に上段の曲物が据えられていたと思われる、その断片が残されている。敷石の面が上段の曲物の上端を示すのであろう。敷石面から底までの深さは約70cmである。井戸埋土中からは瓦片のみが出土した。

SE1083 SE1082の東約4.5mに位置する。一辺約140cmほどの隅丸方形の掘方の中に、円

形の井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端は直径約90cmで、構築には人頭大の石と瓦片を用いている。上端から約110cmの深さまで石組みを認めたが、それより下位には何らの施設もなかった。しかし底までにはさらに70cmほどあり、崩壊していた石がなく、また木質がわずかに認められたことから木枠の置かれていた可能性を考えている。石組みの遺存が掘方の中途までであったため、調査中ほぼ半分が崩壊した。その後も危険を伴い、細部の確認はできなかった。掘方の周囲には小ピットが散在しており、これらのいくつかは覆屋の柱穴の可能性もあるが、まとまるものはなかった。

井戸埋土中からは多量の土師器・瓦・埴などが出土した。

以上三基の井戸は大房SB1080と方向を合わせており、近接するその位置および時期からみてSB1080と関連する遺構と思われる。しかし少なくとも一時期一基とみられ、大房の各房に対応するものではない。

土坑

SK1084 調査区の西端近く、SB1080の北側に位置する。水流による攪乱部にあり、約40～50cmほど削平されていると思われる。現状では一辺長約1.2m、深さ約0.2mの浅い皿状の土坑である。土坑中は青灰色粘土で埋まり、奈良時代後半に属する須恵器・土師器が一括して検出された。井戸SE1081と同時期の所産である。土器には特殊な器形を含んでおり、この土坑はそれらの埋置用と推定される。

SK1085・1101・1103 検出された土坑はいずれも不整形で規模も大小様々のものがあり、性格を明らかにしうる例はない。それらから出土する遺物はSK1084を除いて新しく、また土坑以外からの出土遺物とも共通する。それらの土器はこの土地が大幅に削平された時期を示すと考えている。SK1085・1101・1103ではことに多量の一括土師器を出土している。

なおSK1103では埋土の下部に薄い黒色土層がみられ、この部分から土器が一括出土した。さらに一層をはさんだ上層には多量の灰・鉄滓・ふいご羽口が10cmほどの層をなしていた。層の方向からみて、南側の調査区外に想定される製鉄遺構の灰原と思われる。それはSK1103が完全に埋没する以前に窪地に流入した状態を示しており、この土坑と直接に関連するものではなからう。

その他の遺構

SX1100 SB1080の中軸付近の北側に礎石掘方の痕跡と思われる部分を2カ所検出した。西側のそれは正しく中軸線上に位置し、東側のそれと約300cm(10尺)の間隔を有する。またSB1080とは約420cm(14尺)離れて平行する。建物の一部かと考え精査したが、他に関連する坑を見出すことはできない。遺構の性格を判断しがたいが、位置・方向からみて注目しておきたい。

出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は、白玉帯・土器・陶磁器・瓦埴・銭貨・金銅製品などであ

る。これらは調査区の全域から多量に出土したが、明確な遺構に伴うものは少ない。ここでは井戸・土壇から出土した一括土器を中心に述べる。

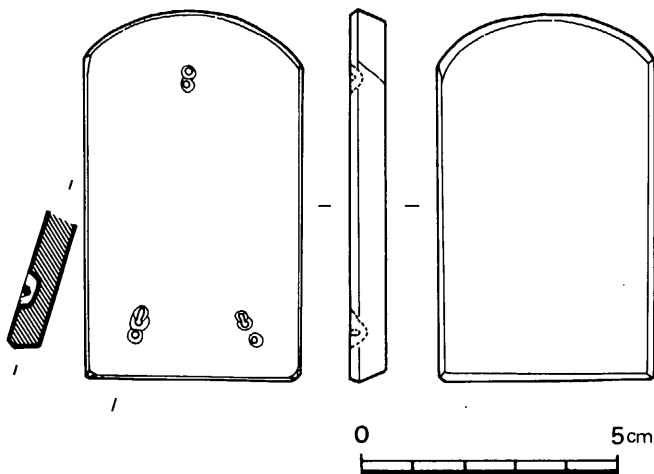
白玉帯（第62図、図版50）

調査区の西端近く、土壇SK1087の東側上層の黒灰土から出土した。出土位置はSB1080が水流によって削平された後の攪乱土中であり、付近から弥生時代の扁平片刃石斧が出土するなど、原位置を示すものではない。

白玉帯は帯の装飾具であるが、今回の出土例は帯の先端を飾る鈍尾に相当する。

薄い緑色を混じえた乳白色の白玉製で、無傷の優美な製品である。長さ7.3cm、幅4.3cm、厚さ0.75cmをはかる。裏面には三カ所にかがり穴を彫り込んでおり、帯への装着をはかっている。

出土の状態が悪く遺構遺物から年代を限定できないが、かがり穴を使用しての装着法は新しく、平安時代にはいつてからのことと思われる。ところが延喜式彈正台の規定によれば「凡白玉腰帶、聽三位以上及四位參議著用」とある。この規定に該当する大宰府官人は従三位相当官である帥ないしは権帥に限られる。とすれば、この白玉帯は彼ら大宰府の最高位の官人の腰を飾っていたと考えられ、稀有の出土品である。



第62図 白玉帯 鈍尾 実測図

土器

SE1081出土土器（第63図、別表、図版45）

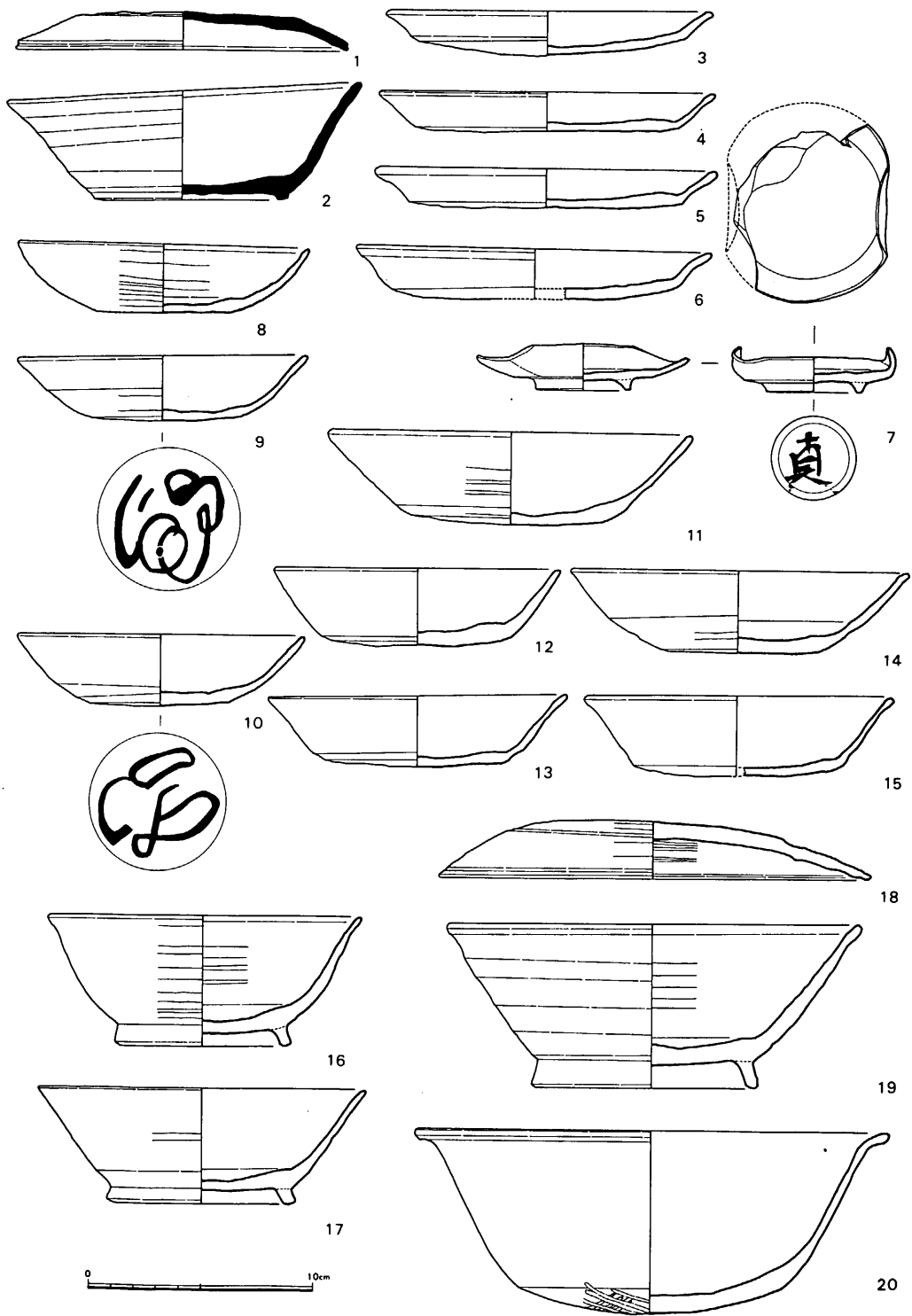
須恵器

杯蓋（1） つまみを有さない杯蓋である。天井部はへら削り、体部は横ナデされる。天井部と体部の境は明瞭な稜をなす。端部は内面に浅く凹線をつけ、わずかに三角形状をなす。

碗（2） 高台碗で、焼きひずみのためいびつな姿をなす。直線的に立ち上がる体部はわずかに外反する。平たくへら切りされた底部の端、体部との境に低い高台を付している。そのため外見は体部と高台とが直線的に一体をなしている。

土師器

皿（3～6） 口径14.5～15.8cm、器高1.8～2.3cmをはかる。いずれも底部はへら切りされ



第63图 SE 1081 出土土器实测图

3を除いてわずかに板状圧痕と思われる痕跡がみられる。体部・内底はナデ調整されるが、4のみの内面調整はへらみがきと思われる。いずれも赤茶色を呈し、硬質に焼成される。4は胎土に砂粒を多く含むが、他はいずれも精選されている。

耳皿(7) 高台付の耳皿で、約3分の1を欠失しているが長径9cm、短径7cmほどに復原される。精選した胎土を硬質に焼成しており、赤茶色を呈する。底部には断面台形状の高台が付される。外底部はていねいにナデられ、墨書文字が認められる。「貞」とあり、「貞」・「真」のいずれとも読めるがいずれにしても十分ではない(図版50-3)。しかし明らかに冠は「十」であり、また「貝」ではあってもその書き出しや勢いからみて「具」的である。したがって「真」と読むのが妥当に思われる。

杯(8-15) 口径12.7-16.2cm、器高3.0-4.2cmをはかる。8-10はほぼ同形同大(平均口径12.9cm、器高3.1cm)で、底部をへら切りし、内彎しつつ立ち上がる体部の内外面を横ナデ調整した後にへらみがきする特徴をもつ。ことに9・10は組み合わせられて出土しており、ともに外底に墨で意味不明の螺旋状の文様が書かれている(図版50-4)。11・14は法量・器形とも8-10とは異なるが、製作手法に共通性がみられる。12・13・15はいずれも体部を横ナデ調整している。胎土は砂粒を含むものが多く、器面に露出している。赤茶色を呈し、硬質に焼成されている。15のみは色調・焼成が他の杯と異なる。

杯蓋(18) 天井部をへら削りし、体部はナデ調整した後にへらでみがいている。天井部につまみを有さない。太い凹線で天井部と体部とを境する。端部の内外に浅い凹線をめぐらし、丸くつまみ出している。

碗(16・17・19) 高台碗で、体部が6は内彎気味であるがおおむね直線的に立ち上がる。平坦にへら切りされた底部の端に外向する高台を付している。体部は内外とも横ナデ調整の後にへらみがきしている。その手法は体部の特徴とともに須恵器高台碗2と通じるものがある。いずれも精選された胎土を硬質に焼成し、赤茶色を呈する。19の胎土は他よりも砂粒分が多いが、その特徴や色調・口径からみて18とセットをなすと思われる。

鉢(20) 口縁部の大きく外反する鉢で、珍しい器形である。体部のていねいな横ナデ調整に対し、底部はへらで乱雑に削られている。

以上の須恵器・土師器は一括遺物として取り扱いうる土器である。この他に黒色土器A(内面燻し)、越州窯青磁の破片が出土している。SE1081出土の土師器は赤茶色の色調、へら切りの底部、横ナデの上にへらみがきを加えた体部、という共通した要素をもつ。製作手法的には須恵器に共通するものがある。これらはSK1084・SK1106に共通する特徴でもあり、時期観は後にまとめて述べる。

SK1084出土土器(第64・65図、別表、図版46・47)

須恵器

杯（1・2） ほぼ同形をなすが体部立ち上がりの反りにやや相違がみられる。

椀（3） 高台椀でSE1081出土例に似るが、若干大きい。高台から体部にかけての直線的な立ち上がりが特徴的である。

土師器

皿（6～9） 6が口径15.4cmとやや小形であるが、他は口径17.1～19.3cm、器高1.8～2.1cmをはかる。10も皿であろうが、形態的に杯に近い。SE1081出土の皿は6程度の法量であり、他は口径で3cmほど大きい。9の内面はていねいにへらみがきされている。赤味の強い茶色を呈し、砂粒を含む胎土を硬質に焼成している。外底部に「小」と墨書されている（図版50-5）。

杯（11～19） 大きく11～13と14～19に分けられる。11・12は前者でもことに特徴的で、平坦にへら切りされた底部とナデ調整された直立に近い体部からなる。杯としては器高に対して口径が小さい。14～19はSE1081出土の杯と相似するもので、口径12.7～15.2cm、器高3.2～3.9cmをはかる。平たくへら切りされた底部と横ナデ調整の上をへらでみがいた体部に特徴をもつ。19はSE1081出土の8～10と類似しており、19の内面の墨痕も本来螺線状の文様をなしていたと思われる。

杯蓋（20・21） いずれも擬宝珠形のつまみをもつと思われる。21は天井部をへら削り、体部および天井部内面を横ナデした後にへらでみがいている。形態・手法ともに須恵器的である。

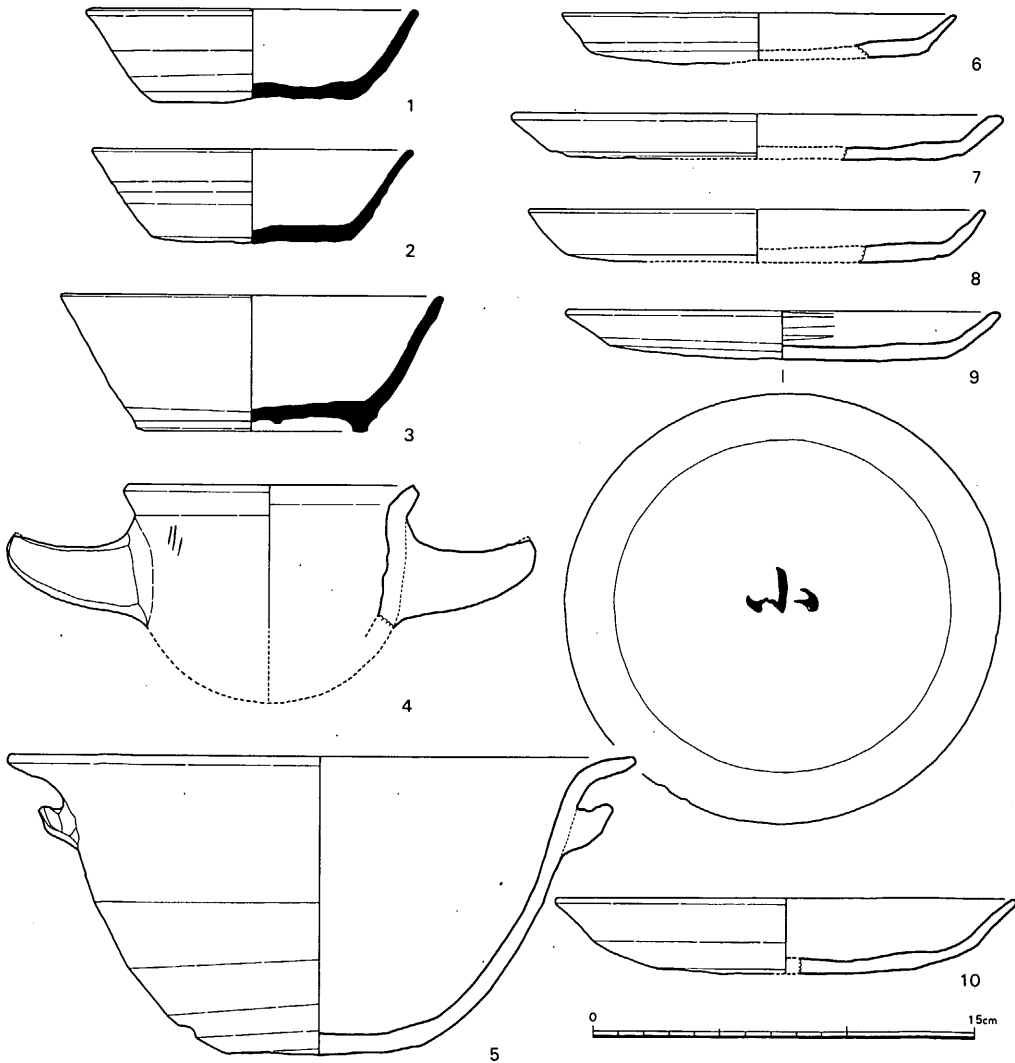
椀（22～25） いずれも高台椀である。22～24は平坦にへら切りされた底部に直線的に立ち上がる体部がつく。底部の端、体部との境にやや外向する高台を付す。体部は内外ともに横ナデ調整され、さらにへらみがきを加えている。23の外底には墨書があるが、一部分のため解読できない。25は大形の高台椀で、直線的に立ち上がる体部の上半を大きく外反させている。口縁端部の内側には凹線がめぐり、やや立ち上がり気味にまとまる。体部はていねいに横ナデ調整をしている。これらの高台椀は他と同様に赤味の強い茶色を呈し、精選された胎土を硬質に焼成している。

鉢（4～5） いずれも把手付の鉢である。4は小形で、ていねいに面取りされた把手はおそらく片方だけに付くものであろう。5は内彎気味に立ち上がり端部を大きく外反させる体部に形式的な把手を付けている。体部外面の下半をへら削り、上半および内面を横ナデで調整している。内面および外面の把手から上部は赤茶色、他は灰白色を呈している。

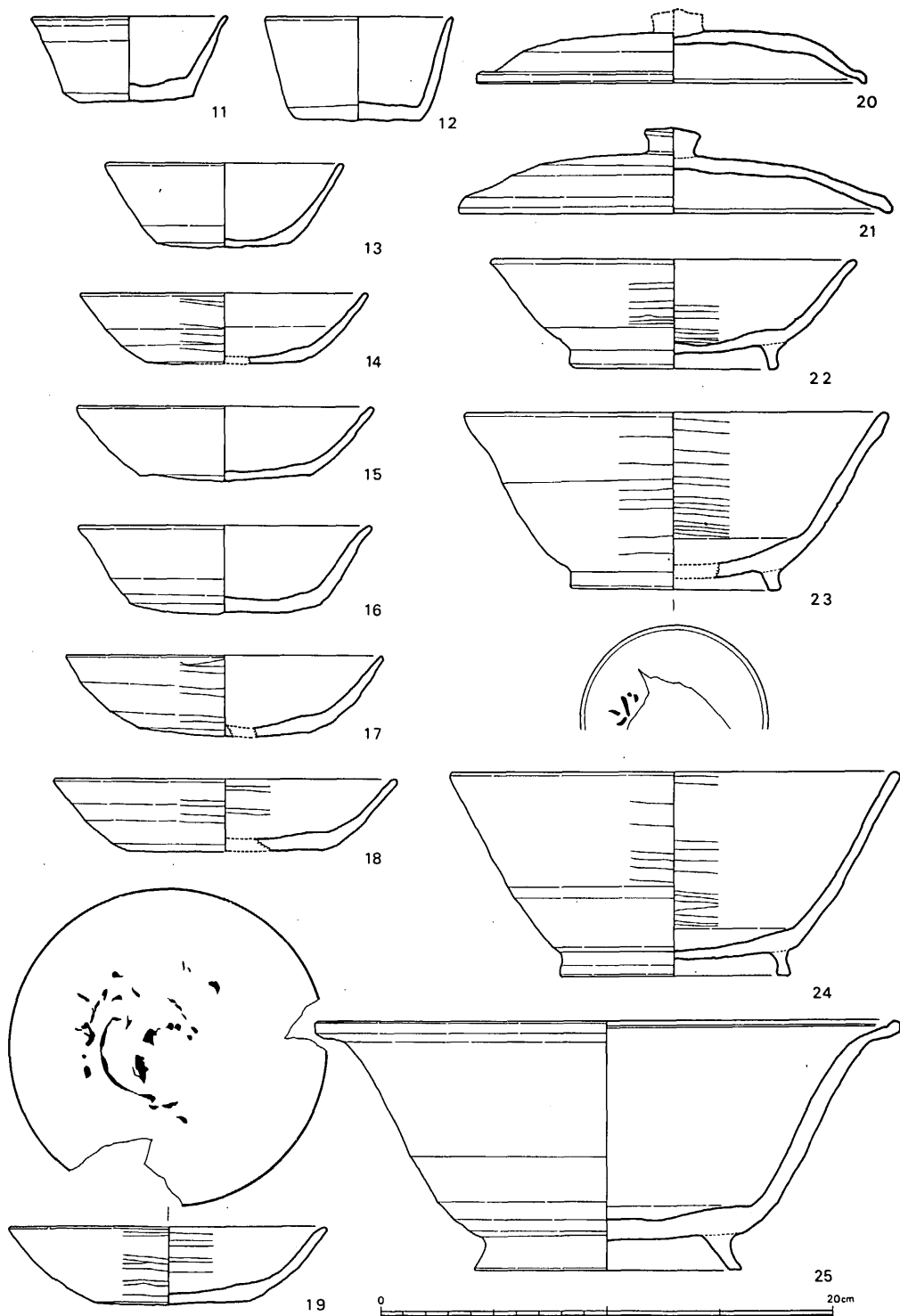
以上の須恵器・土師器とともに、白地に緑の釉をかけた奈良三彩の口縁部小片が出土している（図版50-2）。

これらの土器は青灰色粘土およびその上層の暗茶灰・暗茶褐土の下部から出土した。器形・手法的に区別できず、相互に接合し、また他時期の混入もなく、したがって一括遺物として扱う土器群である。10・22はさらに上層の黒灰土から出土した。これは層位的に必ずしも一括できないが特徴には通ずるものがある。

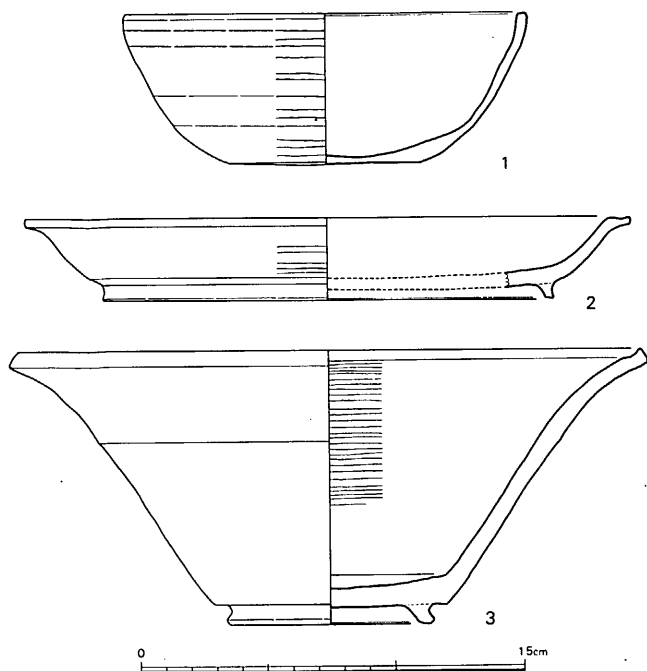
SE1081・SK1084出土の一括土器は皿の法量に差があるものの須恵器高台碗・土師器杯・高台碗・鉢など共通の器形があり、ほぼ同時期の所産と考えられる。同様の器形の一括土器は第18次調査SE400から出土しており、平安時代前期、9世紀代、に位置づけられている。SE400出土土器とSE1081・SK1084出土土器との器形の相似は両者の同時代性をうかがわせるものがあるが、しかし詳細に検討すると、ことに土師器の体部の調整法に違いがみられる。すなわちSE1081・SK1084出土土師器の多くは体部を横ナテ調整した上にていねいにへらみがきを加えている。SE400にしても同様の手法がみられるが、横ナテ調整を基調としている。また色調も、前者が赤味の強い茶色を呈するのに対し、後者は赤味が薄れている。これらを考える時、



第64図 SK1084 出土土器実測図(1)



第65图 SK 1084 出土土器実測图(2)



第66図 SK1106 出土土器実測図

直ちに同時期とするには疑問が残る。

SE1081・SK1084出土土器の時期を考える上でSK1106出土土器は参考になる。SK1106は柱穴状の小ピットであるが、ここから三点の土器が出土した。第66図・図版47がそれで、セットをなす。

1は無高台の椀で、口径15.9cm、器高6.1cmをはかる。底部はていねいにほぼ水平にへら切りされる。内彎しつつ立ち上がる体部の外面は横ナデ調整の上をていねいにへらみがきされる。内面のへらみがきはさらに密である。口縁端部

は平坦に切れられわずかに内傾する。

2は高台皿で口径24.0cmに復原され、器高3.2cmをはかる。へら切りされた底部と体部との境に細身の高台が付く。口縁部は体部から外方に強く引き出され、端部の上面に幅6mmほどの広い凹帯をめぐらしている。体部外面の下部をへら削りするが、その他の調整は1と同様である。

3は高台椀で、口径24.4cm、器高10.7cmをはかる。底部は痕跡を残さぬようにていねいに水平にへら切りされている。体部は直線的に立ち上がり、口縁近くで外反する。口縁端部の内側にはナデで幅6.5mmほどの凹帯をつくる。そのため口縁端をつまみ上げたような形状をもたらしている。体部の下半は風化のため不明瞭であるがへら削りされている。また上半は横ナデされ、内面はへらでみがかれる。底部と体部との境は鋭い稜をなす。境の内側約5mmに大きく外向する低い高台を付している。2の高台皿は3の蓋として復元すべきかも知れない。

SK1106出土の土師器は必ずしも普遍的形態ではないが、これまで大宰府史跡発掘調査の過程で認識してきた平安時代の土師器とは異なっている。しかしながら、九州においてはまだそれに先行する奈良時代の土師器の十分な把握には至っていないため、これらの土器を直ちに奈良時代の所産とすることもできない。はっきりしていることは平安時代の土師器の変遷をたどる時、SK1106出土土師器はSE400のそれよりも古期の調整手法をもつことである。SK1106出土土師器の胎土・色調・調整手法などの特徴はSE1081・SK1084出土土師器に通じている。

今、我々はこれらの赤茶色の一群の土師器の時期決定に積極的な根拠を持たないが、SE 400出土土器との関係から、SK1106出土土器を奈良時代前半～中頃（8世紀前半～中頃）、SE 1081・SK1084出土土器を奈良時代後半（8世紀後半）として位置づけ、今後の検討の素材としたい。

SE 1083出土土器（第67・68図、別表、図版48・49）

土師器

杯 a（1～18） 口径9.8～11.3cm、器高1.3～2.1cmをはかるが、それぞれ10.6cm、1.7cm程度の法量の例が多い。全体に薄手につくられ、丸味をもつ。ヘラ切りされた底部のほとんどに板状圧痕が認められる。淡茶灰色・淡茶白色など白味の強い色調を呈する。微細な砂粒をわずかに含む胎土を、多くはやや軟質に焼成している。

皿 c（21） 高台皿の破片と思われる。底部の中央に焼成前に穿たれた孔がある。他に皿 cの出土はない。

椀（22～38） 無高台の椀で口径12.6～14.2cm、器高3.2～4.8cmをはかる。体部はヘラ切りされた底部からゆるやかに内彎しつつ丸味をもって立ち上がり、口縁端部が外向するようにつまみ出されている。体部は横ナデ調整されている。底部には板状圧痕の付く例が多い。26は内底部をヘラナデして形態・法量ともに高台椀に近似する。胎土には粗い砂粒を含むものもあるが、全体によく選ばれている。色調・焼成は杯 a に近く、白味の強いやや軟質の器壁をなす。22にはススの付着がみられる。

27～38は高台椀である。大小様々のものがあるが、口径11.6～12.9cm、器高4.1～4.6cmの27・28、口径14.1～15.0cm、器高5.1～6.3cmの29～33、口径16.8～18.5cm、器高5.4～8.0cmの34～38、にまとまるようである。大形のグループでは34の器高が口径にくらべてかなり低く、異質の感じを受け、これを除けば7.15cm以上の器高となる。いずれも底部からゆるやかに内彎しつつ丸味をもって立ち上がる体部の先端を外方に折り返えすようにつまみ出す特徴をもつ。それは無高台の椀に通じる特徴でもある。体部は横ナデ調整されるが、34の内面のみはヘラでみがかれている。底部の切離しは不明の例が多いが、すべてヘラ切りと思われる。半数ほどに板状圧痕が付いている。細身で比較的高い高台を付けている。胎土にはほとんど砂を含まない。やはり白味の強い茶色を呈し、27などはほとんど白色に近い。やや軟質の焼成のものが含まれる。

黒色土器

杯 a（19・20） 内外面とも燻され、真黒色を呈する。黒色土器B類に属する。器形は伴出の土師器杯と一致するが、体部の内外をヘラみがきしている。砂粒を含まない胎土を硬質に焼成している。

椀（39） 内面を黒色に燻した、黒色土器A類の高台椀である。燻しは口縁端部の外側におよんでいる。伴出の土師器高台椀と比較すると、体部の中ほどに稜をめぐらす特徴がみられる。

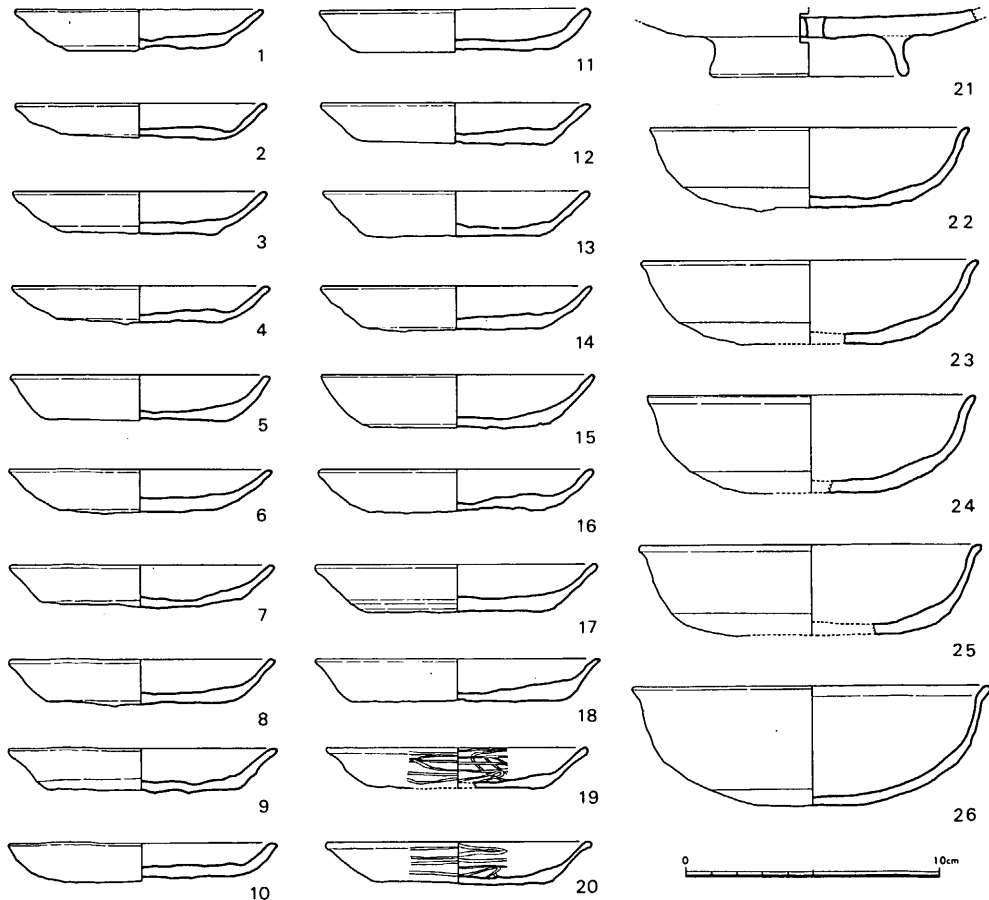
体部の内面をていねいにへらでみがいている。外面は横ナデで調整しているが、稜より上にへらみがきのわずかな痕跡をみることができる。なお破片に黒色土器B類の高台碗がある。

以上のSE1083の出土の土器は一括遺物であるが、形態的にみて第34次調査SK674出土の一括遺物と共通する点が多い。しかしSK674出土土器と比較すると、小皿を含まないものの杯がさらに小形化している。杯の法量には規格性が認められ、時期的に小形化する傾向をもつ。したがってSK674に後出すると考えられる。一方、第38次調査SK802出土土器とは器形に相違する点が多い。これらのことから、SK674、SK802の一括土器に与えられた時期観からみて、SE1083の一括土器には10世紀後半代の時期が与えられよう。
(註7)

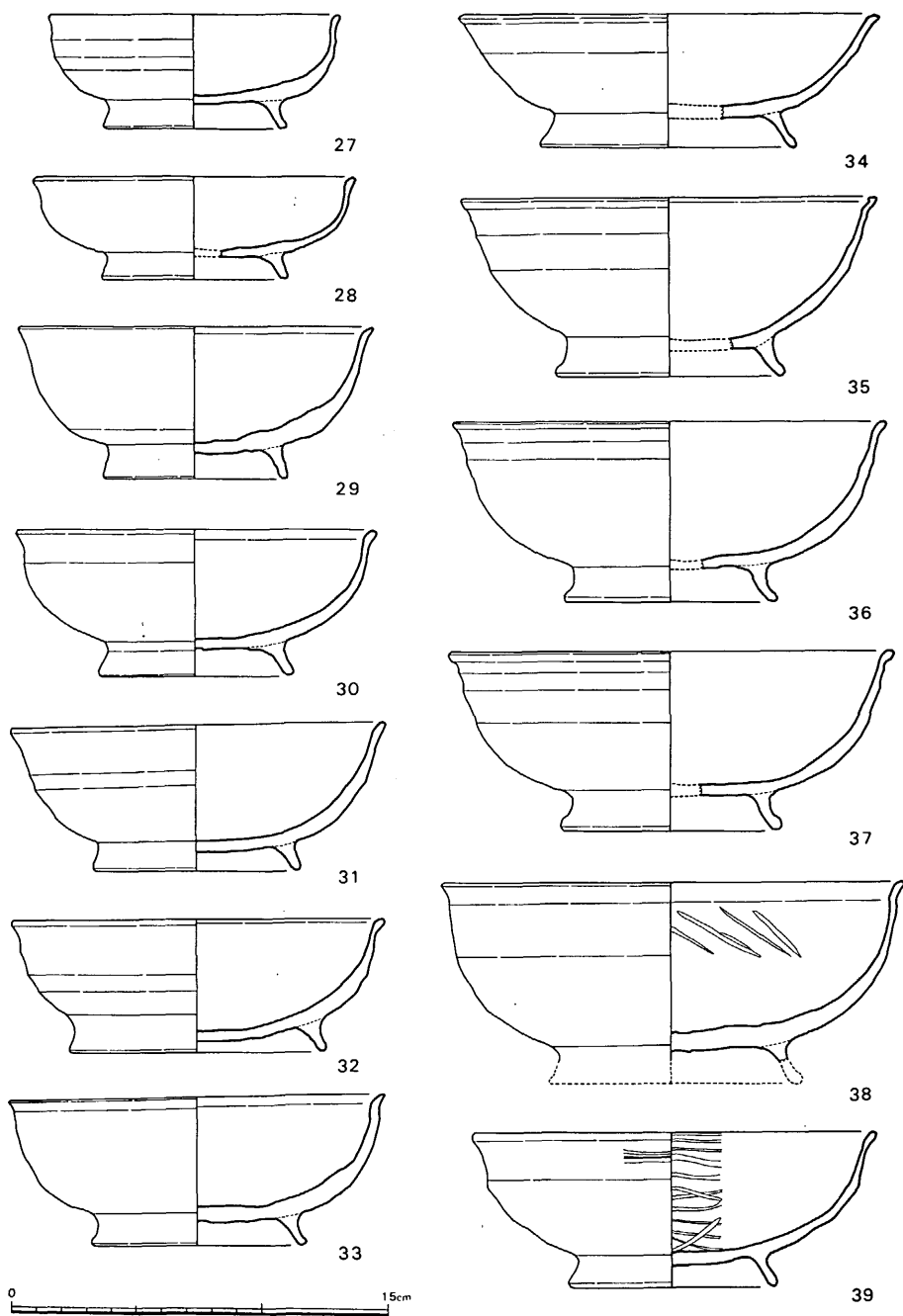
SK1085出土土器 (第69図、別表)

土師器

皿 a (1~3) 口径8.3~9.0cm、器高0.8~1.05cmで赤味をおびた乳白色ないし淡茶色をし



第67図 SE1083 出土土器実測図(1)



第68図 SE 1083 出土土器実測図(2)

ている。胎土は砂粒を含み、底部は糸切りで、板状圧痕は認められない。

杯 a (4~15) 口径13.4~14.8cm、器高2.3~3.1cmである。器形は一様に変化はないが、11のみ底部から口縁部にかけて内彎し、底部に板状圧痕はない。4・5・7は内面のナデが不明瞭で、底部に板状圧痕は認められない。他は内面ナデ、底部は糸切りで板状圧痕のものである。胎土は砂粒を若干含み、比較的硬質で暗灰色、淡茶色を呈する。

SK1101出土土器 (第70図、別表)

土師器と青磁片が出土した。

土師器

皿 a (54) 口径7.4cm、器高1.0cmである。

b (41~53、55) 口径6.2~7.8cm、器高1.35~2.1cmである。器形は体部が内・外反するもの区々で、内面をナデているものは48・50・51~53で他は横ナデである。底部は糸切りで板状圧痕は認められない。

杯 a (56~61) 口径11.6~13.3、器高2.4~3.0cmをはかる。胎土は砂粒を若干含み、比較的硬質に焼成している。

SK1103出土土器 (第70図、別表)

土師器と青磁片が出土した。

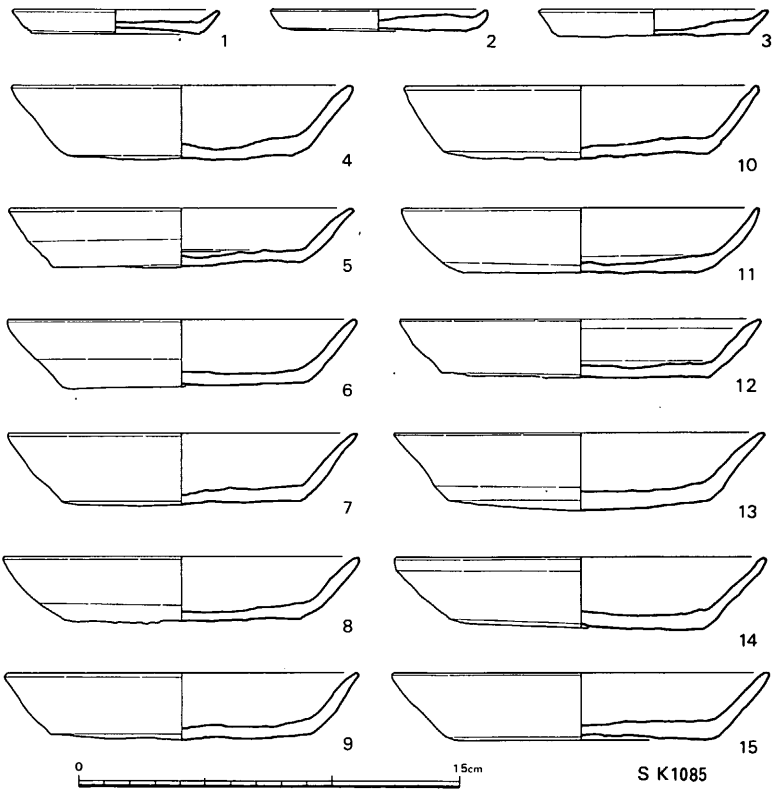
土師器

皿 a (30~33)

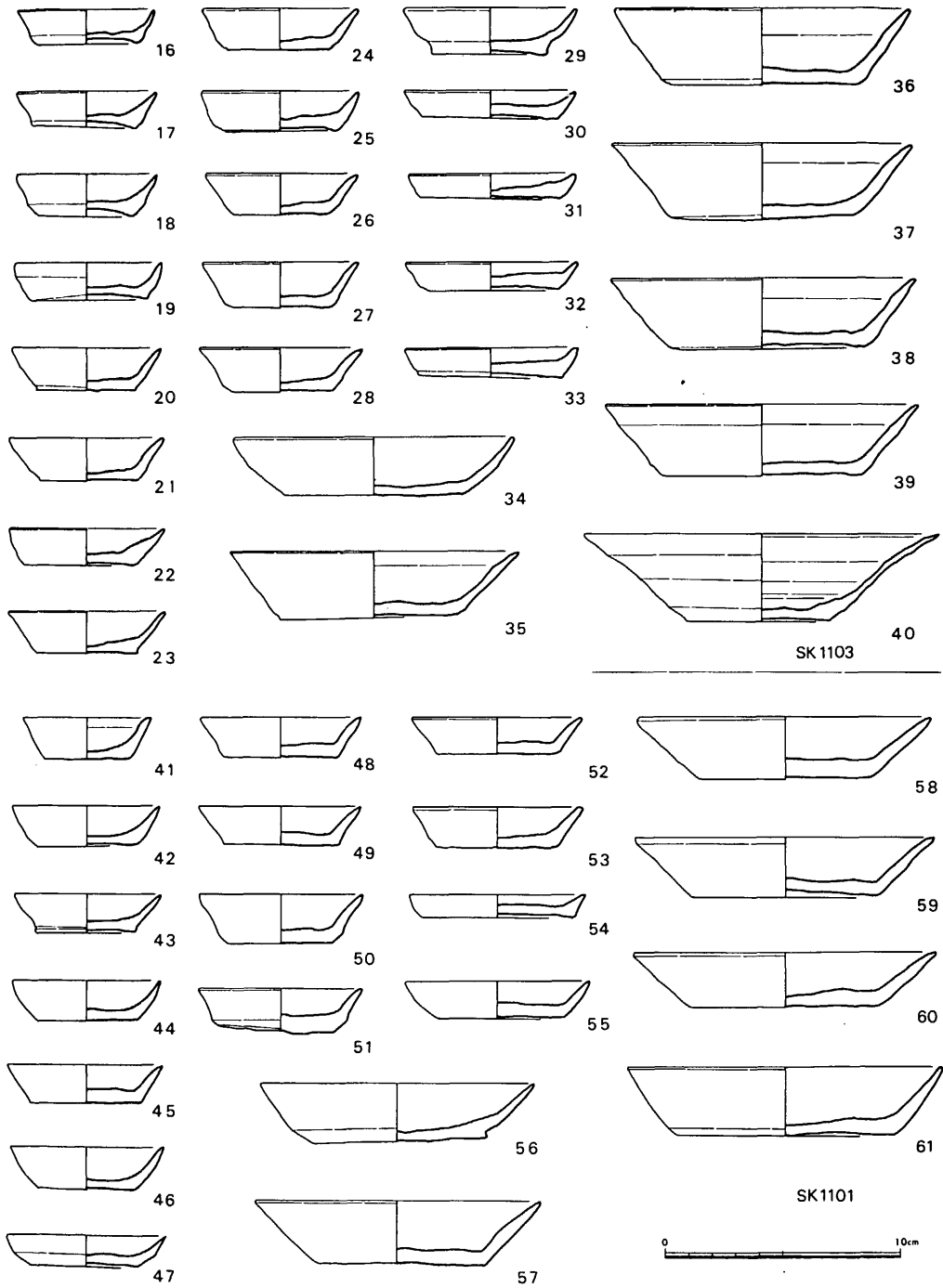
口径7.1~7.4cm、器高0.95~1.1cmである。口径が大きく器高が低い。

b (16~29)

口径5.8~7.4cm、器高1.5~2.0cmで、aに対し器高が高いのが特徴である。内底部にナデのあるものは22・25・28、外底部に板状圧痕が認められるものは22・23・25・26・28で、他



第69図 土埴出土土器実測図(1)



第70图 土 坩 出 土 土 器 实 测 图 (2)

は全て内底部のナデおよび外底部の板状圧痕は認められない。

杯 a (34~40) 34は他の杯に比べ、口径がやや小さく 10.8cm、器高2.4cmである。35~39は口径12.3~13.2cm、器高2.7~3.25cmである。40は器肉が薄く、体部は外上方へ広がり、内外面は細い横ナデを施している。口径15.3cm、器高4.1cmで口径と底径の差が大きい。底部に板状圧痕はない。

瓦

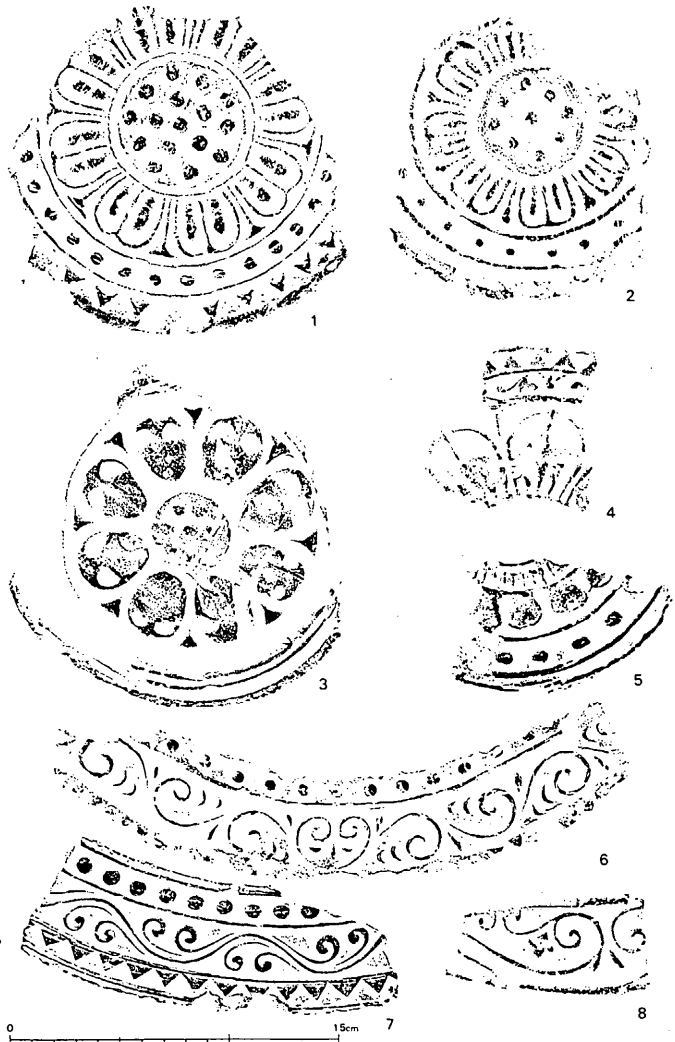
今回の調査で出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦が主で、他に鬼瓦、塼と多量の丸・平瓦片がある。軒先瓦は総数120点で、軒丸瓦68点10型式15種類、軒平瓦52点8型式17種類、文字瓦22点5型式10種類に分かれる。これらの大部分は、黄灰粘質土（地山）に切込んだ土坑（黒灰色土）から出土したものである。

その瓦をみると鎌倉期を中心としたもの（II）とそれ以前の瓦（I）に大別できるため、ここではI・II・文字瓦について記述する。

I（第71図、図版53）

軒丸瓦（1~5） 1はいわゆる老司式瓦で、中房の蓮子は1+5+10をかぞえ、八弁複弁瓦である。SK1084から土器と伴出した。2はいわゆる鴻臚館式の原型に比べ、やや退化したもので、中房の蓮子は1+8で、八弁複弁瓦である。この瓦は筑前国分寺創建期の瓦と考えられ、6とセット関係にある。3は八弁単弁瓦で中房の蓮子は1+7をかぞえ外区は重圈文で構成される。4、5は大宰府史跡地域では新たに出土したものである。4は外区に凸鋸齒文と左廻りの唐草文が配され、弁先端は丸く、界線は外縁と接続している。

軒平瓦（6~8） 6はいわゆる鴻臚館系の瓦で、中心飾下部が離れ



第71図 軒先瓦（1）

左右に3回反転する均正唐草文である。7はいわゆる老司式瓦で、SE1083から出土した。8は左から右に流れる扁行唐草文と思われる。筑後の井上廃寺出土古瓦(註9)と類似しているが、唐草の流れが反対である。

II (第72図、図版54)

軒丸瓦(1~4) 巴文瓦は軒丸瓦出土数の約40%を占め、比較的多い出土であった。1は左廻りの三巴文で、尾部は短かく、珠文数25個をかぞえ、他の瓦に比べ小ぶりである。2は左廻りの三巴文で、尾部は短かく外縁幅は広い。3は2よりやや尾部が長く、左廻りの三巴文で

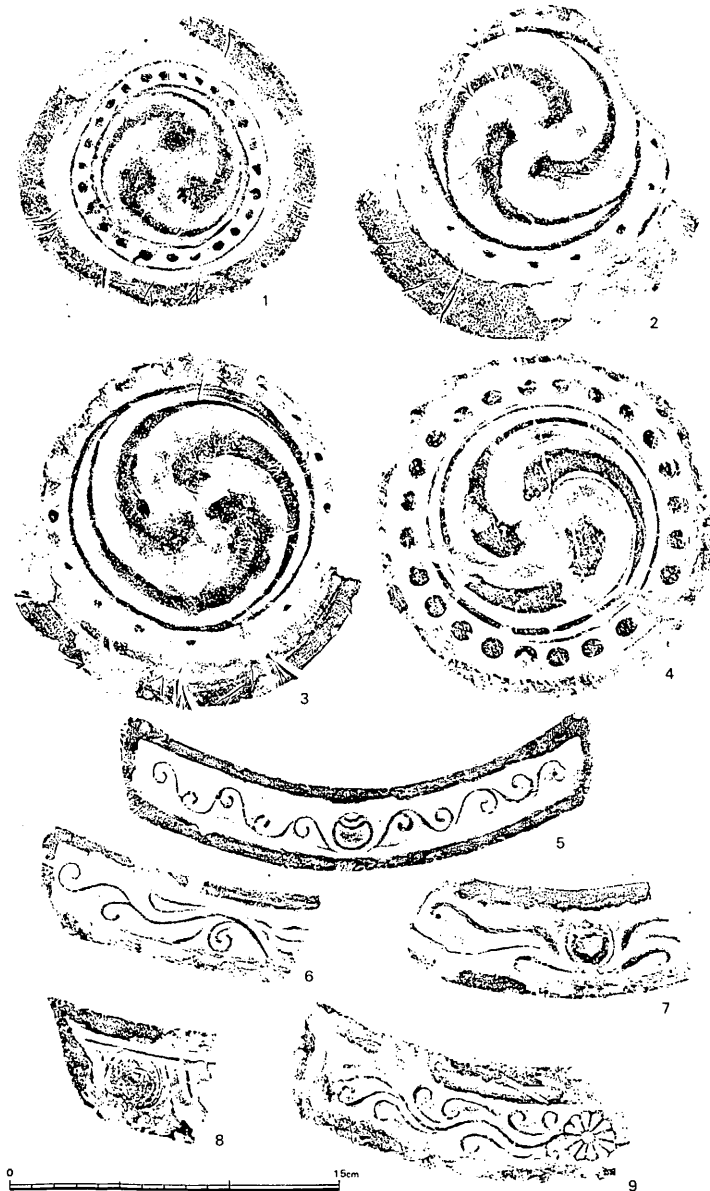
珠文17個をかぞえる。4は左廻りの三巴文で、外区に大きい珠文24個を配し、尾部は長く約1周する。今回出土した中では最も古期に考えられる。

軒平瓦(5~9) 軒平瓦出土数の約34%を占める。

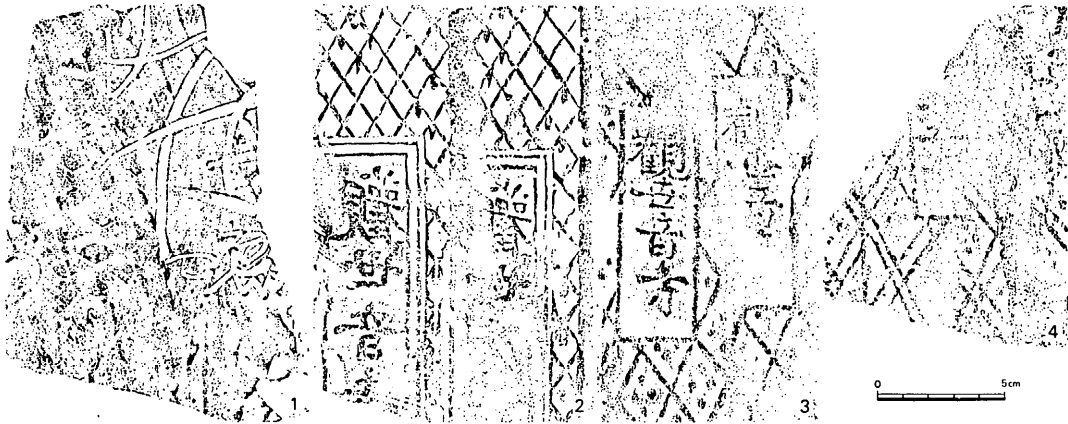
5は宝珠形の退化した中心飾をおき、左右に5回反転する均正唐草文である。6は均正唐草文と考えられる。7は宝珠形の中心飾をおき、蔓草の波高が小さい均正唐草文である。8は下向剣頭文で剣の中央部に鏑が付き、左・中・右に逆字の「観世・音寺・瓦也」銘を刻印している。9は中心飾に十二葉の菊花文を配する均正唐草文である。これらの瓦は一様に胎土に砂粒が多く、黒灰色ないし黄灰色をしている。

文字瓦(第73図、図版53-9)

文字瓦は現在整理中であるため、明らかなものについて記述する。今回は「観世音寺」3型式、「佐」2型式、「平井」2型式



第72図 軒先瓦(II) 拓影



第73図 文字瓦拓影

とその他不明のもの2種類が出土した。

1は叩き文から大文字の「平井」銘瓦と考えられる。その凸面にへう書きがあるが、文字であるか否か不明である。2～4は「観世音寺」銘の入った瓦で、今回は2の出土量が最も多い。

小 結

大房の時期 調査の結果、大房SB1080がわずかに痕跡をとどめる程度で検出された。しかし遺構面をすでに削平されており、SB1080に直接つらなる遺物の出土はなく、時期の判断の手懸りを得ることはできなかった。

史料によれば、大同二年(807)に入唐僧空海が帰朝後入京の日まで観世音寺に住した際に「経廻之間、住件寺分司領一坊也」とある一坊が大房の一室をさすのであれば、もっとも古い記録となる。また『延喜五年観世音寺資財帳』に、貞観三年(861)頃に大房・小子房・馬道屋の小破の記事があり、存在をうかがいする。その後僧房は造作修理を加えつつ康平七年(1064)に堂塔回廊などとともに焼亡している。焼亡後記録にはないが再建されたらしく、康和四年(1102)に大風によって倒壊している。以後嘉承元年(1106)の再建に関する記録を最後に僧房の名は消えており、再建されぬままに終わったと思われる。したがって史料から僧房、ことに大房は康平七年までの古期、康和四年までの新期、の少なくとも二期が知られる。今回検出のSB1080は、新期の大房の規模が不明のため何とも云いがたいが、『延喜五年資財帳』と内容的に近似するところから古期の大房と考えている。

古期の大房の創建が大同二年をどの時点まで遡りうるのか明らかでないが、北側に位置し大房との関連をうかがいする井戸SE1081・土壇SK1084の埋設の時期が奈良時代後半に考えられることから、また僧房が七堂伽藍を構成する主要堂宇であることから、おそらくは観世音寺が落慶供養された天平一八年(746)迄に遡って考えることができよう。これらのことから、S

B1080に関しては唐尺を用いて考察を加えることにする。

大房の規模 大房SB1080は梁行4間(34尺)×桁行19間以上(207尺以上)の東西棟の礎石建物であった。この調査結果を基礎とし、『延喜五年資財帳』の僧房記事を参考にすると大房の概略をうかがうことができる。今、当該部分を抜粋すると

僧客房章

瓦葺大房壹宇 長卅四丈二尺 廣三丈五尺五寸
高一丈四尺

貞觀三年小破 西方端間傾倚
房内柱五枝朽損

卅三間壁六間顛倒 高一丈二尺 十六年中破

小子房貳宇 長十九丈五寸 廣一丈四尺 貞觀三年小破
高一丈

瓦葺壹宇 長十九丈五寸 廣一丈四尺 貞觀三年小破
高一丈

造續四間 長三丈八尺 高一丈一尺
廣一丈四尺

右四間、專寺僧勝春、以元慶四年道俗引率造如件、

今校、長廿二丈八尺五寸、廣一丈四尺、高一丈、今校全

板葺壹宇 長十一丈 廣一丈一尺 今校无實
高九尺五寸 貞觀三年小破

仍載前司不與解由状、仁和二年七月廿日言上已了、

瓦葺馬道屋壹宇 長六丈二尺 廣一丈五尺 今校全
高八尺六寸 貞觀三年小破

客僧房貳宇

檜皮葺屋壹宇 長四丈 廣一丈七尺
高一丈三寸 貞觀十六年大破

今校、於葺皮大破、南方傾二尺五寸、大破不用、

草葺屋壹宇 長四丈 廣一丈五尺八寸
高九尺 戸一具

貞觀八年小破、今校无實、仍載前司不與解由状、仁和二年七月廿日言上已了、

とある。すなわち観世音寺僧房は大房1、小子房2、馬道屋1、客僧房2の6棟から成る。大房は長342尺、幅35.5尺、高14尺の建物であり、貞觀一六年(874)の中破記事「卅三間壁六間顛倒」からみて桁行33間であったと思われる。調査の結果、桁行は中軸部に17尺、その両脇に15尺、すなわち3間47尺が確認された。残余の部分は1間10尺であったから、30間(33間-3間)では300尺となる。したがってSB1080を桁行33間(347尺)×梁行4間(34尺)に復原すれば、『資財帳』記載の大房と桁行で5尺長く、梁行で1.5尺短かい。

ところで仏殿章によれば講堂は

瓦葺講堂壹宇 長十丈 廣五丈一尺 貞觀三年小破
高一丈三尺 戸六具

七間々別長各一丈四尺

とある。長十丈(=100尺)と七間々別長各一丈四尺(計九丈八尺=98尺)とでは2尺の誤差が生じているし、現存する講堂礎石をみれば両端各1間は中間の5間のそれぞれよりも5尺短かく、「七間々別長各一丈四尺」と一括しうるものではない。このように『資財帳』の数値は絶対

的なものではなく、したがって大房にみられる誤差は許容の範囲にあると考えられる。

観世音寺は官寺であるところからみて、その造営には一定の企画が考えられる。このようにみれば大房SB1080は寺の中軸線の左右に位置する15尺・17尺・15尺の3間を中心に東西各15間、講堂と約68尺の間隔を有する桁行33間(347尺)×梁行4間(34尺)の左右対称の東西棟礎石建物であろう。

大房の間取り^(註13) 大房の規模・位置の大略は上述のように復原されるが、今一つ復原の手懸りがある。長元一〇年(1037)「年中修理米用途帳」^(註14)の中に

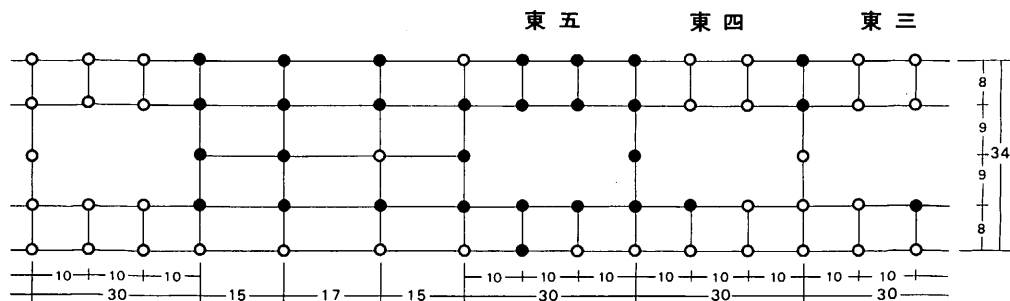
大僧房東第三間第四三間第五三間造作修理

云々とあり、大僧房・廻廊・金堂の造作修理に使用した材木・釘・瓦等の明細が記されている。これによって大房の各房は「東第三の三間、第四の三間、第五の三間」のように境されていたこと、すなわち各房の間口が3間であることが理解される。SB1080は中央の3間を除き東西各15間(10尺)の柱間が想定された。これから大房は間口3間が一単位をなし、東西各5房からなると思われる。したがって礎石列北第2列～第4列が身舎を構成し、中軸から東(西)第2列・第5列・第7列……と房境をなす。それらは調査結果と一致しており、北第3列と東第3・4列との交点に礎石掘方が検出されなかったのは単なる削平の結果ではなく、礎石が配されなかった結果であろう。このような見解から大房の間取りを考えてみたのが第74図である。

第74図では中央の3間分が他と尺度を異にする点に問題がある。これについては三通りの可能性がある。

まず僧房の類例からみて、中央間口17尺部分を馬道とみることができ。観世音寺僧房には瓦葺馬道屋があり参考になる。両脇の1間15尺部分がネックとなるが、間口が各房の二分の一であることから小部屋かも知れない。類例がなく判断しがたい。

次に食堂の可能性が考えられる。『延喜五年資財帳』をはじめ観世音寺史料には食堂の記載を欠いていることからの想定であり、東大寺戒壇院に類例がみられる。^(註15) 観世音寺に食堂所在の記録がないわけではない。大治三年(1128)の「寺領太郎丸納所年貢結解」に初めてみられ、^(註16)



第74図 大房跡礎石位置図(単位は尺)

● 掘方・根石および抜き跡 ○ すでに削平された部分(南側柱列は未掘)

久安四年（1148）の「堂舎損色勘文」には

一 食堂六間四面^(註17) 天井皆無實 童子無實

とあって6間4面の独立堂宇の存在が知られる。しかしこれらの食堂に触れた史料は康平七年（1064）、康和四年（1102）の焼亡・倒壊による再建後、あるいは康治二年（1143）の焼亡による再建後のものであり、当初からの食堂所在の根拠とはならない。したがって中央3間を食堂とする可能性はある。しかし食堂にしては面積が狭隘すぎる上に総柱である点が難点となる。また食堂に安置される聖僧像は『資財帳』によれば講堂にある。とすれば講堂が食堂を兼ねた可能性もあり、同様の例が法隆寺に推定されている。^(註18)このようにみると中央3間を食堂とする可能性はそれほど強いものではない。

以上のいずれでもない場合には未知の用途を考えねばなるまい。現状ではいずれとも判断しがたく、第74図では先入観を避けるため柱間をすべて実線で結んでいる。

調査の結果、述べてきたような時期・規模・位置をもつ大房の所在の復原案を提出しえた。中軸線上において、大房・講堂の中心からの距離（大房梁行34尺/2+68尺+講堂梁行51尺/2）は約110尺となる。鏡山猛氏は観世音寺伽藍の復原にあたって、寺地を10等分する1区108尺の単位を想定されているが、それに近似する値である。^(註19)伽藍配置の企画性をより強く考えることができよう。さらにこれまで類似の指摘された川原寺の西金堂・中金堂の位置にそれぞれ金堂・講堂を、講堂の位置に大房を置いた時、観世音寺の伽藍の配置と一致してくる。設計における両寺の関係をさらに密接に考えることができよう。

註1 鏡山猛「福岡県筑紫郡太宰府遺跡」(『日本考古学年報』5) 1957

福山敏男「福岡県筑紫郡観世音寺境内」(『日本考古学年報』10) 1963

以上の成果は、鏡山猛『大宰府都城の研究』1968にまとめられている。

註2 大宰府史跡第5・8・9・20～23次調査。

註3 鏡山猛『大宰府都城の研究』1968などで鐘楼跡とされた礎石である。

当時僧房はさらに北に想定されていたが、今回の調査の結果、この礎石は大房に伴うことが確認された。

註4 平安遺文 194。

註5 京都大学岸俊男教授の御教示を得た。

註6 亀井明德・高橋章「向佐野、長浦窯跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』VI)

1975

なおS E 400出土土器の実測図は横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」(九州歴史資料館研究論集2) 1976に掲載されている。

註7 横田・森田前掲論文

- 註8 福岡県教育委員会『筑前国分寺昭和51年度発掘調査概報』 1977
- 註9 九州歴史資料館『九州の古瓦と寺院』 1974
- 註10 『大師御行状集記』
- 註11 平安遺文 1898などにある。
- 註12 平安遺文 1659
- 註13 間取りの復原については九州芸術工科大学沢村仁教授に御教示を得た。
- 註14 平安遺文 573
- 註15 奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 九一東大寺一一』 1970
- 註16 平安遺文 2121
- 註17 平安遺文 2649
- 註18 直木孝次郎「法隆寺の食堂と講堂について」(『奈良時代史の諸問題』) 1968
- 註19 鏡山猛『前掲書』

第4表 基準点座標

点名	X	Y	H
No.1	+56,719.98	-44,814.73	36.946
2	+56,859.89	-44,814.03	40.092
3	+56,926.35	-44,729.18	40.724
4	+56,807.57	-44,491.15	37.562
5	+56,683.66	-44,432.27	36.212
6	+56,813.95	-44,388.55	38.636
7	+56,917.26	-44,310.33	41.438
8	+56,746.09	-44,314.33	37.732
9	+56,951.93	-44,231.47	42.561
10	+56,882.38	-44,110.01	40.765
11	+56,810.01	-44,146.47	40.198
12	+56,838.65	-44,237.55	40.268
13	+56,716.81	-44,211.83	37.958
14	+56,704.76	-44,078.12	37.723

今年度から新たに国土調査法第II座標系を基に基準点 (No.1～No.14) を設け、これを基に実測図を作製することとした。

基準点の配点と座標は第4表、第75図のとおりである。



第75図 大宰府史跡実測基準点配点図

別 表

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
SD600A (第33次補足調査)							
皿 a							
	2	8.6	1.0		○	○	○
	3	8.8	1.4		○	○	○
	1	9.0	1.0		○	○	○
杯 a							
	4	14.0	3.3		○		
	5	14.0	3.2		○	○	○
	7	14.0	2.5		○		○
	6	14.2	2.8		○		○
	9	14.2	2.7		○	○	○
	8	14.4	3.3		○	○	○
	10	14.4	2.7		○		
SE820 (第38次調査)							
杯 a							
1		12.5	3.0		○	○	×
SE847							
皿 a							
1	1	9.2	1.45	○		○	○
2	2	9.4	1.15	○		○	×
杯 a							
1	3	15.4	3.15	○		○	×
SE848							
皿 a							
1	9	8.8	1.25		○	○	○
2	7	8.8	1.3	○		○	○
3	10	9.0	0.9		○	○	×
4	8	9.6	1.45	○		○	○
杯 a							
1	11	14.6	2.5		○	○	×
2	12	16.2	3.0		○	○	○
SE849							
皿 a							
1	18	9.2	1.1	○		○	○
2	19	9.2	1.2		○	○	○
杯 a							
1	20	14.65	3.05		○	○	×
SE850							
皿 a							
1	5	9.2	1.1		○	○	○
2	1	9.6	1.0	○		不明	×

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
3	2	9.6	1.05	○		○	○
4	3	9.8	1.5	○		○	×
5	4	10.0	1.4	○		○	○
杯 a							
1	6	15.7	3.0	○		○	×
黒色土器 (椀)							
1	7	14.3	5.7	不明			×
SE851							
皿 a							
1	8	10.0	1.6	○		○	○
2	9	10.5	1.7	○		○	○
3	10	10.7	2.0	不明			
椀							
1	12	16.3	4.6以上	不明		○	不明
SE853							
皿 a							
1	13	8.4	1.0		○	○	○
2	14	9.1	1.2		○	○	○
杯 a							
1		16.2	2.9		○	○	○
SE854							
皿 a							
1	19	8.55	1.0		○	○	○
2	17	8.8	0.9	○		○	○
3	20	8.8	1.0		○	○	○
4	21	8.9	1.0		○	○	○
5	18	8.9	1.3	○		○	○
丸底の杯							
1		15.45	2.9以上	不明			不明
SE855							
皿 a							
1	2	9.0	1.3	○		○	○
2	1	9.0	1.3	○		○	○
3	3	9.2	1.1	○		○	×
4	4	9.8	1.4	○		○	○
杯 a							
1		10.3	2.85	○		不明	×
丸底の杯							
1	5	14.9	3.2	○		○	○
2	6	15.2	3.35	○			○
椀							
1	7	15.4	現存高 4.7	不明			×
瓦器 (椀)							

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
1	8	15.6	5.5	不明			×
2	9	16.4	6.0	不明			×
3	10	16.7	5.0	不明		不明	×
SE856							
皿 a							
1	13	8.9	1.5	○		○	○
2	12	8.95	1.1		○	○	○
3	15	9.4	1.4	○		○	○
4	14	9.4	1.4	不明		○	×
5	16	9.5	1.5	○		○	○
6	17	9.6	1.15	○		○	○
皿 c							
1		11.5	2.3	不明		○	×
2	19	12.4	2.0	不明		○	×
3	18	13.2	3.0	不明		○	×
丸底の杯							
1		13.6	3.2	○			×
2	20	15.4	(3.7)	○			×
3	21	15.7	(3.0)	○		○	×
椀							
1	22	12.4	4.7	不明		○	○
2	23	15.4	5.1	不明			×
3	24	15.4	5.6	不明			×
SE857							
皿 a							
1	24	9.2	1.2	○		○	×
2	25	9.9	1.15	○		○	○
丸底の杯							
1	26	15.55	3.25	○		○	○
SK802							
皿 a							
皿 a							
1		9.2	1.1	○		○	不明
2	1	9.5	1.3	○		○	×
3	2	9.9	1.2	○		×	○
4		9.9	1.2	○		○	不明
5		10.0	1.4	○		○	○
6	3	10.2	1.5	○		○	○
7		10.4	1.4	○		不明	不明
8		10.4	1.6	○		○	不明
9	4	10.4	1.7	○		○	○
10	5	10.6	1.5	○		○	不明
11		10.8	1.4	○		不明	不明
丸底の杯							
1	7	15.5	3.5	○		○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
2	8	15.7	3.4	○			×
3	9	16.3	(3.9)	○		○	不 明
1 丸底の高台付							
1	10	15.6	6.0以上	○			不 明
椀							
1	6	13.6	3.7	○			○
SK805							
皿 b							
1	18	6.7	1.4		○	○	○
2	19	8.0	1.7		○	×	×
杯 b							
1	15	12.0	2.5		○	○	×
2	16	12.2	2.8		○	○	×
3	17	12.3	2.8		○	○	×
SK811							
皿 b							
1	11	7.9	1.9		○	不 明	○
2	12	8.0	1.4		○	○	○
3	13	8.5	1.6		○	○	○
杯 b							
1	14	12.8	3.0		○	○	○
SK822							
皿 a							
1		7.2	0.9		○	○	○
2	2	7.3	1.3		○	○	○
3	3	7.4	1.1		○	○	○
4		7.4	1.1		○	○	○
5		7.4	1.2		○	不 明	不 明
6		7.5	0.8		○	○	○
7		7.5	0.9		○	○	○
8		7.5	0.9		○	○	○
9		7.5	1.0		○	○	○
10	4	7.5	1.1		○	○	○
11	5	7.5	1.1		○	○	○
12		7.5	1.2		○	○	○
13	6	7.5	1.3		○	不 明	×
14		7.6	0.9		○	○	○
15	7	7.6	1.1		○	○	○
16		7.6	1.1		○	○	○
17	8	7.6	1.2		○	○	○
18		7.6	1.2		○	○	○
19	9	7.6	1.3		○	○	○
20		7.6	1.3		○	○	○
21		7.7	1.0		○	○	○

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
22		7.7			○	○	○
23		7.8	0.9		○	○	不明
24		7.8	1.1		○	○	○
25		7.8	1.1		○	○	○
26		7.8	1.2		○	○	○
27	10	7.9	1.1		○	○	○
28		7.9	1.1		○	○	○
29		7.9	1.4		○	○	○
30	11	8.0	0.9		○	○	○
31		8.0	1.1		○	×	×
32		8.1	1.2		○	○	○
33	12	8.1	1.4		○	不明	○
34		8.2	1.2		○	○	○
35	13	8.2	1.3		○	○	○
36		8.3	1.3		○	○	○
皿 b							
1	1	7.2	1.9		○	○	×
皿 c							
1	14	7.0	1.5		不明	不明	不明
杯 a							
1		11.8	2.8		○	不明	不明
2		11.9	3.0		○	○	○
3	15	12.0	2.4		○	○	○
4		12.1	2.7		○	○	○
5		12.1	2.9		○	○	○
6		12.2	2.5		○	○	○
7		12.2	2.5		○	○	○
8		12.2	2.5		○	○	○
9		12.2	2.8		○	○	○
10		12.2	2.9		○	○	○
11		12.2	3.0		○	○	○
12		12.2	3.2		○	○	×
13		12.2	3.2		○	○	×
14	17	12.3	3.2		○	不明	×
15	18	12.4	2.6		○	○	○
16		12.4	3.0		○	○	不明
17		12.4	3.1		○	○	○
18		12.6	2.5		○	○	○
19		12.6	2.7		○	○	○
20	19	12.6	3.0		○	○	○
21		12.8	3.0		○	○	○
22		12.8	3.0		○	○	○
23		12.8	3.3		○	○	○
24		13.0	2.8		○	○	○
25	20	13.0	3.2		○	○	○
26		13.1	2.4		○	×	×
杯 c							

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
1	21	14.8	3.9		○	○	○
SK823							
皿 a							
1	1	7.1	1.3		○	○	○
2	2	7.3	0.8		○	○	○
3	3	7.3	1.2		○	○	○
4	4	7.4	1.0		○	○	○
5	5	7.4	1.1		○	×	○
6	6	7.4	1.2		○	不 明	○
7	7	7.4	1.3		○	不 明	○
8	8	7.5	1.1		○	○	○
9	9	7.5	1.4		○	○	×
10	10	7.6	1.2		○	不 明	○
11	11	7.6	1.2		○	○	○
12	12	7.6	1.2		○	不 明	○
13	13	7.6	1.3		○	○	○
14	14	7.6	1.3		○	○	○
15	15	7.6	1.4		○	不 明	×
16	16	7.7	1.1		○	不 明	○
17	17	7.8	0.8		○	不 明	○
18	18	7.8	1.1		○	不 明	○
19	19	7.9	1.0		○	○	○
20	20	7.9	1.05		○	○	×
21	21	7.9	1.3		○	不 明	○
22	22	8.1	1.4		○	不 明	×
23	24	8.3	1.3		○	○	○
皿 b							
1	24	7.4	1.6		○	不 明	×
2	25	8.2	1.6		○	×	×
皿 c							
1	26	7.7	1.9		○	○	×
2	27	7.8	1.9		○	○	×
3	28	8.8	2.2		○	不 明	○
杯 a							
1	29	11.3	2.7		○	○	○
2	30	11.4	2.9		不 明	○	×
3	31	11.55	2.9		不 明	不 明	○
4	32	12.0	2.9		○	×	×
5	33	12.25	2.3		○	○	×
6	34	12.4	2.8		○	○	○
7	35	12.5	3.0		○	○	○
8	36	12.6	2.6		○	○	○
9	37	12.6	2.7		○	○	×
10	38	12.6	2.9		○	○	×
11	39	12.8	2.7		○	不 明	○
12	40	12.8	3.2		○	○	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	系		
杯 b							
1	41	13.6	3.1		○	不 明	×
2	42	11.95	3.2		○	○	○
杯 c							
1	43	12.8	3.4		○	○	×
SK830							
皿 a							
1	4	8.0	1.0		○	○	○
皿 b							
1		6.0	1.6		○	○	○
2		6.5	1.5		○	○	○
3	1	6.6	1.5		○	○	○
4	2	6.7	1.4		○	○	×
5	3	6.8	1.4		○	○	
6		7.0	1.5		○	○	○
7		7.4	1.5		○	不 明	×
杯 a							
1		11.8	2.5		○	○	○
2	5	11.8	2.8		○	×	×
3		12.0	2.6		○	不 明	×
4		12.0	2.6		○	○	○
5	6	12.1	2.5		○	×	×
6	10	12.2	2.5		○	×	×
7		12.2	2.6		○	○	○
8		12.2	2.6		○	不 明	不 明
9	8	12.2	2.6		○	×	×
10	9	12.2	2.7		○	×	×
11		12.2	2.7		○	○	○
12	7	12.2	2.9		○	×	×
13	13	12.3	2.5		○	○	○
14	17	12.3	2.7		○	×	×
15	11	12.3	2.8		○	×	×
16	12	12.3	2.8		○	×	○
17	16	12.3	2.8		○	×	×
18	14	12.3	2.9		○	×	×
19	15	12.3	3.0		○	不 明	不 明
20	21	12.4	2.5		○	○	○
21	18	12.4	2.6		○	○	○
22		12.4	2.6		○	○	○
23	19	12.4	2.6		○	○	○
24	20	12.4	3.1		○	○	○
25	22	12.5	2.6		○	○	○
26	27	12.5	2.6		○	×	×
27	25	12.5	2.6		○	×	×
28	23	12.5	2.7		○	○	○
29	26	12.5	2.7		○	×	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	系		
30	24	12.5	3.0		○	×	×
31	29	12.6	2.4		○	○	○
32	28	12.6	2.7		○	○	○
33		12.6	2.8		○	不 明	×
34	30	12.7	2.8		○	×	×
35		12.8	2.7		○	○	○
36		12.8	2.7		○	○	○
37	31	12.8	2.9		○	×	×
38		13.0	2.7		○	×	×

SK835

皿 a

1	4	8.2	1.4		○	不 明	×
2	5	8.3	1.1		○	○	○
3	6	8.4	1.1		○	○	○
4	2	8.4	2.0		○	○	×
5	7	8.5	1.1		○	不 明	○
6	9	8.6	1.1		○	×	×
7	10	8.7	1.15		○	不 明	×
8	11	8.8	1.2		○	○	○
9	12	9.0	1.1		○	不 明	○
10	14	9.0	1.2		○	○	○
11	13	9.0	1.2		○	○	×
12	15	9.0	1.2		○	○	○
13	16	9.1	1.1		○	○	×
14	17	9.2	1.2		○	不 明	×
15	18	9.3	1.2		○	○	×
16	8	9.5	1.3		○	○	×

皿 b

1	1	7.3	1.9		○	×	×
2	3	8.2	1.3		○	不 明	○

杯 a

1	19	12.4	2.2		○	不 明	×
2	20	12.4	2.5		○	○	○
3	21	12.5	2.8		○	○	○
4	22	12.6	2.5		○	○	○
5	23	12.6	2.7		○	○	○
6	24	12.7	2.0		○	不 明	○
7	25	12.7	2.5		○	○	○
8	27	12.7	2.6		○	○	○
9	28	12.7	2.7		○	○	○
10	29	12.7	3.0		○	×	×
11	26	12.8	3.0		○	○	○
12	30	12.9	2.5		○	○	○
13	31	12.9	2.5		○	○	○
14	32	12.9	2.6		○	○	○
15	36	13.0	2.2		○	○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
16	33	13.0	2.2		○	○	○
17	34	13.0	2.5		○	不 明	○
18	35	13.0	2.5		○	○	○
19	37	13.0	2.9		○	○	○
20		13.1	2.6		不 明	○	○
21	38	13.2	2.6		○	○	○
22	39	13.2	2.8		○	○	○
23	40	13.4	2.5		○	○	○
24	41	13.4	2.7		○	○	○
25	42	13.5	2.9		○	○	○
26	43	13.6	2.3		○	○	○
27	44	13.6	2.5		○	○	○
28	46	13.6	2.6		○	○	○
29	45	13.6	2.7		○	○	○
30	47	13.6	3.1		○	○	○
31	48	13.7	3.0		○	○	×
32	49	13.8	2.7		○	○	○
33	50	14.0	2.6		○	○	○
34	51	14.2	3.0		○	○	×
杯 c							
1	52	16.1	3.8		不 明	○	×
5 盤							
1	53	21.6	2.6		○	○	×
SB800							
皿 a							
1	20	6.9	1.0		○	○	○
SX803							
皿 b							
1	23	6.7	2.1		○	×	×
杯 a							
1	17	12.6	2.6		○	○	×
2	22	13.1	3.1		○	○	○
3		(13.0)	2.5		○	不 明	○
4		13.2	2.9		○	○	○
SX863 (棺上副葬)							
皿 a							
1	1	8.6	1.1		○	○	○
2	2	8.7	1.2		○	○	○
3	3	8.8	1.2		○	○	○
4	4	9.0	1.0		○	○	○
5	6	9.2	1.2		○	○	○
6	7	9.3	1.1		○	○	○
7	5	9.4	1.0		○	○	○
8	8	9.4	1.2		○	○	○

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
杯 a							
1	9	15.2	3.0		○	○	○
瓦器 (椀)							
1	10	16.8	5.4		○		×
SX863 (掘方内)							
皿 a							
1		8.6	1.2	○		○	○
2		9.1	1.1		○	○	○
3		9.2	1.3	○		○	○
杯 a							
1		16.0	3.4		○	○	×
SX864							
杯 a							
1	1	16.2	2.8		○	○	○
SD790							
皿 a							
1		7.1	1.3		○	○	○
2		8.7	1.2		○	○	×
SD860							
皿 a							
1	1	8.45	1.5			○	○
2	2	8.8	1.2	○		○	×
3	3	8.8	1.4	○		○	×
4	4	8.8	1.4	○		○	×
5	5	9.0	1.25	○		○	×
6	6	9.0	1.4	手づくね		○	○
7	7	9.05	1.4	○		○	○
8	8	9.1	1.3	○		○	○
9	9	9.1	1.9	○		○	○
10	10	9.2	1.3	○		○	○
11	11	9.2	1.6	○		○	○
12	12	9.6	1.15	○		○	×
13	13	9.7	1.25	○		○	○
14	14	9.9	1.25	○		○	○
15	15	8.25	1.15	○		○	○
16	16	8.4	1.25	○		○	○
17	17	8.45	1.25	○		○	○
18	18	8.55	1.1	不明		○	○
19	19	8.55	1.5	○		○	○
20	20	8.6	1.35	○		○	○
21	21	8.6	1.4	○		○	○
22	22	8.65	1.15	○		○	○
23	23	8.65	1.4	○		○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
24	24	8.7	1.6	○		○	○
25	25	8.75	1.25	○		○	○
26	26	8.8	1.05		○	○	○
27	27	8.8	1.3	○		○	○
28	28	8.8	1.3	○		○	○
29	29	8.8	1.35	○		○	○
30	30	8.8	1.4	○		○	○
31	31	8.8	1.4	不 明		○	○
32	32	8.8	1.4	○		○	×
33	33	8.8	1.4	○		○	○
34	34	8.85	1.4	○		○	○
35	35	8.85	1.4	○		○	○
36	36	8.9	1.25	○		○	○
37	37	8.9	1.4	○		○	○
38	38	8.9	1.45	○		○	×
39	39	8.9	1.5	○		○	○
40	40	9.0	1.2	○		○	○
41	41	9.0	1.3	○		○	○
42	42	9.0	1.3	○		○	○
43	43	9.0	1.4	○		○	○
44	44	9.0	1.4	○		○	○
45	45	9.0	1.5	○		○	○
46	46	9.0	1.5	○		○	○
47	47	9.05	1.3	○		○	○
48	48	9.1	1.2		○	○	○
49	49	9.1	1.35	○		○	×
50	50	9.1	1.4	○		○	×
51	51	9.1	1.6	○		○	×
52	52	9.15	1.5			○	○
53	53	9.2	1.1	○		○	○
54	54	9.2	1.2	○		○	○
55	55	9.2	1.7	○		○	○
56	56	9.25	1.3	○		○	○
57	57	9.3	0.9	○		○	×
58	58	9.3	1.25	○		○	○
59	59	9.3	1.25	○		○	○
60	60	9.3	1.3	○		○	○
61	61	9.35	1.55	○		○	○
62	62	9.4	1.15	○		○	○
63	63	9.4	1.2		○	○	○
64	64	9.4	1.4	○		○	○
65	65	9.45	1.3	○		○	○
66	66	9.5	1.1	○		○	○
67	67	9.5	1.5	○		○	○
68	68	9.55	1.05	○		○	○
69	69	9.55	1.3	○		○	○
70	70	9.55	1.6	不 明		○	○

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
71	71	9.6	1.1	○		○	○
72	72	9.6	1.6	不明		○	○
73	73	9.65	1.2		○	○	○
74	74	9.65	1.65	○		○	○
75	75	9.75	1.4	○		○	○
76	76	9.95	1.4	○		○	○
77	77	11.5	1.7	不明		○	○
78	78	8.65	1.1	○		○	○
79	79	8.7	1.3	○		○	○
80	80	8.7	1.3	○		○	○
81	81	8.8	1.3	○		○	○
82	82	8.8	1.3	○		○	○
83	83	8.9	1.55	○		○	○
84	84	9.0	1.2		○	○	○
85	85	9.1	1.2		○	○	○
86	86	9.1	1.2	○		×	×
87	87	9.15	1.4		○	○	○
88	88	9.2	1.4	○		○	○
89	89	9.3	1.35	○		○	×
90	90	9.3	1.45	○		○	○
91	91	9.3	1.5	○		○	○
92	92	9.3	1.6	○		○	○
93	93	9.4	1.4		○	○	○
94	94	9.4	1.45	○		○	○
95	95	9.4	1.5	○		○	○
96	96	9.45	1.55	○		○	○
97	97	9.5	1.2	○		○	○
98	98	9.5	1.4		○	○	○
99	99	9.7	1.2	○		○	○
100	100	9.75	1.55	○		○	×
丸底の杯							
1	101	14.5	3.1	○		○	○
2	102	14.6	3.5	○			○
3	103	14.65	3.1	○			○
4	104	14.3	3.35	○			○
5	105	14.3	3.4	○			○
6	106	14.4	3.2	○			○
7	107	14.5	2.8	○			○
8	108	14.6	3.3	○			×
9	109	14.65	3.4	○			○
10	110	14.7	3.1	○			○
11	111	14.7	3.45	○			×
12	112	14.85	2.8	○			○
13	113	14.85	3.0	○			○
14	114	14.9	3.1	○			○
15	115	14.9	3.35	○			○
16	116	14.95	3.4	○			○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
17	117	14.95	3.45	○			○
18	118	15.0	3.45	○			○
19	119	15.15	3.25	○			×
20	120	15.15	3.45	○			○
21	121	15.2	3.3	○			○
22	122	15.25	3.4	○			×
23	123	15.3	3.3	○		○	○
24	124	15.3	3.4	○			○
25	125	15.4	2.95	○			○
26	126	15.45	3.45	○			○
27	127	15.55	3.2	○			○
28	128	15.6	3.7	○			○
29	129	15.65	3.45	○			○
30	131	16.25	3.2	○			○
31	132	14.7	3.1	○			○
32	133	14.8	3.15	○			○
33	134	15.2	3.7	○			○
34	135	15.3	3.4	○			○
35	136	15.4	3.1	○			○
杯 a							
1	130	16.25	2.6	○			○
2	137	15.6	2.5		○		○
杯 c							
1	138	13.0	4.0	不 明		×	×
2	139	14.4	4.0	不 明			不 明
3	140	14.1	3.6	不 明		○	×
碗							
1	141	15.0	5.0	不 明			×
2	142	16.4	5.0	不 明			○
3	143	16.1	6.1	不 明			×
4	144	16.8	5.45	不 明			○
瓦器 (碗)							
1	145	15.25	5.5	不 明			×
2	146	15.3	5.0	不 明			×
3	147	16.8	5.1	不 明			×
4	148	16.9	5.4	○			×
5	149	17.2	5.9	不 明			×
6	150	17.7	4.9以上	不 明			×
SD865							
皿 a							
1	1	10.3	1.5	○		×	○
2	10	10.4	2.8	○		不 明	×
3	3	10.7	1.9	○		×	×
4	2	10.7	1.9	○		○	○
5	11	11.0	2.6	○		不 明	×
6	4	11.2	2.0	○		×	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
7	5	11.2	2.1	○		○	○
8	6	11.3	1.7	○		○	○
9	7	11.4	2.0	○		○	○
10	9	11.4	2.0	○		○	○
11	8	11.4	2.0	○		不 明	○
12	12	11.6	2.6	○		○	○
皿 c							
1	13	11.6	2.1	不 明		×	×
2	14	11.7	2.3	○		×	×
3	15	11.8	2.4	○		不 明	×
4	16	12.1	2.1	○		○	×
5	17	12.1	2.4	不 明		不 明	○
6	18	12.2	2.3	○		○	×
7	20	12.3	2.1	○		×	○
8	19	12.3	2.6	不 明		×	○
9	21	12.4	2.3	○		×	×
10	22	12.7	2.2	○		○	○
11	23	13.2	3.0	○		×	×
杯 c							
1	27	12.4	4.2	○		不 明	○
2	24	12.6	4.0	○		×	×
椀							
1	25	13.0	5.0	不 明		不 明	×
2	26	13.2	5.0	○		×	○
3	28	13.3	4.6	不 明		不 明	×
4	29	14.7	6.2	不 明		○	×
5		15.0	5.7	○		×	○
6	31	22.3		不 明			
黒色土器 (椀)							
1	32	15.6	6.4	○		×	×
灰褐色土							
皿							
1	1	9.4	2.3		○	×	×
2	2	9.8	2.0		○	○	○
杯 b							
1	3	11.6	2.6		○	×	×
2	4	11.9	2.7		○	×	×
茶灰色土							
皿 a							
1		7.4	1.3		○	○	×
2	9	7.7	1.3		○	○	×
3		7.8	1.25		○	○	○
4		7.8	1.25		○	○	○
5		8.9	1.2		○	○	○
6		9.0	1.2		○	○	○

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
7		9.1	1.35		○	○	×
8	10	11.8	1.3		○	○	×
皿 b							
1	5	5.7	1.8		○	○	○
2	8	5.8	1.4		○	○	○
3		6.8	1.9		○	○	○
4	6	6.9	1.9		○	不明	○
5	7	7.0	1.5		○	○	○
皿 c							
1	11	12.5	3.1		○	○	×
杯 a							
1	12	12.8	2.7		○	○	○
2		13.0	3.0		○	○	○
杯 b							
1	13	13.3	3.5		○	○	×
黒色砂質土							
皿 a							
1		8.5	1.2	○		○	○
2		8.5	1.4	○		○	○
3		8.6	1.5	○		○	×
4		8.7	1.0	○		○	○
5		8.8	1.1	○		○	○
6		8.8	1.1	○		○	○
7		8.8	1.1	○		○	○
8		8.8	1.2	○		○	○
9		8.8	1.3	○		○	○
10		8.9	1.1	○		○	○
11		8.9	1.3	○		○	○
12		9.0	1.5	○		○	○
13		9.0	1.5	○		○	○
14	15	9.1	1.15	○		○	○
15		9.1	1.2	○		○	○
16		9.1	1.5	○		○	○
17		9.1	1.5	○		不明	×
18		9.1	1.55	○		○	○
19		9.1	1.6	○		○	○
20		9.2	0.9	○		○	○
21		9.2	0.9	○		○	○
22		9.2	1.2	○		○	○
23	18	9.2	1.2	○		○	○
24		9.2	1.2	○		○	不明
25	16	9.2	1.25	○		×	×
26		9.2	1.3	○		○	×
27		9.2	1.3	○		○	○
28		9.2	不明	○		○	○
29		9.2	1.45	○		×	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
30	19	9.3	0.8	○		○	○
31	20	9.3	1.1	○		×	○
32		9.3	1.3	○		○	○
33	21	9.3	1.3	○		○	○
34		9.3	1.4	○		○	○
35		9.3	1.5	○		○	○
36		9.3	1.6	○		○	○
37		9.4	1.1	○		○	○
38		9.4	1.3	○		○	○
39		9.4	1.4	○		不 明	不 明
40		9.4	1.5	○		○	○
41		9.4	1.5	○		○	×
42		9.5	1.4	○		○	○
43		9.7	1.6	○		○	×
44		9.8	1.3	○		○	○
45		9.8	1.5	○		○	○
46		10.0	1.8	○		不 明	×
47		7.6	1.1		○	○	○
48		8.2	0.7		○	○	○
49		8.2	0.9		○	○	○
50		8.3	0.9		○	○	○
51		8.3	1.2		○	○	○
52		8.4	0.9		○	○	○
53		8.4	1.0		○	○	×
54		8.4	1.0		○	○	不 明
55		8.4	1.1		○	○	○
56		8.4	1.2		○	○	○
57		8.4	1.2		○	○	○
58		8.5	0.8		○	○	○
59		8.5	1.1		○	○	○
60		8.5	1.2		○	○	○
61		8.5	1.2		○	○	不 明
62		8.5	1.3		○	○	○
63		8.5	1.3		○	○	○
64		8.6	1.3		○	○	○
65		8.6	1.3		○	○	不 明
66		8.6	1.3		○	○	○
67		8.7	1.0		○	○	○
68		8.7	1.0		○	○	○
69		8.7	1.1		○	○	○
70		8.7	1.3		○	○	○
71		8.7	1.3		○	○	○
72		8.7	1.3		○	○	○
73		8.7	1.4		○	不 明	○
74		8.8	0.8		○	○	○
75		8.8	(1.0)		○	○	○
76		8.8	1.1		○	○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
77		8.8	1.2		○	○	×
78		8.8	1.4		○	○	×
79		8.8	1.5		○	○	○
80		8.9	0.9		○	○	○
81		8.9	1.0		○	○	○
82		8.9	1.1		○	○	○
83		8.9	1.2		○	○	○
84		8.9	1.3		○	○	○
85		8.9	1.5		○	○	○
86		9.0	0.9		○	○	○
87		9.0	0.9		○	○	○
88		9.0	0.9		○	○	○
89		9.0	1.0		○	○	×
90		9.0	1.2		○	○	○
91		9.0	1.3		○	○	○
92		9.0	1.3		○	○	○
93		9.0	1.3		○	○	○
94		9.1	0.8		○	○	○
95		9.1	0.9		○	○	○
96		9.1	1.1		○	○	○
97		9.1	1.2		○	○	○
98		9.1	1.5		○	○	○
99		9.2	0.9		○	○	○
100		9.2	1.0		○	○	○
101		9.2	1.2		○	○	不 明
102		9.2	1.3		○	○	○
103		9.2	1.3		○	○	○
104		9.2	1.4		○	○	○
105		9.3	0.9		○	○	○
106		9.3	1.3		○	○	○
107		9.3	1.5		○	○	○
108		9.4	1.2		○	○	○
109		9.4	1.3		○	○	×
110		9.4	1.5		○	○	○
111		9.5	0.9		○	○	○
112		9.5	1.0		○	○	○
113		9.5	1.0		○	○	○
114		9.6	1.0		○	○	○
115		9.7	1.0		○	○	○
116		9.7	1.5		○	○	×
117		9.7	1.8		○	○	○
118		9.8	1.3		○	○	○
119		10.0	0.9		○	○	○
120		10.1	1.2		○	○	○
121		10.1	1.3		○	不 明	不 明
122		10.3	1.6		○	○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の有無	板状圧痕の 有無
				へ ラ	糸		
1	24	9.6	2.0	不 明		×	×
2		10.5	1.9	不 明		○	×
3		11.5	2.6	不 明		○	×
皿 d							
1	22	9.4	1.2	○		○	○
2	23	9.7	1.3	○		○	○
杯 a							
1		12.0	2.3	○		○	○
2		14.2	2.8	○		○	○
3		14.8	3.3	○		○	○
4		12.5	2.3		○	○	○
5		12.8	2.7		○	○	○
6		13.0	2.6		○	○	○
7		13.2	2.9		○	○	○
8		13.2	(2.9)		○	不 明	不 明
9		13.3	2.6		○	○	○
10		13.9	2.4		○	○	○
11		14.1	3.0		○	○	○
12		15.1	3.3		○	○	○
13		15.4	(2.7)		○	不 明	不 明
14		15.5	2.8		○	○	○
15		16.0	3.3		○	○	○
16		16.1	3.2		○	○	○
丸底の杯							
1		13.7	3.4	○			○
2		13.9	2.8以上	○			○
3		14.6	3.5	○			○
4		14.7	3.8	○			○
5	25	14.8	3.5	○		○	○
6		15.0	(3.3)	○		不 明	○
7		15.1	3.0	○			○
8		15.3	3.5	○		不 明	○
9		15.4	3.5	○			○
10		15.6	3.0	○			○
11		16.0	(3.6)	○		不 明	×
12		16.5	(3.6)	○			○
13		16.7	(2.8)	○			○
椀							
1	26	15.4	5.1	不 明			×
2	27	16.6	5.3	不 明		○	×
瓦器 (皿)							
1		9.4	1.5		○	○	○
2		9.4	1.5	不 明			×
3		9.7	2.1	不 明			○
4		9.8	2.0		○		○
5		10.5	1.8	○			○
6		10.9	2.3	○			○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ	糸		
瓦器 (椀)							
1		10.3	3.1	不 明			×
2		15.3	5.9	不 明			不 明
3		16.4	5.3		○		×
4		18.0	5.5	不 明			×
5		18.8	(5.5)	不 明			×
暗青色土							
皿 a							
1		8.4	1.3	不 明		○	○
2		8.5	1.2	○		○	○
3		8.6	1.1		○	○	○
4		8.8	1.4	不 明		○	○
5		8.8	1.4		○	○	○
6		8.9	1.2	○		不 明	○
7		9.0	1.1	○		○	○
8		9.0	1.4	○		○	○
9		9.1	1.25		○	○	○
10		9.2	1.5	○		○	○
11		9.2	1.5		○	○	○
12		9.4	1.5	○		○	○
13		9.5	1.3	○		○	○
14		9.8	1.0	○		○	○
15		9.8	1.5	○		○	○
16		9.9	2.0	○		○	○
杯 a							
1		14.5	3.7	○		○	○
丸底の杯							
1		14.8	3.5	○		○	○
2		15.0	3.25	○			○
3		15.2	3.15	○			○
4		15.3	3.4	○			不 明
5		15.6	3.1	○			○
椀							
1		8.9	3.5	不 明		○	○
瓦器 (皿)							
1		8.85	1.85	不 明			不 明
瓦器 (椀)							
1		15.4	5.4以上	不 明			不 明
2		16.0	5.0	不 明			不 明
3		16.4	5.0以上	不 明			不 明
4		16.6	5.2	不 明			不 明
SE902 (第39-2次調査)							
椀							
1	5	13.1	4.9			○	

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
SX911							
皿 a							
1	10	8.9	1.0		○	○	○
2	11	9.1	1.2		○	○	○
3	12	9.1	1.2		○	○	×
SD916							
皿 a							
1	16	8.0	1.2		○	○	○
2	17	8.7	1.2		○	○	○
杯 a							
1	20	11.6	2.4		○	○	×
2	18	11.8	2.5		○	○	○
3	19	12.4	2.6		○	○	○
SK926							
皿 a							
1	1	7.4	1.2		○	○	○
2	2	8.1	1.0		○	○	○
3	3	8.1	0.8		○	○	
丸底の杯							
1	4	15.3	3.4	○			
SK927							
皿 a							
1	6	6.9	1.3		○	○	○
2	7	7.1	1.2		○	○	○
3	8	7.1	1.1		○	○	○
4	11	8.4	1.0		○	○	○
5	9	8.5	1.1		○	○	○
6	10	8.5	1.4		○	○	×
7	13	8.5	1.1		○	×	×
8	12	8.7	1.4		○	○	○
9	15	8.9	1.3		○	×	×
10	14	9.0	1.0		○	○	○
11	16	9.0	1.2		○	○	○
12	18	9.6	1.8	○		○	○
13	17	9.9	1.5		○	○	○
皿 c							
1	19	8.4	1.4		不 明	○	
2	20	8.5	1.7		不 明	○	
3	21	8.7	1.5			○	
4	22	8.7	1.6		不 明	○	
5	23	8.8	1.9		不 明	○	○
杯 a							
1	24	11.9	2.6		○	○	○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
2	25	12.0	2.2		○	○	○
3	26	12.7	2.8		○	○	○
4	28	13.0	2.8		○	○	○
5	27	13.1	2.6		○	○	○
6	29	13.5	2.4		○	○	○
7	30	13.7	2.4		○	○	○
SK934							
丸底の杯							
1	7	9.2	2.0		○	○	
SD939							
皿 a							
1	22	10.0	1.5			○	○
皿 c							
1	23	12.2	2.6				
丸底の杯							
1	24	13.6	3.0		○		○
2	25	16.7	4.4		○		
杯 c							
1	26	12.5	5.3			○	○
椀							
1	27	15.4	5.7				
SK954 (第39-3次調査)							
皿 a							
1	2	8.4	0.8		○	○	○
2	3	8.6	1.1		○	○	○
3	1	8.8	1.1		○	○	○
杯 a							
1	8	12.4	2.6		○	○	○
2		12.7	2.5		○	○	○
3	9	12.8	3.1		○	○	○
4	5	13.2	2.2		○	○	○
5	4	13.3	2.2		○	○	○
6	6	13.3	2.7		○	○	○
7	11	13.9	2.9		○	○	○
8	10	14.1	2.8		○	○	
SK956							
皿 a							
1		8.1	1.4		○	○	○
2	14	8.3	1.2		○	○	○
3	17	8.4	1.1		○	○	○
4	15	8.6	1.0		○	○	○
5	16	8.7	0.9		○	○	○
杯 a							

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
1	18	13.3	2.7		○	○	○
SK957							
皿 a							
1	27	8.3	1.1		○	○	○
2	26	9.0	1.2		○	○	○
杯 a							
1	29	14.0	3.0		○	○	○
2	28	14.6	2.7		○	○	○
SK958							
皿 a							
1	1	7.8	1.1		○	○	○
2	4	7.8	1.2		○	○	○
3	2	8.0	1.2		○	○	○
4	3	8.0	1.2		○	○	○
5	6	8.6	1.0		○	○	○
6	5	8.7	0.9		○	○	○
7	8	8.7	1.0		○	○	○
8	7	9.0	0.9		○	○	○
SK960							
皿 a							
1	9	8.3	0.9		○	○	○
2	10	8.4	1.1		○	○	○
3	11	9.4	1.0		○	○	
皿 c							
1		10.5	2.1		○	○	
杯 a							
1	12	13.5	2.7		○	○	○
SK976							
皿 a							
1	21	8.2	1.3	○		○	○
2	22	8.3	1.4	○		○	○
3	24	8.3	1.4	○		○	○
4	23	8.5	1.2	○		○	○
5	27	8.7	1.2	○		○	○
6	25	8.9	1.7	○		○	○
7	26	9.0	1.2	○		○	○
8	28	9.0	1.3	○		不明	○
9		9.0	0.7		不明	○	○
10	19	9.2	1.0	○		○	○
11	29	9.2	1.5	○		○	○
12	20	9.5	1.5		○	○	○
杯 a							
1	30	14.3	3.7	○			○

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
2	31	14.7	3.6	○			○
3	32	14.7	3.4	○			○
4	33	15.0	3.3	○		不 明	○
5	34	15.4	3.6	○			○
6	37	15.4	3.2	○			○
7	35	15.5	3.3	○		不 明	○
8		15.5	3.0	○			○
9	36	16.0	3.5	○		不 明	○
10		16.0	3.8	○			○
SK988							
皿 a							
1	1	8.6	1.3		○	○	○
2	3	8.9	0.8		○	○	○
3	2	9.2	1.2		○	○	○
SK994							
皿 a							
1	6	8.9	1.3	○		○	○
2		8.9	1.3	○		○	○
3	8	9.0	1.3	○		○	○
4	7	9.4	1.3	○		○	○
5	9	9.6	1.6	○		○	○
6		11.1	1.3	○		○	○
丸底の杯							
1	10	15.0	3.6	○			
2	11	16.0	3.1	○			
SK999							
皿 a							
1	21	8.8	1.3	○		○	○
杯 a							
1	23	12.2	2.8		○	○	○
2	24	12.3	2.8		○	○	○
3	22	12.9	2.9		○		
SE1081 (第42次調査)							
須恵器(杯蓋)							
1	1	14.7	1.7	-		○	×
須恵器(椀)							
1	2	15.8	4.9	○		×	×
皿							
1	3	14.5	2.0	○		○	×
2	4	15.0	1.8	○		×	○
3	5	15.2	1.8	○		不 明	○
4	6	15.8	2.3	○		○	板状圧痕と思われる 条痕二条あり
耳 皿							

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
1	7	—	2.1	不 明		○	×
杯							
1	8	13.0	3.1	○		挿ナデ調整したあと ペラミガキ	×
2	9	12.9	3.0	○		ヘラケズリ	×
3	10	12.7	3.3	○		○	×
4	11	16.2	4.2	○		○	×
5	12	12.7	3.4	○		○	×
6	13	13.3	3.2	○		○	×
7	14	15.0	3.7	○		○	×
8	15	13.8	3.6	○		なで?	○
杯 蓋							
1	18	19.4	2.6	—		×	×
碗							
1	16	13.9	6.0	○		ヘラミガキ	×
2	17	14.5	5.25	○		○	×
3	19	18.6	7.3	○		不 明	×
4	20	21.2	8.1	—		○	×
SE1083							
杯 a							
1	1	9.8	1.6	○		○	○
2	2	10.0	1.3	○		○	○
3	3	10.0	1.7	○		○	○
4	4	10.2	1.45	○		不 明	○
5	5	10.2	1.8	○		○	○
6	6	10.4	1.7	○		○	×
7	7	10.4	1.7	○		○	○
8	8	10.4	1.8	○		○	×
9	9	10.6	1.7	○		○	○
10	10	10.6	1.4	○		○	○
11	11	10.7	1.6	○		○	○
12	12	10.7	1.6	○		○	○
13	13	10.6	1.8	○		○	×
14	14	10.7	1.7	○		○	○
15	15	10.8	2.1	○		○	○
16	16	10.9	1.7	○		○	○
17	17	11.2	1.9	○		○	○
18	18	11.3	1.65	○		○	○
碗							
1	22	12.6	3.2	○		○	○
2	23	13.2	3.3±	○		不 明	○
3	24	12.9	3.9	○		○	○
4	25	13.5	3.6±	○		○	不 明
5	26	14.2	4.8	○		ヘラなで	×
6	27	11.6	4.6	—		○	○
7	28	12.9	4.1	○		ヘラナデ	×
8	29	14.1	6.1	—		○	○

番号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
				ヘラ	糸		
9	30	14.4	5.85	—		○	○
10	31	15.0	5.8	不明		ヘラなで	×
11	32	14.9	5.3	—		ヘラなで	○
12	33	15.0	5.9	○		○	○
13	34	16.8	5.4	○		○	×
14	35	16.6	7.2	—		ヘラなで	×
15	36	17.4	7.2	—		ヘラなで	○
16	37	17.7	7.15	—		ヘラによるなで	不明
17	38	18.5	8.0±	—		ヘラなで	○
黒色土器A							
1	39	16.2	6.2	—		ヘラみがき	×
黒色土器B							
1	19	10.3	1.7	○		×	×
2	20	10.5	1.7	○		×	×
SK1084							
須恵器(杯)							
1	1	13.1	3.5	○		ナデか?	×
2	2	12.6	3.7	○		○	×
須恵器(椀)							
1	3	15.1	5.5	○		ナデか?	×
皿							
1	6	15.4	1.9	○		不明	不明
2	7	19.3	1.8	不明		不明	不明
3	8	18.0	2.1	○		×	不明
4	9	17.1	2.0	○		○	×
5	10	18.4	3.0	○		ナデか?	×
杯							
1	11	8.8	3.7	○		○	×
2	12	8.5	4.6	○		○	○
3	13	10.5	3.7	○		○	×
4	14	12.7	3.2	○		ナデか?	×
5	15	13.1	3.4	○		○	×
6	16	13.0	3.9	○		ナデか?	×
7	17	14.0	3.65	○		不明	×
8	18	15.2	3.2	○		○	×
杯蓋							
1	20	17.2	2.2+	○		○	—
2	21	19.4	2.6+	○		○	—
椀							
1	22	16.2	4.9	○		不明	×
2	23	18.9	7.8	○		○	×
3	24	20.2	9.0	○		○	×
4	25	26.1	11.0	○		○	×
鉢							
1	4	11.8	8.6	不明		不明	不明
2	5	25.1	11.8	○		○	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ら	糸		
SK1085							
皿 a							
1	1	8.3	0.9		○	○	×
2	2	8.7	0.8		○	不 明	×
3	3	9.0	1.05		○	不 明	×
杯 a							
1	4	13.4	2.9		○	×	×
2	5	13.6	2.3		○	×	×
3	6	13.7	2.65		○	○	○
4	7	13.7	2.9		○	×	×
5	8	14.0	2.6		○	○	○
6	9	14.0	2.65		○	○	○
7	10	14.0	2.9		○	○	○
8	11	14.1	2.55		○	○	×
9	12	14.2	2.4		○	○	○
10	13	14.6	3.1		○	○	○
11	14	14.6	2.7		○	○	○
12	15	14.8	2.7		○	○	○
SK1101							
皿 a							
1	54	7.4	1.0		○	不 明	×
皿 b							
1	41	5.4	1.8		○	○	○
2	42	6.2	1.8		○	×	×
3	43	6.2	1.7		○	不 明	○
4	44	6.2	1.7		○	×	×
5	45	6.5	1.65		○	不 明	×
6	46	6.5	1.9		○	×	×
7	47	6.8	1.35		○	不 明	×
8	48	6.8	1.7		○	○	×
9	49	6.9	1.7		○	不 明	×
10	50	7.0	2.1		○	○	×
11	51	6.9	1.8		○	○	○
12	52	7.2	1.6		○	○	×
13	53	7.2	1.8		○	○	○
14	55	7.8	1.6		○	×	×
杯 a							
1	56	11.6	2.5		○	不 明	×
2	57	12.3	2.7		○	×	×
3	58	12.4	2.6		○	不 明	×
4	59	12.7	2.6		○	×	○
5	60	12.8	2.4		○	×	×
6	61	13.3	3.0		○	不 明	×

番 号	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
				へ ラ	糸		
SK1103							
皿 a							
1	30	7.3	1.05		○	○	○
2	31	7.1	0.95		○	○	○
3	32	7.4	1.05		○	○	○
4	33	7.4	1.1		○	○	○
皿 b							
1	16	5.8	1.5		○	×	×
2	17	6.0	1.5		○	×	×
3	18	5.95	1.8		○	×	×
4	19	6.2	1.6		○	×	×
5	20	6.3	1.8		○	×	×
6	21	6.6	1.8		○	×	×
7	22	6.6	1.5		○	○	○
8	23	6.6	1.8		○	×	○
9	24	6.6	1.8		○	×	×
10	25	6.6	1.75		○	○	○
11	26	6.6	1.7		○	×	○
12	27	6.6	1.9		○	×	×
13	28	6.9	1.8		○	○	○
14	29	7.35	2.0		○	×	×
杯 a							
1	34	10.8	2.4		○	×	×
2	35	12.3	2.7		○	○	○
3	36	12.9	2.9		○	○	○
4	37	12.7	3.2		○	×	×
5	38	12.6	3.25		○	○	○
6	39	13.2	3.05		○	○	○
7	40	15.3	4.1		○	×	×

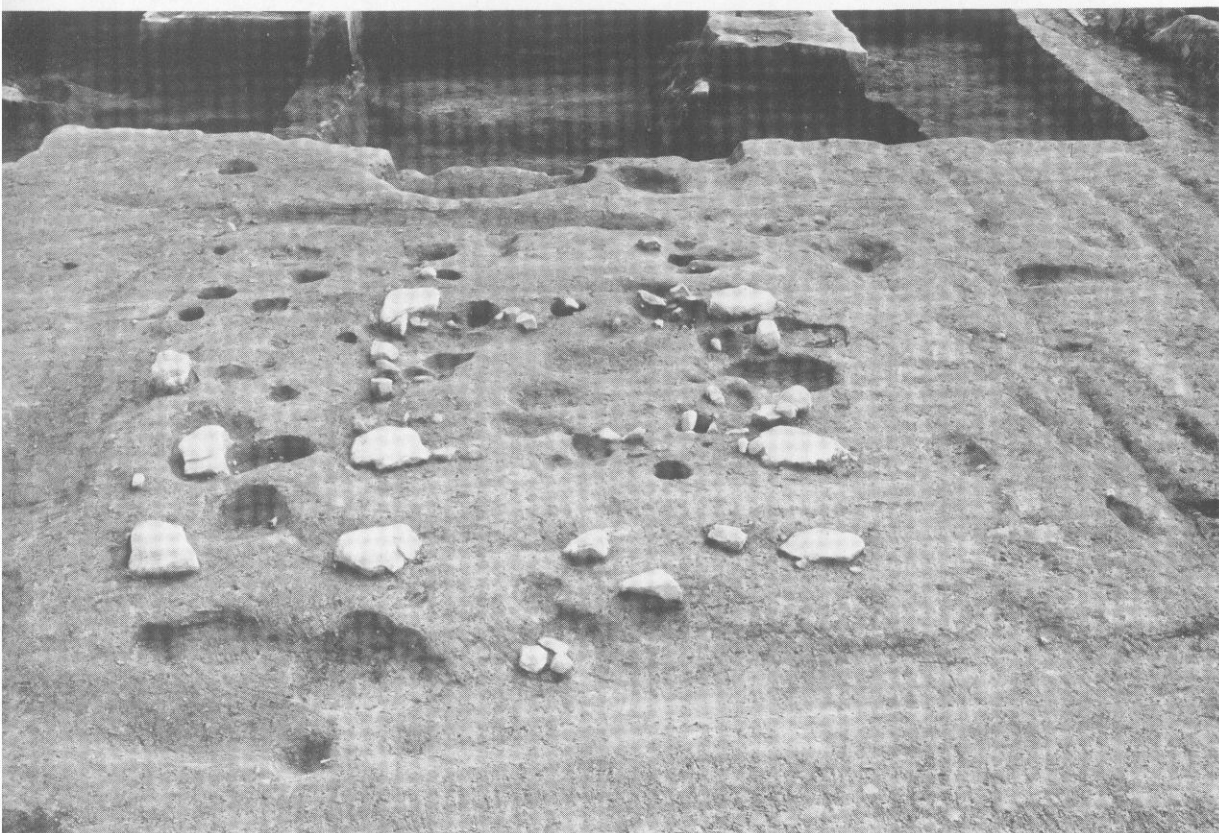
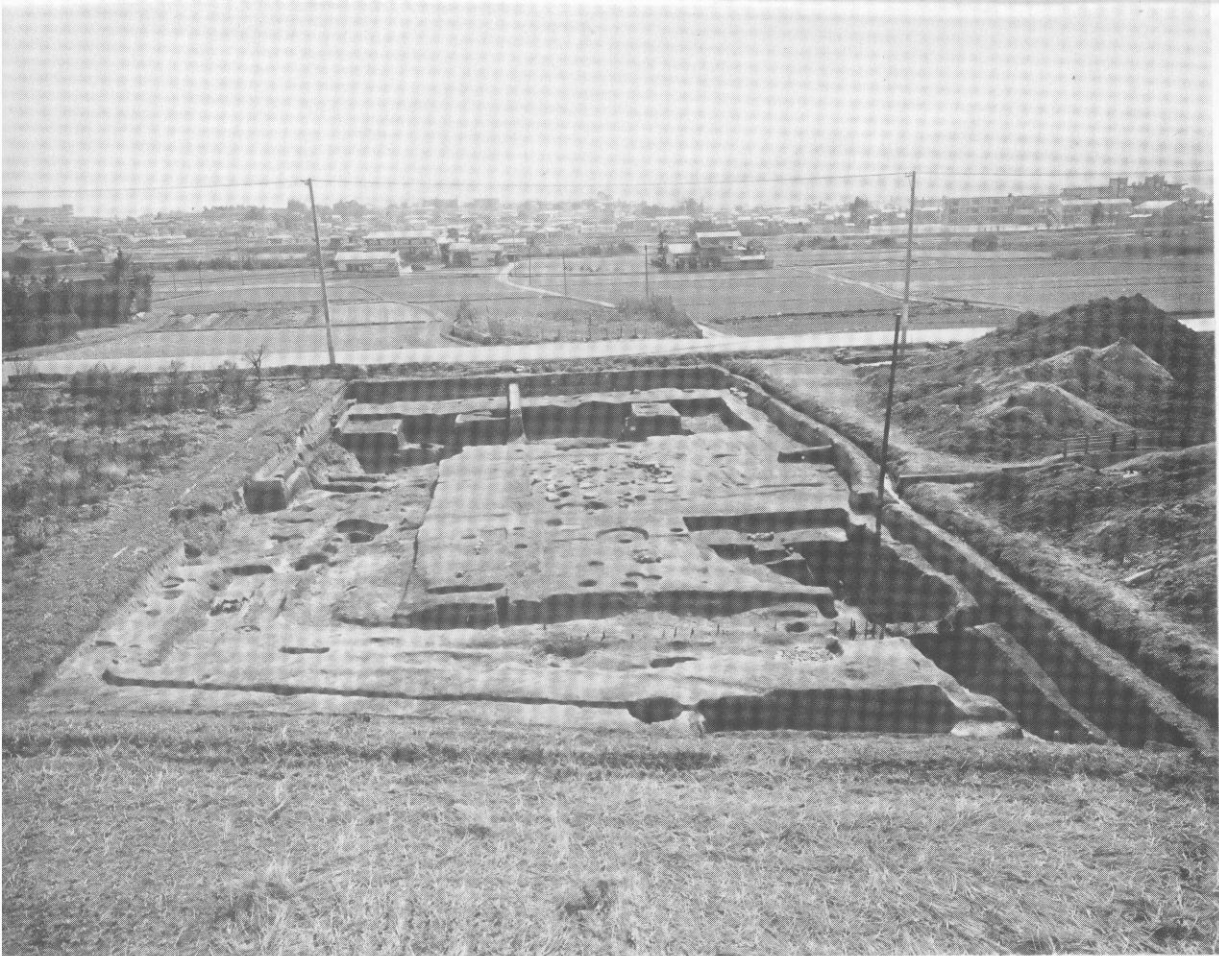
圖 版

図版 1

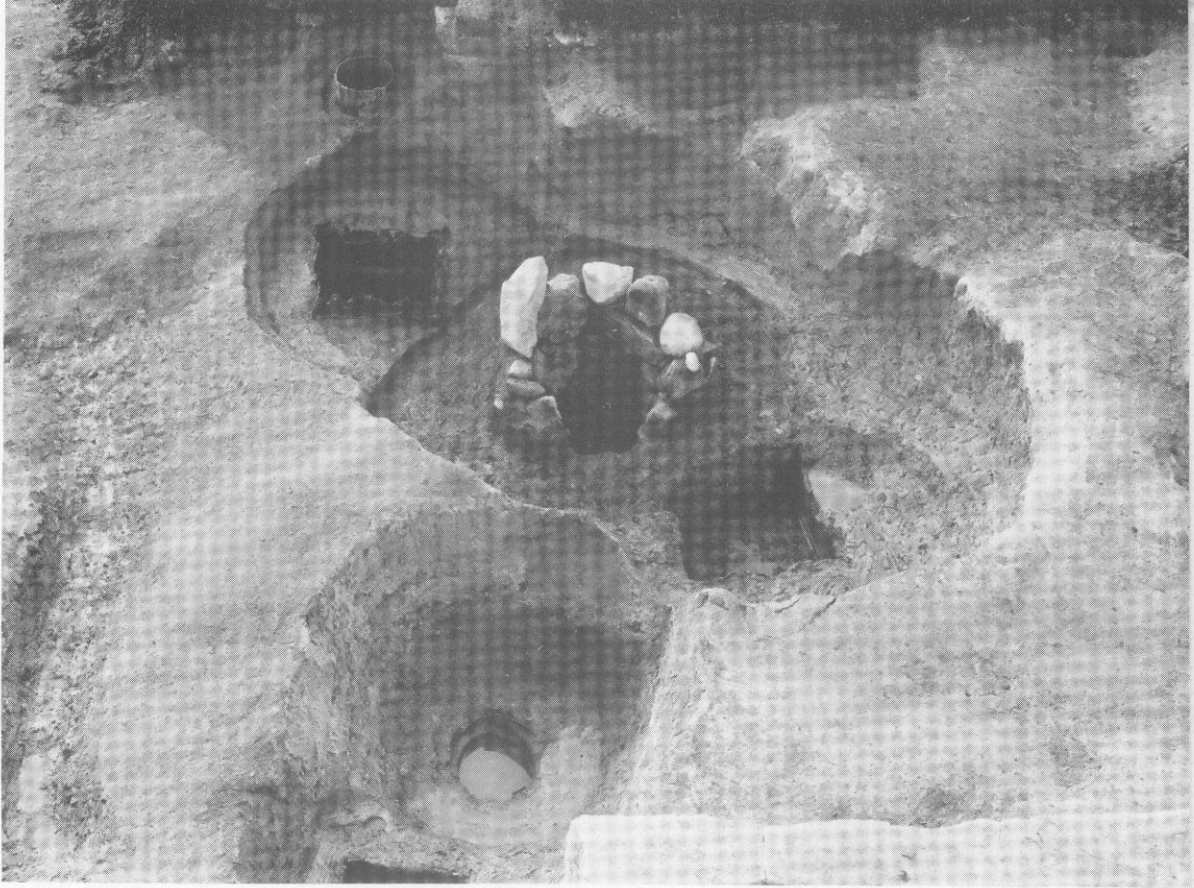
(上)第33次調査区全景(東から)

(下)SD600溝(南から)

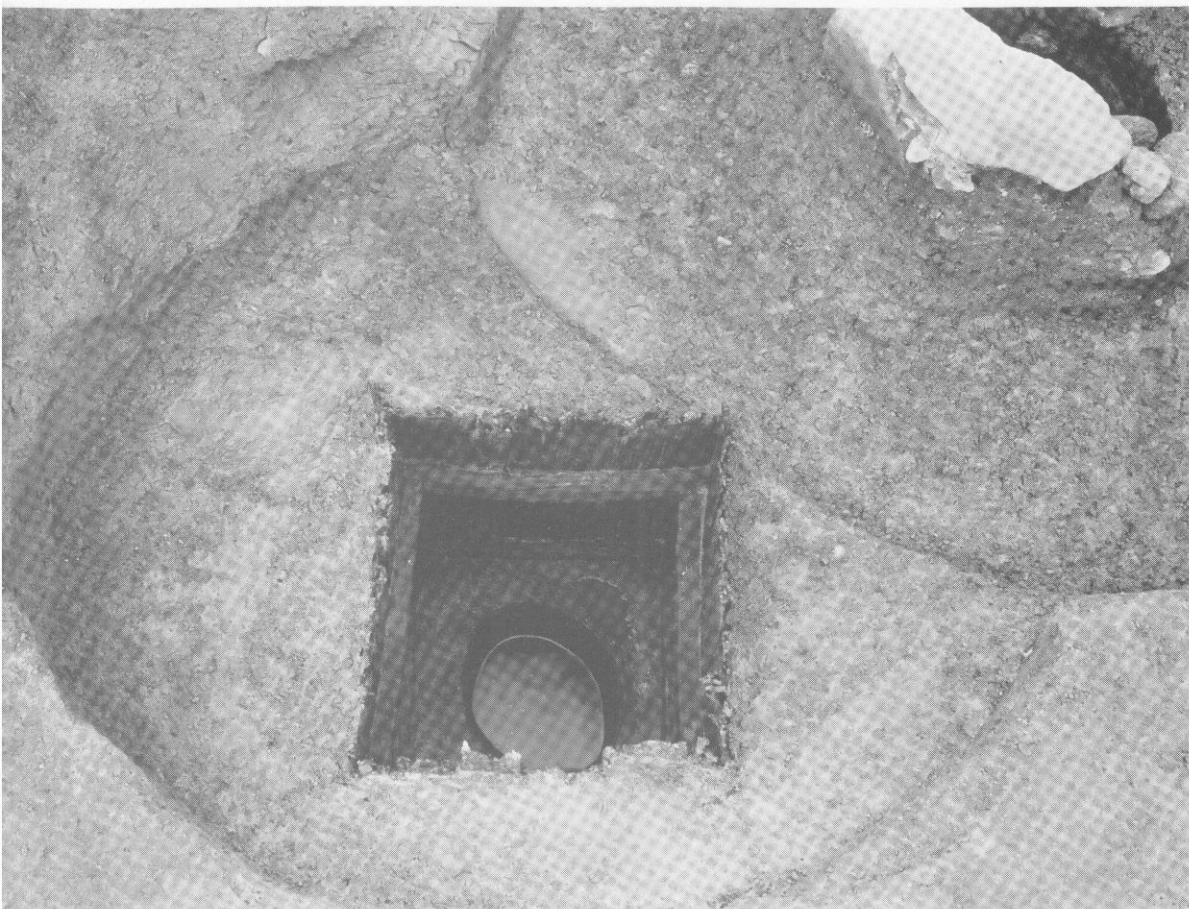




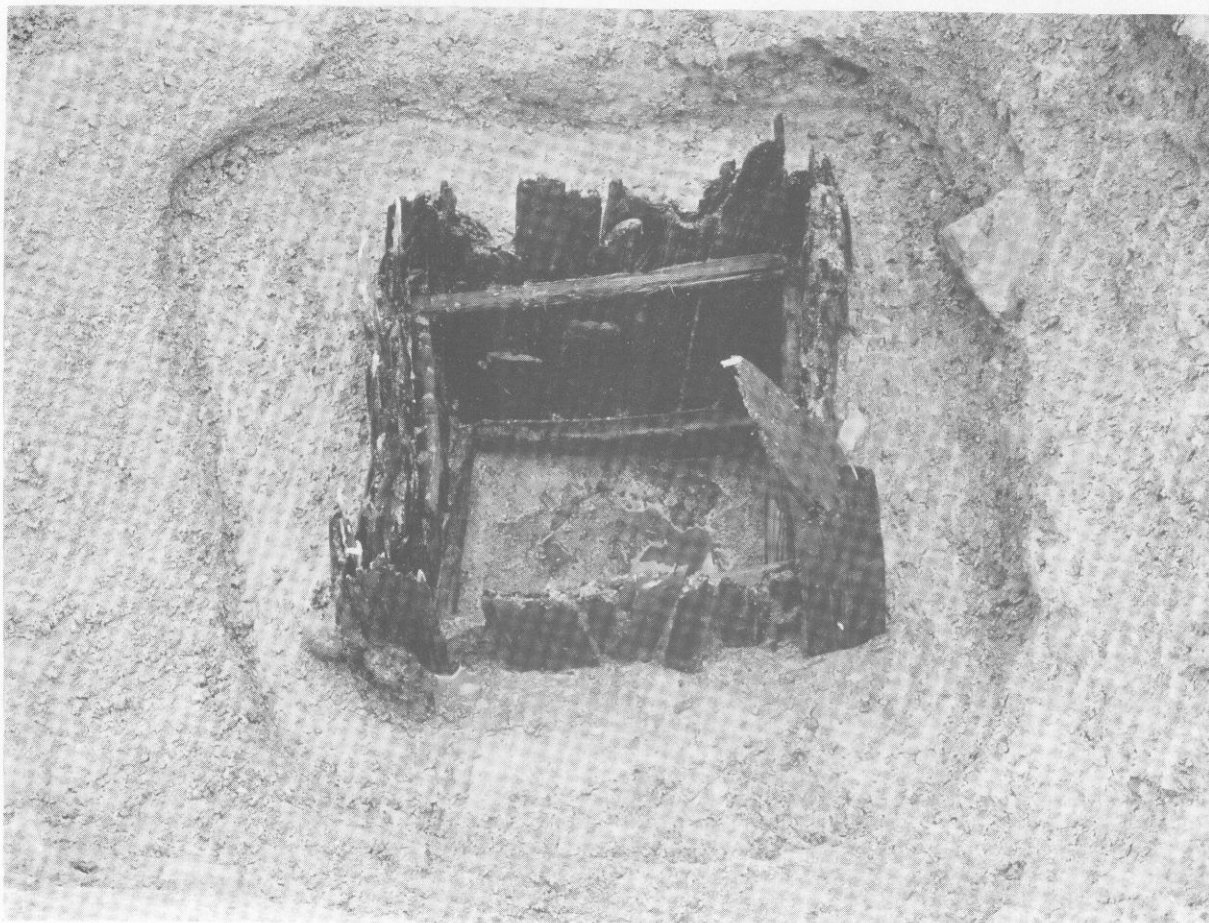
図版 2 (上)第38次調査区全景(北から)・(下)SB800建物(北から)



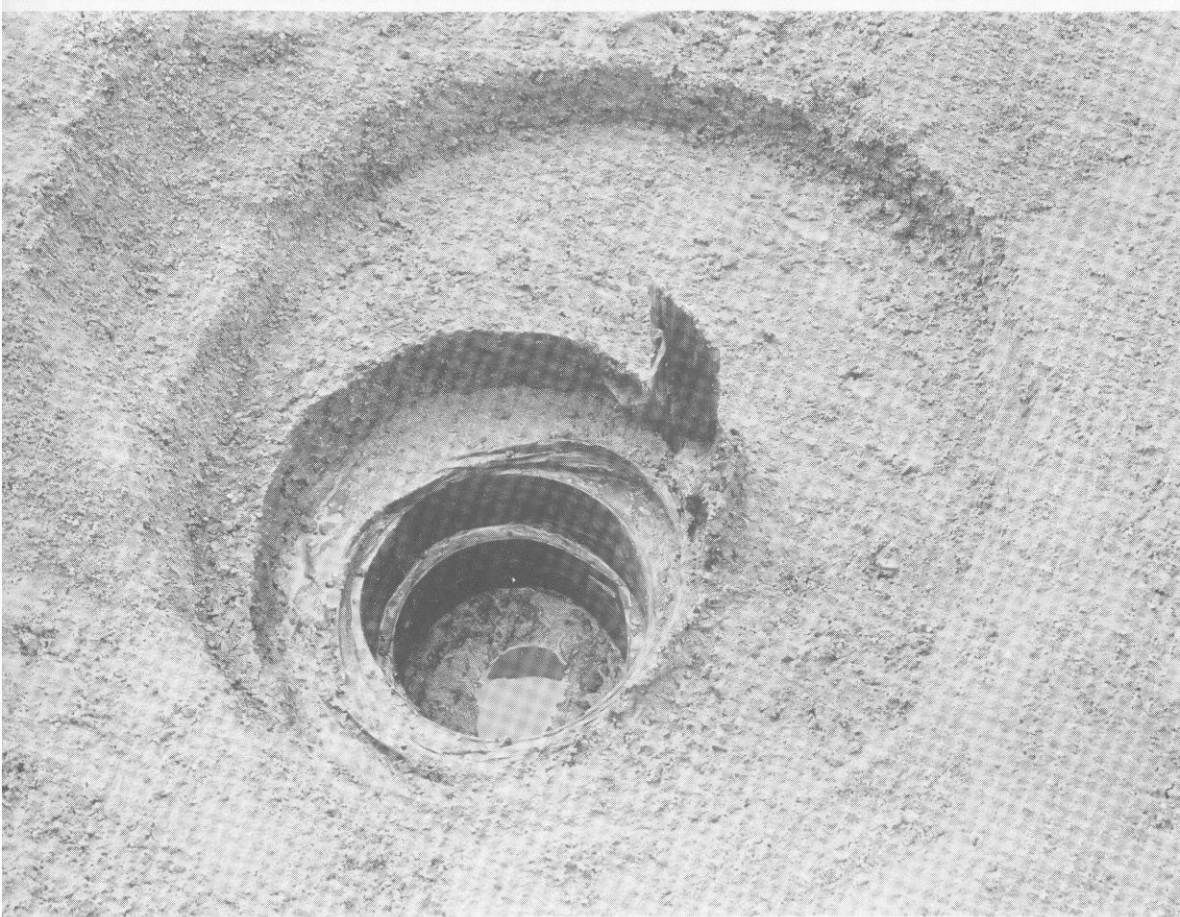
図版 3 (上)井戸(東から)・(下)SE 849井戸(東から)



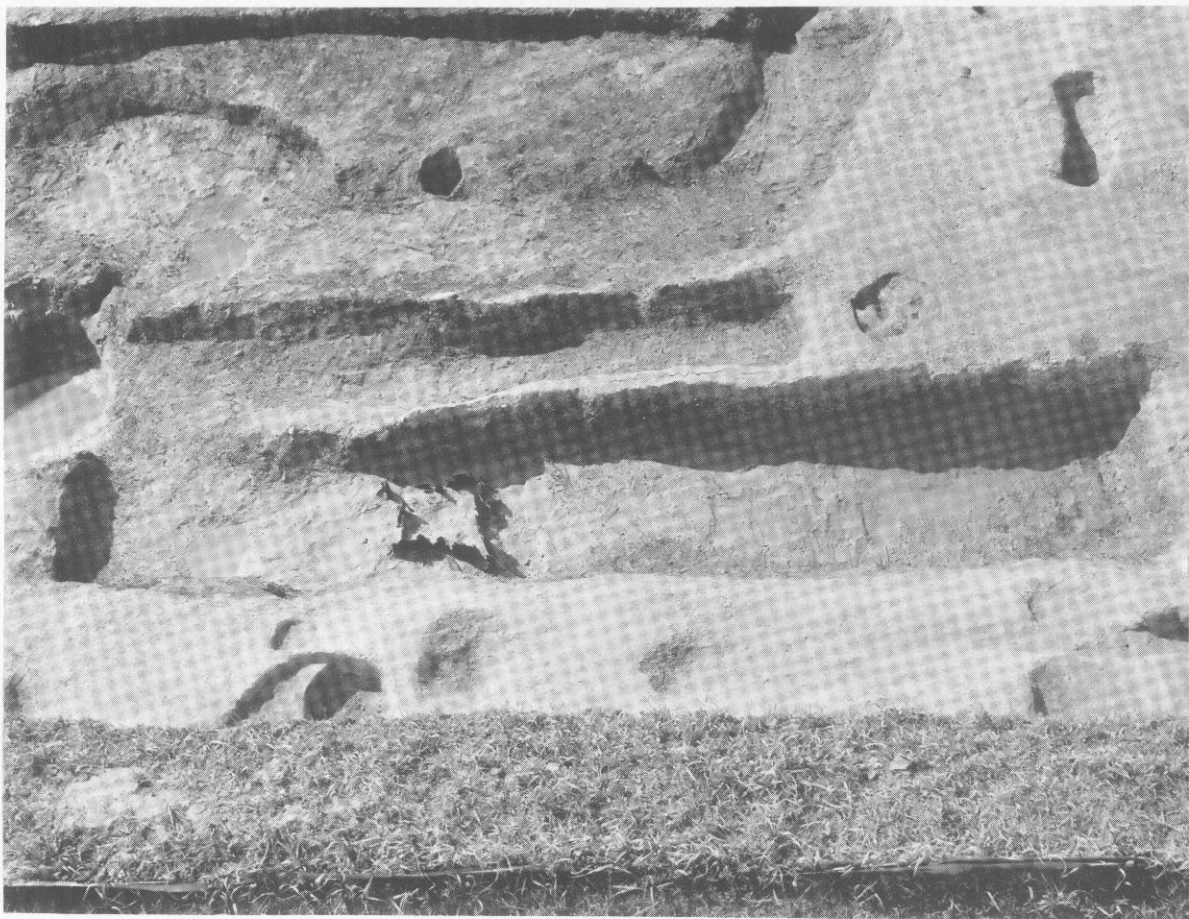
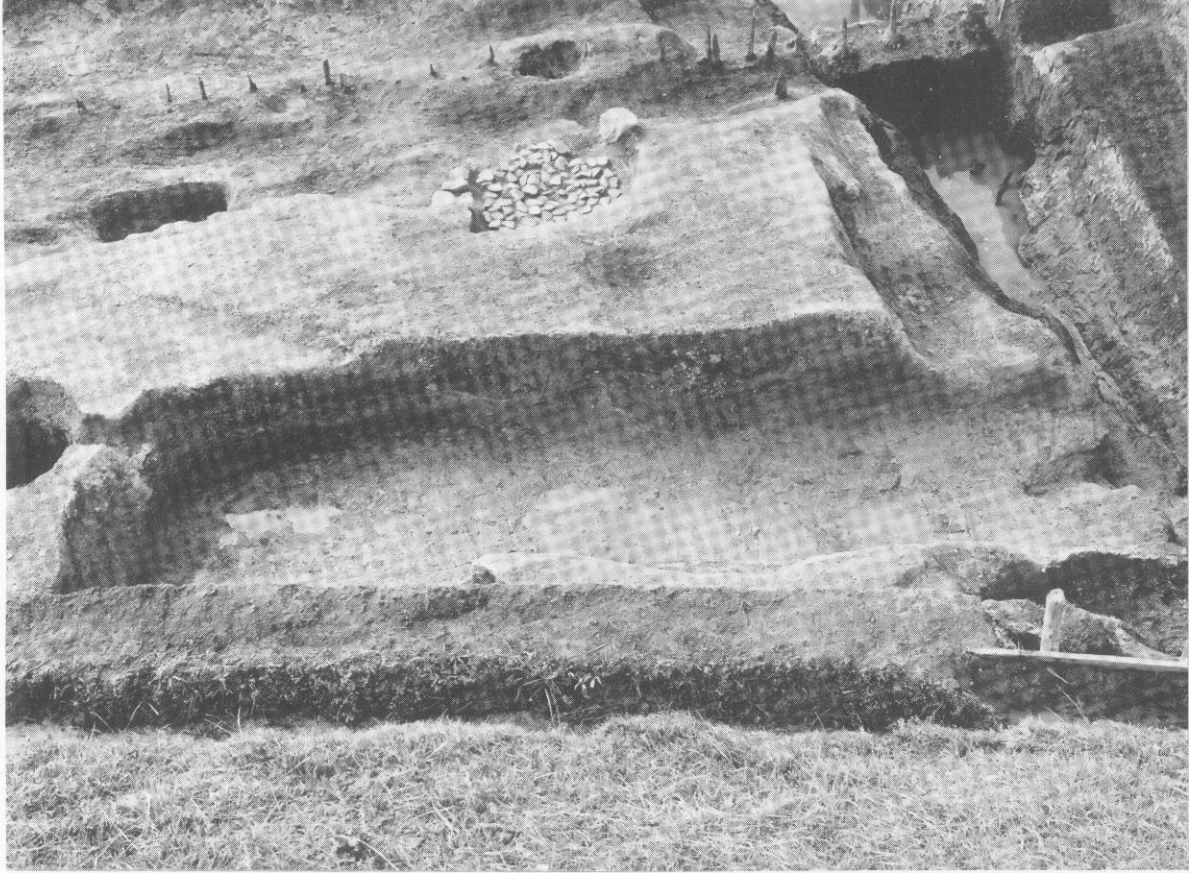
図版 4 (上)SE 820井戸より(西から)・(下)SE 850井戸(南から)



図版 5 (上) SE 853・854井戸(南から)・(下) SE 855井戸(東から)



図版 6 (上) SE 857 井戸(西から)・(下) SE 858 井戸(東から)



図版 7 (上)SK 830土壇(北から)・(下)SX 835土壇・SE 847井戸(東から)

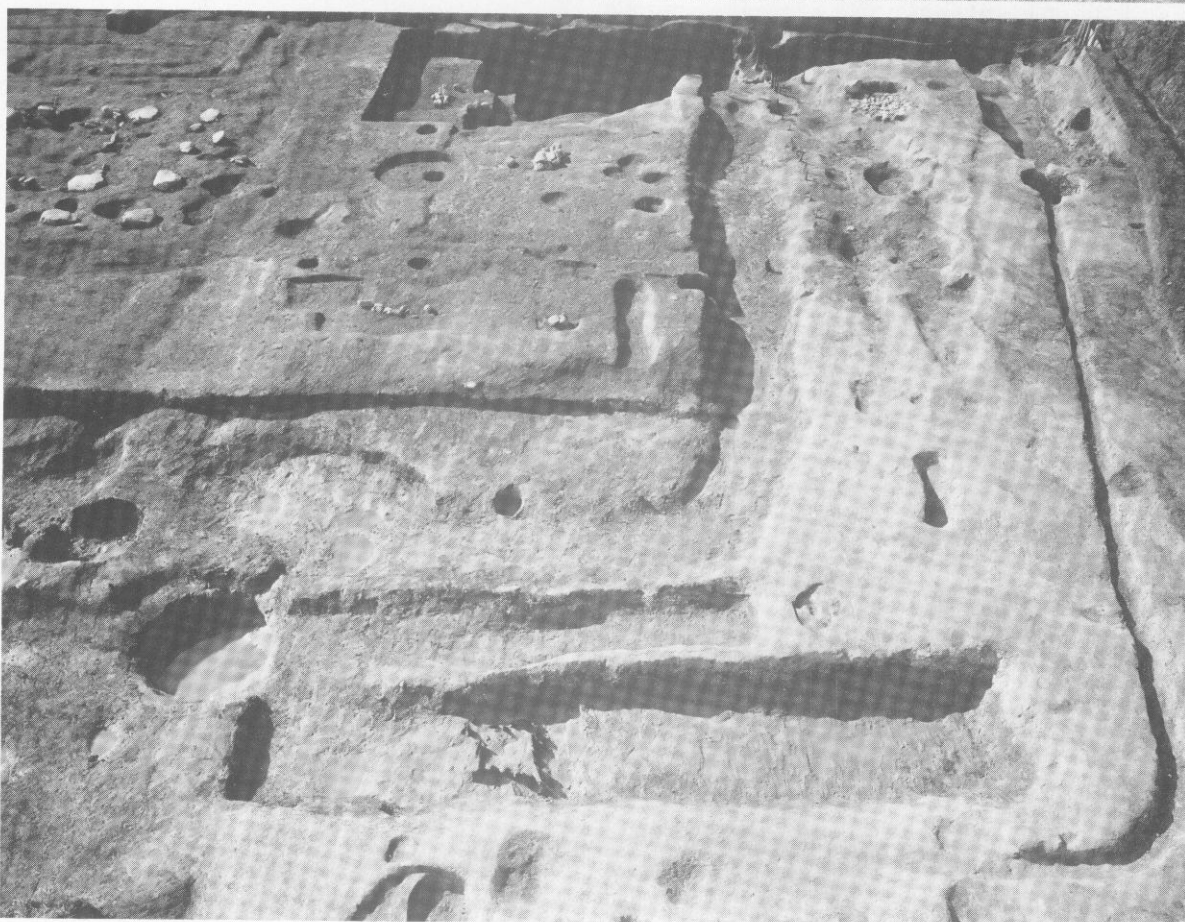
図版 8

SD790溝(西から)



SD860溝(南から)





図版 9 (上)SD865溝(東から)・(下)SD825溝(東から)



図版10

(上) SX 863木棺墓配石状態(東から)

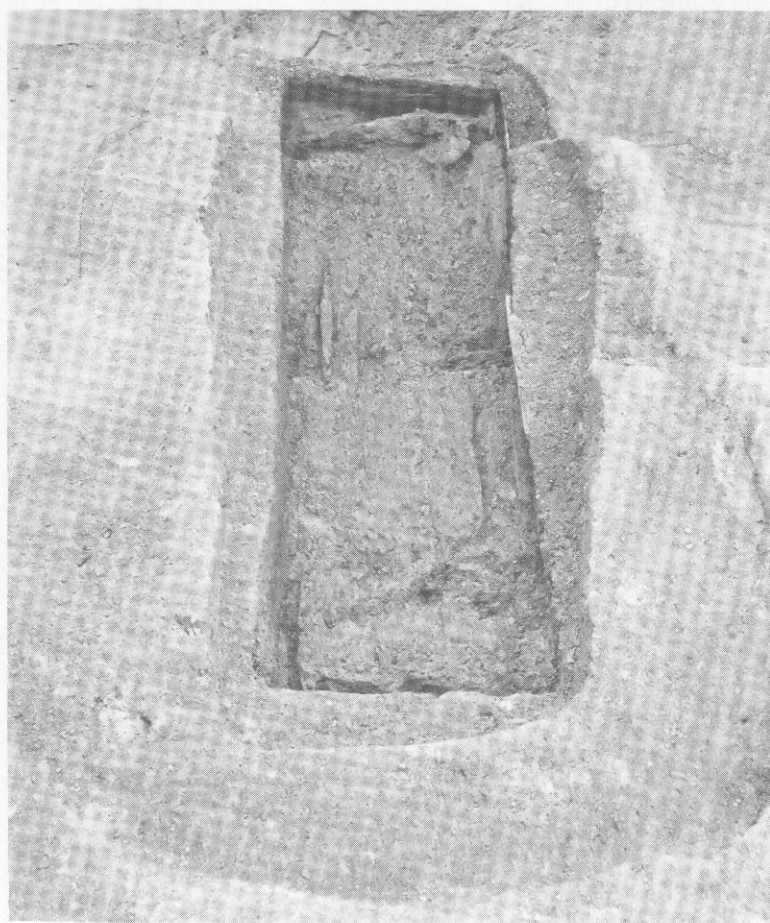
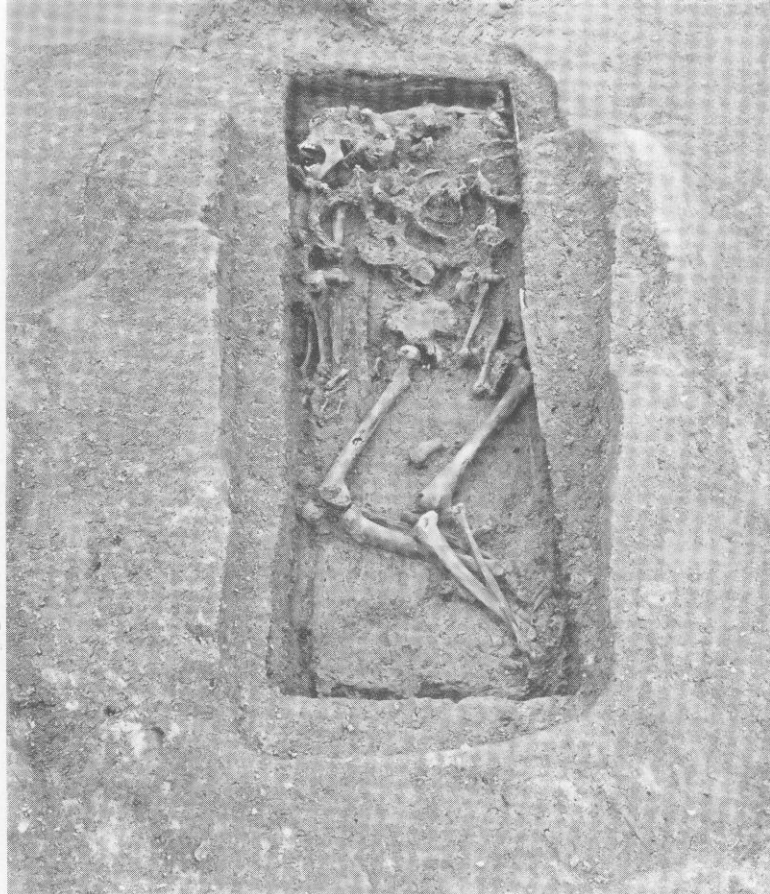
(下) SX木棺墓埋土除去後(南から)

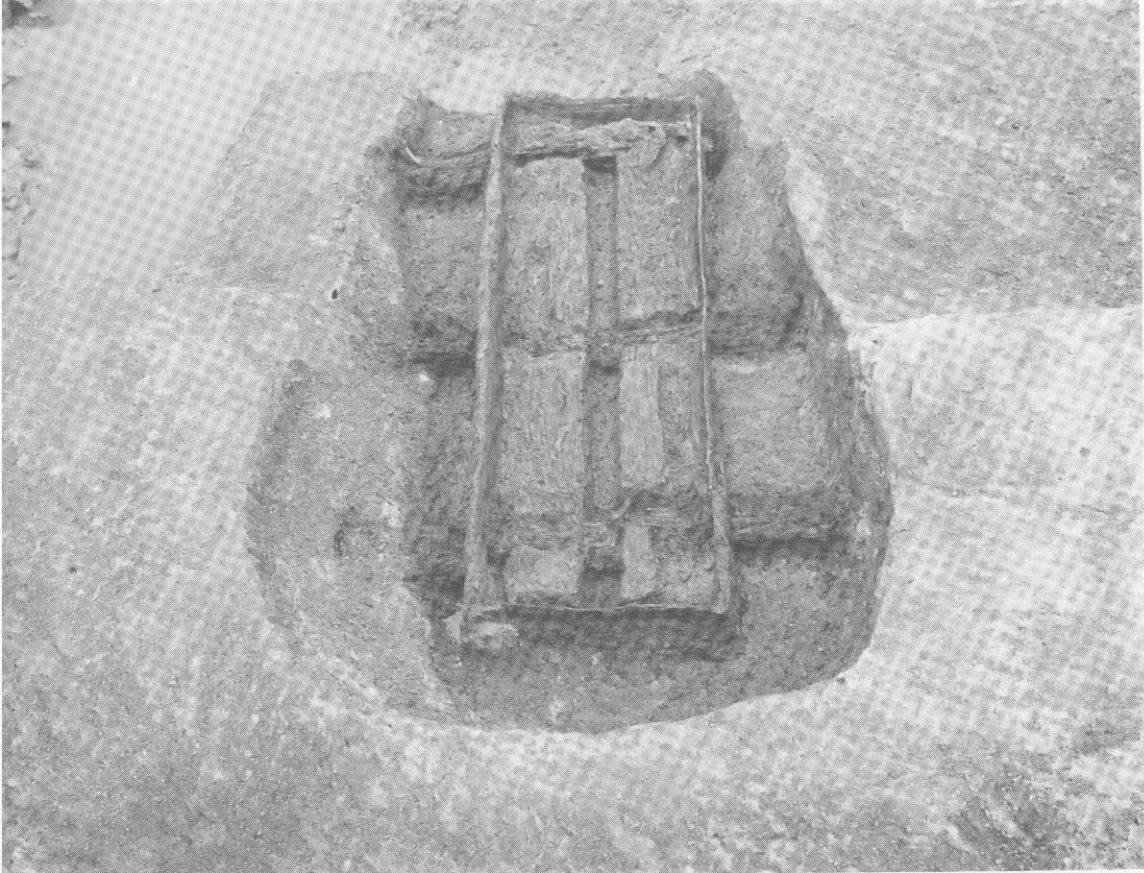
図版11

(上) SX863木棺墓埋葬状況(南から)

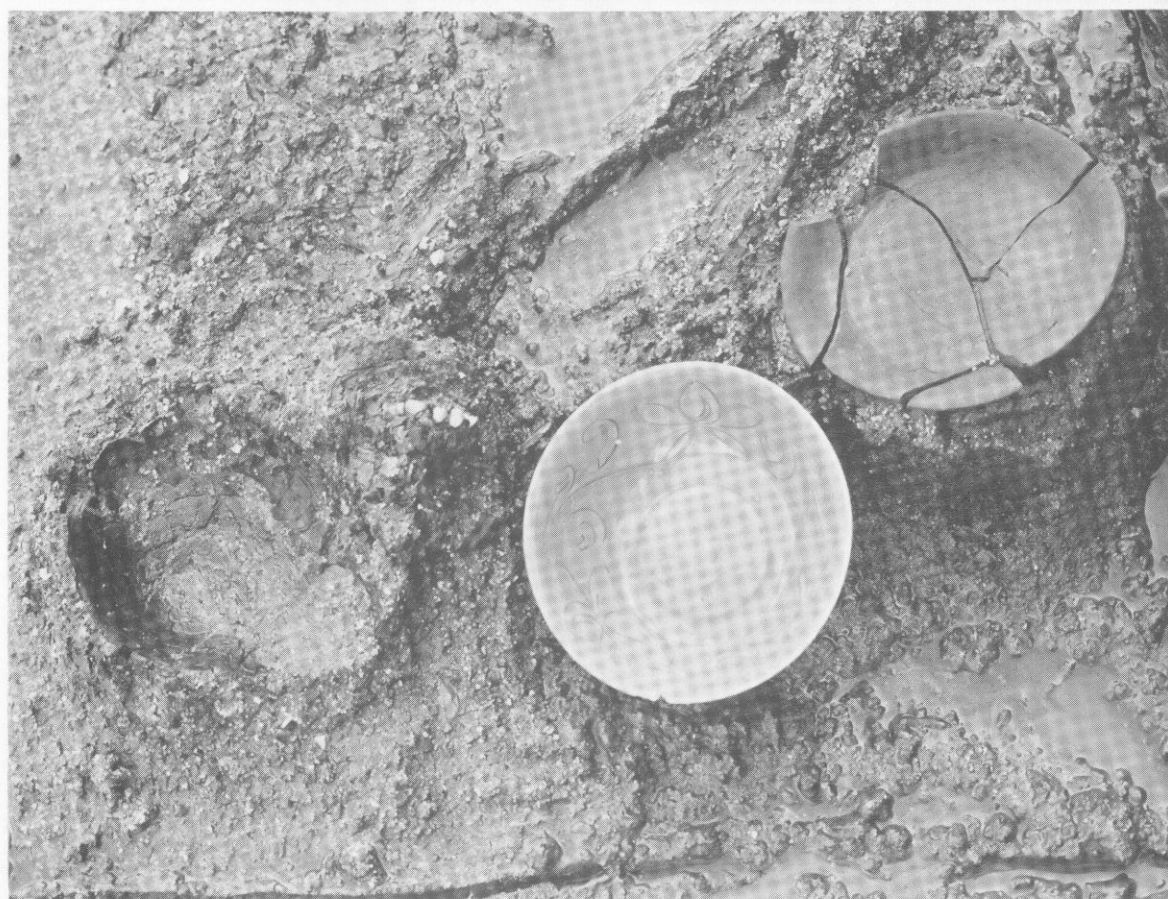
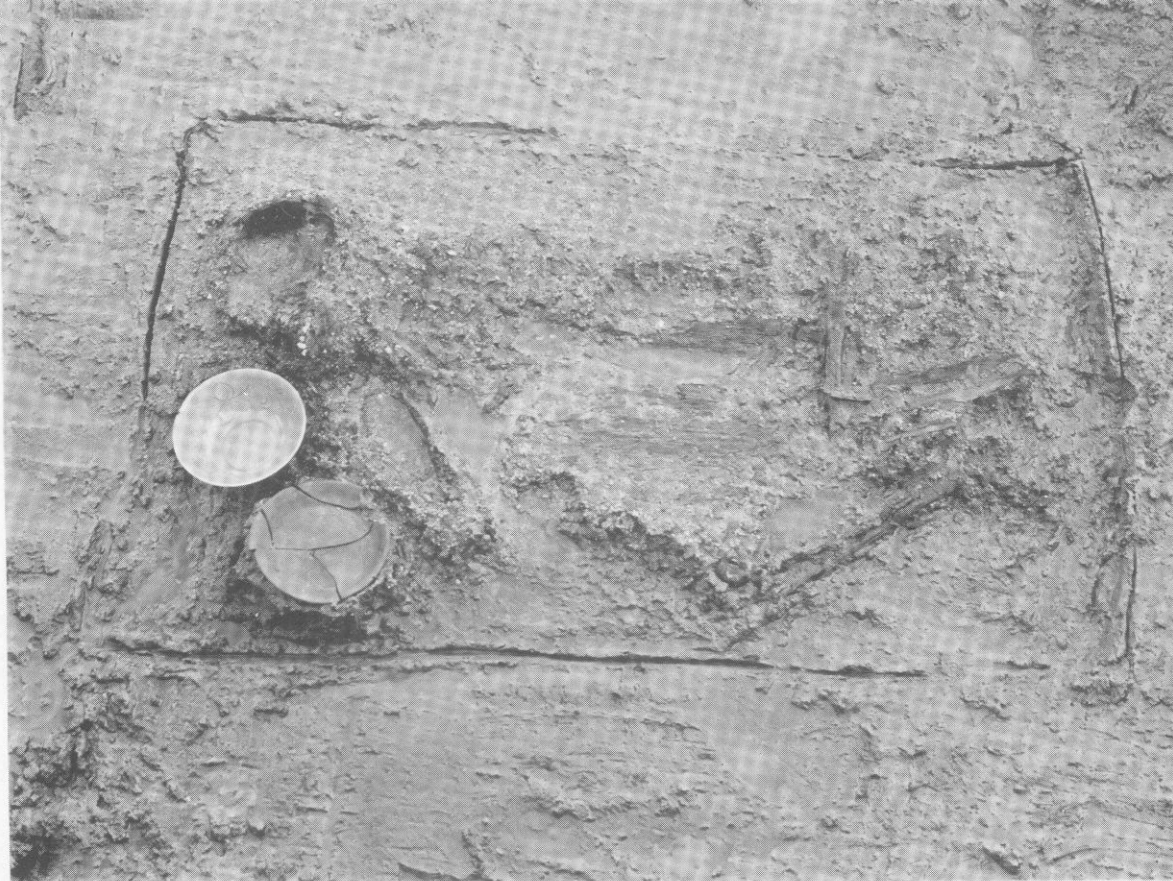
(下) SX863木棺墓棺材および

鉄刀、銅銭出土状態(南から)





図版12 (上) SX 863木棺墓棺身埋置状態(南から)・(下) SX 863木棺墓横木配置状態(南から)



図版13 (上) SX 864木蓋土塚墓(西から)・(下) SX 864木蓋土塚墓副葬品出土状態



図版14 (上) SX 811土坑・銅銭出土状態・(下) SK 830土坑・遺物出土状態



图版15 (上)SD790溝出土木製品・(下)SD860溝下駄・杵出土状態

図版16

第39-2次調査

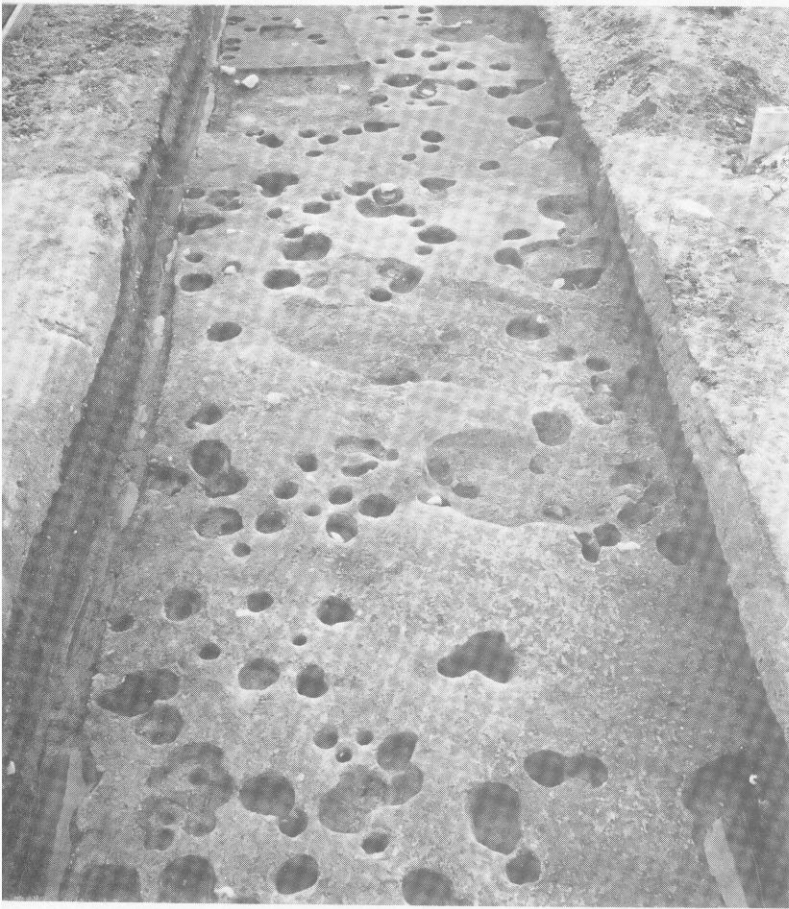
第3・4トレンチ上層遺構

(東から)



第3トレンチ上層遺構

(西から)



図版17

第3・4トレンチ全景(東から)



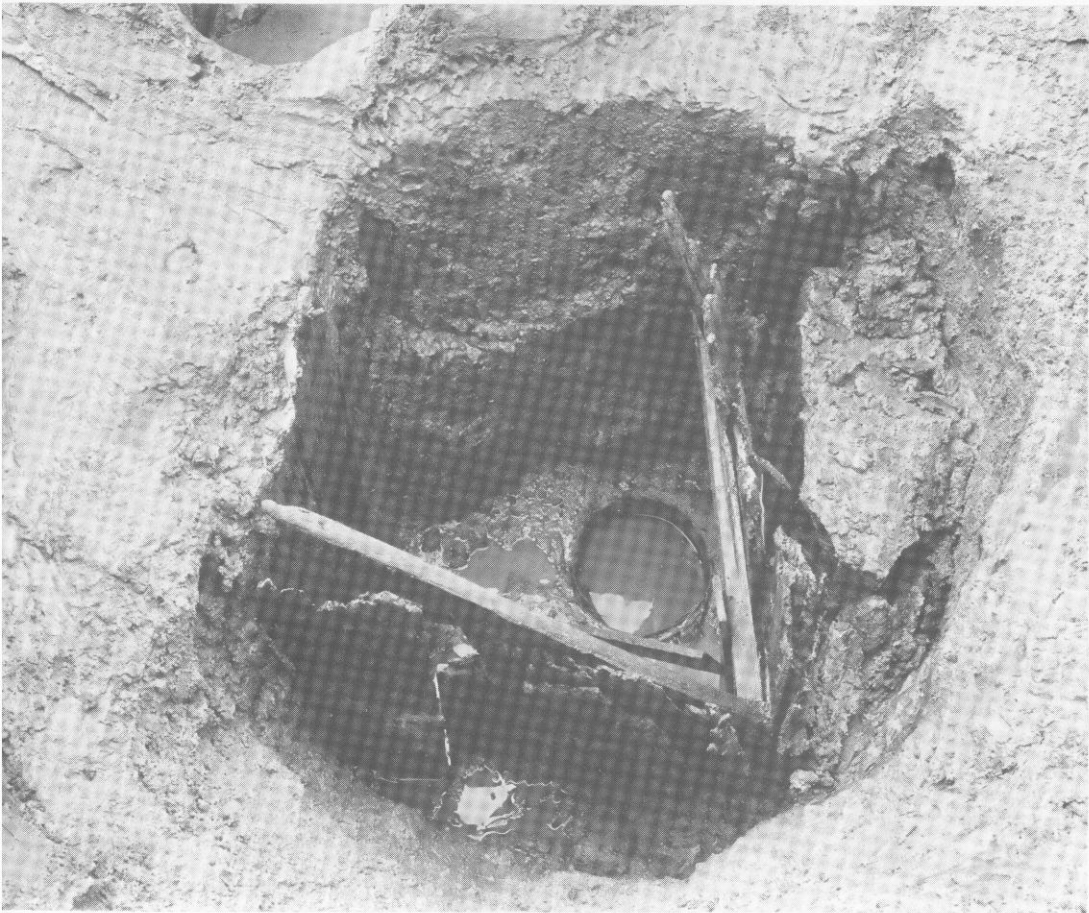
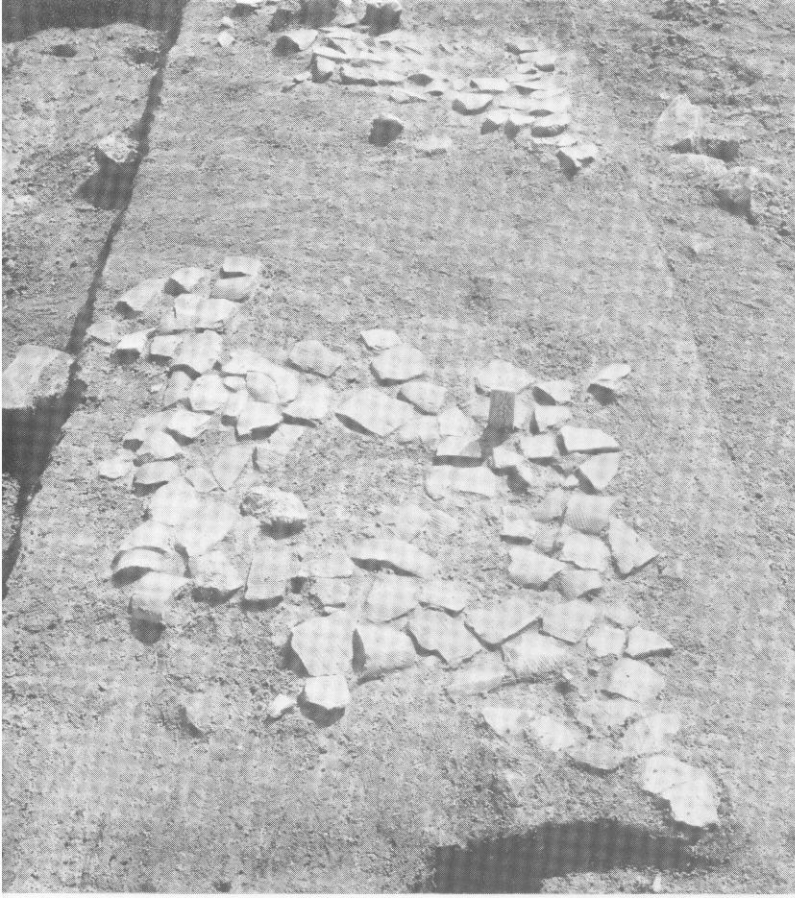
第4トレンチ全景(東から)

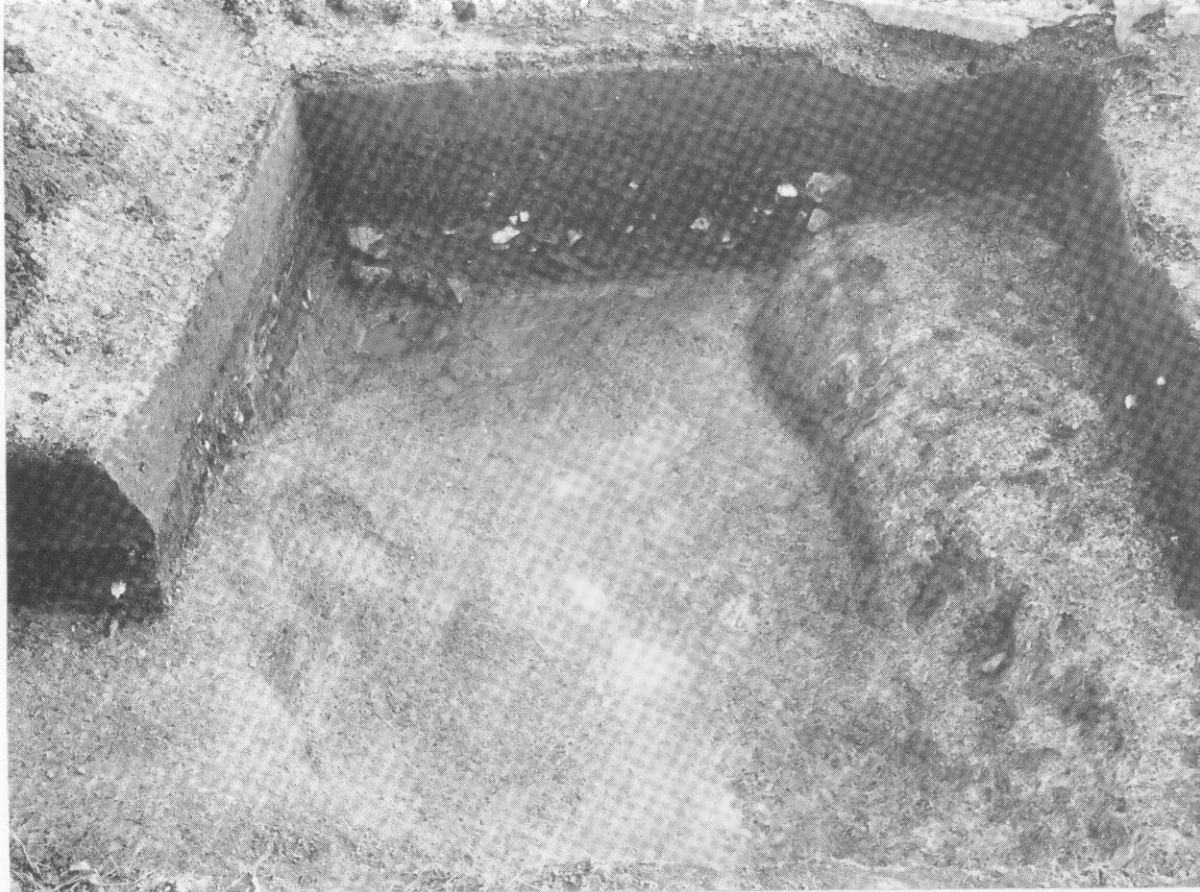


図版18

(上) SX 917瓦敷遺構(南から)

(下) SE 895井戸(南から)





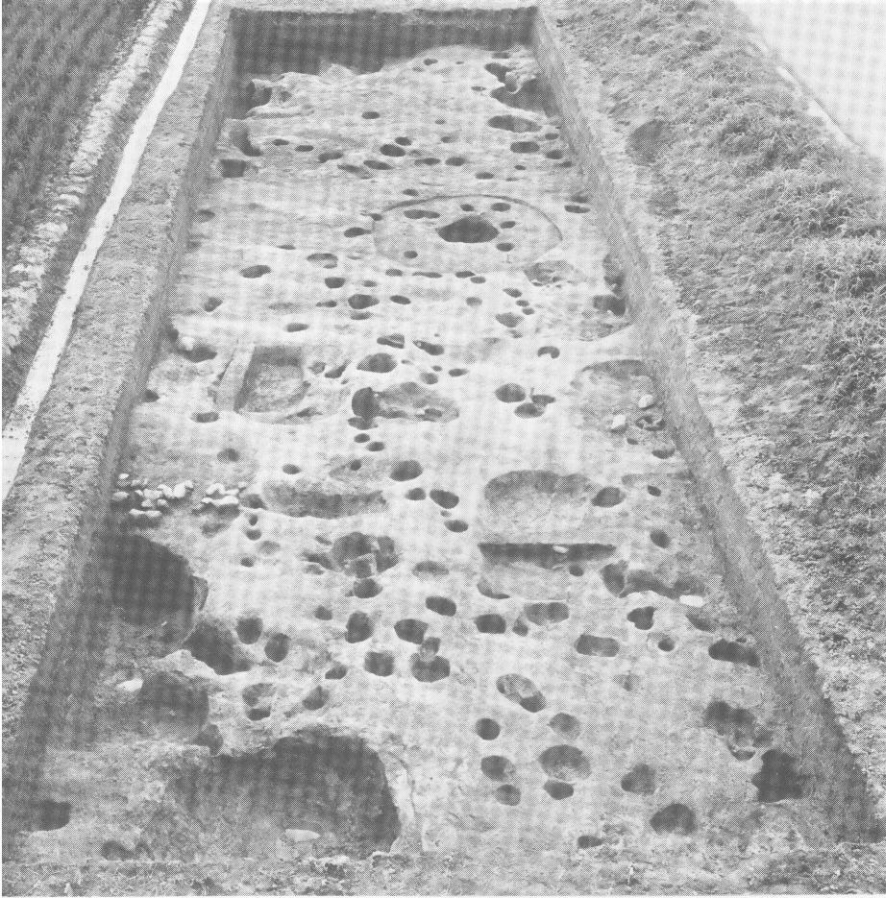
図版19

(上) SD892最下層溝(北から)

(下)第39-3次調

第2トレンチ全景(東から)

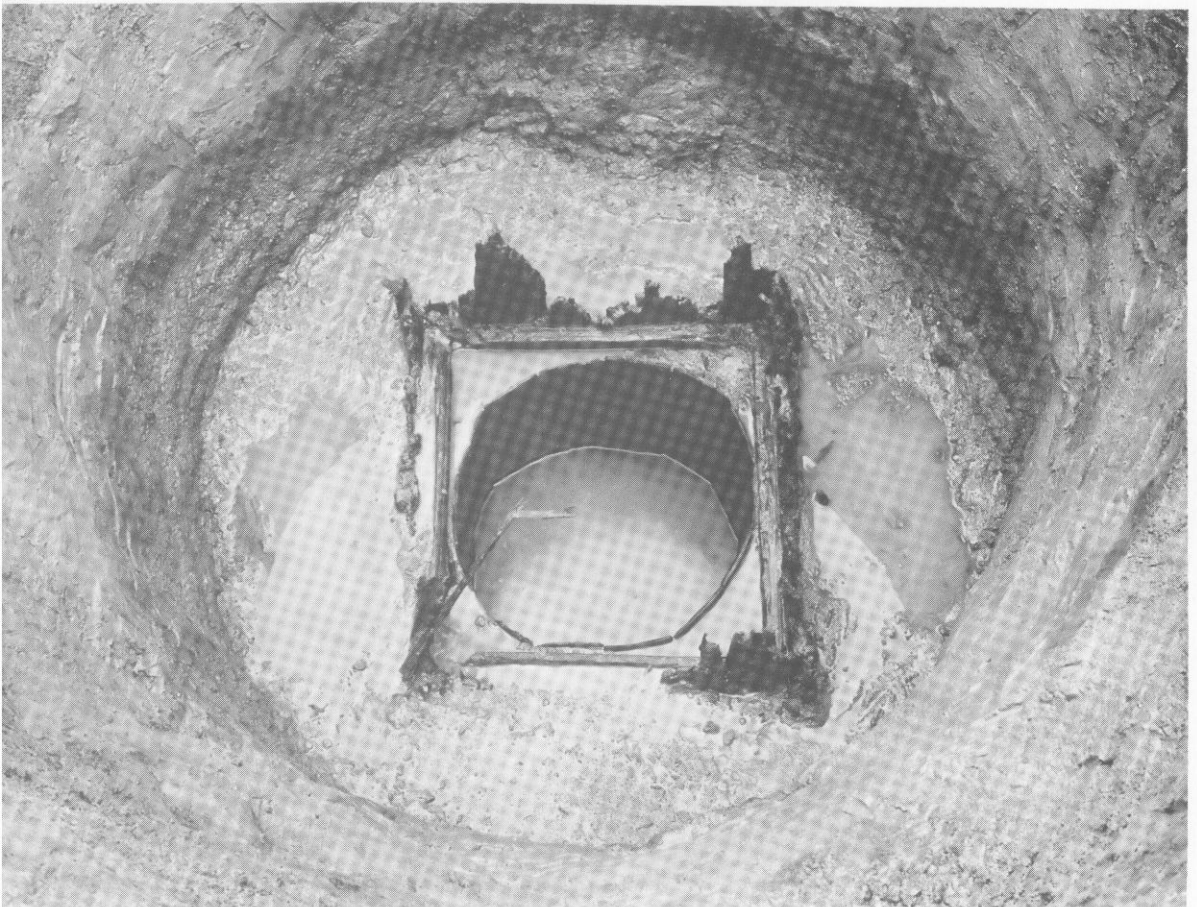




図版20

(上)第5トレンチ全景(東から)

(下)SE1021井戸(南から)

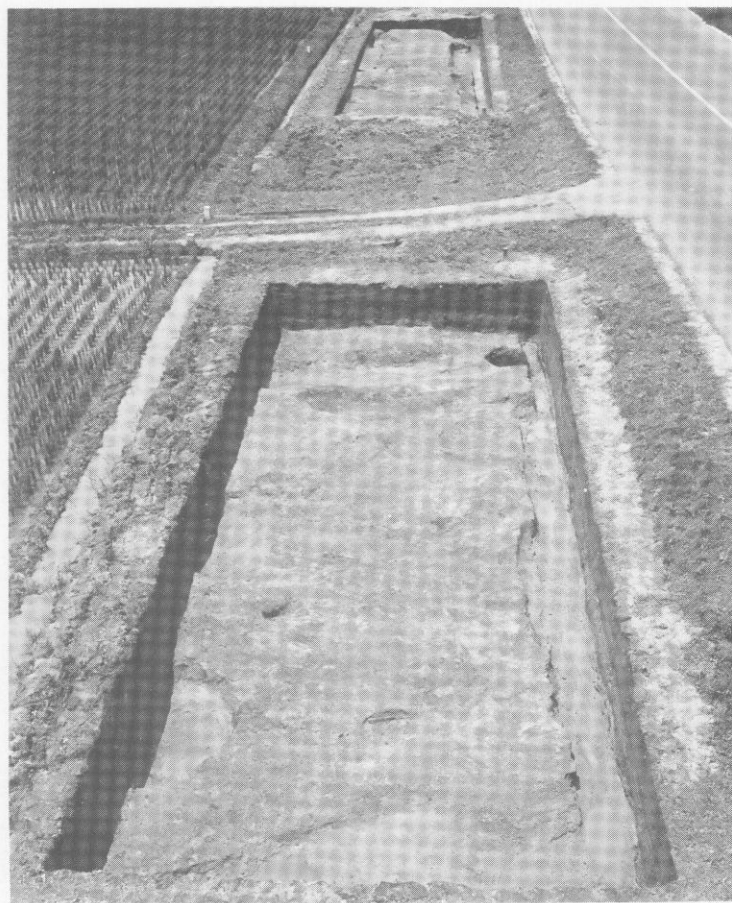


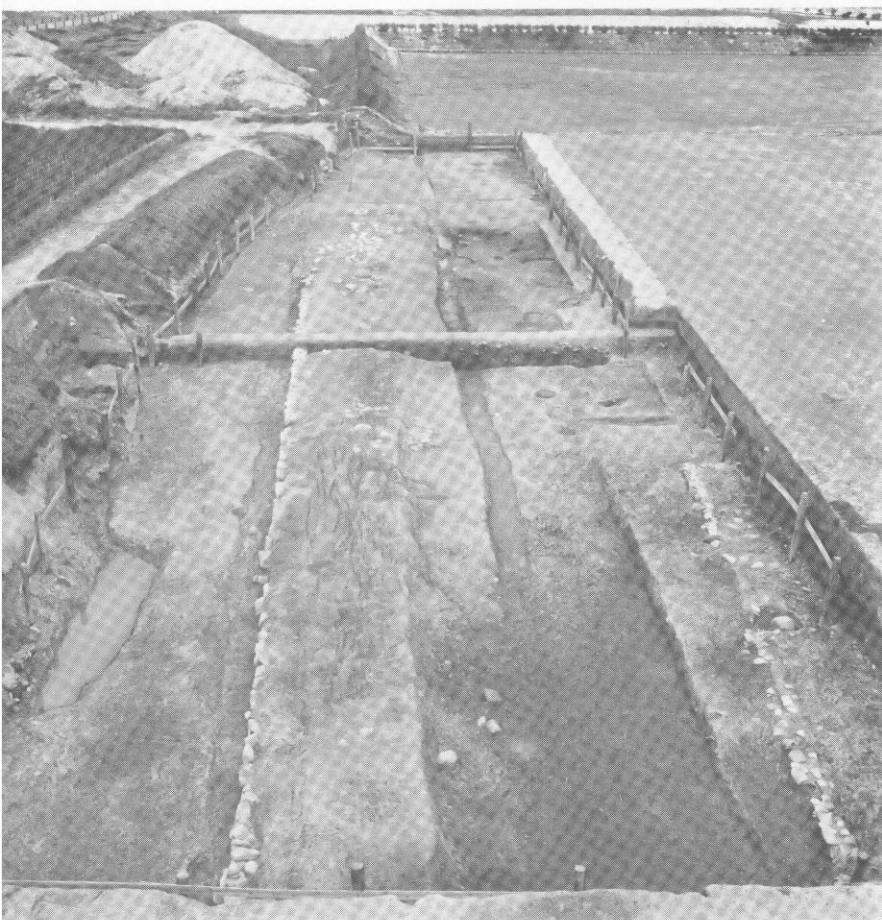
図版21

第6・7トレンチ全景(東から)



第9・10トレンチ全景(東から)

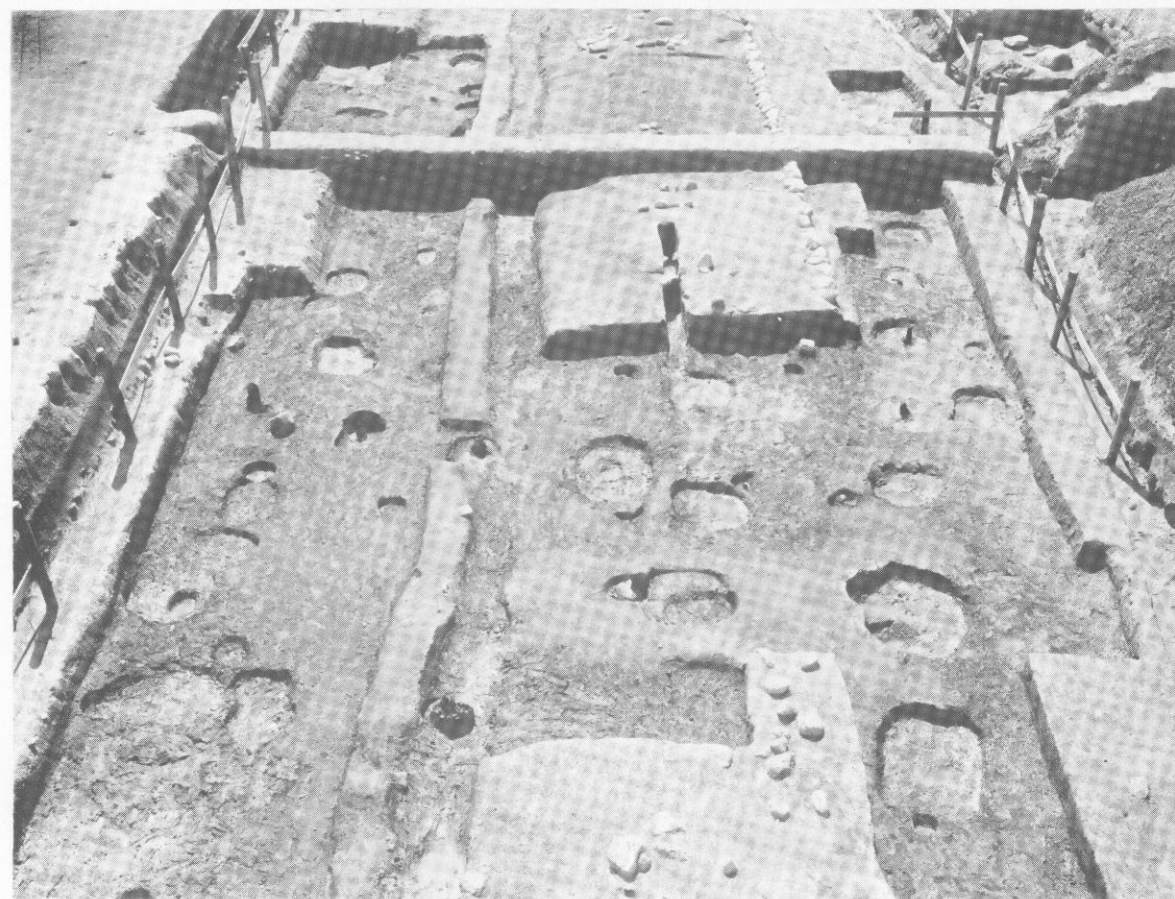




図版22

第41次調査区全景

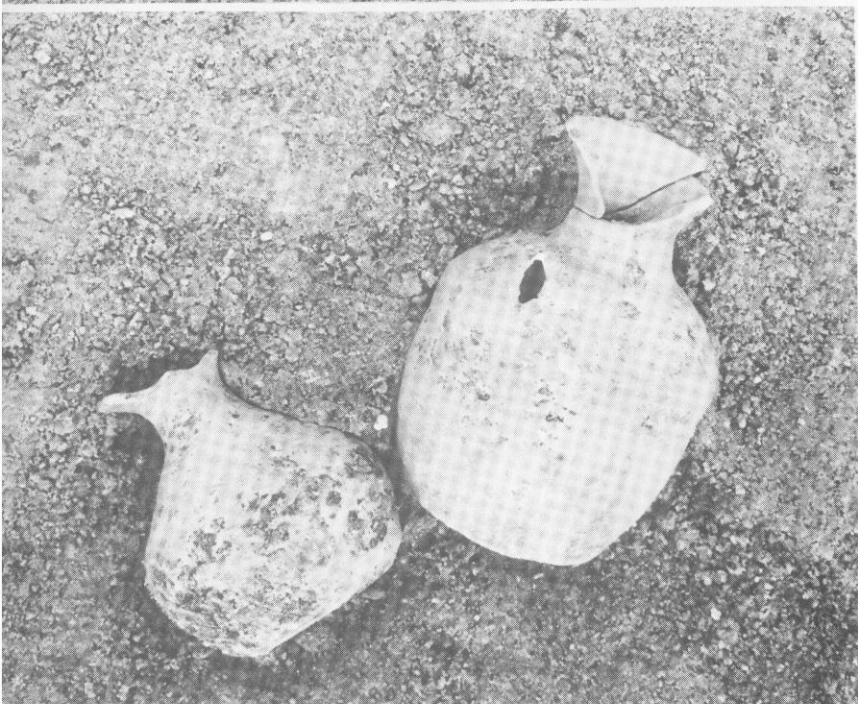
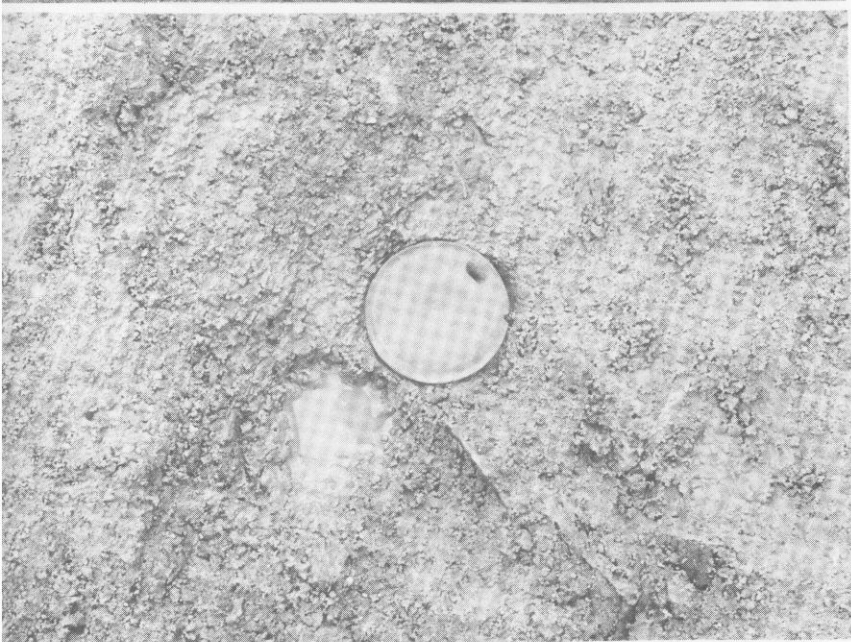
(上：北西から・下：西から)

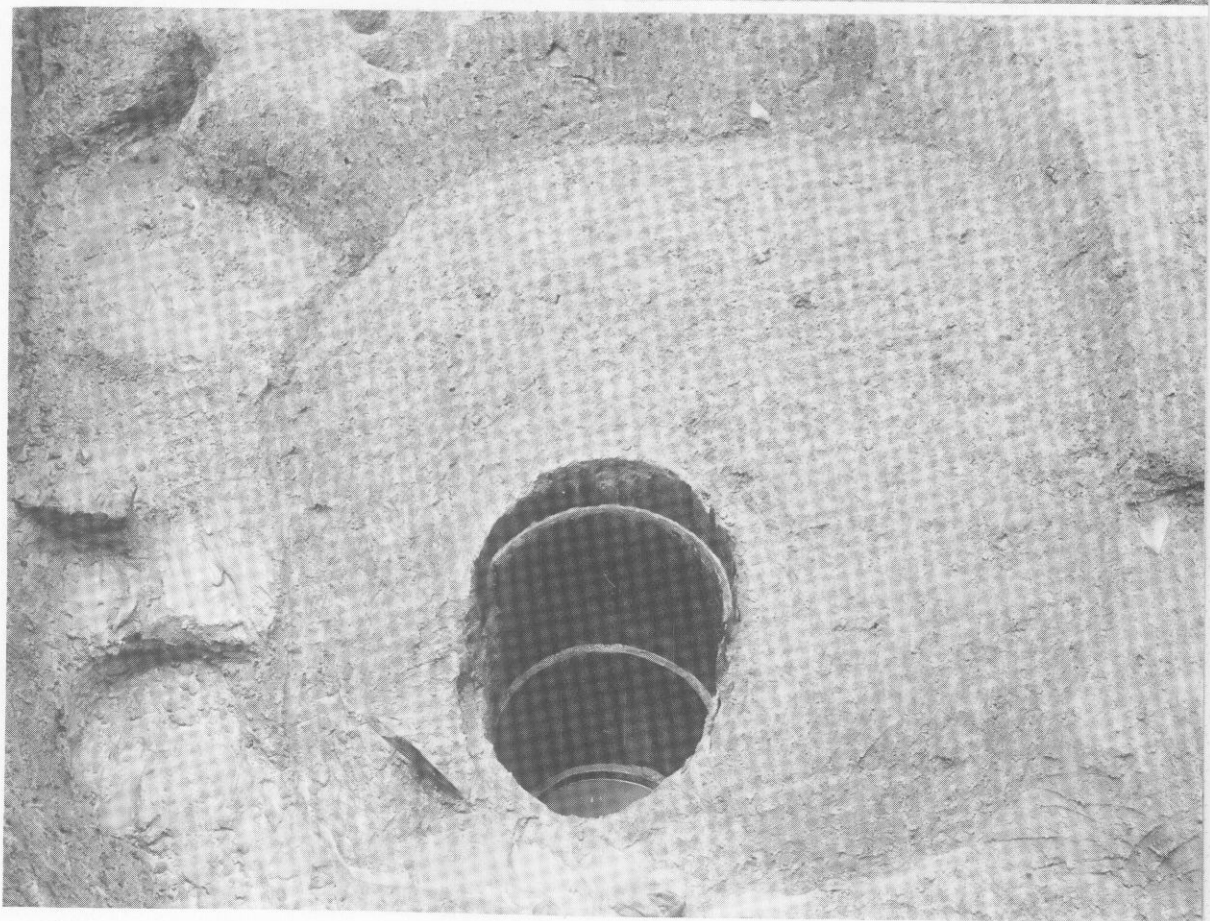


図版23 (上) SX 1061(南から)・(下) SA 1064・1065柵(東から)

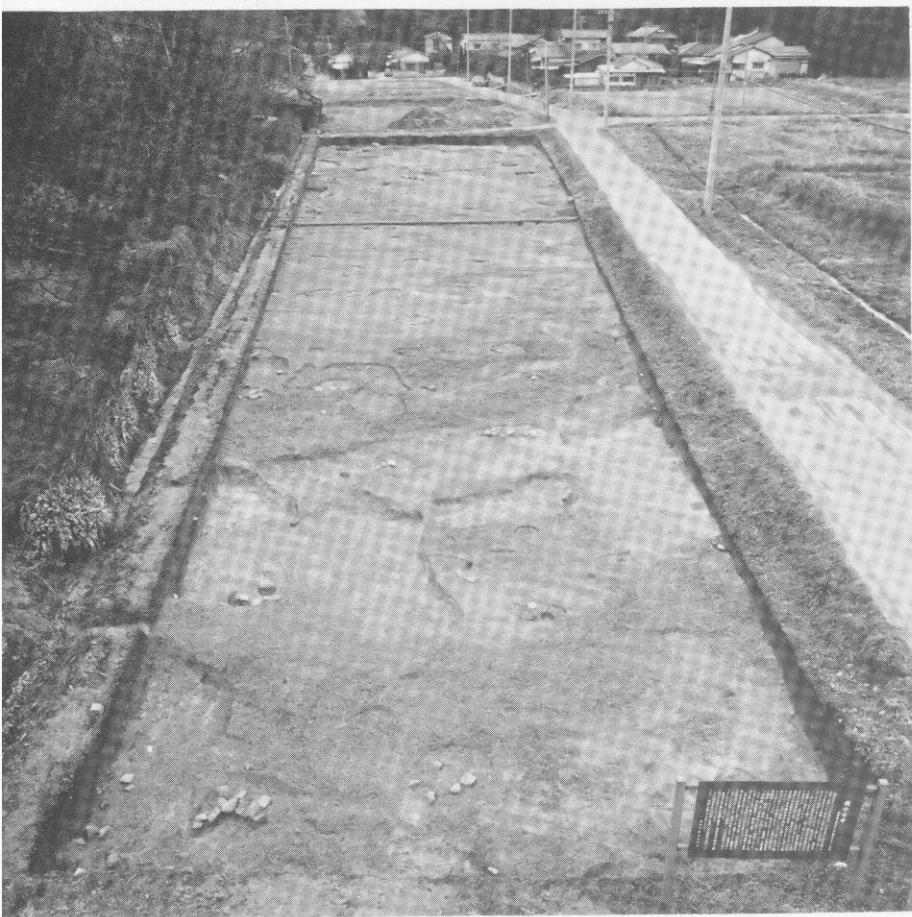
图版24

遺物出土狀態





図版25 (上)第42次調査区全景(北から)・(下)SE 1070井戸



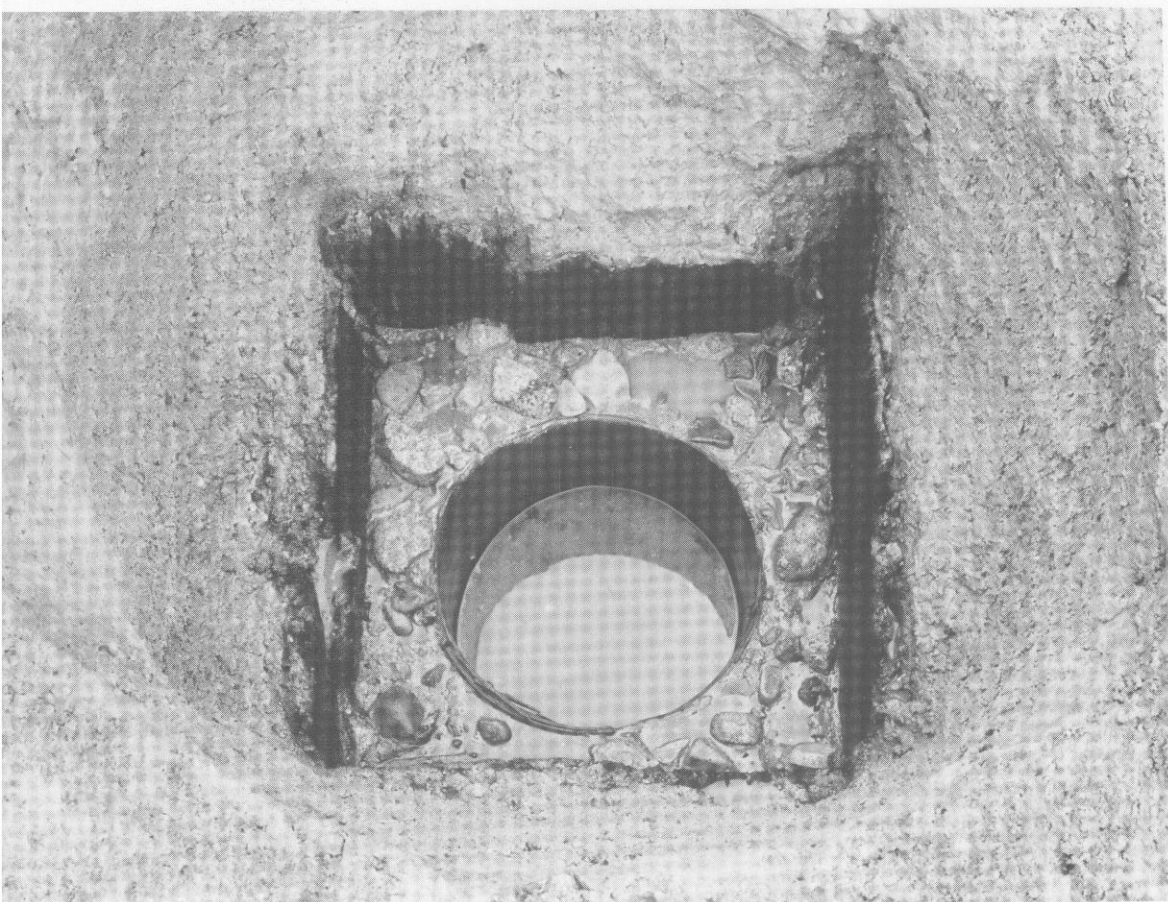
図版26

第43次調査区全景

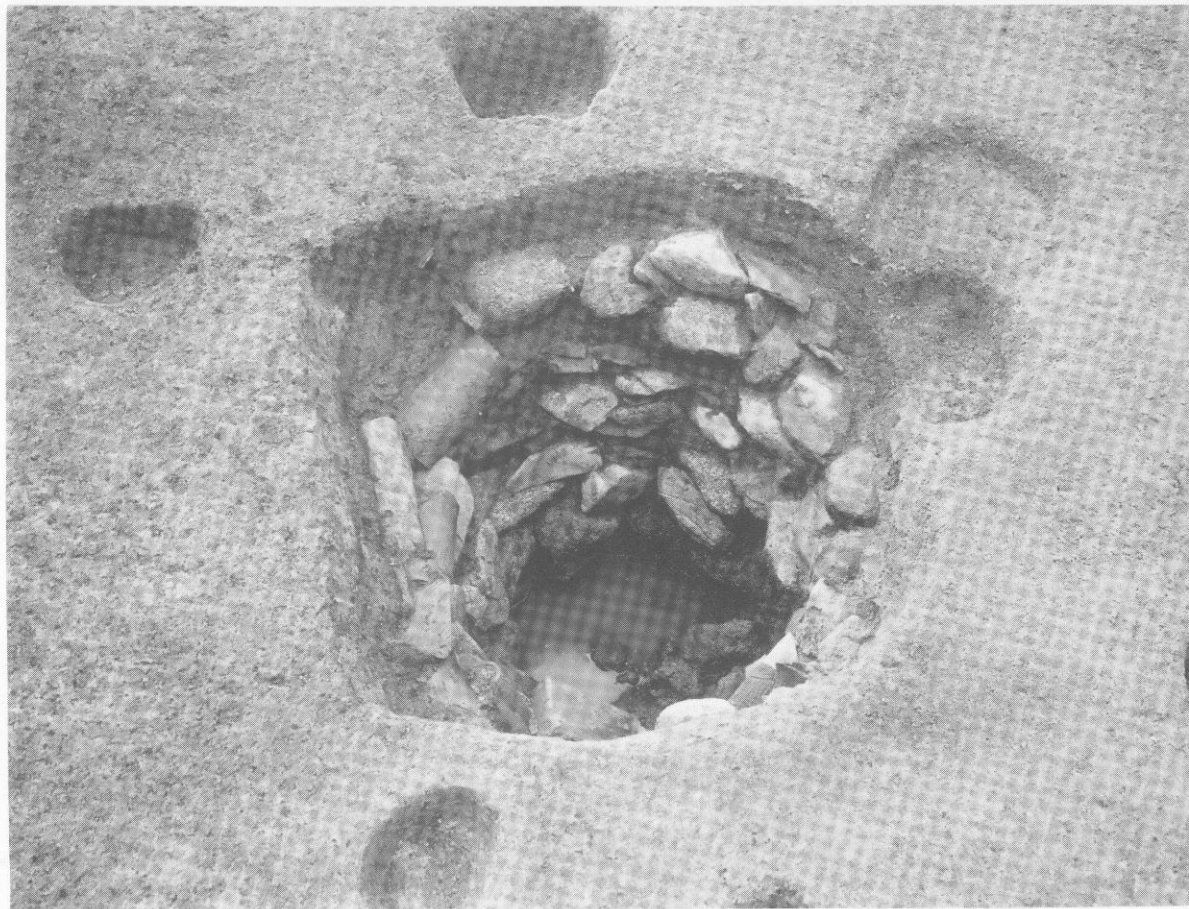
(上：西から・下：東から)



図版27 SB1080建物(上：西から・下：北から)



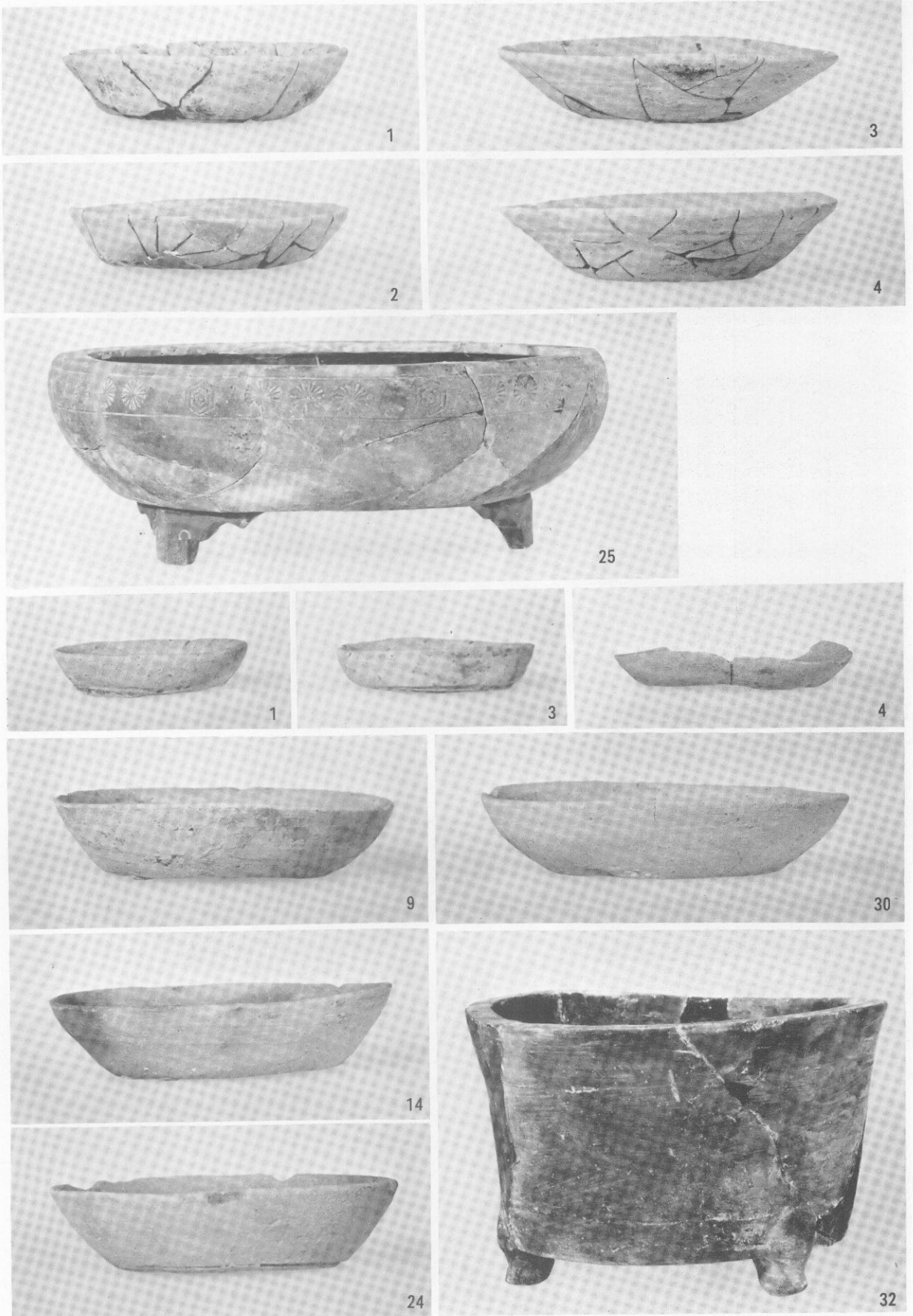
図版28 SE 1081井戸 |上：埋土中の土器・下：井戸枠(西から)|



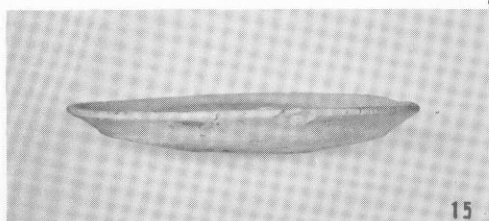
図版29 (上) SE 1082井戸(東から)・(下) SE 1083井戸(東から)



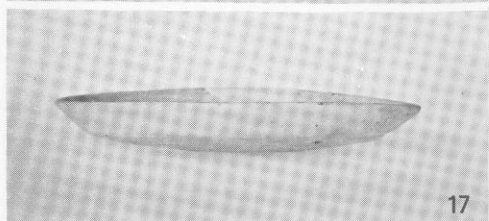
図版30 (上)SB 1080建物の礎石(北から)・(下)SK 1084土壇・土器出土状態



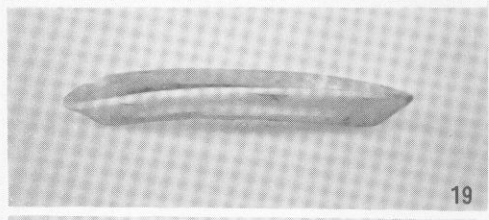
図版31 第38次調査 灰褐土層、S X 803、S K 830土壇出土土器(25は1/3、他は1/2)



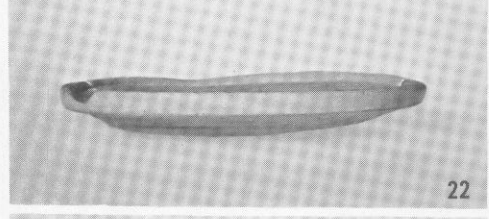
15



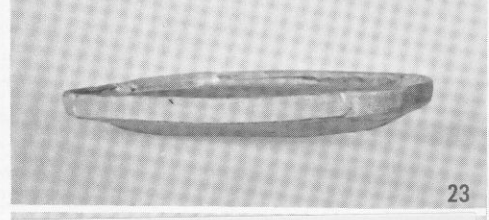
17



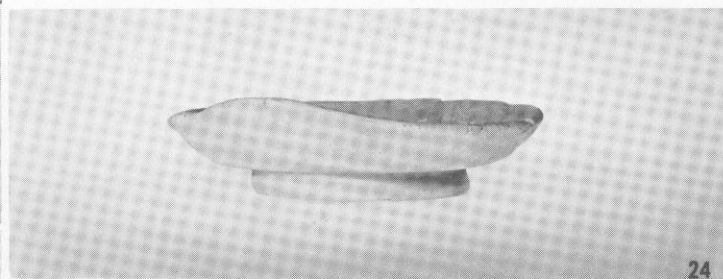
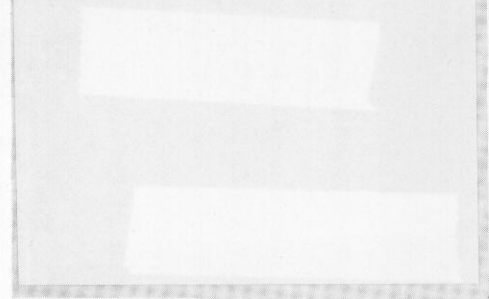
19



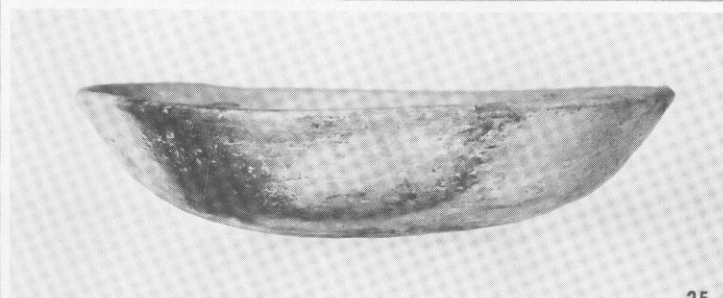
22



23



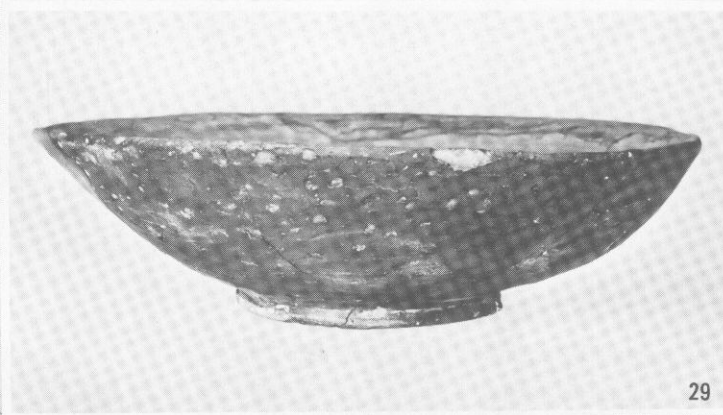
24



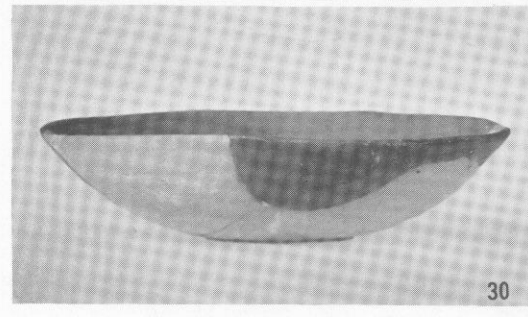
25



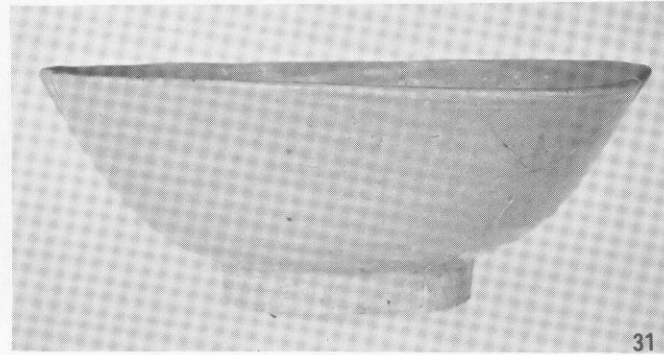
28



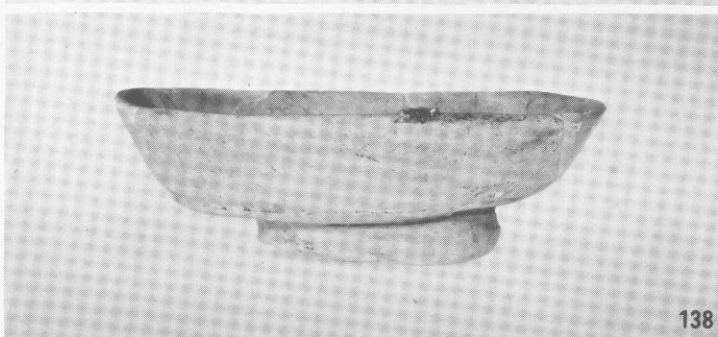
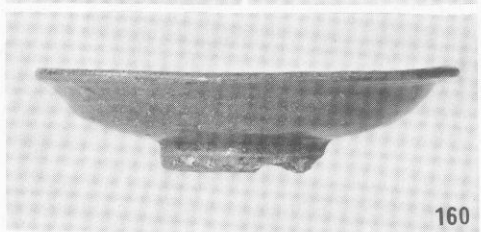
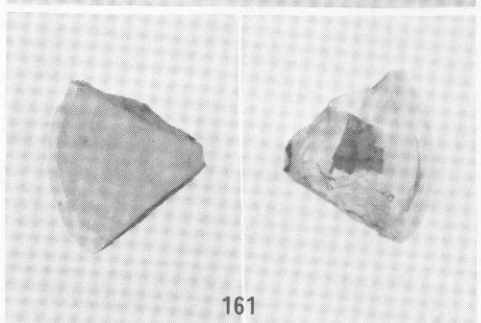
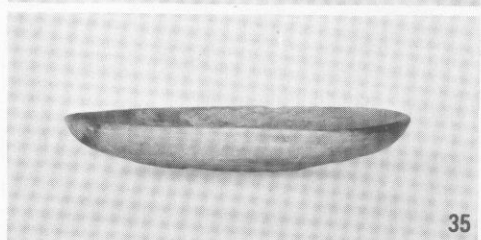
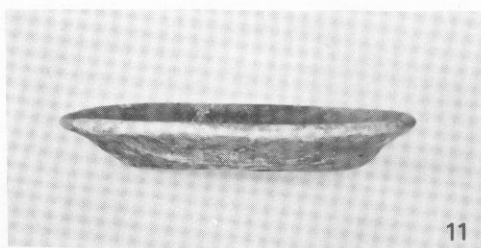
29

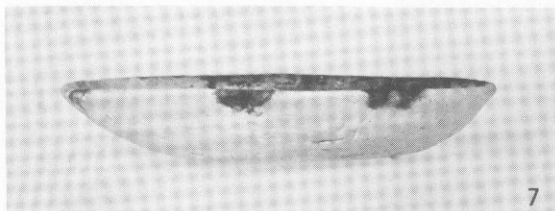


30

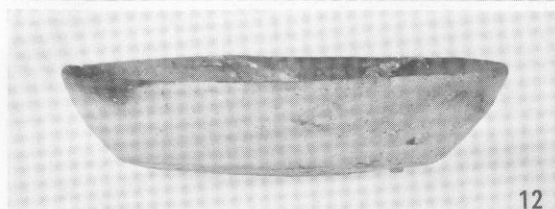


31

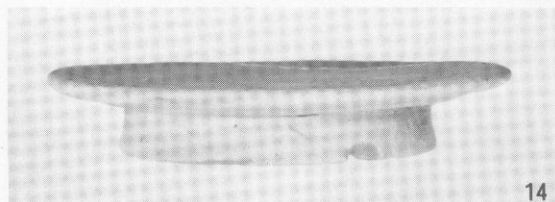




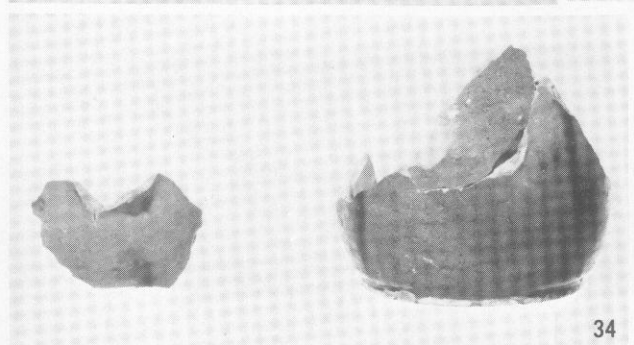
7



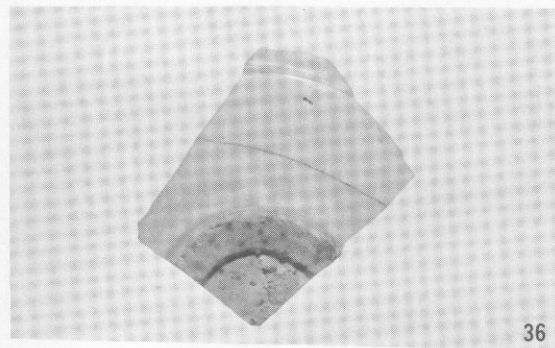
12



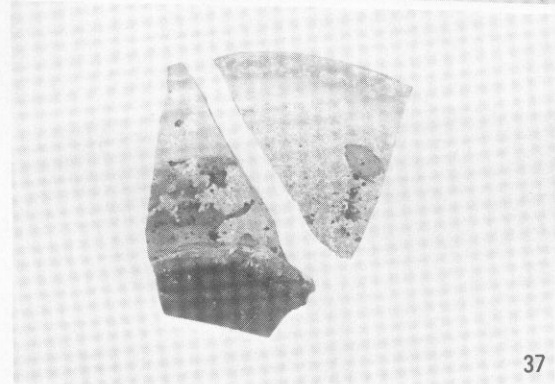
14



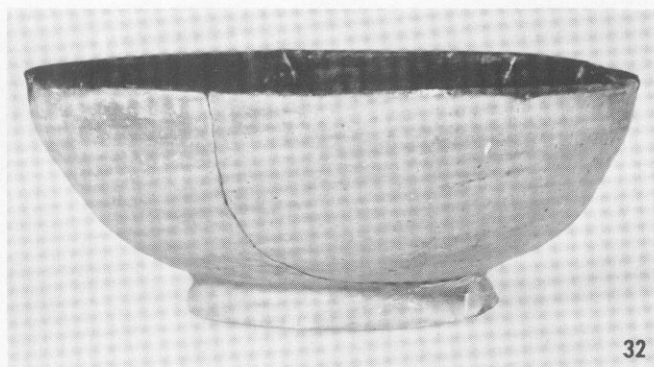
34



36



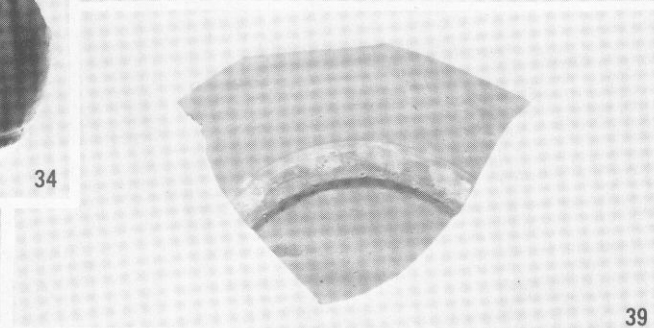
37



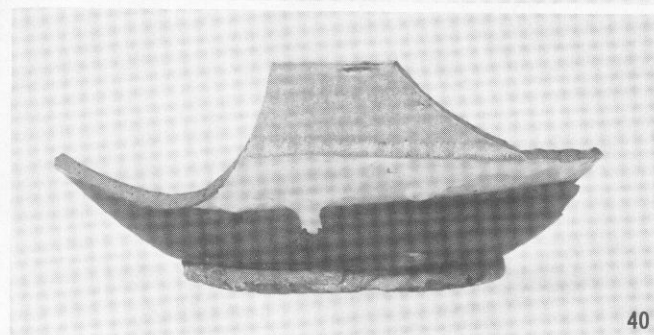
32



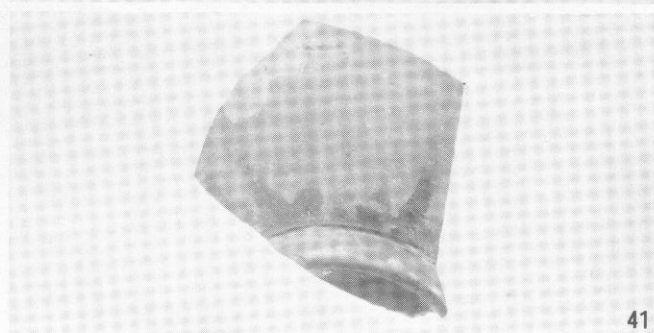
36



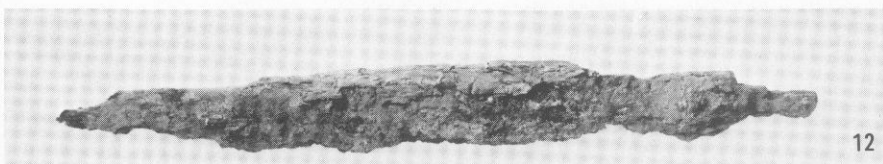
39



40



41



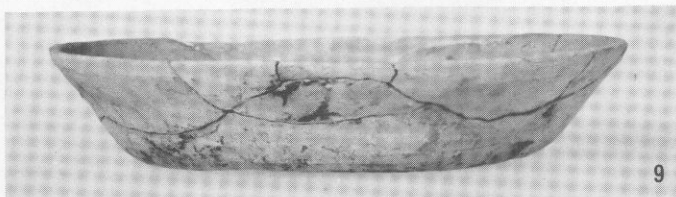
12



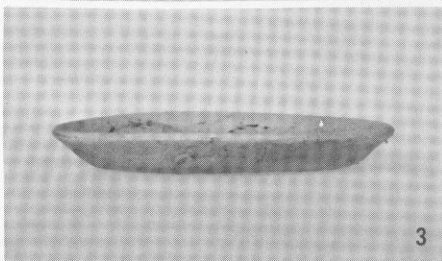
13



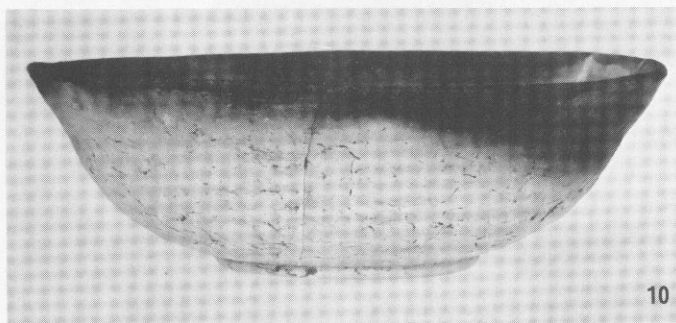
7



9



3



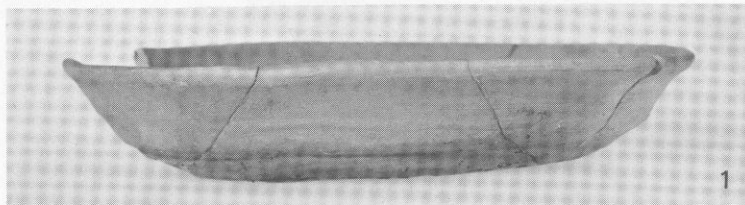
10

図版35

第38次調査 SX863木棺墓・
SX864木蓋土塚墓出土遺物(1/2)



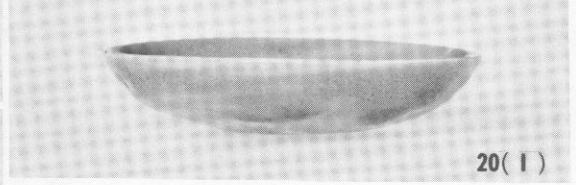
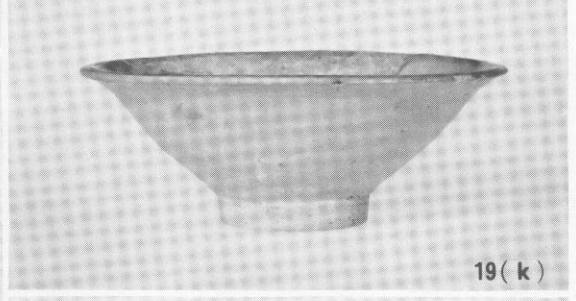
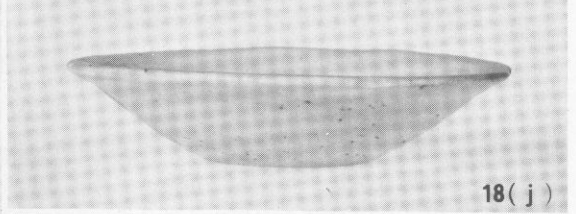
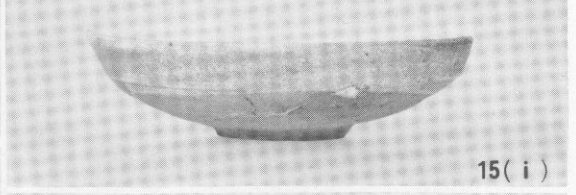
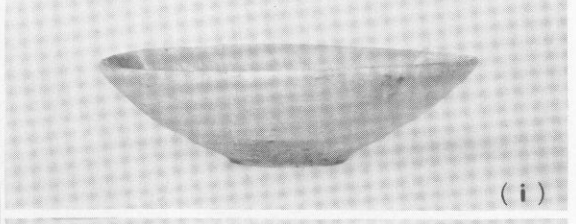
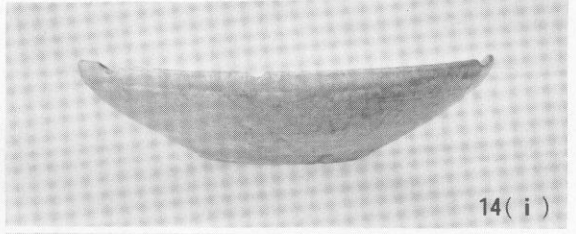
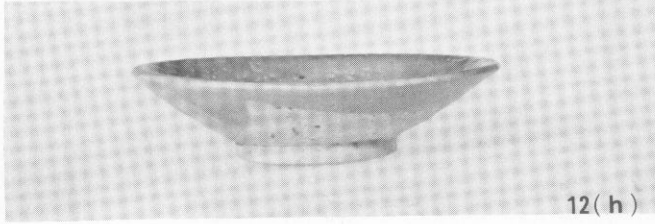
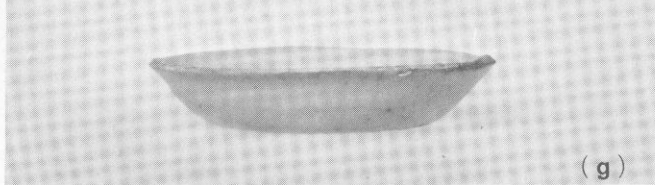
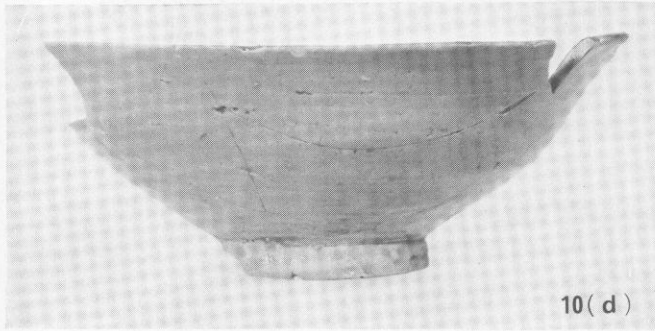
11



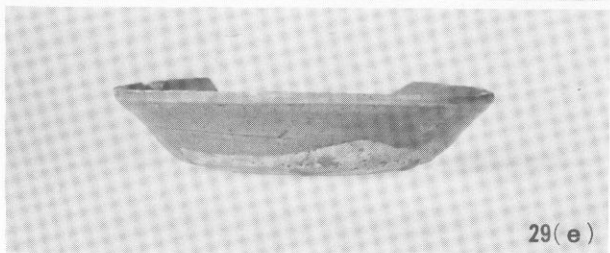
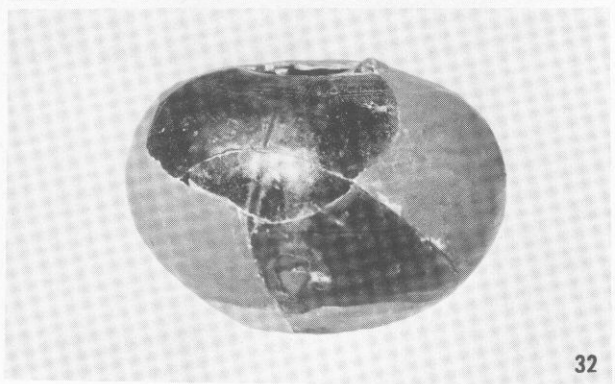
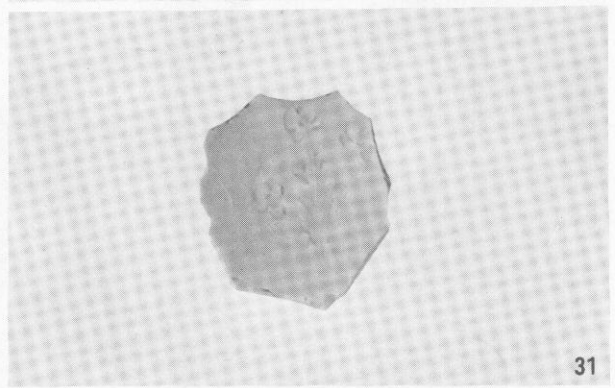
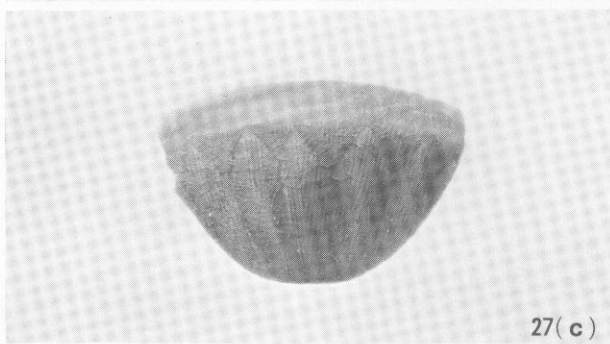
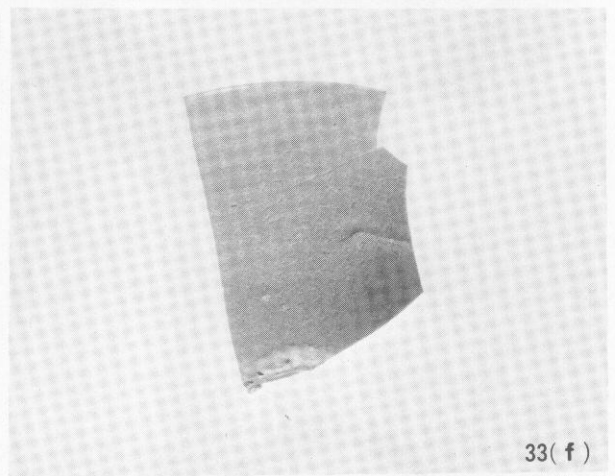
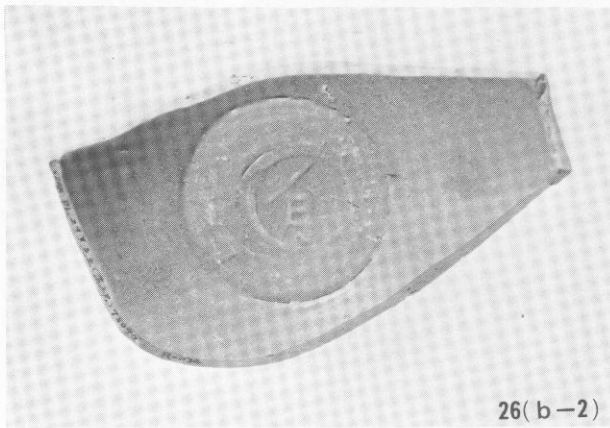
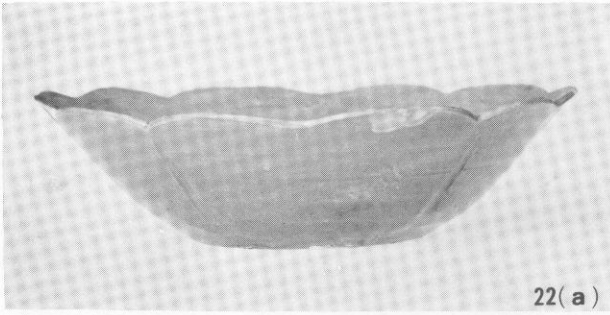
1

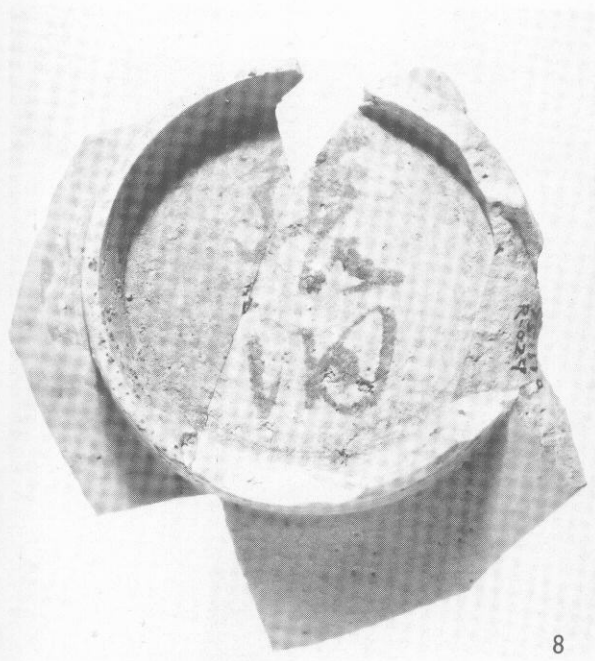


2



図版36 第38次調査 出土陶磁器(1/2)

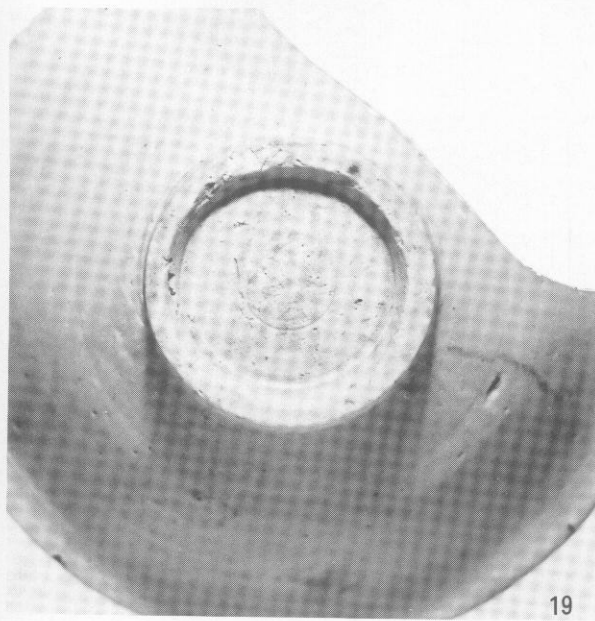




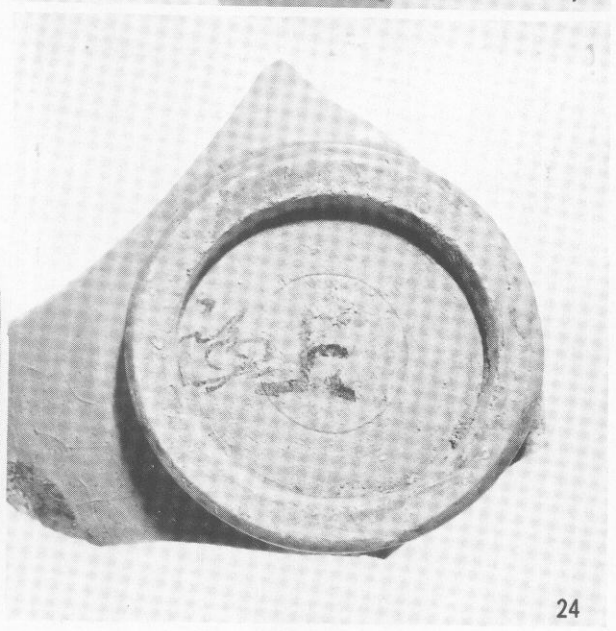
8



7

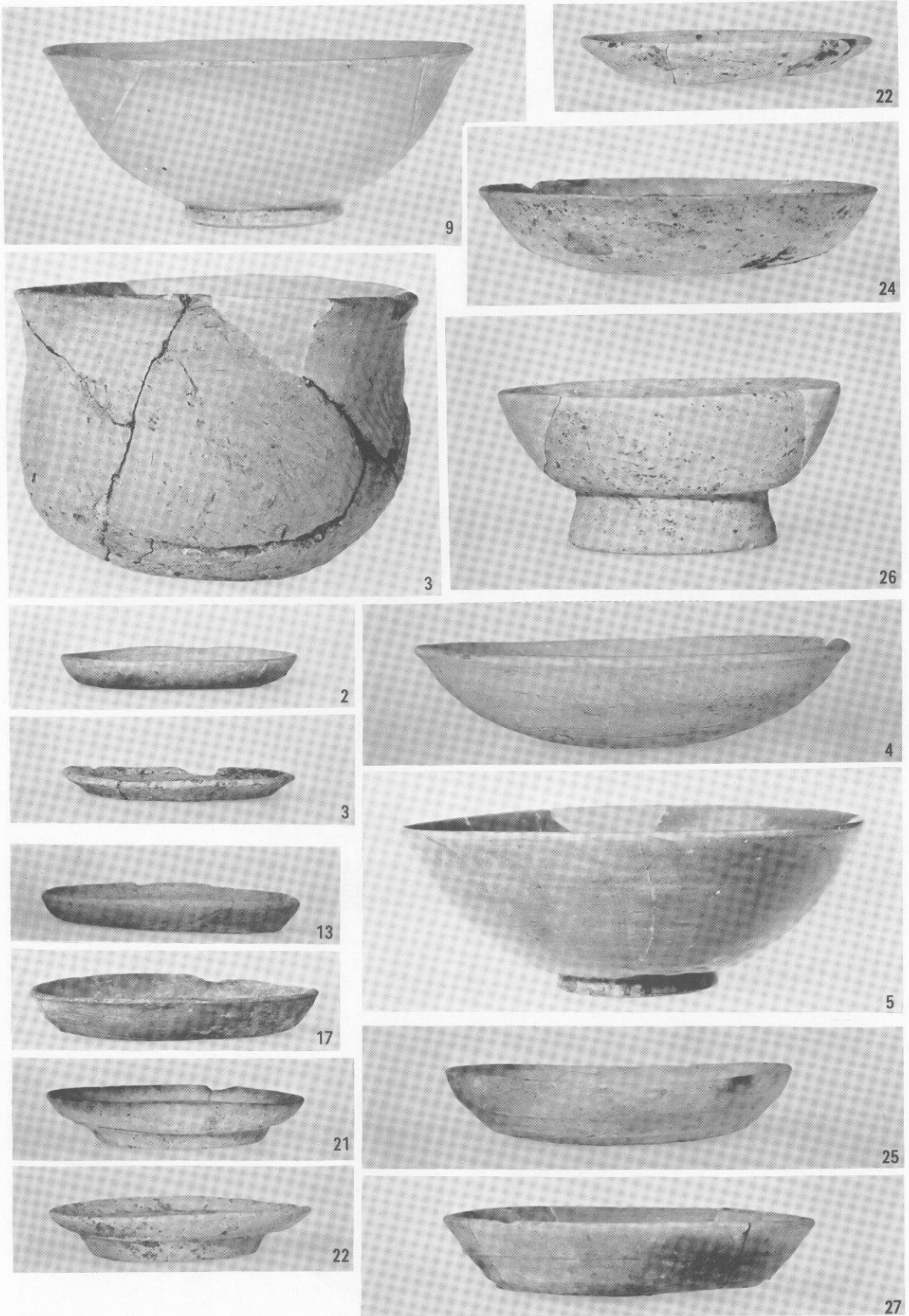


19

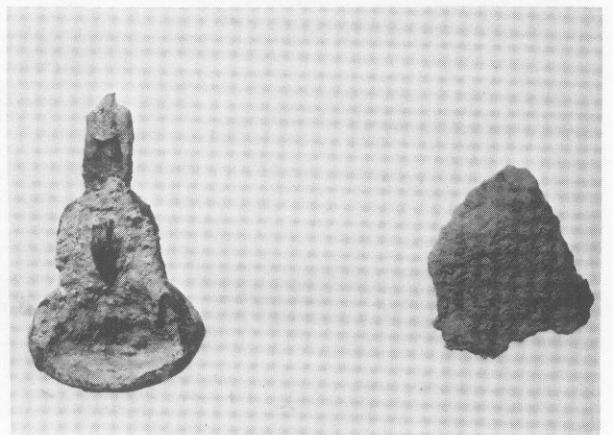
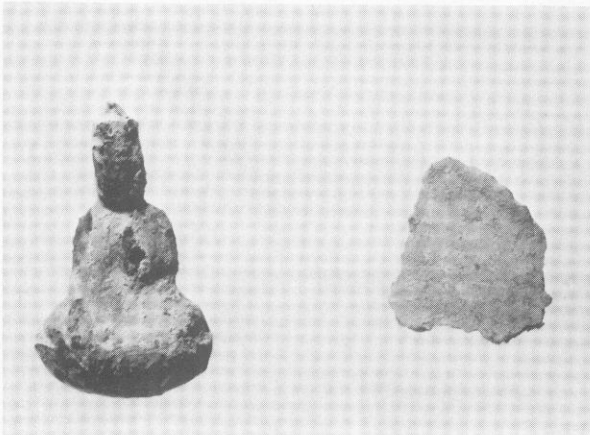
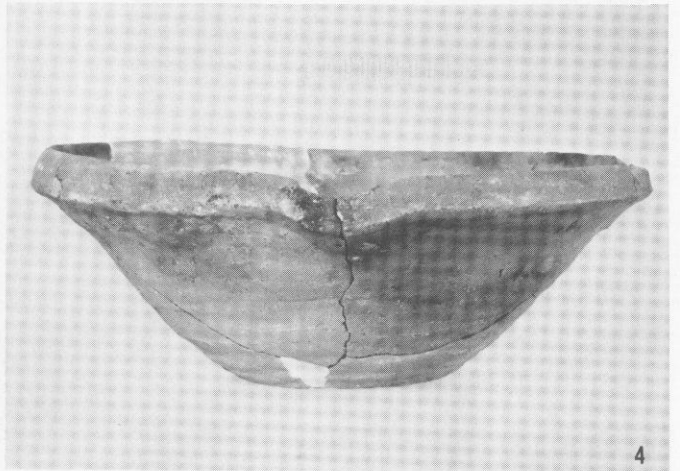
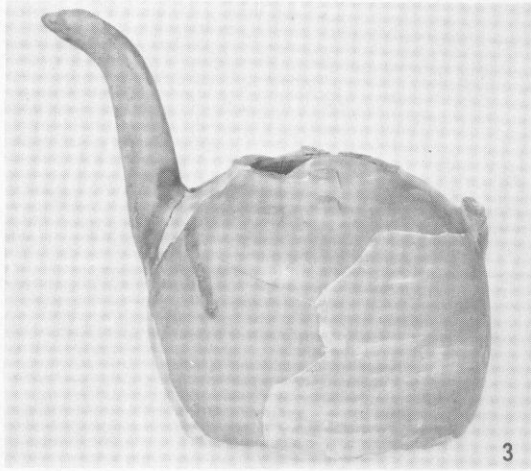


24

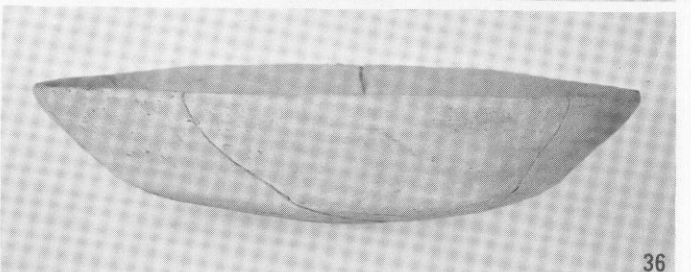
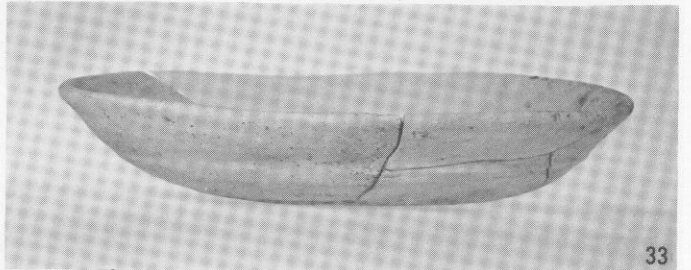
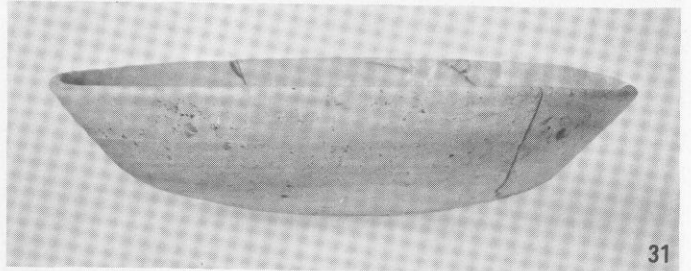
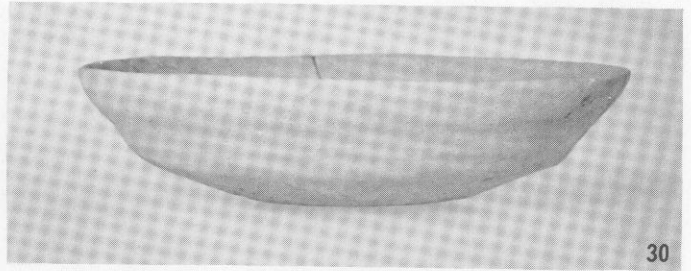
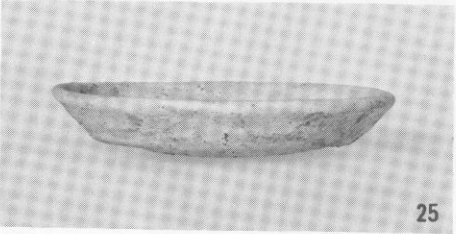
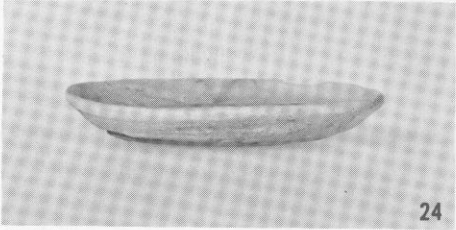
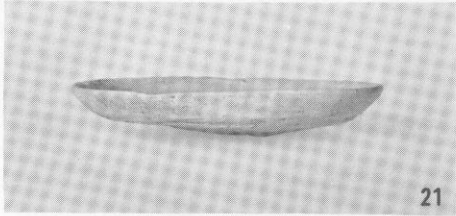
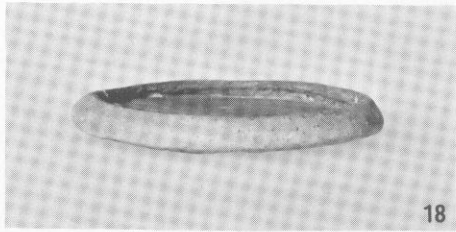
図版38 第38次調査 出土陶磁器の墨書銘(1/1)



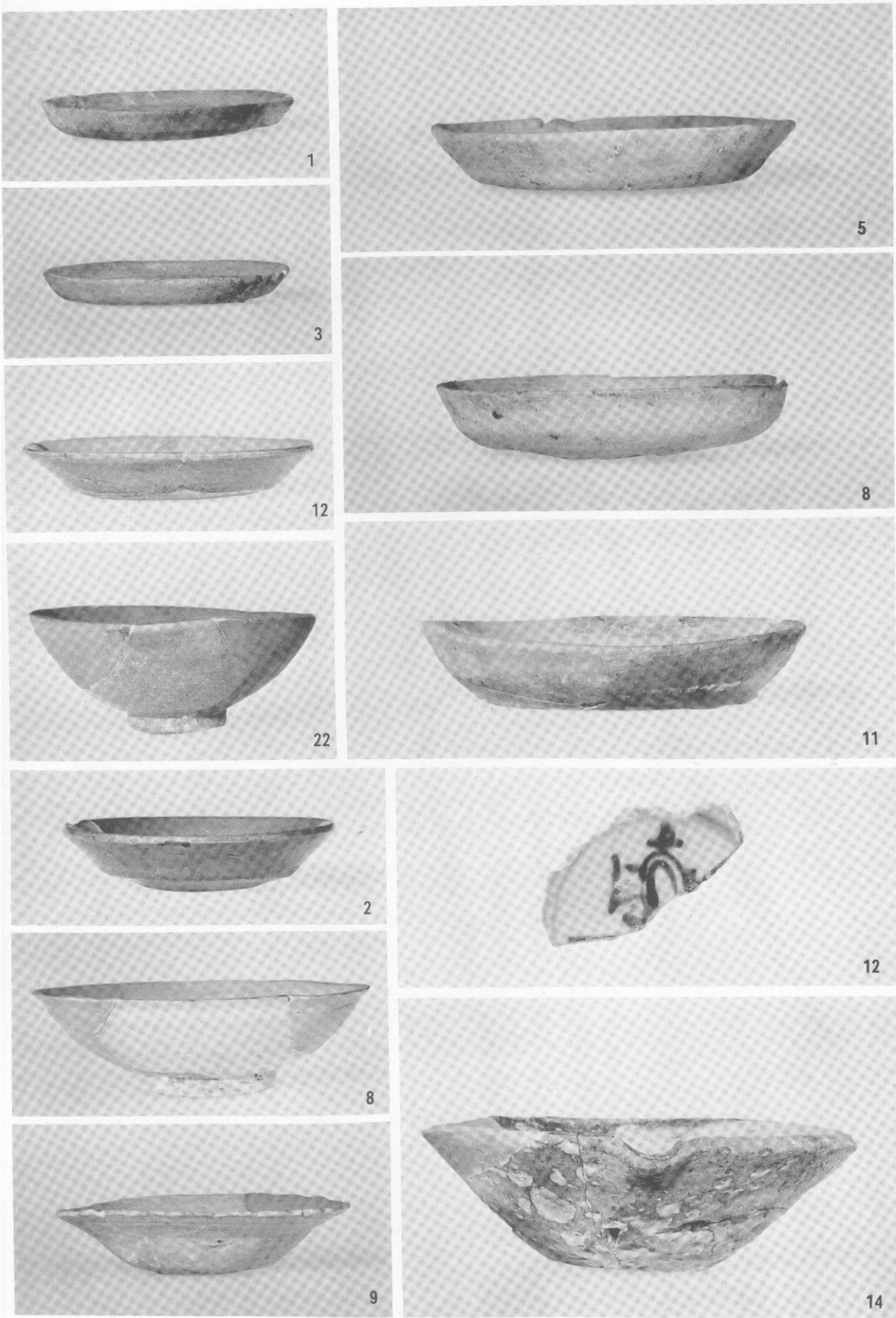
SK934(9) SD892(3)SD939 (22・24・26) SK926(13・17・21・22・25・27)



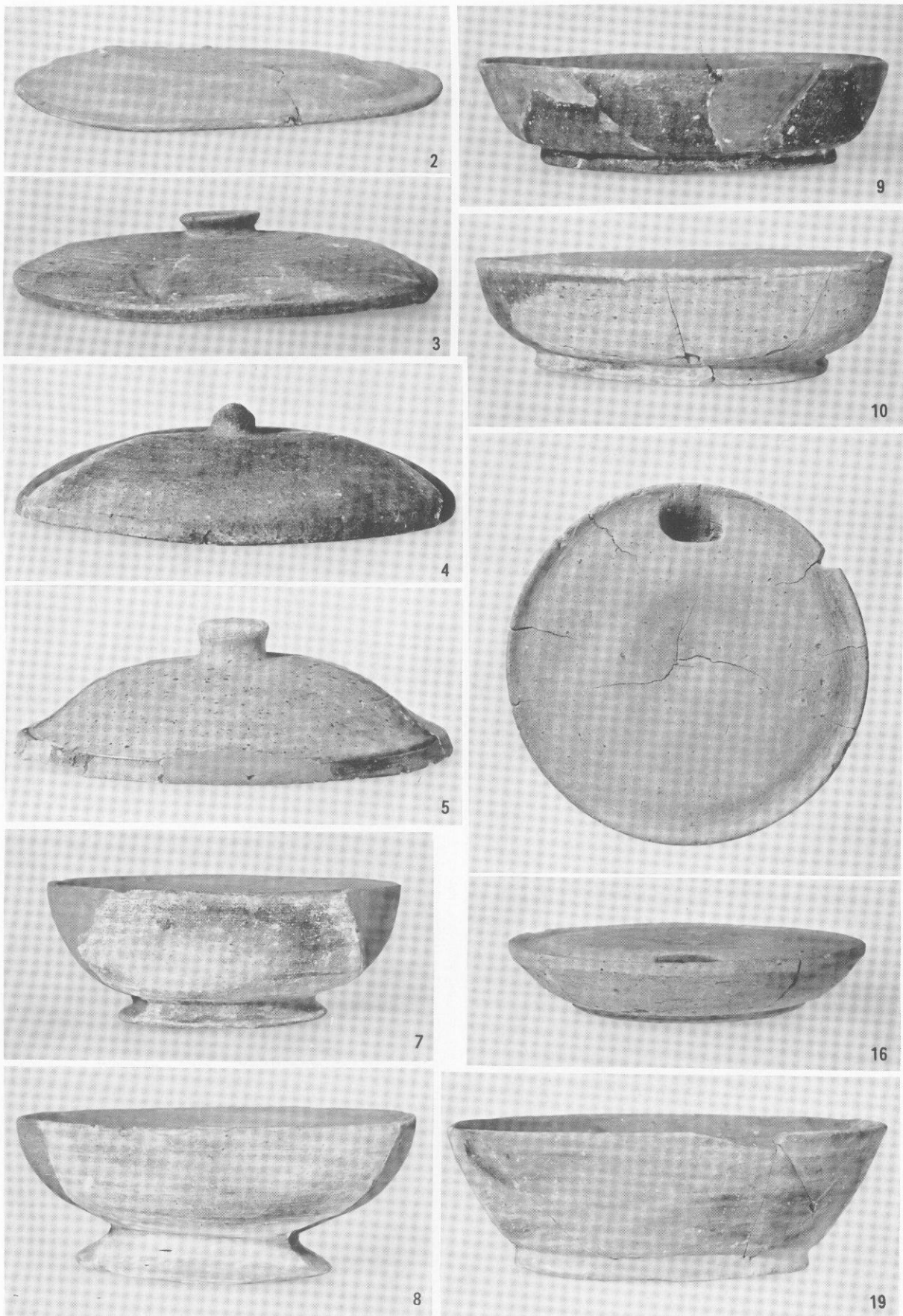
図版40 第39-2次調査 出土遺物(2・3・13…1/2、4…1/3、他は1/1)



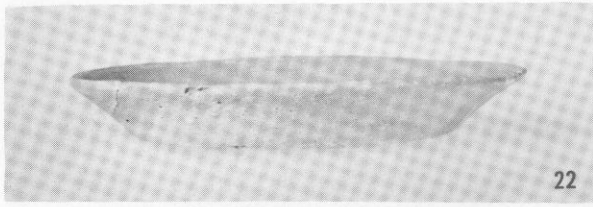
図版41 第39-3次調査
SK976土坑出土土器(1/2)



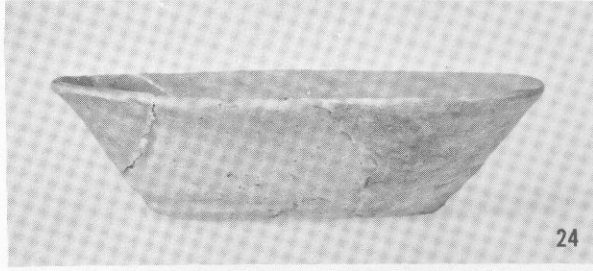
SK954(1・3・12・5・8・11) SK956(2) SK960(2)陶磁器(8・9・12・14)



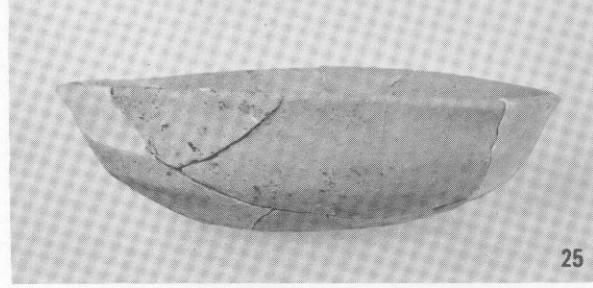
图版43 第41次調査 出土土器(1/2)



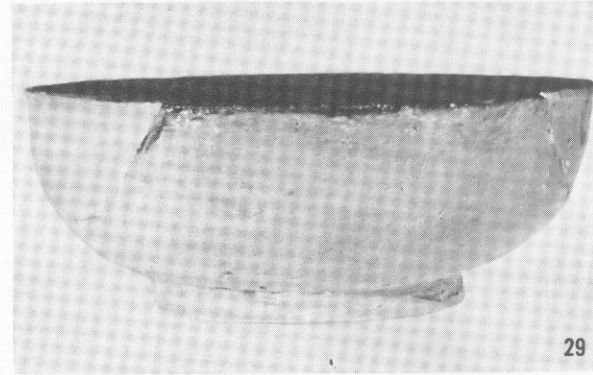
22



24



25



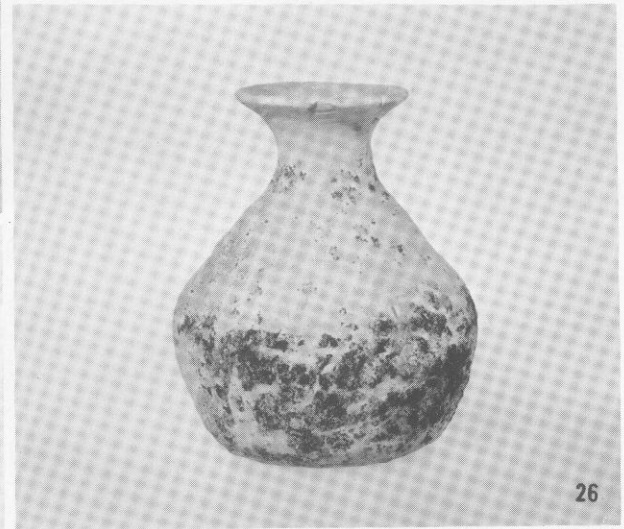
29



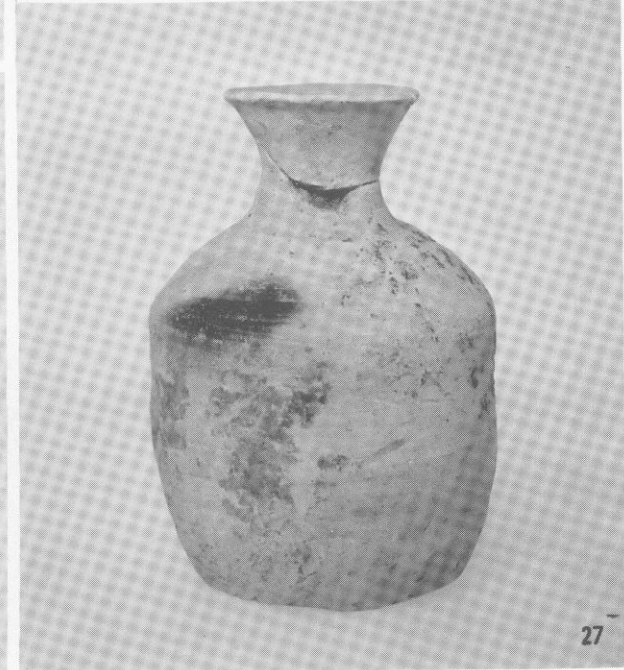
28



21

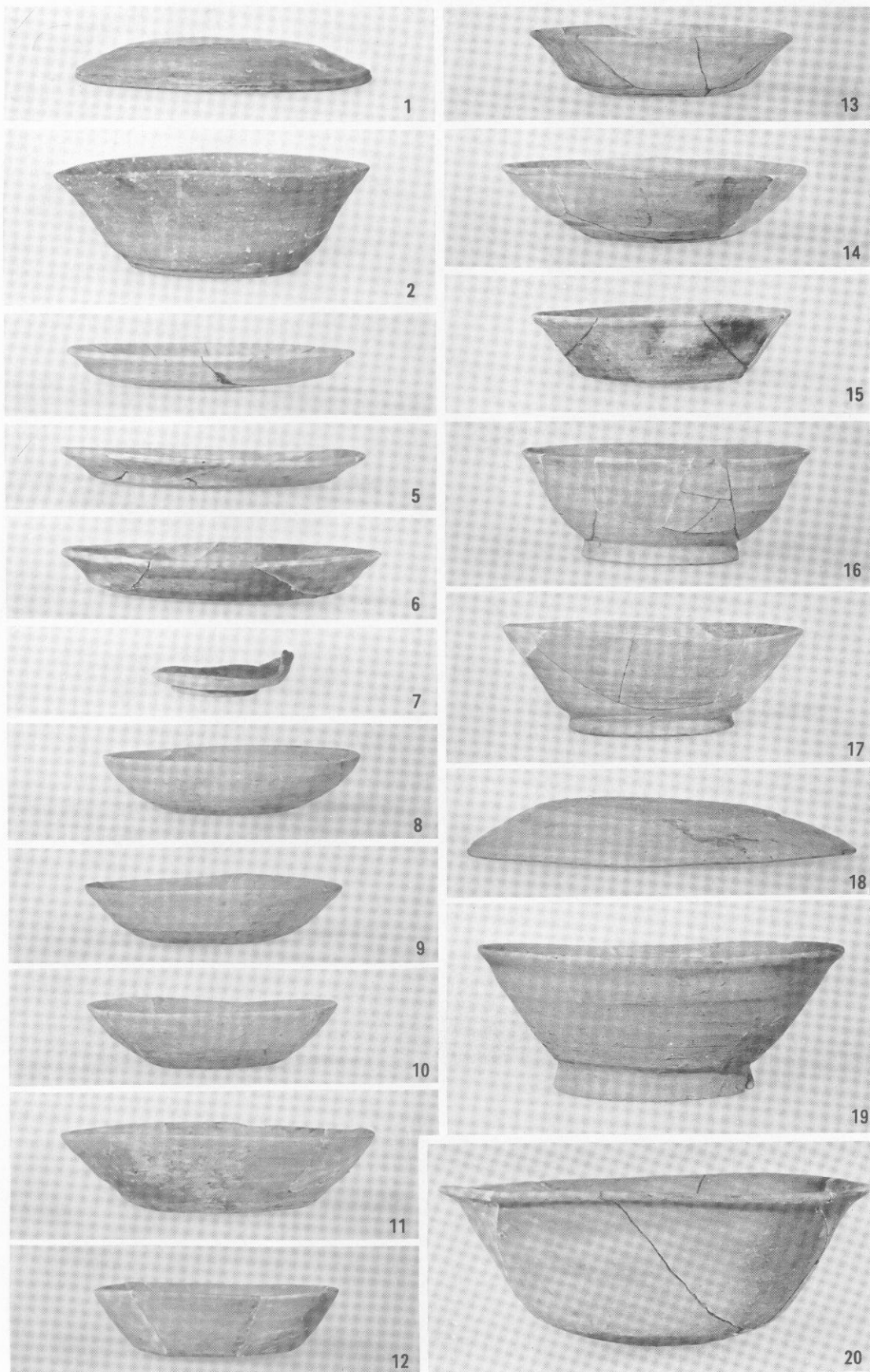


26

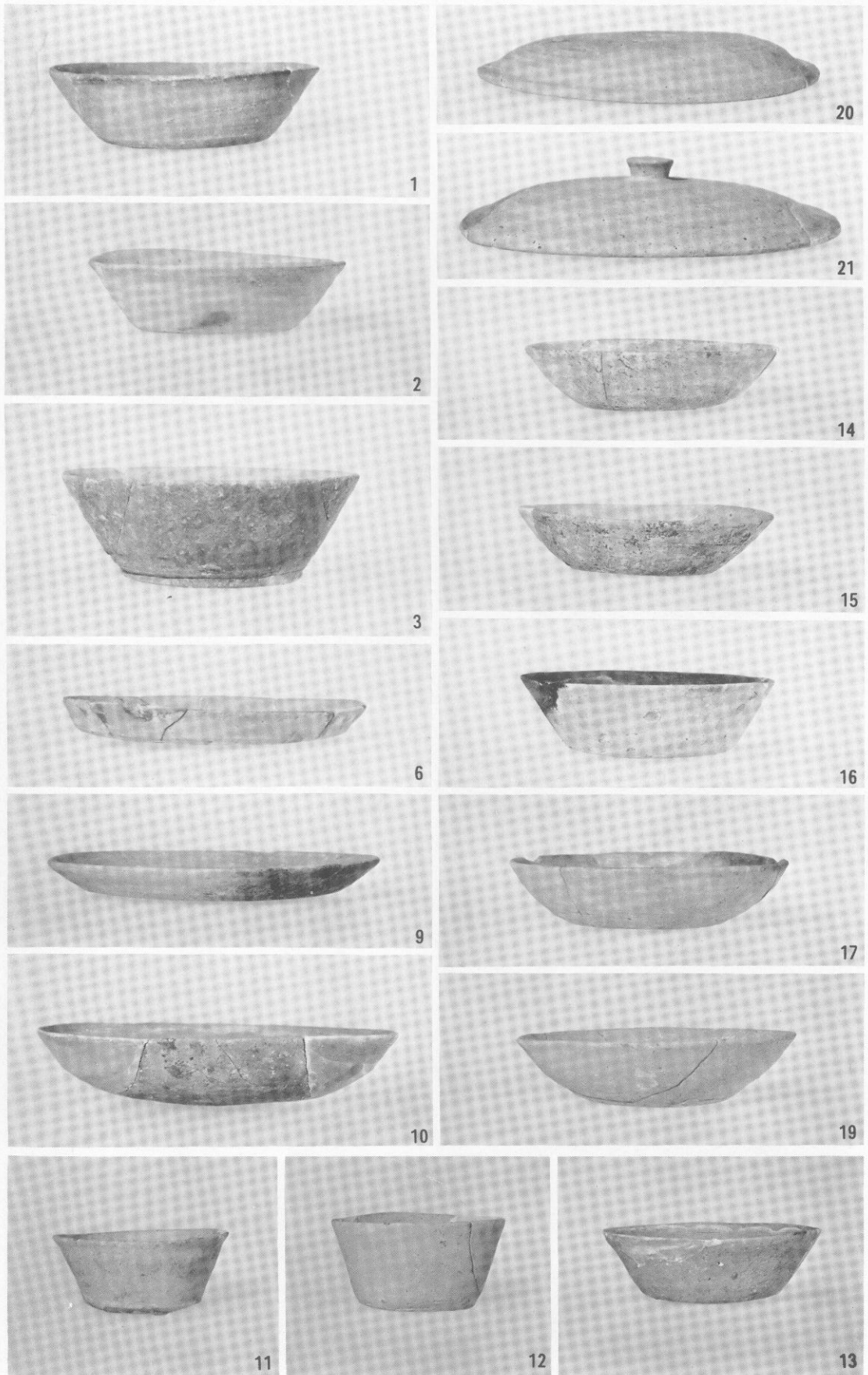


27

図版44 第41次調査 出土土器(22・24・25・29…1/2、21・26～28…1/3)



図版45 第43次調査 S E 1081井戸出土土器(1/3)



图版46 第43次調査 SK 1084 土埴出土土器



22



23

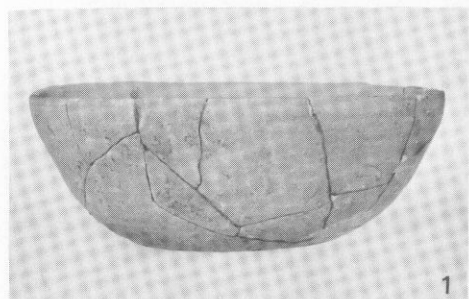


25



5

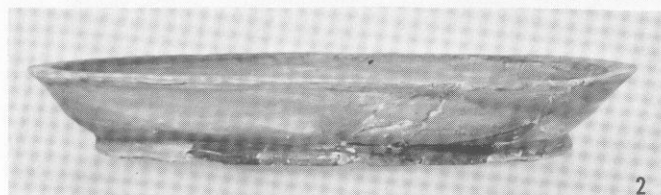
SK1084



1



3

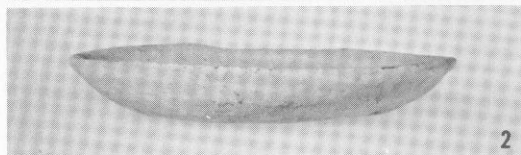


2

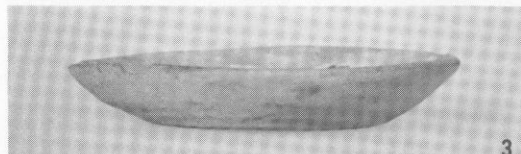
SK1106



1



2



3



4



5



7



9



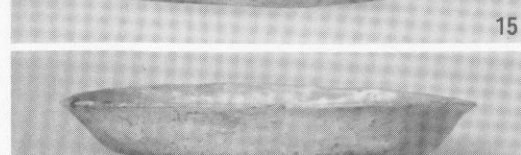
10



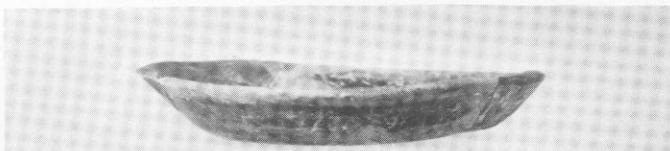
11



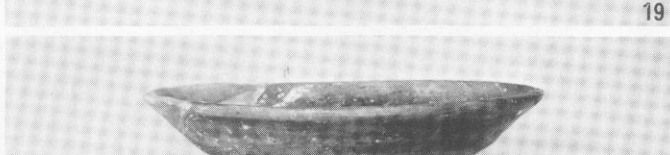
15



18



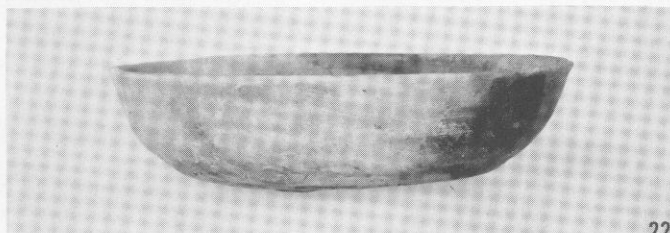
19



20



21



22



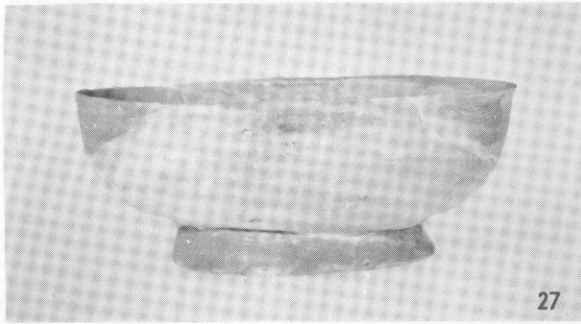
23



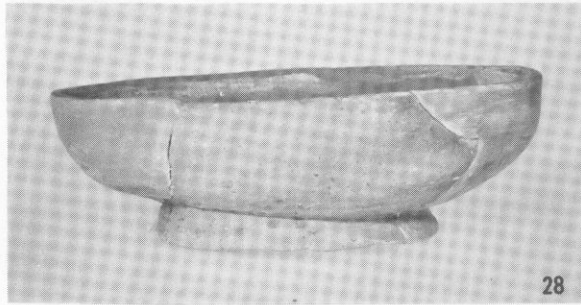
24



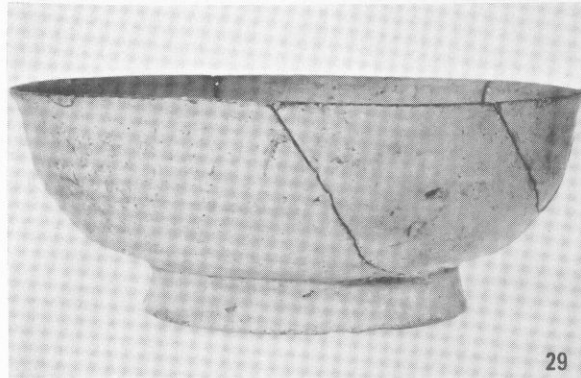
26



27



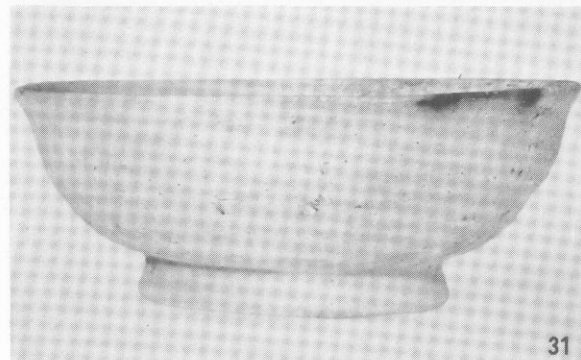
28



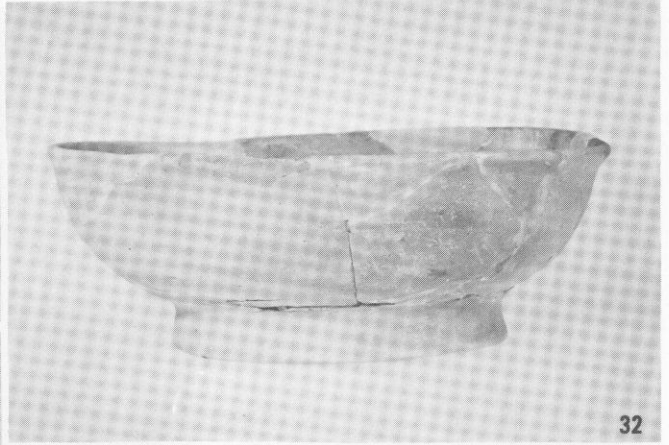
29



30



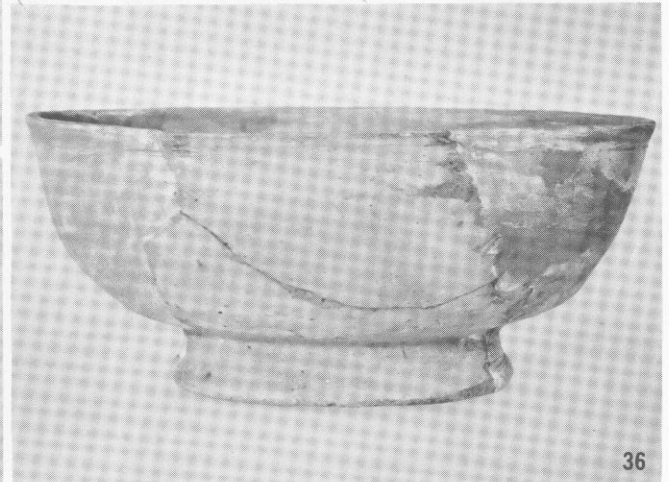
31



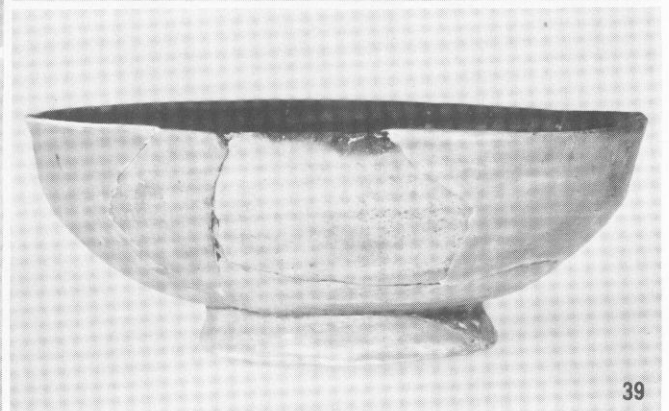
32



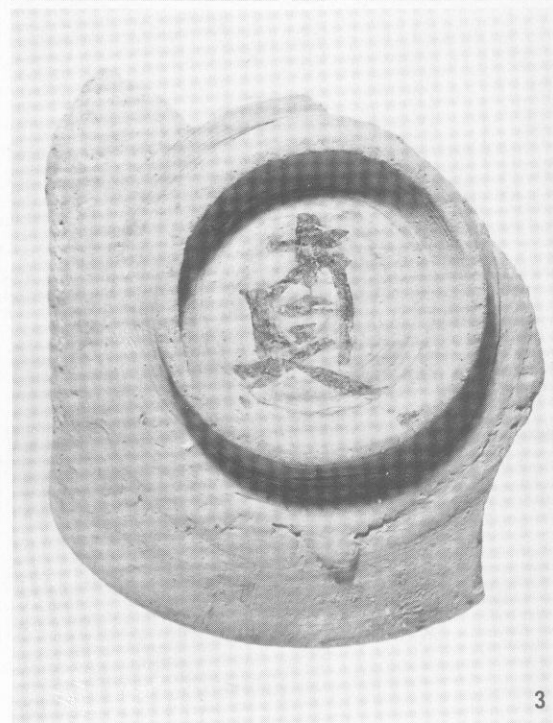
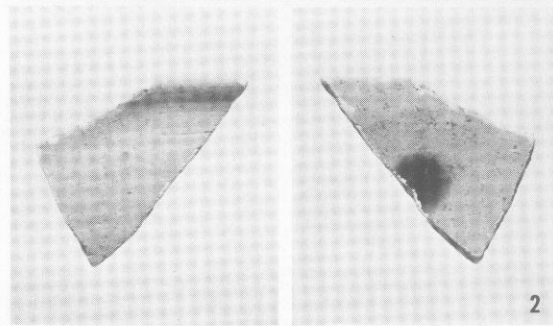
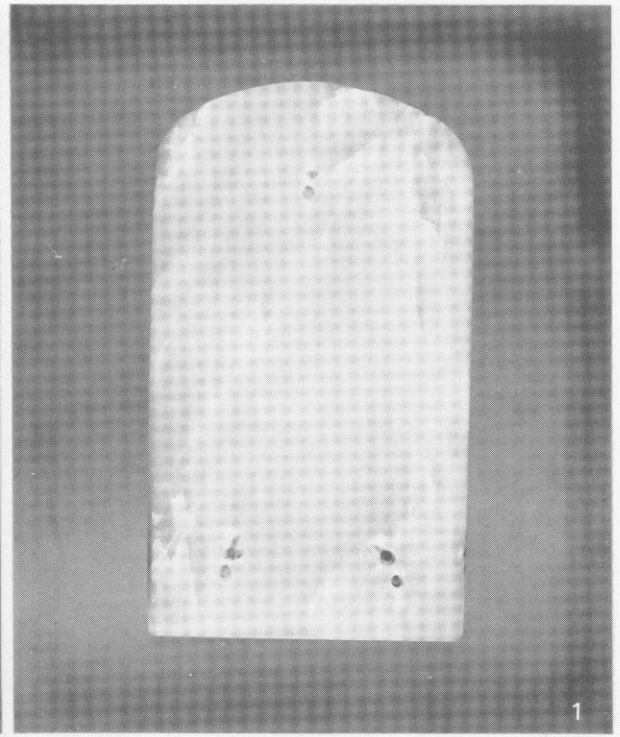
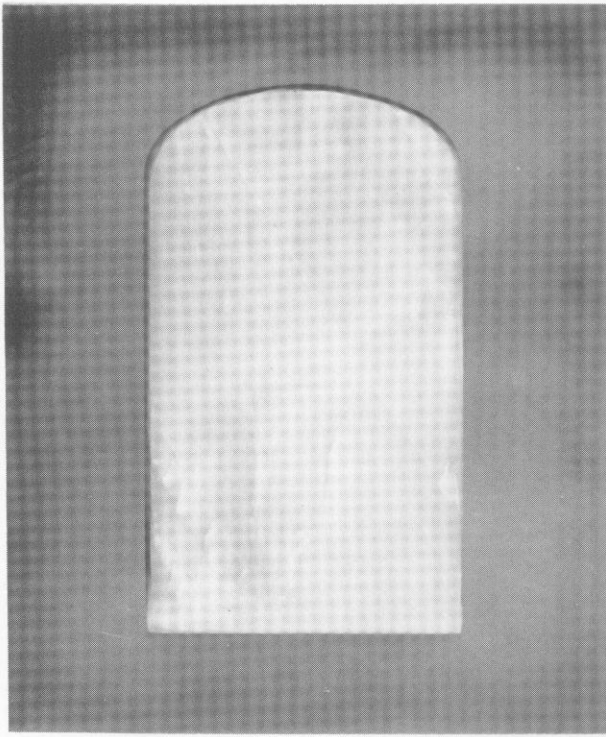
33



36



39



図版50 第43次調査 出土遺物(白玉帯・三彩・墨書土器)(1/1)



1



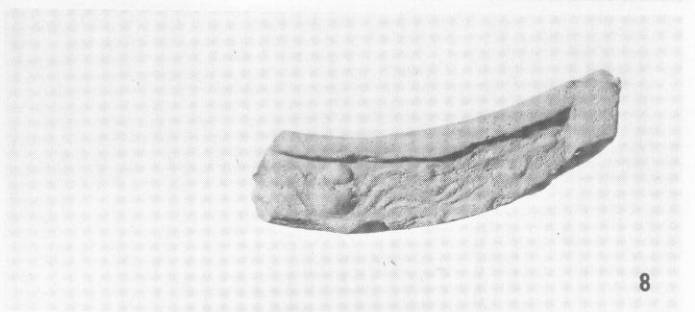
5



2



6



8



3



4



7



1

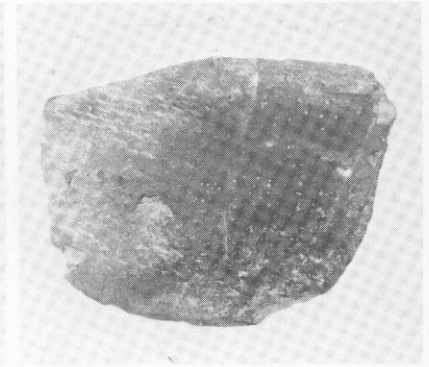
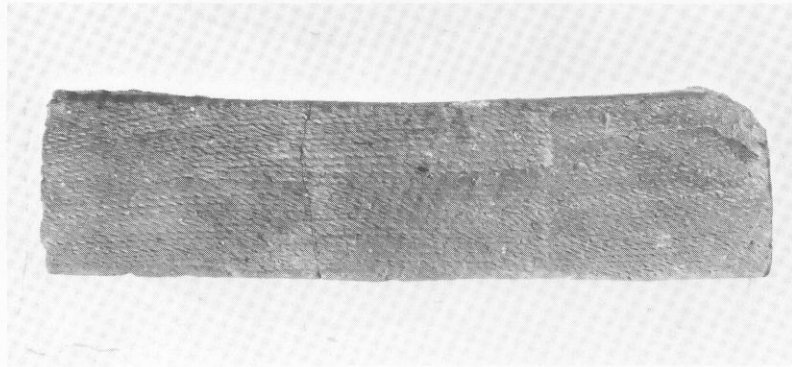


3

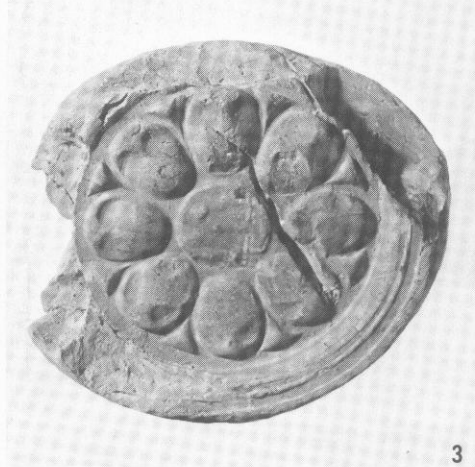


2

図版51 第38次調査 出土軒先瓦および土製仏像(1/3)



図版52 第41次調査 出土瓦・「口屋郡口」銘須恵器



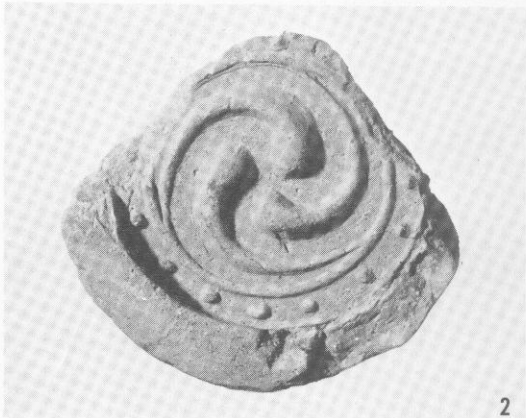
图版53 第43次調査 出土軒先瓦・文字瓦(1/3)



1



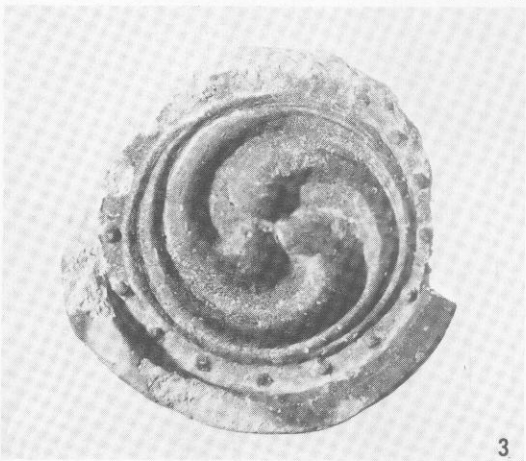
5



2



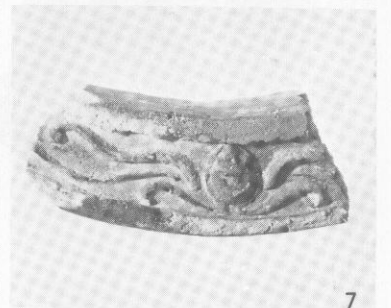
6



3



8



7

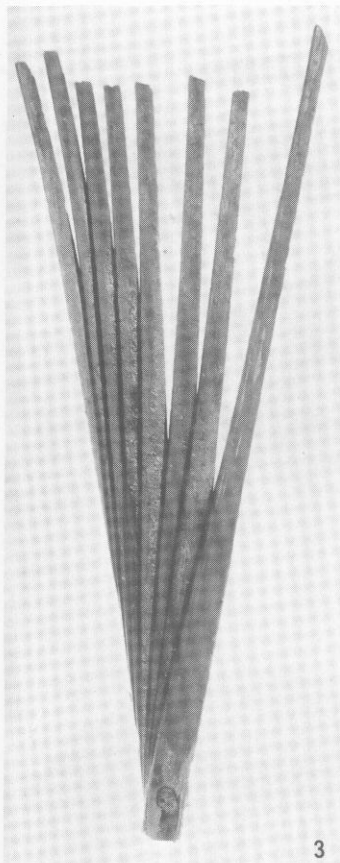


4

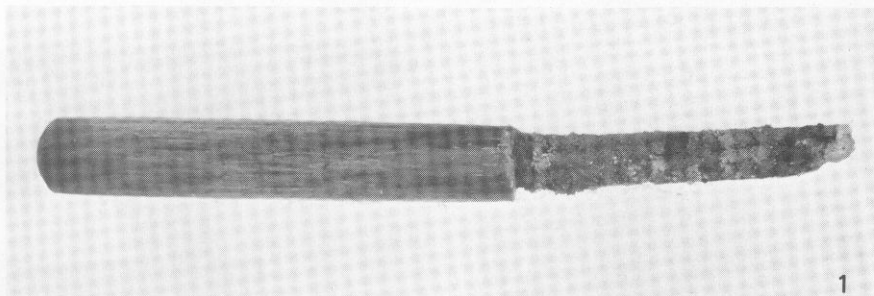


9

图版54 第43次調査 出土軒先瓦(1/3)



3



1



5



4

図版55 第38次調査 出土木器・鉄器



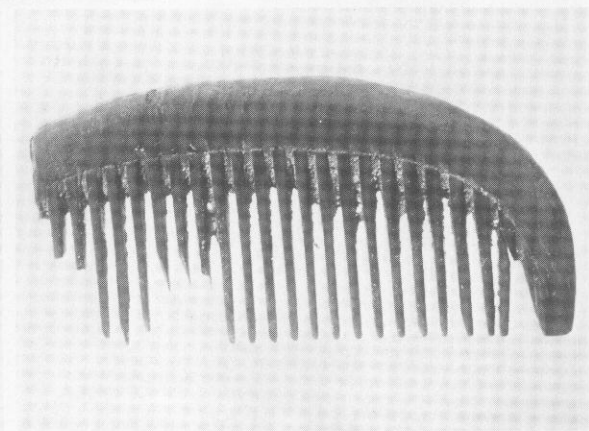
2



6



11



図版56

第38次調査 出土木器・墨書木札



大 宰 府 史 跡

昭和51年度発掘調査概報

昭和 52 年 3 月

発 行 九 州 歴 史 資 料 館

筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社

福岡市中央区渡辺通2丁目9の31